

兵庫県文化財調査報告書第27冊

大森谷遺跡

— 淡路縱貫道関係埋蔵文化財調査報告書 I —

1985.3

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書第27冊

大森谷遺跡

— 淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書 I —

1985. 3

兵庫県教育委員会

序

この報告書は淡路縦貫道の建設にともない、県教育委員会について本州四国連絡橋公団との委託を受けて行ったかずかずの発掘調査のうち、洲本市上内膳大森谷に所在する「大森谷遺跡」についての調査結果をまとめたものです。

この遺跡は弥生時代中期後半から後期にかけての集落跡であり、いわゆる高地性集落と呼ばれる遺跡であります。幾多の事実と問題が提起がなされております。遺跡は既に消滅しましたが、この報告書により、その概要を明らかにするとともに、この遺跡が提起している様々な問題にとりくむ上で一つの参考材料を示すことができれば幸いであります。

最後に調査に当って本州四国連絡橋公団第一建設局及び同洲本工事事務所に、種々便宜を図って戴いたことに厚くお礼申しあげます。

昭和60年3月

兵庫県教育長

井 野 辰 男

例　　言

1. 本書は、本州・四国連絡橋公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が昭和57年11月から、昭和58年2月にかけて実施した兵庫県洲本市上内膳大森谷に所在する「大森谷遺跡」の埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 今回の調査は、淡路縦貫道建設に先立って行ったものである。発掘調査は、松下勝、井守徳男、吉謙雅仁、市橋重喜、平田博幸、別府洋二が担当した。
3. 本書の作製に伴う整理作業は、兵庫県教育委員会魚住分館（昭和59年移転）及び、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において、昭和58、59年度に実施した。
4. 本書に使用した図のうち、遺構については調査員が分担してを行い、遺物は調査員と山根実生子が実測した。
5. 製図は調査員と山根が実施した。
6. 遺構の写真撮影は、調査員が分担してを行い、遺物については森昭氏の手を煩わした。
7. 本文の執筆は、調査員と山根が行い、各分担は、目次に氏名を記して、その責任の所在を明らかにした。
8. 本書の編集は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において、別府、平田、市橋が行った。

本文目次

第 1 章 はじめに.....	(別府洋二)	1
第 1 節 調査の経過.....		1
第 2 節 調査組織.....		1
第 2 章 遺跡の位置と環境.....	(平田博幸)	3
第 3 章 確認調査.....	(別府)	9
第 4 章 本調査の記録.....		12
第 1 節 I 地区の調査.....		12
1. 調査の概要.....	(別府)	12
2. 1 号住居址.....	(別府)	13
3. 2 号住居址.....	(平田)	15
4. 掘立柱建物址.....	(平田)	16
5. その他の遺構.....	(平田)	21
6. 小結.....	(平田)	26
第 2 節 II 地区の調査.....	(平田)	27
1. 調査の概要.....		27
2. 3 号住居址.....		30
3. 4 号住居址.....		38
4. 大形土壙.....		39
5. 掘立柱建物址.....		42
6. 小結.....		43
第 3 節 III 地区の調査.....	(平田)	45
1. 調査の概要.....		45
2. 調査結果.....		48
3. 小結.....		48

第 4 節 IV 地区の調査	(市橋重喜)	50
1. 調査の概要		50
2. 5号住居址		52
3. 土 壙		52
4. 小 結		53
第 5 節 V 地区の調査	(別府)	54
1. 調査の概要		54
2. 6号住居址		54
3. 7号住居址		57
4. 酔状遺構		59
5. 近世遺構		64
6. 小 結		64
第 5 章 遺 物		65
第 1 節 弥生時代の遺物		65
1. 土 器	(山根実生子)	65
2. 石器・鉄器	(別府)	106
第 2 節 中・近世の遺物		110
1. 中世土器	(市橋)	110
2. 近世土器	(別府)	113
3. その他の遺物	(別府)	115
第 6 章 ま と め	(別府)	122

挿 図 目 次

挿図 1	遺跡の位置と周辺遺跡	3
挿図 2	大森谷遺跡の地形（調査前）	8
挿図 3	確認調査区設定図	10
挿図 4	本調査区設定図	12
挿図 5	1号住居址	13
挿図 6	1号住居址中央土壤	14
挿図 7	1号住居址出土土器	15
挿図 8	2号住居址	16
挿図 9	掘立柱建物址 1	17
挿図 10	掘立柱建物址 2	18
挿図 11	掘立柱建物址 3	19
挿図 12	掘立柱建物址 4	20
挿図 13	掘立柱建物址 5	21
挿図 14	溝 1	22
挿図 15	溝 2・3・5・6	23
挿図 16	溝 7	23
挿図 17	溝 8・9・10	24
挿図 18	溝 11	25
挿図 19	土壤 1	26
挿図 20	土壤 2	26
挿図 21	第2トレンチ西壁土層図	28
挿図 22	第3トレンチ北壁土層図	29
挿図 23	第11トレンチ西壁土層図	30
挿図 24	3号住居址中央土壤	31
挿図 25	3号住居址出土土器—1	33
挿図 26	3号住居址出土土器—2	34
挿図 27	3号住居址	折り込み
挿図 28	3号住居址出土土器—3	35
挿図 29	3号住居址周辺出土土器	36
挿図 30	鉄製品	37

挿図 31	4号住居址	38
挿図 32	4号住居址出土土器	39
挿図 33	有孔円板	39
挿図 34	大形土壙	40
挿図 35	大形土壙出土土器	41
挿図 36	掘立柱建物址 6	43
挿図 37	第6トレンチ東壁土層図	45
挿図 38	第7トレンチ北壁土層図	46
挿図 39	第8トレンチ北壁土層図	47
挿図 40	IV地区遺構配置図	50
挿図 41	5号住居址	51
挿図 42	5号住居址出土土器	52
挿図 43	土 壇	53
挿図 44	V地区全図	55
挿図 45	6号住居址	56
挿図 46	6号住居址中央土壙	56
挿図 47	7号住居址	58
挿図 48	7号住居址中央土壙	59
挿図 49	7号住居址出土土器	59
挿図 50	1号溝	60
挿図 51	2・3号溝	61
挿図 52	4・5号溝	62
挿図 53	溝状遺構出土土器	63
挿図 54	6・7号溝	63
挿図 55	8号溝	64
挿図 56	近世溝	65
挿図 57	弥生土器—1（I地区 灰褐色土層出土土器）	71
挿図 58	弥生土器—2（I地区 上部包含層出土土器）	71
挿図 59	弥生土器—3（I地区 下部包含層出土土器）	72
挿図 60	弥生土器—4（I地区 下部包含層出土土器）	73
挿図 61	弥生土器—5（II地区周辺部 上部包含層出土土器）	74
挿図 62	弥生土器—6（II地区周辺部 下部包含層出土土器）	74
挿図 63	弥生土器—7（II地区周辺部 下部包含層出土土器）	75

挿図 64	弥生土器—8 (Ⅱ地区 包含層出土土器)	76
挿図 65	弥生土器—9 (Ⅲ地区 包含層出土土器)	76
挿図 66	弥生土器—10 (Ⅳ地区 包含層出土土器)	77
挿図 67	弥生土器—11 (Ⅴ地区 上部包含層出土土器)	77
挿図 68	弥生土器—12 (Ⅴ地区 下部包含層出土土器)	78
挿図 69	弥生土器—13 (Ⅴ地区 下部包含層出土土器)	79
挿図 70	弥生土器—14 (拓影)	79
挿図 71	石 器—1	107
挿図 72	石 器—2	108
挿図 73	石 器—3	109
挿図 74	中世土器—1	111
挿図 75	中世土器—2	112
挿図 76	近世土器	114
挿図 77	錢貨拓影	115
挿図 78	鉄 器	116
挿図 79	砥 石	116
挿図 80	五 輪 塔	117
挿図 81	大森谷遺跡の立地概念図	122
挿図 82	遺跡横断面と住居址立地概念図	123
挿図 83	遺跡の地形と住居址立地概念図	123

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表—1	4
第 2 表	周辺遺跡地名表—2	5
第 3 表	周辺遺跡関係文献一覧表	6
第 4 表	弥生土器遺構別出土量	66
第 5 表	器種別による百分比	68
第 6 表	底径別個体数	70
第 7 表	弥生土器観察表	80~105
第 8 表	投弾法量一覧表	106
第 9 表	銭貨一覧表	115
第 10 表	中世土器観察表	120
第 11 表	近世土器観察表	121
第 12 表	竪穴住居址一覧表	124

付 図 目 次

付図 1	I 地区全図
付図 2	I 地区遺構配置図
付図 3	II 地区全図
付図 4	II 地区遺構配置図
付図 5	III 地区全図
付図 6	III 地区遺構配置図
付図 7	V 地区遺構配置図

図版目次

- 図版 1 弥生土器 大森谷遺跡出土弥生土器
- 図版 2 V 地区 1. 7号住居址
2. 7号住居址焼土断面
- 図版 3 遠望 大森谷遺跡より洲本川河口をのぞむ
- 図版 4 遺跡 1. 調査区遠景—西より
2. 調査区遠景—東尾根より
- 図版 5 I 地区 1. 1号住居址（検出状況）—西より
2. 1号住居址—西より
- 図版 6 I 地区 1. 1号住居址中央土壤—南東より
2. 1号住居址中央土壤—南西より
- 図版 7 I 地区 1. 2号住居址（検出状況）—南より
2. 2号住居址—南より
- 図版 8 I 地区 1. I地区南西部（掘立柱建物址4・5）—北より
2. I地区南西部（掘立柱建物址4・5）—南東より
- 図版 9 I 地区 1. I地区北東部（2号住居址、溝8・9・10）—南より
2. I地区北東部（2号住居址、溝8・9・10）—北東より
- 図版 10 I 地区 1. I地区東中央部（1号住居址、溝8・9・10・11）—北東より
2. I地区西中央部（1号住居址、掘立柱建物址3・4）—南より
- 図版 11 II 地区 1. II地区西半部（3・4号住居址、掘立柱建物址6）南より
2. 掘立柱建物址6—北より
- 図版 12 II 地区 1. 3・4号住居址（検出状況）—東より
2. 3・4号住居址—東より

- 図版 13 Ⅱ 地区 1. 4号住居址(検出状況)一東より
2. 4号住居址一東より
- 図版 14 Ⅲ 地区 1. Ⅲ地区全景一南より
2. Ⅲ地区南半部一南より
- 図版 15 Ⅳ 地区 1. 5号住居址一西より
2. 5号住居址中央土壤南北セクション一西より
- 図版 16 Ⅳ 地区 1. 土壤(検出状況)一南より
2. 土壤一南より
- 図版 17 Ⅴ 地区 1. Ⅴ地区全景一西より
2. 6号住居址一西より
- 図版 18 Ⅴ 地区 1. 6号住居址中央土壤一南より
2. 6号住居址排水溝、周壁溝交差個所一南より
- 図版 19 Ⅴ 地区 1. 7号住居址一南より
2. 7号住居址中央土壤一東より
- 図版 20 Ⅴ 地区 1. 7号住居址排水溝、周壁溝交差個所一東より
2. 7号住居址砾石出土状況一東より
- 図版 21 Ⅴ 地区 1. 5号溝土器出土状況一南より
2. 5号溝土器出土状況一南より
- 図版 22 弥生土器 弥生土器一壺形土器
- 図版 23 弥生土器 弥生土器一壺形土器・脚部
- 図版 24 弥生土器 弥生土器一高坏形土器
- 図版 25 弥生土器 弥生土器一變形土器・鉢形土器・把手・ミニチュア土器
- 図版 26 弥生土器 1. 弥生土器一壺形土器
2. 弥生土器一壺形土器
- 図版 27 弥生土器 1. 弥生土器一壺形土器
2. 弥生土器一壺形土器・器台形土器
- 図版 28 弥生土器 1. 弥生土器一高坏形土器
2. 弥生土器一變形土器

図版 29	弥生土器	1. 弥生土器—變形土器 2. 弥生土器—變形土器
図版 30	弥生土器	1. 弥生土器—底部 2. 弥生土器—底部
図版 31	弥生土器	1. 弥生土器—底部 2. 弥生土器—底部
図版 32	石器・鉄器他	1. 石器・鉄器・有孔円板 2. 石器—砥石
図版 33	石 器	1. 石器—石斧・投弾他 2. 石器—投弾他
図版 34	中世土器	1. 中世土器—土師器 2. 中世土器—土師器
図版 35	中世土器	1. 中世土器—須恵器 2. 中世土器—國產陶器
図版 36	中・近世土器	1. 中世土器—船載磁器 2. 近世土器
図版 37	近世土器	近世土器
図版 38	錢貨・鉄器	1. 錢 貨 2. 鉄 器
図版 39	石製品	1. 石製品—砥石 2. 石製品—五輪塔
図版 40	鐵滓・炉壁片他	1. 鐵 洋 他 2. 炉壁片他

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

淡路縦貫自動車道は、神戸から淡路島を縦走して鳴門海峡を越え、徳島県鳴門市に至る自動車専用道路で、本州と四国を結ぶ動脈の一つとして計画されたものである。

現在、大鳴門橋をはじめとして計画が着々と実施されてきているが、それに先立って路線内に存在する埋蔵文化財調査の必要性が生じた。本州四国連絡橋公団からの依頼を受けた兵庫県教育委員会では、分布調査を経て、昭和53年度から、志知川沖田南遺跡をはじめとした発掘調査を現在も継続して実施している。

大森谷遺跡は、昭和57年11月1日に確認調査を開始し、弥生時代後期の遺物包含層を確認した。協議の結果、調査範囲を拡大して確認調査を継続し、また一部全面調査を開始した。全面調査は翌昭和58年2月18日まで行い、総面積約3,000m²の調査を完了した。また調査範囲内に存在する「荒神さま」が祀られている地点に関しては、移転が完了した後、昭和58年9月28日から同年10月7日にかけて調査を実施した。

遺跡から出土した土器などの遺物は、コンテナ数にして約60箱強あるが、これらは現地で隨時洗浄し、発掘調査終了後は明石市にある兵庫県教育委員会魚住分館に運び、註記・接合・復元・実測作業を実施した。

昭和59年7月に魚住分館から埋蔵文化財調査事務所に移転したのに伴って、引き続き整理作業は同事務所内において実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査・整理作業ともに、本州四国連絡橋公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が主体となり、発掘調査は昭和57・58年度に、整理作業は昭和58・59年度に実施した。

発掘調査の体制

昭和57年度	昭和58年度
事務担当　社会教育・文化財課	事務担当　社会教育・文化財課
課長　藤本繁	課長　西澤良之
文化財担当参事　吉村芳郎	文化財担当参事　大西章夫
副課長　道畠實	副課長　森崎理一
課長補佐　池田義雄	課長補佐　池田義雄
埋蔵文化財係長　大村敬通	埋蔵文化財調査係長　樋本誠一
主任　西口和彦　小川良太	

技術職員	水口富夫	技術職員	大平 茂
課長補佐兼管理係長	福永慶造	課長補佐兼管理係長	福永慶造
課長補佐	堀 洋	主任	八家 均
事務職員	杉本恵子	事務職員	杉本恵子
調査担当	社会教育・文化財課	調査担当	社会教育・文化財課
主 査	松下 勝	技術職員	吉識雅仁 平田博幸
主任	井守徳男		
技術職員	吉識雅仁 市橋重喜		
	平田博幸 別府洋二		

整 理 作 業 体 制

昭和58年度		昭和59年度	
事務担当	社会教育・文化財課	事務担当	社会教育・文化財課
課 長	西澤良之	課 長	西澤良之
文化財担当参事	大西章夫	文化財担当参事	大西章夫
副課長	森崎理一	副課長	森崎理一
課長補佐	池田義雄	課長補佐	和田富男
埋蔵文化財調査係長	樋本誠一	埋蔵文化財調査係長	樋本誠一
技術職員	大平 茂	技術職員	大平 茂 森内秀造
課長補佐兼管理係長	福永慶造	管理係長	小西 清
課長補佐	堀 洋	主 査	坂本豊明
事務職員	杉本恵子	事務職員	杉本恵子
作業担当	社会教育・文化財課	作業担当	社会教育・文化財課
主 査	松下 勝	主 査	松下 勝
技術職員	市橋重喜 平田博幸	技術職員	市橋重喜 平田博幸
	別府洋二		別府洋二
補 助 員	山根実生子	補 助 員	山根実生子

- ・発掘調査参加者 浅井多英美・橋詰建設・中央建設
- ・整理作業参加者 早川亜紀子
- ・協力者・機 関 洲本市教育委員会・淡路考古学研究会・綿貫俊一・山口慶一・深沢良章・西尾知恵子・金山恵子・二階堂康子・平井美鈴・原 香代美伴 悅子

洲本市教育委員会浦上雅史氏には資料を実見させて頂いたうえ、多くの御指導・御助言を頂いた。

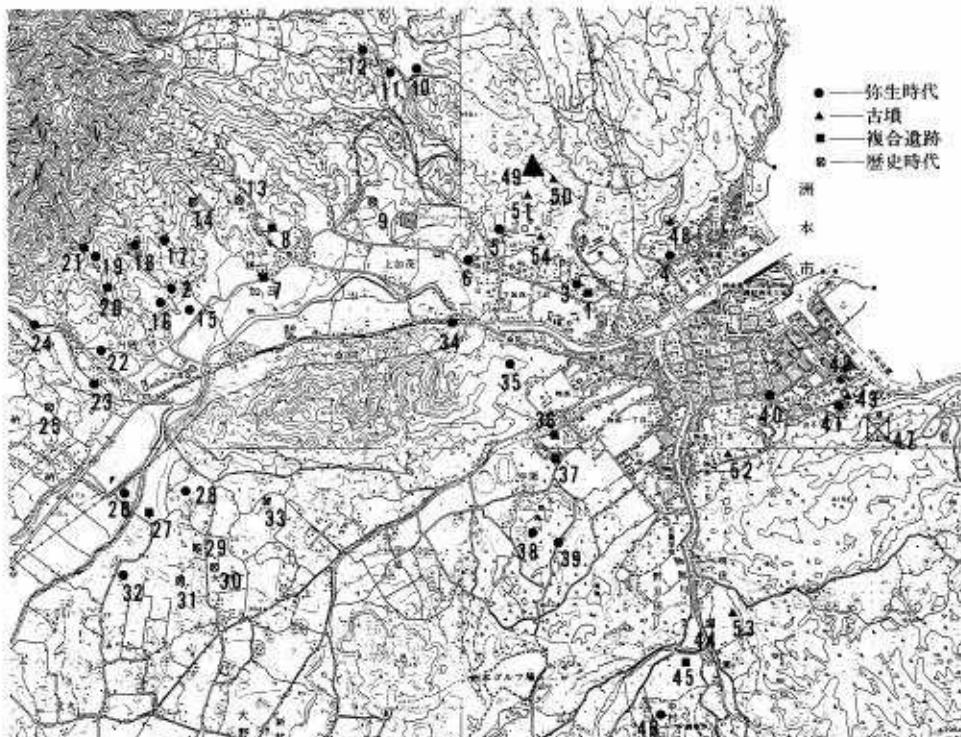
出土した中・近世土器に関しては、岡田章一・水口富夫両氏に指導・助言を受けた。

第2章 遺跡の位置と環境

大森谷遺跡は、洲本市上内膳大森谷に所在する。遺跡は先山からびた尾根上と、尾根にはさまれた谷の内の小さな張り出し部に営まれている。

海拔445mの山頂に千光寺の伽藍がならぶ先山から、洲本川にむかって南方向にびた馬背状の尾根は、深い谷を伴って、手をひろげたように幾筋も張り出している。その先端は洲本川の氾濫によって削り取られ、現洲本川との間に河岸段丘を形成している。対岸の大野、西隣の緑町は広田・中条の地域に扇状地が、北の洲本川にむかってひろがっており、洲本市街地からはじまつた平野部は洲本川にそって南西に深くはいりこみ、油谷山の北麓で終結する。おわってしまうとはいっても西側で大きくひろがる三原平野とは小さな峠によって隔てられているのみであり、南淡路の東と西を結ぶ要路の1つであったことにはまちがいない。

洲本市は淡路島第一の街であるが、その母体となるのは、永正7(1510)年、熊野水軍の一翼をなった安宅冬一の洲本城築造に前後すると思われる。現在の洲本市街地のうち



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

番号	遺 跡 名	時 代	所 在 地	備 考
1	武 山 遺 跡	縄文(前・晚期) 弥生時代、平安時代	洲本市宇山三丁目	文献 (1)
2	大 森 谷 遺 跡	弥生(後期)	〃 上内膳大森谷	
3	空 の 谷 遺 跡	弥生(前期)	〃 宇山空の谷	
4	脇 遺 跡	弥生(中期)	〃 宇山二丁目	
5	下 加 茂 岡 遺 跡	弥生(中・後期)	〃 下加茂小字岡	文献 (2)
6	下 加 茂 遺 跡	弥生(中期)	〃 下加茂二丁目	
7	下 内 膳 遺 跡	弥生(前～後期)、古墳(前期) 奈良、平安、室町、鎌倉	〃 下内膳	文献 (3)
8	道 下 池 遺 跡	古墳(後期) 奈良、平安	〃 下内膳	
9	里 池 遺 跡	奈良	〃 上加茂小字大谷	
10	三 木 田 池 遺 跡	弥生	〃 中川原三木田	
11	清 間 遺 跡	弥生	〃 中川原三木田清原	
12	西 の 下 遺 跡	弥生	〃 三木田小字西の下	
13	西 の 森 遺 跡	平安	〃 下内膳	
14	野 神 遺 跡	弥生、奈良	〃 下内膳野神	
15	方 城 遺 跡	弥生	〃 下内膳方城	
16	大 森 谷 里 池 遺 跡	弥生	〃 上内膳大森谷里	
17	新 白 遺 跡	弥生	〃 上内膳	
18	大 森 谷 浜 田 遺 跡	弥生	〃 上内膳大森谷浜田	
19	尾 筋 九 山 遺 跡	弥生	〃 上内膳尾筋丸山	
20	尾 筋 岡 遺 跡	弥生	〃 上内膳尾筋岡	
21	ハ タ 遺 跡	弥生	〃 上内膳尾筋ハタ	
22	森 遺 跡	弥生(中期)、古墳(後期) 平安末～鎌倉、室町	〃 上内膳里森	
23	寺 中 遺 跡	弥生(中・後期) 奈良、室町	〃 納	
24	大 西 遺 跡	弥生(後期)	〃 納岸川小字大西	
25	鴨 根 原 遺 跡	奈良	〃 納上根原	
26	戸 犬 遺 跡	弥生(後期)	〃 納	
27	寺 田 遺 跡	弥生(後期) 古墳(後期)	〃 金屋寺田	

第 1 表 周 辺 遺 蹤 地 名 表 — 1

番号	遺 跡 名	時 代	所 在 地	備 考
28	栗 林 遺 跡	弥生(後期)	洲本市大野小字栗林	
29	土 生 寺 陶 瓦 窯 跡	奈良(前期)	〃 大野小字土生寺	文献 (4)
30	野 上 遺 跡	奈良	〃 下野小字野上	
31	新 宮 窯 跡	奈良(後期)	〃 大野小字新宮	文献 (4)
32	金 屋 宇 山 遺 跡	弥生(後期)	〃 金屋宇山	
33	庄 慶 陶 瓦 窯 跡	白鳳～奈良	〃 大野小字庄慶	文献 (5)
34	尾 崎 遺 跡	弥生(中期)	〃 桑間小字尾崎	
35	龜 谷 山 遺 跡	弥生(中・後期)	〃 物部小字龜谷	
36	馬 木 遺 跡 A 地 点	弥生(中期) 奈良	〃 物部小字馬木	
37	馬 木 遺 跡 B 地 点	弥生 白鳳、奈良	〃 物部小字馬木	
38	太 郎 池 遺 跡	弥生(中・後期)	〃 物部小字馬木	
39	深 田 遺 跡	弥生	〃 上物部深田	
40	居 屋 敷 遺 跡	弥生(後期)	〃 本町五丁目	
41	山 下 町 遺 跡	弥生	〃 山手一丁目	
42	山 下 町 居 屋 敷 遺 跡	古墳(後期)	〃 山下町	文献 (6)
43	旧 城 内 遺 跡	古墳(初・中期)	〃 山手一丁目	文献 (7)
44	明 田 遺 跡	奈良	〃 千草明田	
45	中 村 遺 跡	弥生 奈良	〃 千草中村	
46	丁 遺 跡	弥生	〃 千草小字丁	
47	洲 本 城 址	大永～ 寛永 8 年～	〃 小路谷	文献 (8)
48	宇 山 牧 場 I・2 号 墳	古墳	〃 下加茂岡二丁目	文献 (9)
49	下 加 茂 岡 群 集 墳 (1～6 号 墳)	古墳(後期)	〃 下加茂岡	
50	宇 山 古 墳	古墳(後期)	〃 宇山三丁目	
51	下 加 茂 ヨ ヤ ダ ニ 古 墳	古墳(前期)	〃 下加茂岡	文献 (9) 文献 (10)
52	曲 田 山 古 墳	古墳(後期)	〃 上物部間形	文献 (11)
53	明 田 丸 山 古 墳	古墳(後期)	〃 千草明田小字丸山	文献 (12)
54	下 加 茂 岡 古 墳	古墳(後期)	〃 下加茂岡	

第 2 表 周 边 遺 跡 地 名 表 一 2

番号	著者名	書名	発行機関	発行年
(1)	丹羽佑一他	『武山遺跡発掘調査報告』	洲本市教育委員会	1975
(2)	村川行弘	『下加茂岡遺跡調査概要』		1963
(3)	沖田真一	『下内膳加茂校遺跡出土品について』	淡路地方史研究会誌 3	1966
(4)	浦上雅史	『淡路島の古窯址出土の須恵器について』	淡路考古学研究会誌 3	1980
(5)	田辺昭三	『大野庄慶須恵器窯跡について』	淡路考古学研究会誌 1	1972
(6)	岡本稔他	『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告』	洲本市教育委員会	1975
(7)	田村昭治	『旧城内遺跡』—製塙遺跡—	淡路考古学研究会誌 2	1974
(8)	新見貫次	『洲本市史』	洲本市	1974
(9)	岡本稔	『淡路弥生式時代の研究—洲本川流域の遺跡を中心として—』	淡路考古学研究会誌 2	1974
(10)	服部久隆	『子午線上の陰陽曆と淡路山跡文化』	古代淡路摄影会	1960
(11)	浦上・岡野・金田	『曲田山古墳石室実測調査報告書』	淡路考古学研究会誌 2	1974
(12)	立命館大学考古学研究会	『明田丸山古墳実測調査報告』	淡路考古学研究会誌 3	1980

第3表 周辺遺跡関係文献一覧表

洲本川以南には城下町のおもかげが良くのこっている。ただ、直接の母体は洲本城に関連するとしても、それに先行する遺跡が周辺に数多くみられる。

洲本市内の遺跡は、南部の扇状地域よりも洲本川周辺、特に左岸に集中する傾向がみられる。左岸には先にものべたように、先山からびてきた多数のゆるやかな尾根と、その裾部にひろがる河岸段丘の上に縄文時代から歴史時代にいたる遺跡が点在している。

旧石器時代では由良佐昆真野谷より有舌尖頭器の出土が伝えられているが、他の遺跡の存在は確認されていない。縄文時代の遺跡は少ない。縄文時代の前期と晚期、それに弥生時代の全時期を通して占地されていた武山遺跡をはじめとして、金屋池遺跡・安乎浦田井遺跡・石井遺跡・塩入遺跡を確認している。武山遺跡は北淡町の育波堂の前遺跡に対して、南淡路を代表する縄文遺跡であり、前期・晚期の多量の土器片、石器類を出土している。

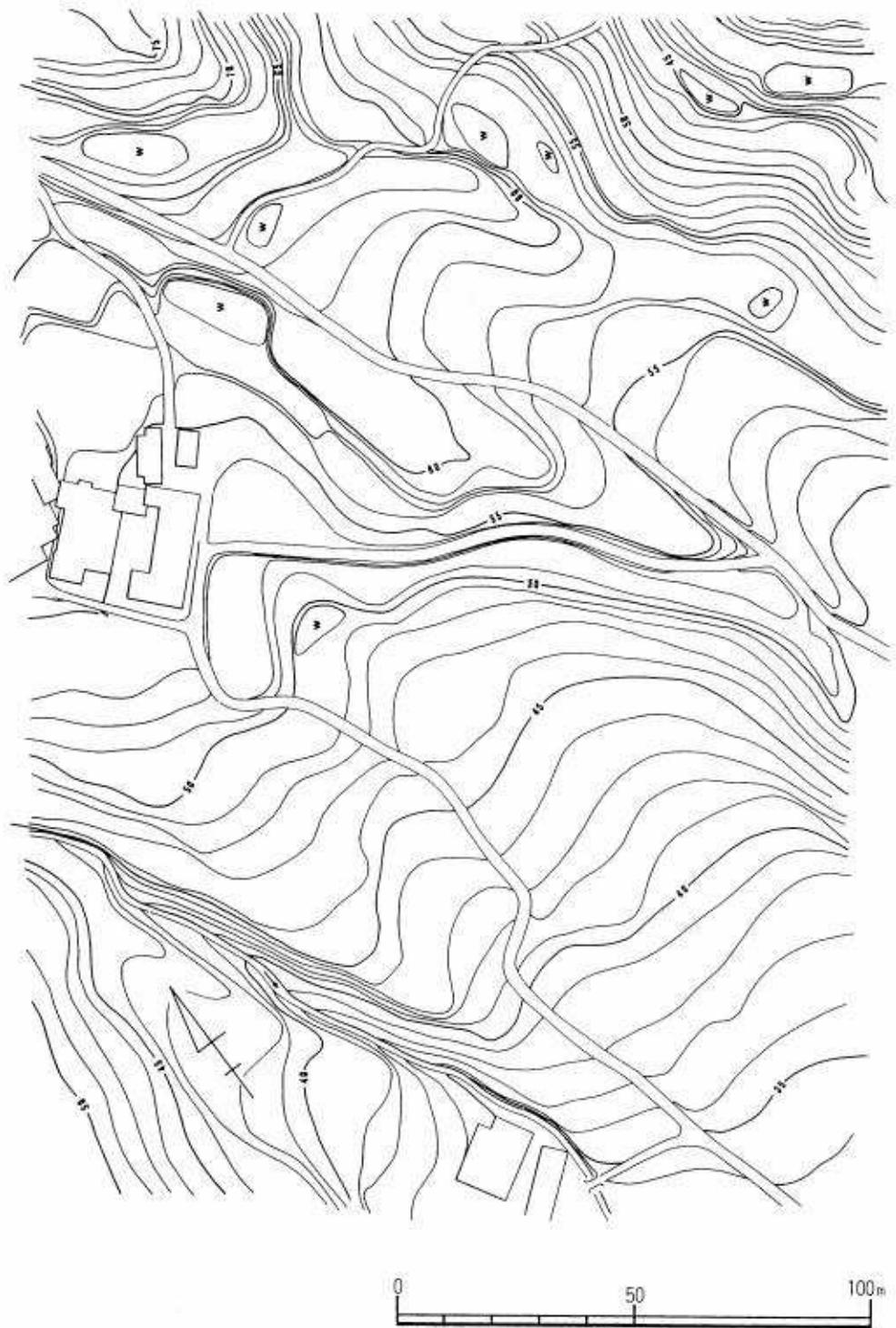
弥生時代にはいると、洲本川の左岸、先山からびてきた多数の尾根とその下方の河岸段丘上に多くの遺跡が出現する。大森谷遺跡もその尾根の1つにのる遺跡である。武山遺跡は弥生時代にもほぼ全時期にわたって存在しており、多量の遺物とともに中期前葉の方形周溝墓が確認されている。また、下内膳に所在する下内膳遺跡も、前期から後期までの存続が確認された、大規模な集落遺跡である（下内膳遺跡では、大森谷遺跡の存続時期に

あたる中期末から後期初頭までの遺物・遺構が少ないと聞いており、両者の間に密接な関係が存在することも考えられる）。この武山遺跡と下内膳遺跡のみが弥生時代のすべての時期をカバーしており、前者が洲本川下流域の、後者が中流域の母集落的な存在であったことが十分に考えられる。さらに、淡路縦貫自動車道に伴う発掘調査によって先山からのびた尾根上にも、中期末から後期にかけての小規模な集落遺跡がかなり存在することがしだいに明らかになってきた。大森谷遺跡の他に、昭和58年度に兵庫県教育委員会の実施した発掘調査によって、納に所在する寺中遺跡では中・後期の竪穴住居址と後期の方形周溝墓を6基確認している。周溝墓を群として調査したのは淡路では初めてであり、その意義は非常に大きいと思われる。さらに森遺跡においても中期の竪穴住居址2軒と古墳時代後期の竪穴住居址9軒を調査しており、尾根上に存在する集落遺跡の性格がしだいに明らかになってきている。

また、この時代の淡路を特徴づけるものとして西淡町慶野中の御堂出土のものをはじめ、20口あまり出土している銅鐸をあげることができる。それもかなり古い型式のものが多くみられる。現在、西淡町隆泉寺の所蔵しているものは洲本市中川原町二ツ石出土の銅鐸といわれており、最古式に含まれる資料である。ところが、新しい型式に含まれる銅鐸はなく、この状況は次の古墳時代の前期古墳のあり方に強く反映しているようである。

古墳時代では、その集落が確認されているのは前記した森遺跡と下内膳遺跡の2軒の竪穴住居址のみであるが、おそらくまだ未発見の状態にあるものと思われる。島内における古墳の数は著しく少ないが、その古墳のあり方をみても古式に含まれるもの、大型のものはほとんど存在していない。洲本川河口にある宇山牧場古墳（すでに消滅）で玉類・素文鏡・五銖銭などが出土し、洲本市加茂のコヤダニ古墳（消滅）の小型竪穴式石室より三角縁三神五獸鏡が出土しているものの、古墳時代初頭の絶大な権力の存在を決して示すものではない。時代が下って後期になると、武山遺跡の北西にあたる下加茂岡に下加茂岡群集墳・宇山古墳・下加茂岡古墳が出現し、物部川右岸にも横穴式石室を有する曲田山古墳と明田丸山古墳が造営されるが、その他にはほとんどみられず、その中心はやはり下加茂岡にあるようである。

古墳時代以降になると、洲本川流域にはさらに遺跡が希薄となり、大野地区に庄慶陶瓦窯址、土生寺陶瓦窯址、新宮窯址が発見されているが、国分寺・同尼寺・国府が三原町に存在することからみて、当時の政治的・社会的中心が三原の平野部におかれたことが知られる。



第2図 大森谷遺跡の地形（調査前）

第3章 確認調査

大森谷遺跡は、洲本市史などによると「大森谷遺跡」及び「新白遺跡」として挙がっている。遺跡の内容は、「五輪塔と段状水田地に弥生土器の散布」である。

現地は、急斜面が多く、段状に水田を構築する際に、かなり地形が改変されたと考えられ、遺跡の残存は憂慮された。当初、 $2m \times 2m$ の坪堀り調査を4ヶ所で行ったところ、1ヶ所では炭層の広がりが確認され、また別の地点では、礫に混って多量の弥生土器が出土した。そこで調査範囲を拡大し、大森谷川左岸の谷内から斜面・尾根上までの約200m × 路線幅の約50mを調査対象地として確認調査を継続した。

総数37ヶ所の坪堀り調査の結果、遺物包含層、或いは遺構が確認された所には、トレンドを設定、また段状の畦畔を垂直に削ることによって遺構・遺物包含層の範囲把握に努めた。

全面調査地区は、主として遺構の検出された区域に設定し、遺物包含層のみが存在する区域では、トレンドを拡張して遺物採集を行った。以下に確認調査の概略を述べる。

G-1～4 遺物包含層及び柱穴等の遺構が確認される。比較的傾斜が緩く、遺構の残りが良いと思われる所以全面調査範囲とする。(Ⅰ地区)

G-5 燃土、柱穴、溝を検出。グリッドを拡張し、竪穴住居址の一部と確認する(3号住居址)。遺構面の広がりを把握するにT-1を設定。全面調査範囲とする。(Ⅱ地区)

G-6 遺構・遺物とも検出されず。

G-7 遺物包含層を確認、T-3・9を設定。西端で落ち込み、礫と共に多量の弥生土器が出土。拡張を行う。

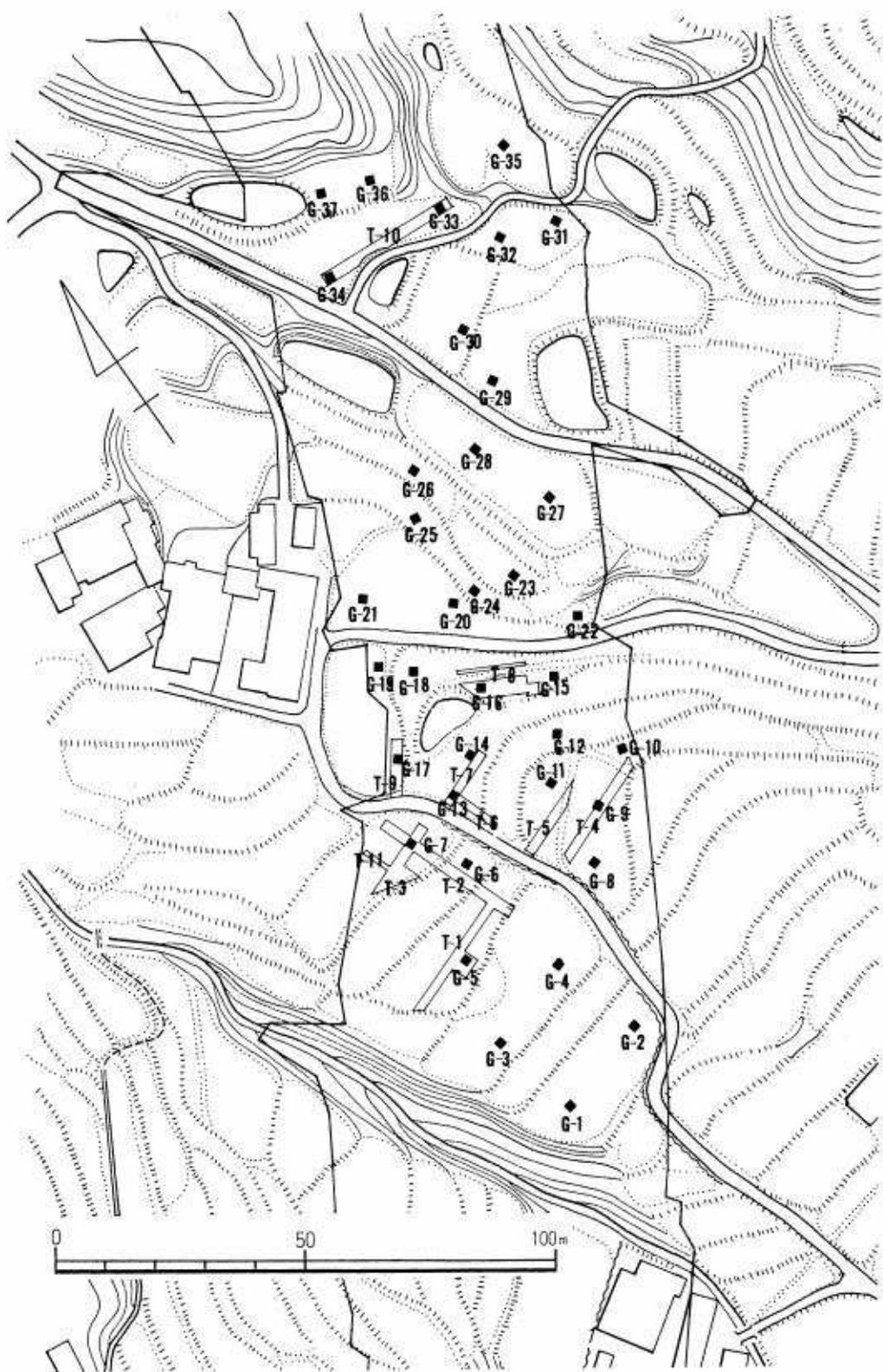
G-8～12 G-8、G-11で遺物包含層、柱穴を確認した為、T-4・5を設定。東半は谷状に急に落ち込み、遺物も見られない為、西半部を全面調査範囲とする。(Ⅲ地区)

G-13・14 G-13で石積みと思われる落ちを検出。T-6・7を設定したところ、自然地形とわかる。

G-15・16 G-16で炭層の広がりを検出、拡張すると共にT-8を設定。土壌を確認。またその下層に竪穴住居址の一部が認められた(5号住居址)。全面調査地区(Ⅳ地区)設定。

G-17～19 G-19で弥生土器が多量に出土。T-9を設定。調査範囲外北側に広がる可能性がある。G-18では何等検出されなかった。

G-20・21 3m近く掘り下げたが、攪乱された土が統く。溜池を埋めたものか。



第3図 確認調査区設定図

- G-22~26** 急斜面の為、包含層の堆積もなく、遺構も見られない。
- G-27・28** 耕土直下で地山面が表われ、かなりの削平を受けている。
- G-29~32** 水田を作る際に埋め出しを行ったと思われる。遺物の出土は見られない。
- G-33・34** G-33で焼土・炭及び周壁の一部を検出（7号住居址）。T-10を設定したところ、完形になる甕、高壺を出土した。全面調査範囲（V地区）。
- G-35** 地山直上から弥生土器片及び砥石が出土したが、北東へ落ちる急な斜面の肩部にあたる。
- G-36・37** 水田を作る際に埋め出しを行ったと思われる。遺物出土せず。

以上、確認調査の結果によって全面調査区を計5ヶ所設定した。

調査は、一部表土を重機によって除去し、それ以下を手掘りで行った。表土下の層序は、大きく上部包含層・下部包含層・黄褐色ベースと分かれ、下部包含層は弥生時代の遺物のみを含んでいる。

遺構面は当然複数枚あると思われたが、平面での検出は極めて困難であった為、遺構の検出は全て黄褐色ベース面で行うこととした。

※ 確認調査に際して出土した遺物は、全面調査地区内から出土したものについては、その地区的遺物に含めた。また全面調査地区外から出土した遺物は、地区周辺遺物とした。

- G-7、T-2・3——Ⅱ地区周辺
G-13・14、T-6・7——Ⅲ地区周辺
G-15・17~19、T-9——Ⅳ地区周辺
G-33——V地区周辺

※ 調査は、道路などがある為、かなり制約を受け、58年度に一部追加調査を行った。

※ 遺構番号は、堅穴住居址については全調査地区にわたって通し番号を付け、またその他の遺構番号は、各地区毎に付けた。

第4章 本調査の記録

第1節 I 地区の調査

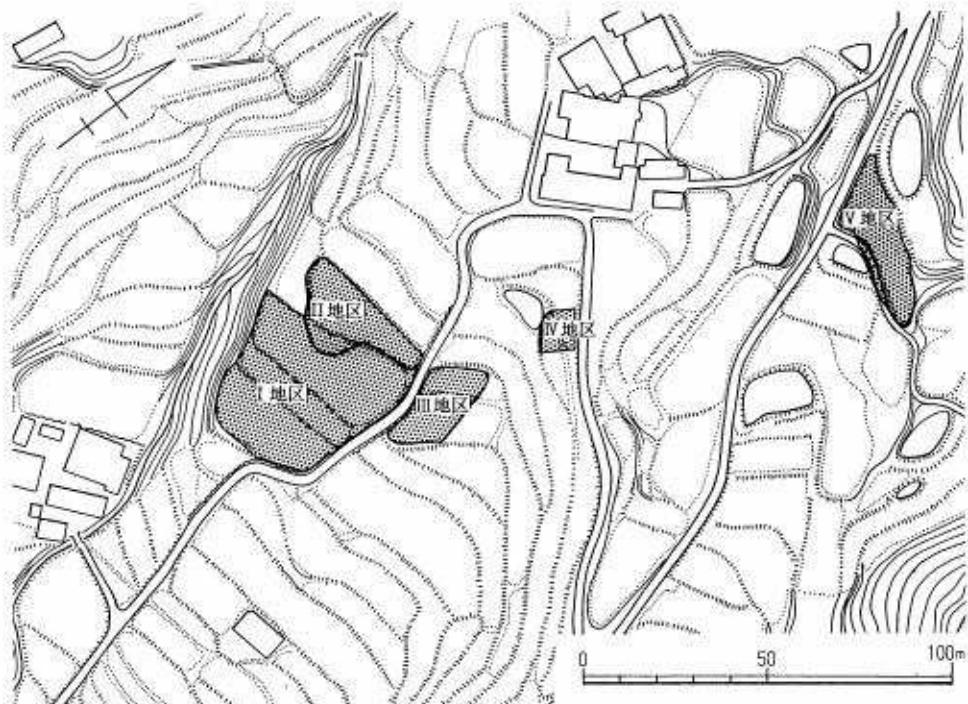
1. 調査の概要

I 地区の調査範囲は、大森谷川によって西側を限られており、北は段差を持ってⅡ地区と、東は道を隔ててⅢ地区と接している。大森谷遺跡の中では西南端にあたり、谷の最も低い位置を占める。

調査区では南に向って傾斜しており、標高は約44.5mから41.5mになる。西半は北からの張り出しが延び、東半は緩やかに谷状を呈している。土層は大きく分けて、表土・上部包含層・下部包含層・地山となる。北端では地山面までの削平が見られる。

遺構には、竪穴住居址・溝・掘立柱建物址・土壤・柱穴群が検出され、主として西半の張り出し上や谷状地形縁辺部に見られる。

土層中に含まれる遺物は、上部包含層からは弥生時代から中世の土器片・錢貨・炉壁片が見られ、谷状地形周辺や調査区南端に広がる下部包含層からは、大小の礫に混じって



第4図 本調査区設定図

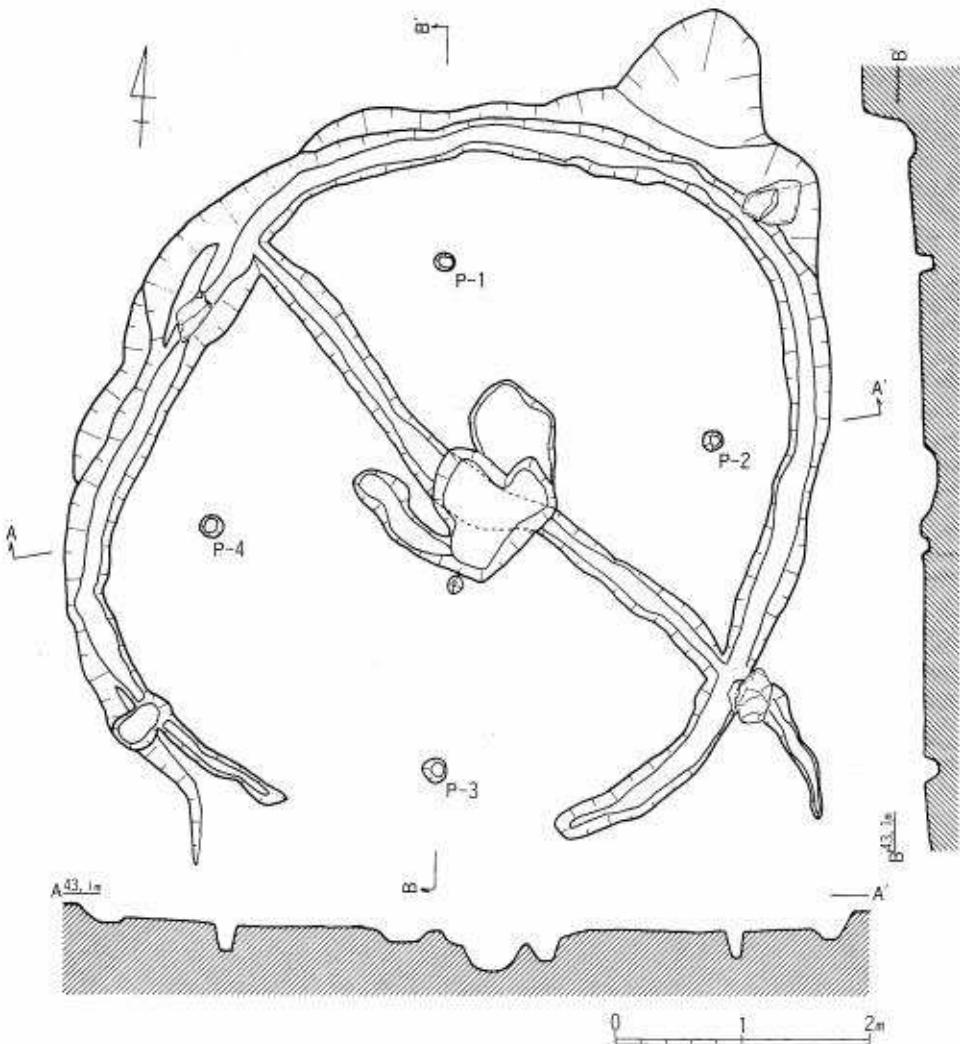
弥生土器が出土している。

2. 1号住居址

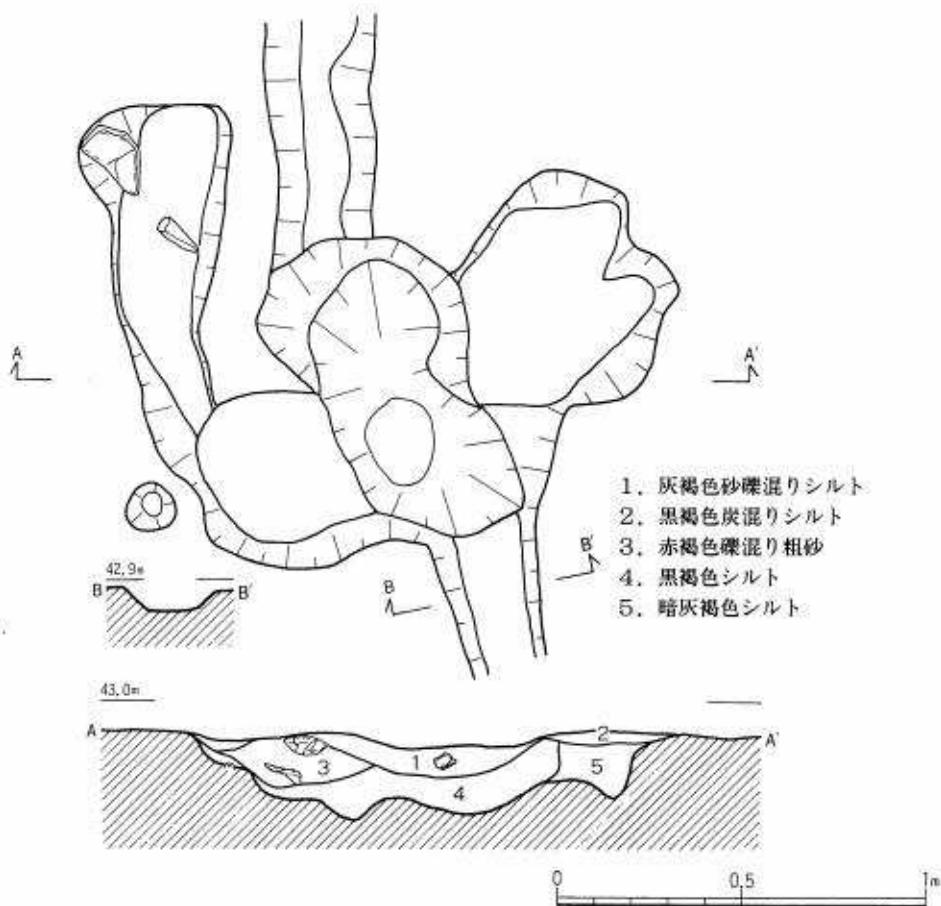
1号住居址の立地は、北から延びる張り出しに乘り、小谷状地形に向って東南に傾斜する緩斜面にある。今回調査した住居址の中では最も低い標高にのる円形堅穴住居址である。

斜面上方を約45cm掘り込んで床面を作り出しているが、斜面下方では周壁及び周壁溝が失われており、盛土して作られていたものが流失したと考えられる。床面の規模は長径で約5.7m、短径約4.8mで、やや橢円形に近くなる。

主柱穴は4本であり、P-1が直径約16cm、深さ約13cm、P-2が直径約16cm、深さ約



第5図 1号住居址



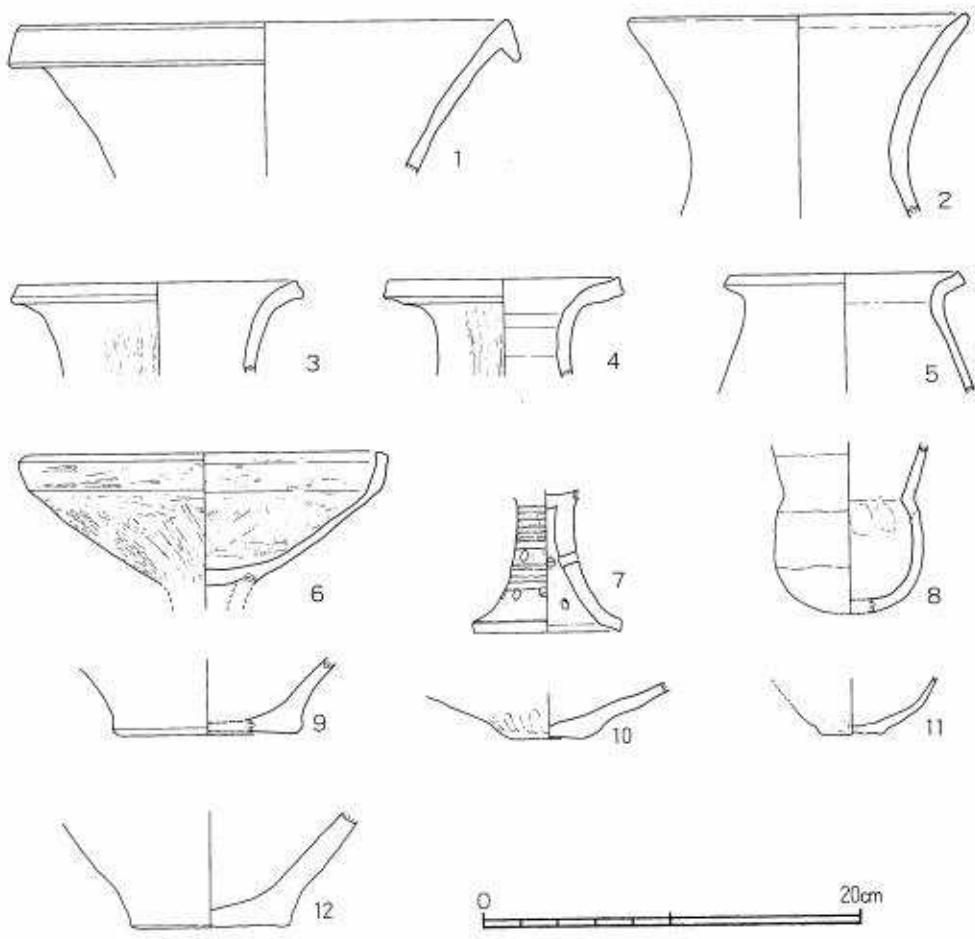
第 6 図 1号住居址中央土壙

22cm、P-3が直径約20cm、深さ約13cm、P-4が直径約22cm、深さ約22cmであり、比較的細い柱を使用していたと思われる。各柱穴間の距離は床面の長径方向に広く、P-1・P-4間が約3.0m、P-2・P-3間が約3.2mであるのに対し、短径方向の柱穴間距離は共に約2.4mである。

周壁溝は南辺が途切れている。幅約35cm、深さ約8cmを測る。

排水溝は、床面の短径方向に走向し、北西の周壁溝から中央土壙を横切り、南東部では周壁溝を越えて屋外に延びる。幅約30cm、深さ約8cm。排水溝が周壁溝外に出る位置に自然石が2個配されていた。

中央土壙は、不整形の土壙が複数錯綜した形であるが各々の新旧は確認できなかった。土壙の中央部では、埋没後に排水溝によって切られている。埋土中には炭が含まれているが、壁や底には火を受けた痕跡は認められない。周辺の床面ではわずかに焼土が散見され



第7図 1号住居址出土土器

た。

出土遺物は、投弾が周壁溝底から検出された以外は埋土中より検出された。壺（1・3・4）、器台（2）、甕（5）、高坏（6・7）、底部（9～12）及び石錐が出土した。

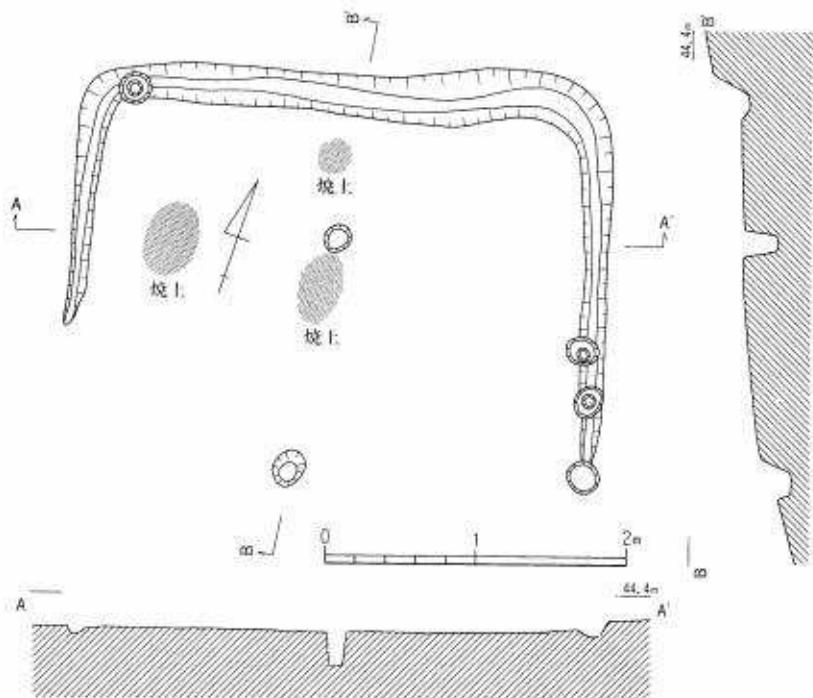
3. 2号住居址

一辺約3.5mを測る隅円方形平面の住居址である。住居址の北・南壁を等高線方向にあわせて構築している。谷側半分はすでに消失しており、山側の半分のみが遺存している。そのため、壁の残りも非常に浅く、最も深い北壁側で約20cmを残すのみである。この壁にそって幅約25cmの、断面が「U」字形の周壁溝が設けられている。床面には中央土壇などは設けられていないが、床面の3ヶ所に焼土が集中してみられる。3.5m四方の比較的小型の住居のためか、柱穴は南北方向に1.6mの間隔を置いて2ヶ所設けられている。

遺構の残存状況が悪かったこと也有ってか、その形態を知り得る遺物はほとんどなく、

その埋土と床面上より土器の小片を少量取り上げたのみである。こうした状況のため、この住居址の時期決定も非常に難しいが、弥生時代後期におさめてまちがいはないものと考える。

また、この住居址のすぐ東側には南からびてきた小さな谷がはいっており、住居址はちょうどこの谷の西斜面にのるような状態にある。さらに、住居址の周辺にはかなり大きな礫が露頭しているが、床面は比較的整然と形成されており、住居の構築にあたって床面に頭を出していった礫を取り去る行為がなされたことが十分に推測できる。



第8図 2号住居址

4. 挖立柱建物址

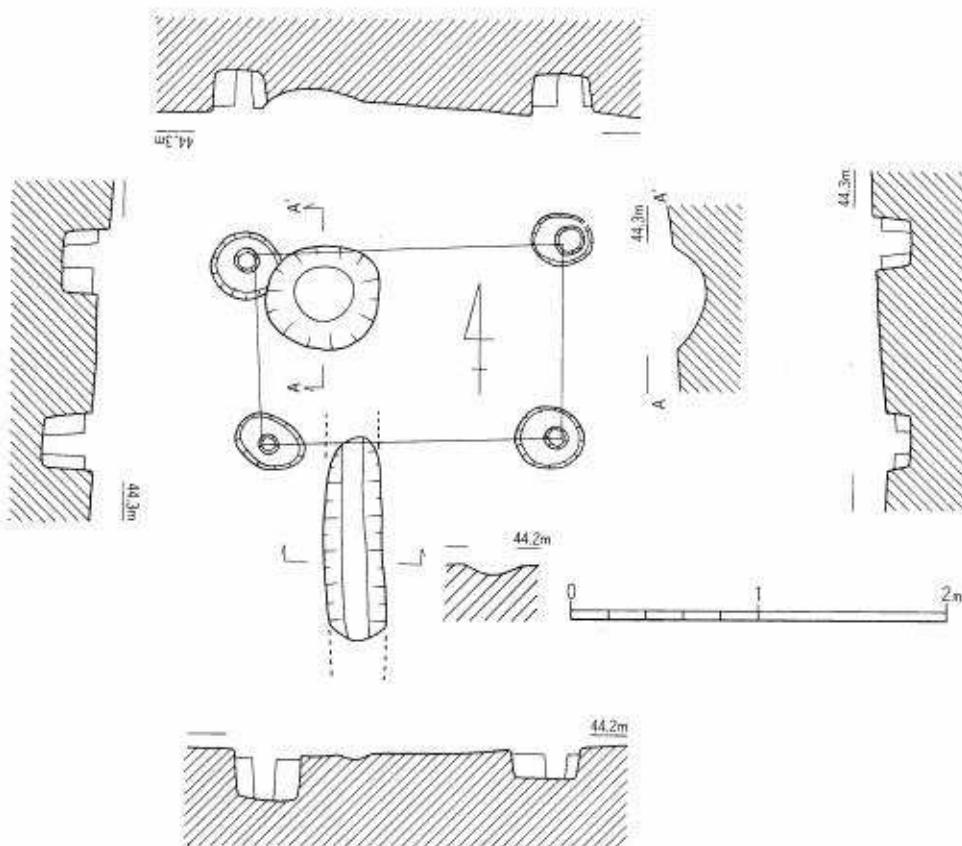
掘立柱建物址1

1間×1間の掘立柱建物であるが、梁行は約1.0m、桁行が約1.6mと長くなっている、東西棟をなしている、ただ、桁行はごくわずかに北に偏している。

建物の北西隅部には、掘立柱建物址2と同様の径約60cm、深さ約10cmの鍋底状をした円形平面の土壙が設定されているが、この土壙が北西隅の柱穴を切っていることから、建物が建てられた後に掘りこまれた土壙であることがわかる。さらに、南西隅の柱穴の横を土壙にむかうように、ほぼ南北にまっすぐに伸びた溝(溝6)は、この建物に関連する遺構に

なるのではなかろうかと考えている。ただ、溝の北端は削平されて消失しているため、直接土壌からのがれていることが確実なわけではなく、さらに、周囲に溝 $2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5$ など溝状遺構が集中していることから、建物とはまったく関連のない溝となることが十分に考えられるため、別に『溝6』として記述しておいた。遺構の配置状況から一応の可能性をもたせて、ここにも記してみた。

土壌内にはやはり遺物がほとんどなく、土壌、建物の性格は不明であり、その時期も限定できないが、おそらく、中世以降の遺構になるものと思われる。



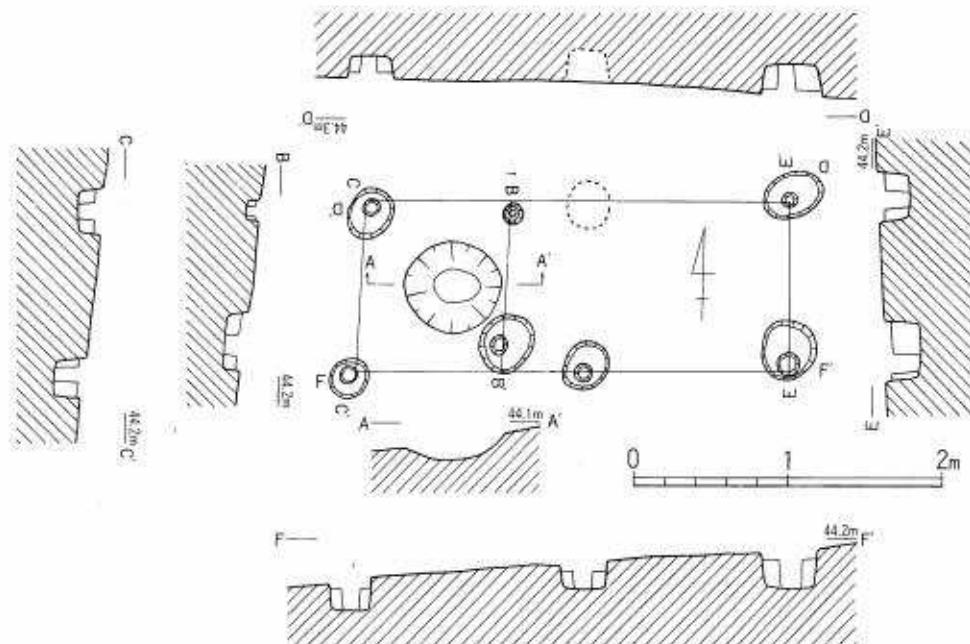
第9図 掘立柱建物址1

掘立柱建物址2

梁行1間、桁行2間の東西棟建物である。北桁行の中央の柱穴は確認することはできなかったが、梁行約1.1m、桁行2.8mの規模になる。中央の梁行から西へ約60cmの所には、桁行線よりも若干内側に同じ切り用かと思われる柱穴がみられる。この柱穴で同じ切られた西側の南北約1.1m、東西約0.9mの1間×1間の空間のはば中央に、径約60cm深さ約

10cmの鍋底状の土壌が設けられている。

柱穴・土壌内から遺物の出土がまったくないため、この建物がどういった性格を持ち、内部の土壌とどのように関係しているかに関しては、明確にすることはできない。また、その時期もまったく不明であるが、おそらく中世頃の建物かと思われる。



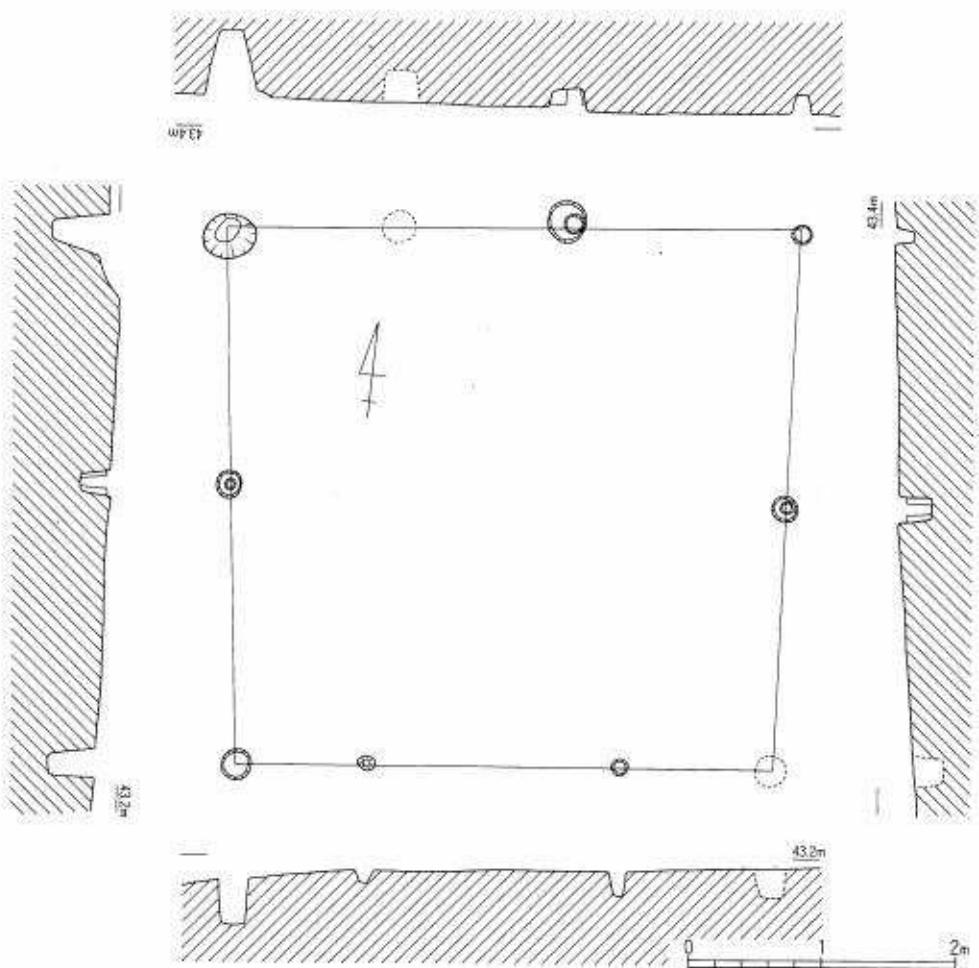
第10図 据立柱建物址 2

据立柱建物址 3

南東隅の柱穴は検出できなかったが、2間×3間の総柱にはならない東西棟の建物であり、梁行は約6度西に偏している。各辺の規模は柱の心々でみると、桁行は北で約4.3m、南は推定約4.0m、梁行は東側が推定約4.0m、西も4.0mをはかる。平面形をみると東側の梁行が東へわずかに開いた状態となっている。

北の桁行は、2間分の柱のならびしか確認できなかった。各柱間の距離をみても、梁の柱間で2m前後であるのに対して、南の桁行は3間とも距離が一致していない。北の桁行はその西側の柱間が2.6mあり、この中間に柱を設定して3間とすると、南桁行の3間の各柱間が不均一な状況と同じになる。よって、西の1間を限る柱穴が確認できなかったものと考え、その間を二等分する柱穴を推定して3間とした。そうすると柱間の距離は、梁行が2m前後となるが、桁行は近似した距離をもたない柱間となる。

時期を限定する遺物は出土していないが、おそらく中世もしくはそれ以降の建物かと思われる。



第 11 図 堀立柱建物址 3

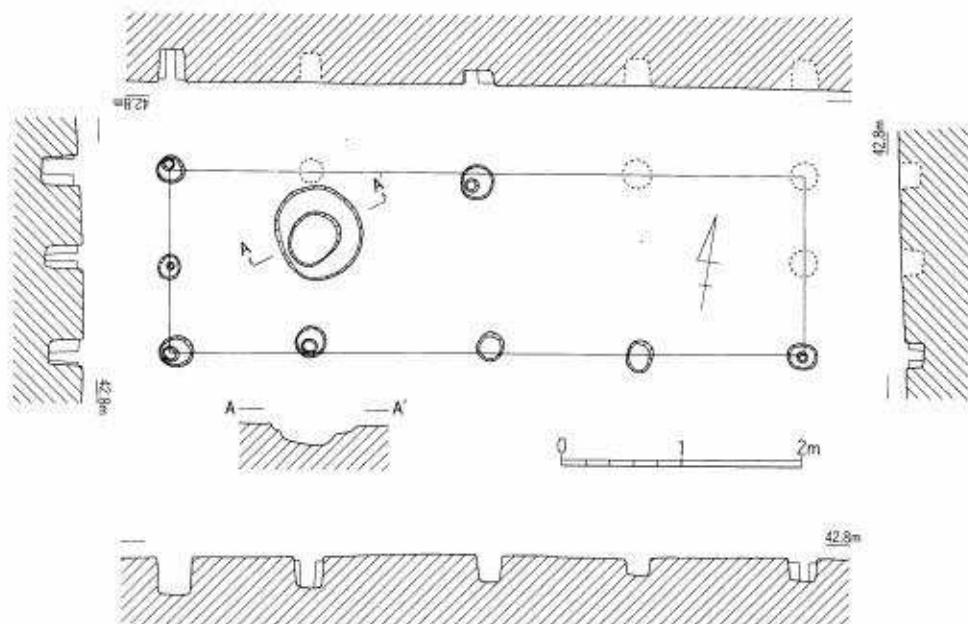
堀立柱建物址 4

2間×4間の東西棟であるが、桁行がわずかに北方向に偏している。西梁行と南の桁はすべての柱穴を残すが、東の梁行は南端の柱穴を、北の桁行は両端と中央の柱穴を残し他のものは後世の削平によって消失している。各柱間の距離は不均一であり、柱穴を復元した全体は、梁行約1.6m、桁行約5.3mの規模の建物になるものと思われる。

西から二番目の梁行部分の若干北よりには、外径約80cm、内径40cmの二段掘りになる深さ約15cmの不定円形平面をした土壙が、掘りこまれている。

この建物の南側にも礫を入れた円形土壙があるため、この土壙が建物と直接関係するものであるかどうかは明確ではないが、ちょうど梁行が土壙の中央を通ることから、この建物に付随した施設であろうと思われる。

土壤内埋土にも混入物が含まれていないため、この建物の性格を知ることはできなかった。また、遺物の出土もないため、明確な時期は把握できないが、柱穴掘方の状態などからみて、中世以降の建物と思われる。



第12図 堀立柱建物址4

堀立柱建物5

桁行をほぼ南北方向にとる2間×3間の南北棟堀立柱建物である。総柱にはなりえず、南梁の中央の柱穴は、検出できなかった。桁行はいずれも4.8mであるが、東側の桁が総じて若干南にさがっており、さらに、梁行が北側で3.4m、南側で3.5mとわずかに南側が長いため、平面形は若干のひずみをもっている。

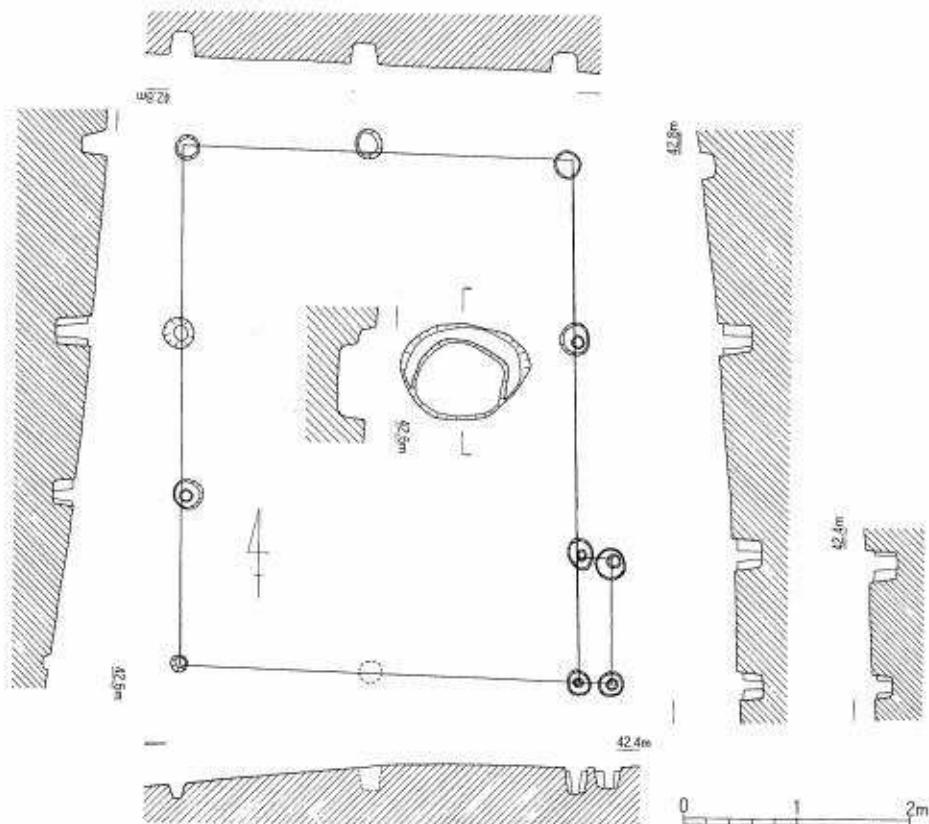
柱穴の掘方の下面をみても、梁行は東に高く西へ少し低くなり、桁行は北から南にむかってかなり低くなっている。そのため、北東が最も高く、南西が最低となる。

また、この建物の中には、長軸を東西方向にとる1.2×0.84mの楕円形平面をした二段掘の土壤が設置されていたものと思われる。建物との関連性を示すものは何もないが、掘りこまれている位置が梁行を二等分したちょうど中央になり、その方位を建物とほぼ同一にもっているということから推測するのみである。

この建物で特徴的なのは、柱の心々間の距離も不均一であるとともに、その最も狭くなっている東桁行の南の間の外側（東側）に、それとほぼ同じ距離をもつ柱間があることがある。おそらくこの柱間が、この建物の入口部分にあたり、外側の柱間は入口にとりつく

底に伴う柱穴ではないかと思われる。

建物の時期を明確にする資料は柱穴・土壤内からもまったく出土していないが、確認面と埋土からみて中世以降の遺構と思われる。



第13図 捩立柱建物址5

5. その他の遺構

溝 1

長さ6m弱・幅約25cm、深さ約4cmの、南北方向に一直線に走る溝である。南端は削平されているため、本来はさらに続いていたものと思われる。遺物がまったく含まれていないため時期は限定できないが、南端付近で上部包含層を切りこんでいるため、弥生時代以降のものであることがわかる。ただ、その性格についてはまったく不明である。

溝 2

現長約4.3mを残す。幅は、30~40cmをはかる。若干の弧を描きながら北西から南東に走る、深さ10cmあまりの浅い溝である。両端は削平されて痕跡をまったく残さないため、

本来の規模を知ることはできない。溝4・5を切っているため、その前後関係は知ることができる。埋土内には弥生土器の小片をわずかに含んでいたが上部周含層を埋りこんでいるため、弥生時代の遺構でないことは明確である。よって、出土した弥生時代土器片は上部包含層からの二次的な混入によるものと思われる。

溝 3

東西に分断されているが、本来は一連のものであったと思われる。西から東へ約2.8mのびた後、南へまがってさらに約1.0mのびている。幅約20cm、深さ約5.0cmの浅い溝である。この溝も削平によって両端を消失している。遺物はまったく含まれていなかったが、溝5との前後関係は知ることができる。

溝 4

幅、深さともに溝3に非常に類似しており、埋土も同質に近いものである。溝2によって切られているため、溝3と一連のものであったかどうかを知ることはできない。ただ、溝3と同様の弧を描いているため、両者がきわめて近い性格をもった溝であった可能性は強いと思われる。こちらも遺物はまったくなく、南端は削平されて消失している。

溝 5

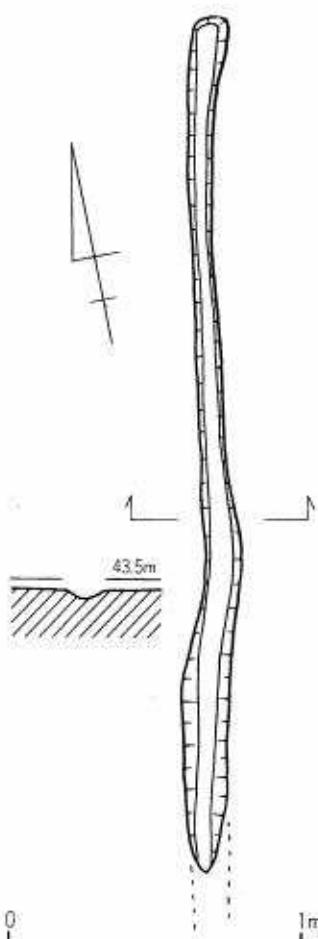
幅0.7~1.0m、深さ15cmをはかり、現長約4.3mの溝である。南端は水田の削りこみによって切断、消失している。ほぼ南北方向にむいているが、若干西に偏している。埋土内からは、ごくわずかの土器を出土しており、12世紀後半から13世紀前半の溝であると思われる。

溝 6

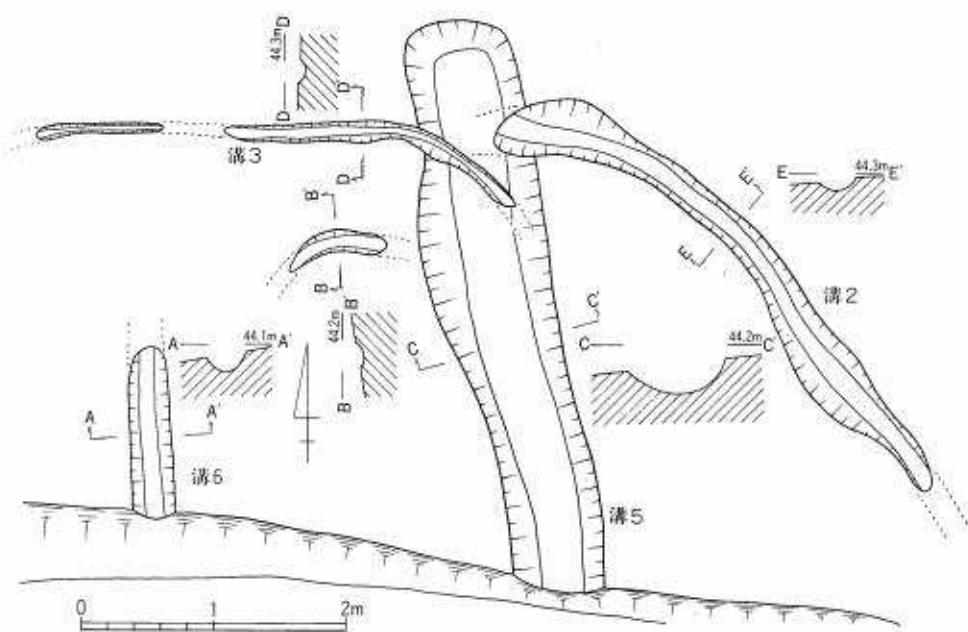
幅約30cm、深さ約4cmをとどめるだけの溝であり、長さも約1.0mを残すのみである。若干西へ偏しているが、ほぼ南北方向に走る。遺物はまったくなく、溝2に近い埋土をもっている。掘立柱建物址1と関連する可能性が強いと思われる。

溝 7

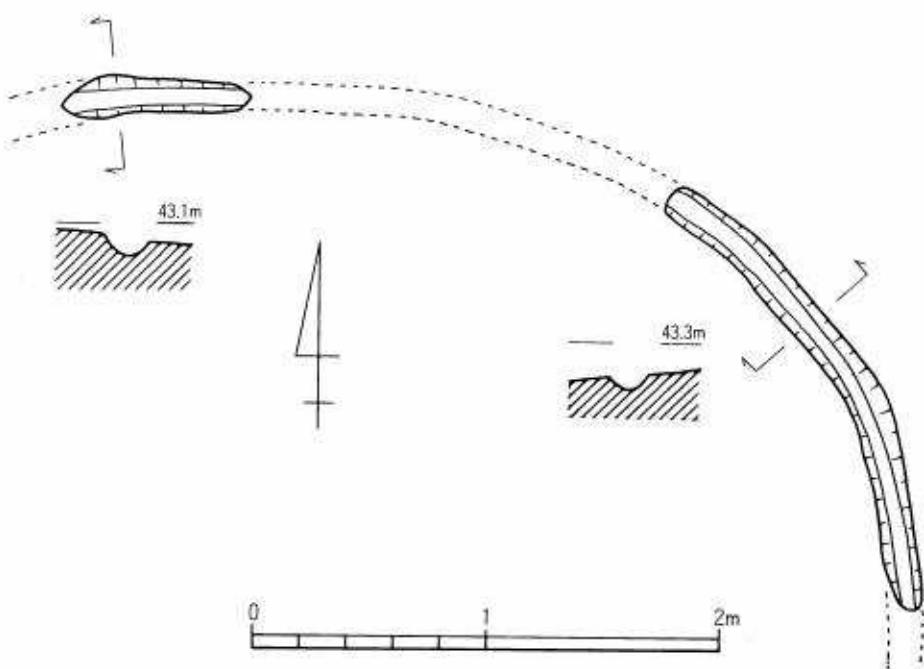
なかほどが長さ約2.0mにわたって消失しているが、おそらく後世の削平によるものと思われる。この部分をつなぐと、現長で約4.4mをはかることができる。現状では堅穴住居址の周壁溝を思わせる様なカーブを描いているが、住居址の柱穴にあたる柱のならび、



第14図 溝1



第15図 溝2・3・5・6



第16図 溝 7

および中央土壙などがみあたらないこと、さらに、埋土が溝3・4に近いことなどから考えて、弥生時代の竪穴住居址ではなく、中世以降の遺構と考えられる。幅約15cm、深さ約7cmを残すだけあり、遺物もまったく含まれていないため、その具体的な時期についてはまったく不明である。

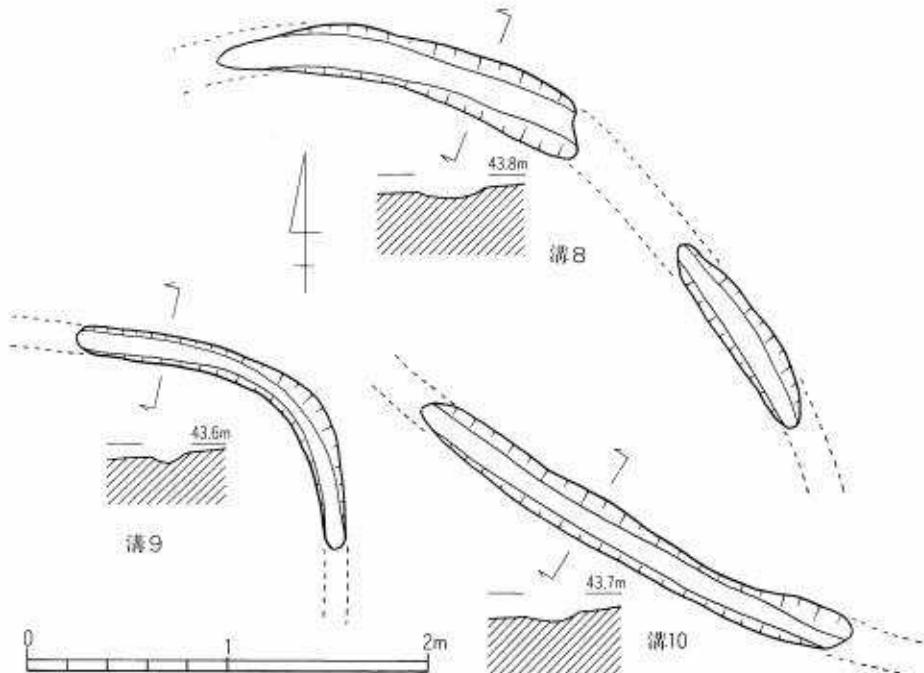
溝 8・9・10

溝8も分断されたかたちになっているが、本来は一連のものであったと思われる。幅は最大で約30cm、深さ15cmを残すが、両端は削平のために消失しているようである。直線的に走るのではなく、谷にむかって若干の弧を描いている。

溝9は現長が2.0m弱であり、両端は削平のためになくなっている。幅約20cm、深さ10cmの溝は、谷にむかって大きく曲りこんでいる。

溝10は近接した3本の溝の中で唯一北西から南東にむかって直線的に走っている。深さ15cm、幅24cm、現長約2.5mをはかる。

この3本の溝はいずれも出土遺物はないものの、埋土がほぼ同質であるため、同一のものかもしくは、近い時期に設けられたものと思われる。埋土の関係からみれば、溝4・5・7に最も近いものであるため、やはり中世以降の遺構であろうと思われる。ただ、その性格については不明確である。



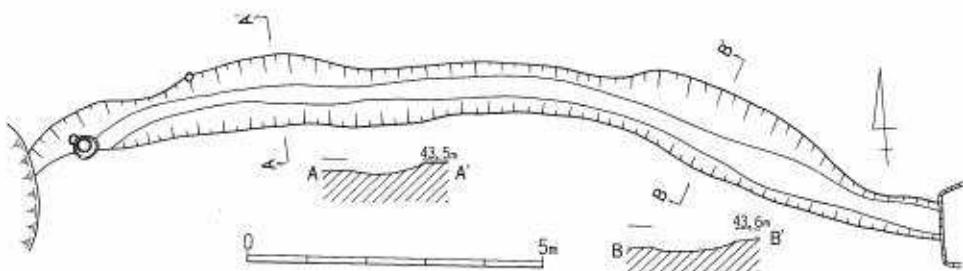
第17図 溝8・9・10

溝 11

現長約15mの東西に走る溝である。西端は現在のカク乱によって破壊されている。東端は調査区外にのびている。幅は0.7~1.4mあり、断面はゆるやかな「U」字状をなしている。深さは西で約10cm、東では25cmとしだいに深くなり、溝自体も東に傾斜している。

1号住居址の東側に南よりはいりこんで、2号住居址の東側に達する小さな谷をちょうど横断するようによこたわっている。そのため、谷地形に対応して、中央部が若干張出すような弧状をなしている。出土する遺物は非常に少なかったが、1号住居址と並行する弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての遺構と思われるものである。

前記したように、西端はカク乱を受けているが、1号住居址の北側の壁は明確に遺存しており、溝11が1号住居址に直接つながっていたとも思われない。また、カク乱の西側、1号住居址の北西部にはプライマリーな遺構面が残っており、そこには溝11が続いているため、他の山腹部に立地する集落遺跡のような地山成形の痕跡とも考えられない。やはり、前にも述べたように、谷を分断するための溝のようである。



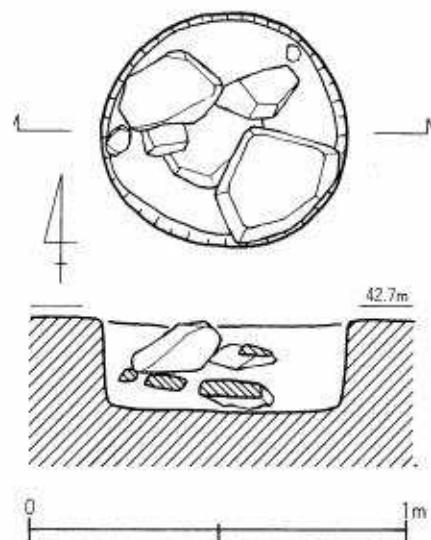
第18図 溝 11

土壤1・2

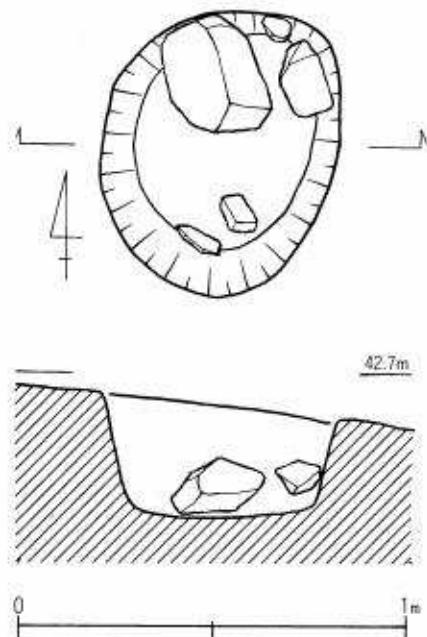
土壤1は直径約90cmあまりの正円に近い平面形をしている。壁はほぼ垂直に30cmほどさがり、壙底は平坦に仕上げられている。壙内には偏平な石が数個入れられているが、しきつめているわけではなく、また石室構造などをしているわけでもない。埋土は淡灰褐色の細砂であり、しまりも悪く非常にやわらかい。その中にスミなどが混入している痕跡もみられない。石は遺構面より上にとび出すことはなく、立ったものは皆無ですべてがふせた状態になっている。

土壤2は、南北方向に若干長い梢円形平面をなしている。壁は若干ななめにさがり、深さは西側で40cm、東側で約30cmをみる。こちらは土壤1のような偏平な石ではなく、また無造作に配されているようである。埋土はほとんど土壤1と同様であり、両者は位置的に少し距離をおくが、同一の性格をもった遺構であったものと思われるが、その性格を知る

ことはできない。埋土内からの遺物の出土はまったくなく、その時代も限定することはできないが、検出面・埋土などからみて中世以降の遺構と思われる。



第 19 図 土 壙 1



第 20 図 土 壙 2

6. 小 結

この地区においては、弥生時代の竪穴住居址 2 棟と中世以降と思われる掘立柱建物址を 5 棟、さらに掘立柱建物址と時期を同じくすると思われる溝を数条検出した。

弥生時代の 1 号住居址は、北よりのびた低い尾根筋の東斜面に、2 号住居址は東側に入っている谷の奥に位置している。2 号住居址は 2 本柱であり、規模も小さいことを思えば 4 号住居址と同じようであるが、1 号住居址との関係は、4 号住居址における 3 号住居址と同じような密接な関係はないように思われる。

5 棟の掘立柱建物址は、尾根の西斜面に位置する。弥生時代の住居址は、強い西風をさけて東斜面にあったが、これらの建物址は西風を受ける位置にある。さらに、鉄滓、炉壁と思われる資料が広く散っていたことから、数条の溝も含めて、鉄関係の生産活動があったのではないかと思われる。溝 5 から 12~13 世紀の土器が、調査区の西斜面より 14~15 世紀の土器が出土しているため、この 2 時期にわたってこの地で、生産活動が行なわれていたものと思われる。

第2節 Ⅱ 地区の調査

1. 調査の概要

トレンチ調査

全面調査にはいる前に、遺構のひろがりを確認することを主な目的としてトレンチ調査を実施した。ここでは、全面調査区に含まれるトレンチを除いた、他のトレンチ調査の結果について簡単に説明する。

第2トレンチ

Ⅰ・Ⅱ地区の東側にはいっている谷筋にあたっている。

このトレンチのⅡ地区にあたる地域は、耕土から旧耕土をはじめ上部包含層までがほぼ水平堆積している。上部包含層は北で約20cm、南に約70cmと深くなる。この上部包含層には多量の礫を含むが、この礫も比較的北半部分に多くみられる。下部包含層はトレンチ南端より北へ3m付近にはじまり、10cm～30cmの厚さをもって南に広がる。北側約3mにはまったくくみることができない。旧地形は南にさがるゆるやかな斜面になっている。

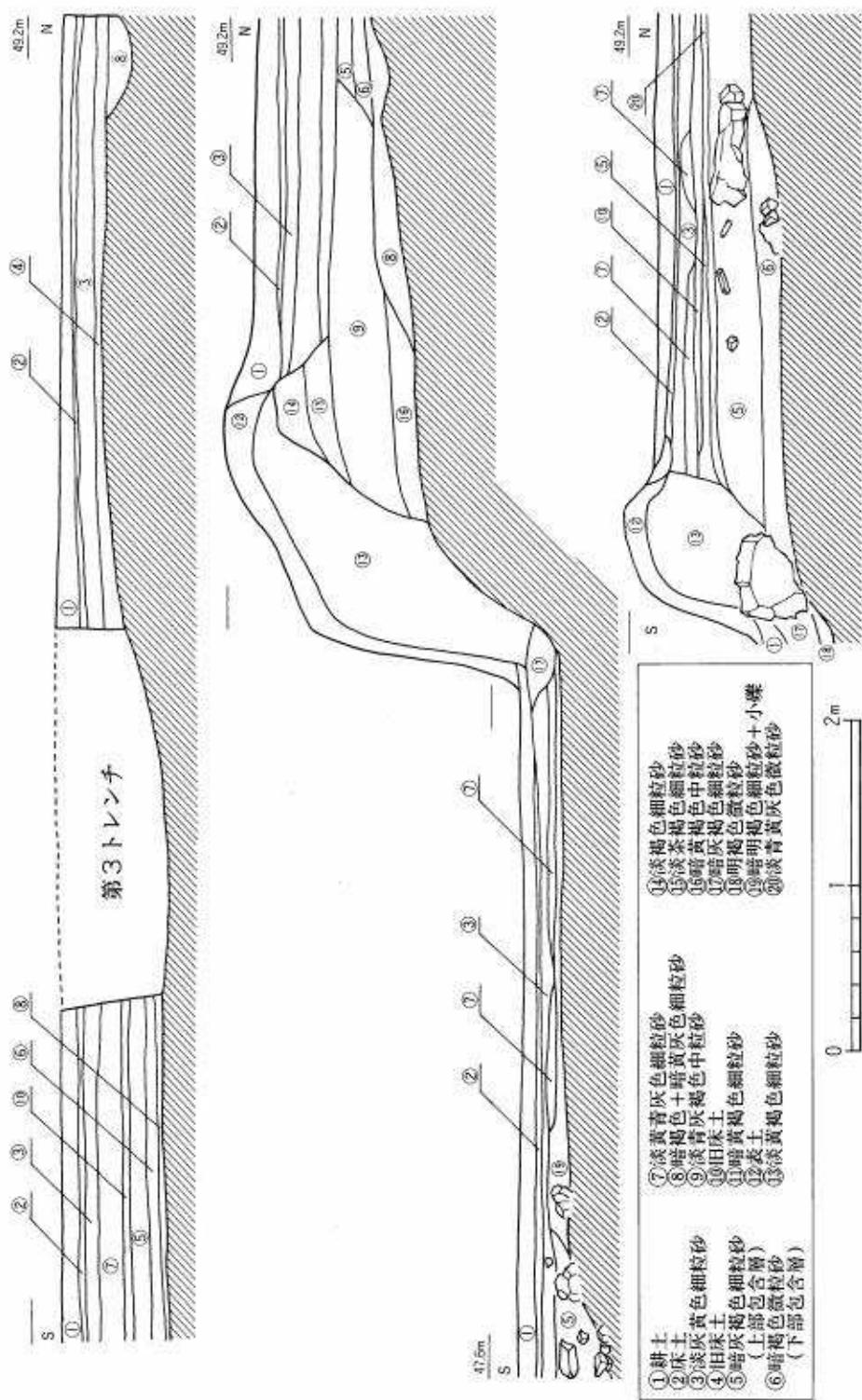
Ⅲ地区以北についても上部包含層までは、それ以南とほぼ同じ状況にある。ただ、トレンチ北端より15m以南に上部包含層の上にうすい間層をおいて、上部包含層と同質に近い厚さ10cmほどのうすい包含層がみられる。下部包含層はトレンチ北端より16m以南、現水田畔まで約20cmの厚さでひろがる。上部包含層にはやはり礫が混入しており、トレンチ北端から12mのところで旧地形のたちあがりがある。これ以北にはひろがらない。上部包含層の北端から北側約3mにわたって後世の水田造成による削平がなされたことが知れる。

トレンチ北側の最上段地区は旧地形が南に若干低いものの、かなりの平坦面をもっている。上・下両包含層は北端の現水田畔下までのびず、第3トレンチにぶつかってなくなる。両包含層はトレンチの北端より8.5m付近からはじまり、下部包含層は約10cmの厚さをもち、上部包含層は10～20cmの厚さをもっている。

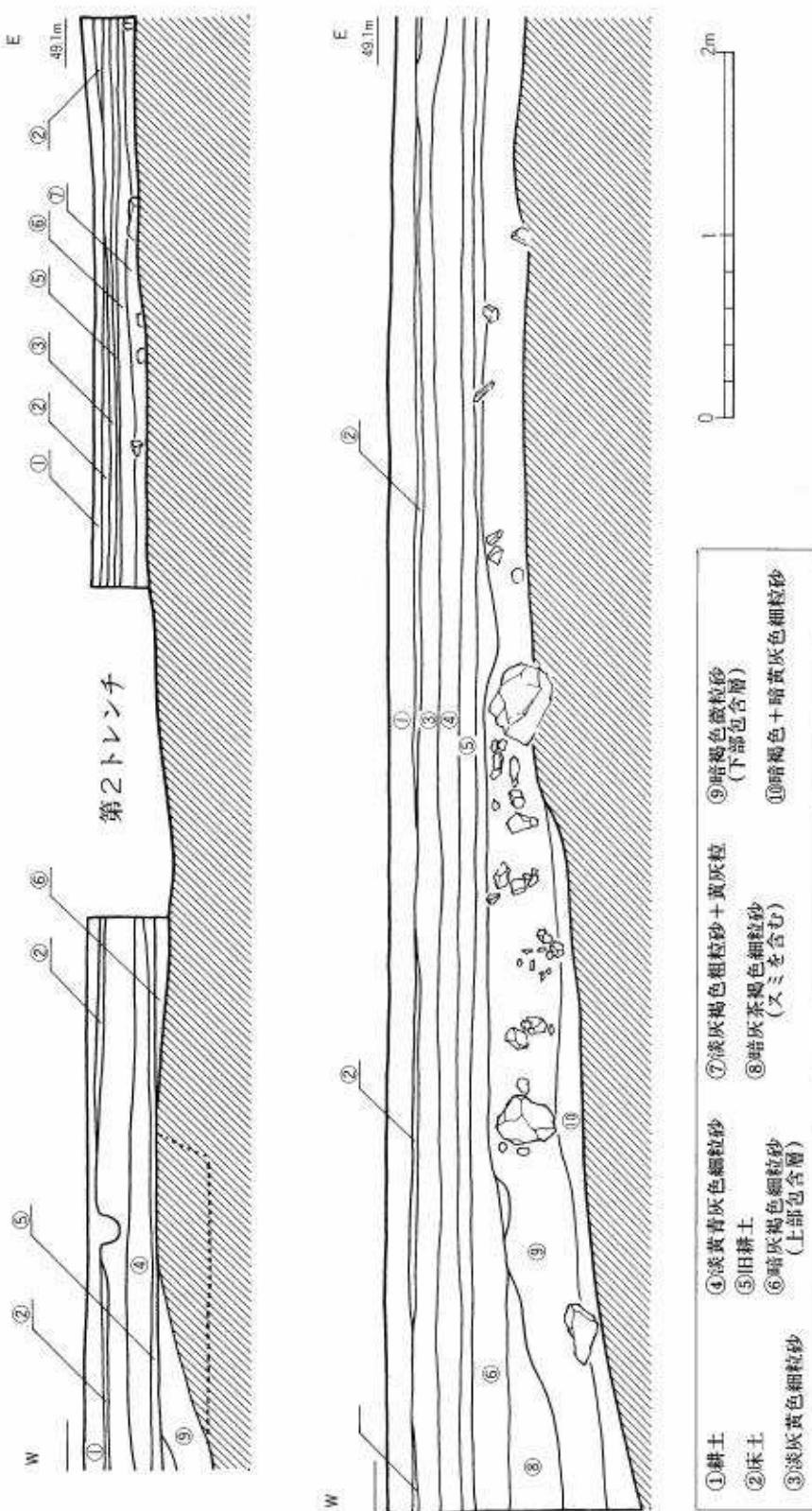
第3トレンチ

第2トレンチに直交するトレンチである。上部包含層は東端よりはじまり、約10cmの厚さをもって第2トレンチの西1mで一度なくなり第2トレンチの西約3m付近で再び現われる。そのまま西端まで続き、最厚で約20cmをはかる。下部包含層は第2トレンチの西2mあたりより堆積し、そのまま西にむかってしだいに厚くなる。これによって、西にはいりこんでいる大きな谷にむかってしだいにさがるゆるやかな斜面を形成していることがわかる。下部包含層には40cm前後の礫をはじめ、多量の礫を含んでいる。

下部包含層は弥生時代の土器片のみを含んでいるが、特に中期末から後期の土器片を中心にも多量の遺物を出土する。全域にわたって弥生時代の遺物包含層を確認したが、Ⅰ・Ⅱ

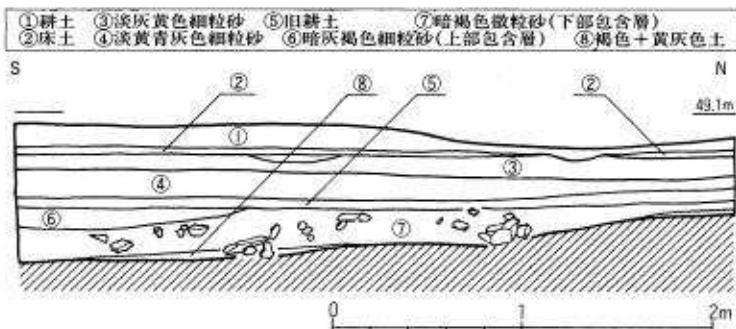


第21図 第2トレンチ西壁土層図



第22図 第3トレンチ北壁土層図

地区の遺物と共に
通すると思われる
旧地形面には
礫が多量に露頭
しており、弥生
時代の遺構はま
ったく確認する
ことができなか
った。



第23図 第11トレンチ西壁土層図

全面調査

基本地形はほぼⅠ地区と同じく、調査区の西約3分の1付近に小さな尾根のびがあり、西は谷によって大きくおち込んでいく。東側の約3分の1にはⅠ地区からのびてきた小さな谷の奥部がはいりこんでおり、それより東の地区は東側の尾根にむかって高まっていく。

海拔はこの小さな谷の南辺が最も低く約46.0m、北東隅に高くなり約48.0mをはかる。調査区は東西約35.0m・南北約10.0mと東西に長く、西側の尾根部分が南にはり出してその先端部に庚申の社が祭られている。

この地区では弥生時代中期の堅穴住居址2棟と大形土壙1、それに時期不明の掘立柱建物1棟を検出した。大形土壙は谷の部分に掘りこまれ、住居址は西側の尾根の上に構築されている。谷部以東の地区にはまったく遺構を検出できない。基本層位(第22図)は耕土から旧耕土までがほぼ水平堆積をしており、暗青灰褐色中粒砂の下に上部包含層が20~40cmの厚さで堆積する。下部包含層は3号住居址内埋土の上に若干みるのみである。基本的にはこの上部包含層の直下より遺構を検出できるが、北側は幅約1.0mで谷部以西には包含層が削平されてしまつたくみられず、床土直下より遺構面が顔をみせる。調査区の東半部および西半部でもその南側には遺構面に拳大をはじめとして多数の礫が露頭しているが、2棟の住居址の床面には頭を持ち上るような礫はまったくなく、2号住居址同様その構築にあたってじゃまになる礫を抜き取る行為が行なわれたものと思われる。

2. 3号住居址

調査区の東側にはいりこんでいる小さな谷の西斜面にのるように構築されているが、大極的には尾根筋を占める位置にある。

住居址の床面にはスミや土器の少片が多く含まれているためこれらを取りのぞいたところ、四重に回る周壁溝の痕跡が現われ、3度の建替えが行なわれていることが明らかとなつた。それぞれの建替えに際して前時の周壁溝を埋める行為がなされ、最終的に張り床状

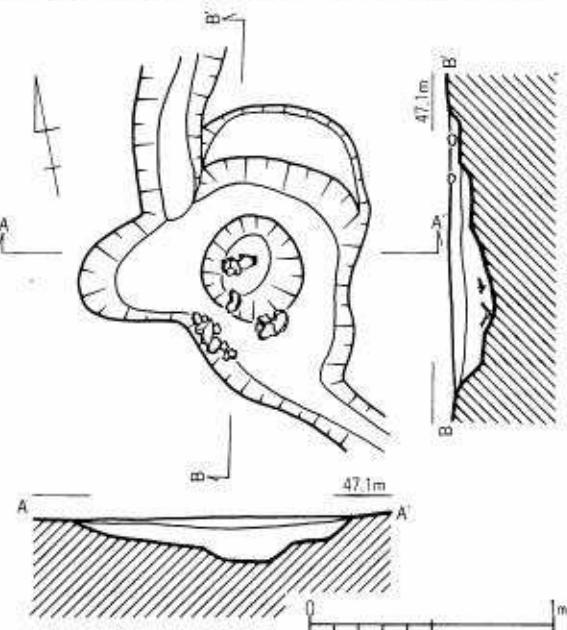
の状態になったものと思われる。

最初の住居址は、直径が約6mあり、この遺跡中でも標準的な規模の住居址である。この住居址の周壁溝は、北西部で長さ約90cmにわたって分断されている。この部分が他にくらべて周壁溝が浅かったために、二度、三度と住居址を建替えていく際に削平されて6号住居址のように消失したとも思われるが、7号住居址などは、ほぼ同一の個所を意図的に掘り残して周壁溝を分断しているため、一概に削平によるものとばかりはいいきれないようにも思われる。

第2期の住居址は2個所で第1期の住居址の周壁溝を切っているが、大まかには第1期の住居址の外側に周壁溝をめぐらして径約6.4mに拡張している。

第3期は西側半分で第2期の周壁溝と切りあう結果、住居址は東側に拡げられることとなる。直径約7mをはかる。

最終期の住居址は前期の周壁溝を2個所で取りこんでいるが、ほぼその外側に周壁溝がめぐるよう設定されている。ここにいたって径約7.6mの本遺跡中最大の規模をほこる円形竪穴住居址となる。壁はわずかに開きながら立ち上り、その高さは最も高い北壁部で約30cmをみる。この壁にそって幅約30cm、深さ10cm、断面「U」字形の周壁溝がめぐらされている。床面中央の長径1.2m、短径0.9mの不定形をした土壙は、その中央がさらに一段深くなり二段土壙となっている。土壙の一部には火を受けた痕跡がみられ、埋土にも焼土や炭を若干含んでいる。壙底部には弥生時代後期に属する變形土器の破片(22・44・51)が含まれている。数個体分あるように思われるが、接合するものはほとんどない。遺存状態も悪く、二次焼成を受けた可能性も強い。中央土壙以外にもその周囲に3ヶ所にわたって焼土の集中したり、床面の焼けた痕跡をみることができる。この中央土壙からほぼ北の方向にむかって幅約25cmの非常に深い溝がのび、周壁溝と連結している。また、南東方向にむかっても幅約25cm、深さ約15cmの「V」字断面をした溝が周壁溝よりも一段深く掘りこまれている。南



第24図 3号住居址中央土壙

東方向が谷地形のためにしだいに低くなっていくため、この溝は排水の機能をそなえた溝かとも思われる。

以上の建替えに伴う柱穴は2組を確認することができる。上記の各住居址の建替えの状況をみると、第2期と最終期の住居址がそれぞれ前時期の周壁溝の外側におさまるように周壁を設けて拡張していることがうかがえるため、内側の柱穴の組合せが第1期と第2期に伴う柱穴であり、外側の柱間の長くなる柱の組み合せが第3期と最終期の住居址に共有された柱穴ではないかと考えられる。

また、中央土壙と排水溝は最終期の住居址の周壁溝を検出した面で確認できたため、この段階の住居址に伴うものであることは確実であるが、中央土壙から北に伸びた溝に切られて同様の溝がもう1本あり、その溝が第2期の住居址の周壁溝に結びついている。ただ、この個所は第2期の周壁溝が第1期の周壁溝をとりこんでいるため、この溝がもう一段階古く、第1期の住居址に伴うものである可能性もある。さらに、中央土壙が不定円形の二段土壙であり、各住居址にあてはめてみてもほぼその中央に設けられているため、第1期の住居址から共通して用いられていたことも十分に考えられる。

3号住居址出土土器

大森谷遺跡で検出された7軒の住居址は削平などのために遺存状態は決して良好な状態であったとはいえないが、相対的に住居址内出土の遺物は非常に少量であった。その中でも3号住居址は比較的多量の土器片を出土したが、ほとんどは床面に伴ったものではなく埋土内の土器としてとらえられるものである。また、土器の状態は非常に悪く破片も小片のものがほとんどである。

出土土器は中期後葉の様相を若干残してはいるが、その大半は後期の初頭として取らえられるものと思われる。以下出土土器について器種別に簡単に説明してみたい。

壺形土器（第25図）

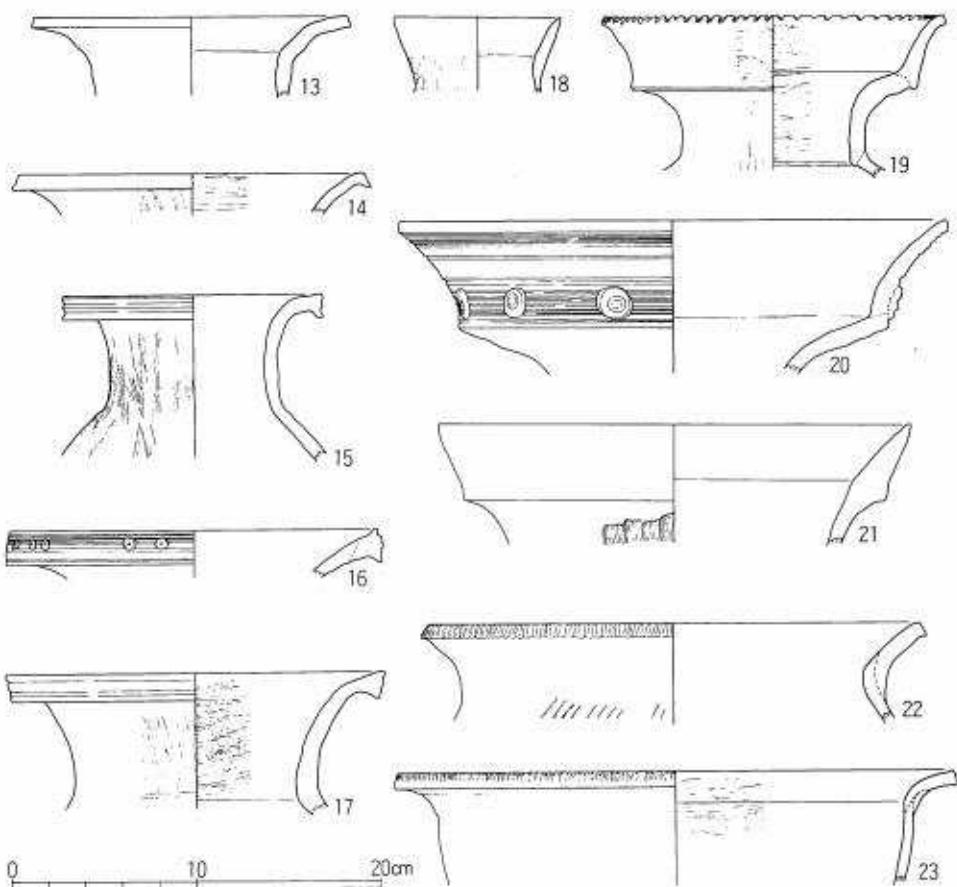
13は短かく直立する頸部にラッパ状に開く口縁をもち、端部をそのままおさめている。14は頸部の形態は不明であるが、13よりも口縁が深く開き、その端部が小さくなめ外方にくりさがる。内面を横方向に篦磨きする。15は13よりも口縁が短かく水平に近く開き、端部は下方に若干肥厚し垂直面を形成する。その垂直面には2条の沈線をもつ。外面に刷毛目を残す。16は15に類似した口縁形態であり端部が上下に肥厚しなめ下方に開く面をもつ。面の外面には5条の沈線の後2つを単位とする円形浮文をはりつける。17は頸部から外わんしながら開く口縁の端部が下方に小さく肥厚し、外傾する面をなす。頸部外面を縦方向に、その内面を横方向に篦磨きする。18は外傾しながら開く直口縁であるが、直口型式のものは本遺跡では資料数が非常に少ない。外面に縦方向の篦磨きが残る。

19は明確な複合口縁をもつ壺である。頸部は大きく外彎した後、一条の稜をもって口縁

へと移り、さらにわずかに外彎しながら開く。端部は小さく折曲した後、丸くおさまり、口唇にきざみを加える。外面は頸部を縦方向の口縁部を横方向の箇磨きで調整し、内面は折曲部を狭く縦方向に磨くほかは、横方向に磨く。20も複合口縁になり、大きく開いた頸部は大きく角度をかえて短かく直角に立上った後、わずか外彎しながらまた大きく開いて丸くおさまる。口縁部には口唇部直下と垂直部に数条の沈線をめぐらし、垂直部にはその上より円形浮文をはりつけている。横方向にナデあげ、調整は著しく丁寧である。器台口縁の可能性も捨てきれない。21の内面は外彎しながら開き、外面は大きく外彎して稜をなした後、角度をかえて開き端部は丸くおさまる。外面稜部以下は縦方向に刷毛目を加え、内面は横ナデする。稜壁が厚く稜台等の脚裾部になる可能性もある。

甕形土器（第25図）

22は口縁がゆるやかに「く」字状に折曲して開く。口縁端部は下方にごくわずかに小さ



第25図 3号住居址出土土器—1

く肥厚して狭い面をなしておさまる。口唇部にはこまかにきざみ目が加わる。外面頸部以下には叩きの痕跡がわずかに残る。23は肩がほとんど張らなく深鉢状の形態をなすものと思われる。頸部が若干くぼんだ後、口縁はゆるやかに大きく外反し水平に近い形態となる。口縁端部はごくわずかに肥厚して狭い面となり、その口唇面の上半にのみこまかにきざみ目がみられる。内面には頸部以下を縦方向に磨いた後、それ以上に横方向の箝磨きを施す。

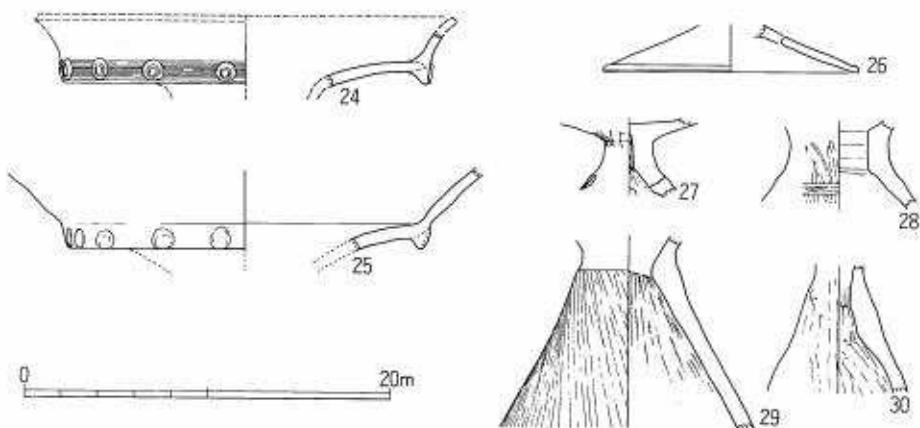
器台形土器（第26図）

24は脚部がなく口縁部もその上半を欠くが、およよその形態を推察することはできる。頸部からびた坏部は大きく外に開きほぼ水平な受部をなす。口縁部は立ちぎみに外彎して開き、その変換部の外面は下方にくりさがり複合口縁の形態をとる。このくり下り部の外面には沈線が数条めぐり、その上に円形浮文を配している。25は口縁端と受部下半を欠いている。受部はゆるく外彎しながら大きく開き、角度をかえて口縁が外反する。変換部の外側にはくり下り部がはりつけられて複合口縁の形態をなし、その外側にうすい円形浮文がつけられている。両者とも器壁は薄く丁寧に磨きあげられている。

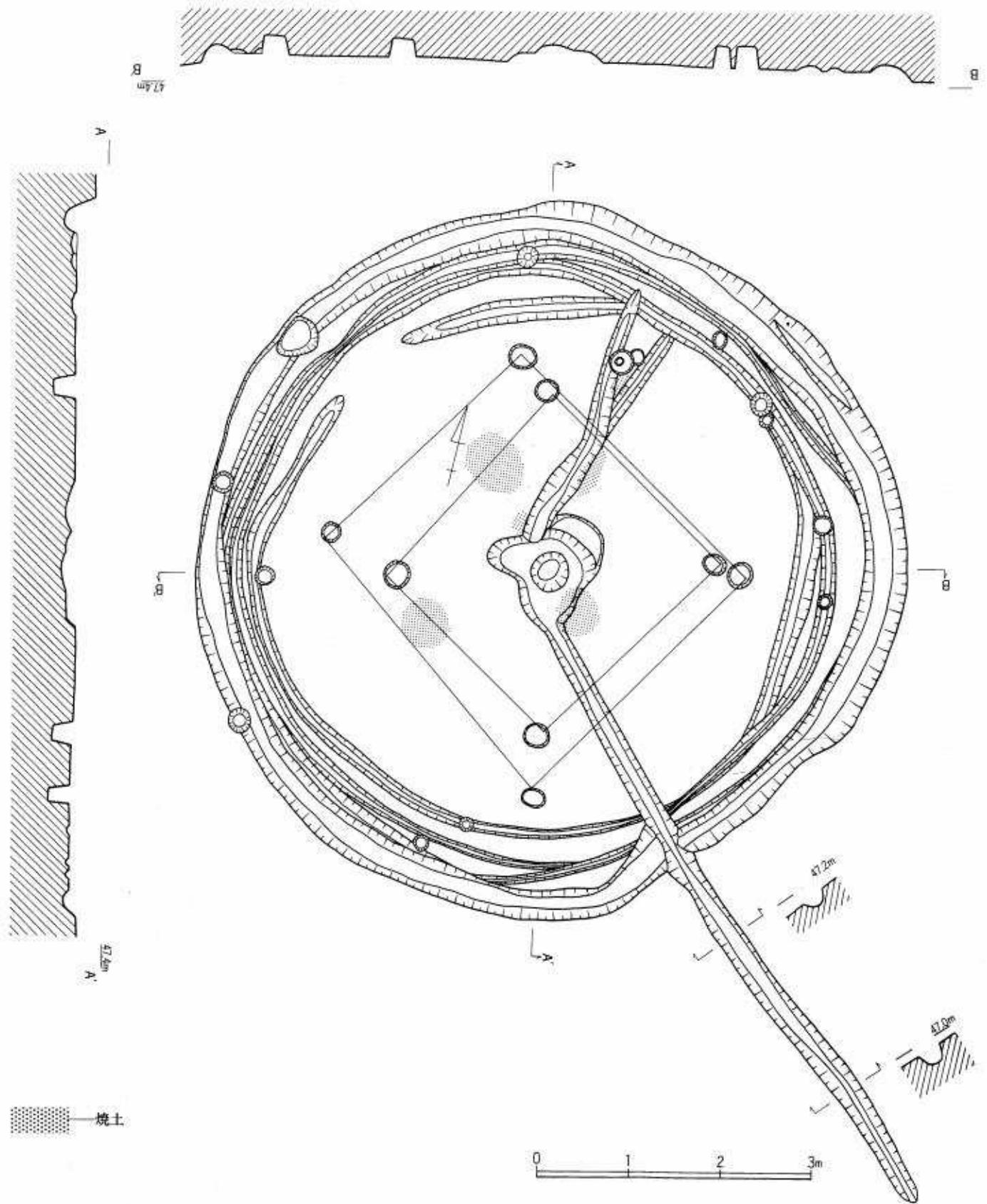
高坏形・器台脚部（第26図）

26は「ハ」字形に開く高坏形土器の脚部である。脚端部は上部外面に小さく肥厚して丸くおさまる。上端のわれ口部にはスカシの痕跡がみられ、本来は三方に穿孔されていたものと思われる。胎土、焼成とも良好であり丁寧に箝磨きされている。27は脚柱部と坏部の一部を残す。短かな脚柱部には大きく開く脚部がつづいていたようである。

脚部の下端には三方に設けられたスカシの一部がみられる。脚柱部の中は坏部内面近くまで深くくり抜かれている。28は器台の脚部であるが、脚柱部のみである。脚柱部内は、大きくくり抜かれている。外面は縦方向に細かく箝磨きされ、1ヶ所のみ後から横方向に磨いている。29も器台脚部である。脚部はかなり腰だかに開き、脚端部を欠損する。受部



第26図 3号住居址出土土器—2



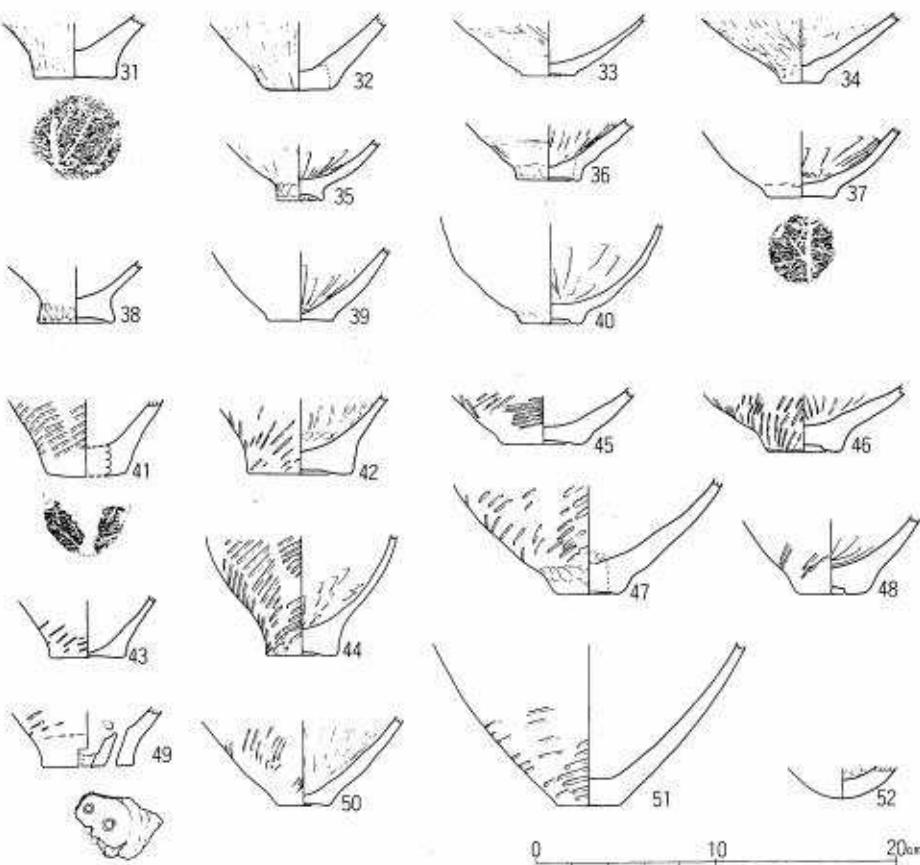
第27図 3号住居址

へは「く」字状に折曲し、折曲部の外面は若干しづらこまれている。裾部の外面には左なめ上方より傾斜する縦方向の範磨きが丁寧に施されている。内面には削り取りの痕跡が残る。30も器台脚部と思われるが29以上に腰だかとなり、脚の開きが狭い。外面には縦方向の範磨きの痕跡が残る。内面は下半を縦方向に範磨きし、上半は二段にわたって削り取っている。

土器底部 (28図)

第28図は、3号住居址より出土した土器底部の一部である。それを大まかな形態によって分類してみた。31~40は壺のものかと思われるものであり、41~52は甕もしくは鉢と思われるものである。

31・32は器壁が厚く、比較的大きな底面をもっている。外面はいずれも縦方向に範磨きする。33~35は底面が著しく小さく、高台状に高くなっている。外面はいずれも範によつて磨きあげる。内面は34のみ範磨きする。36はどちらかといえば、後者の形態にはいるも



第28図 3号住居址出土土器—3

のかと思われる。37~40は外面があれているために調整は不明であるが、おそらく壺になるものと思われる。39は、31・32の群に、他のものは高台状底部の類にいれられよう。31と37には底面に木葉圧痕が残っている。

41~44は体部の開きがゆるやかではなく、かなりの角度をもって上方にのびてゆく。そうした形態の体部にかなり大型の重厚な底部が伴っている。これに対して45~48は、体部がかなり大きく開きながらのび、それに高台状の底部を持っている。50・51はその中間的な形態として分類をしてみた。

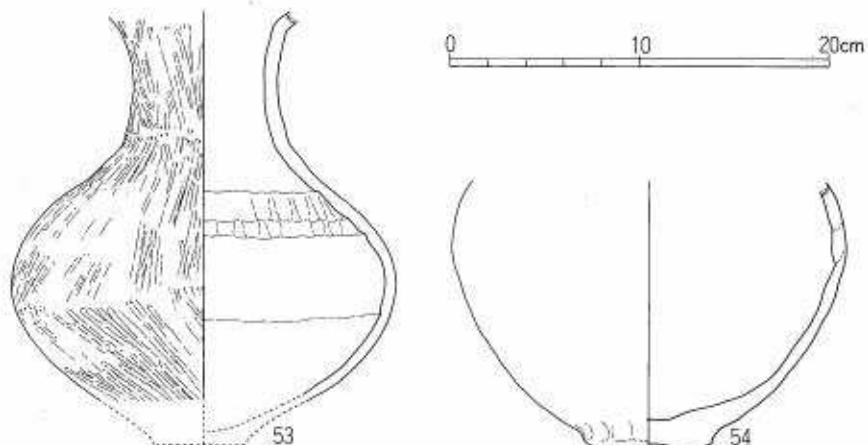
どの形態の底部にしても、外面には比較的小さな单位による右あがりの叩きが施されている。内面は遺存状態が悪く不明なものもあるが、横ナデ、箝磨きなどの手法をみることができる。

49は4個所の底部穿孔と1個所の側面部穿孔の痕跡を確認することのできるコンキの底部である。基本的な形態としては、42などと同じものである。52は完全な丸形の底部であるが、体部のそりなどと比較すると、器壁がかなり厚くできている。外面はナデあげ、内面にはこまかに箝磨きが明瞭にみられており、どういった器形の底部なのか明確にしえない。

3号住居址周辺出土土器（第29図）

3号住居址周辺出土の土器というのは、排水溝のなかほどの西肩部に接するようにして出土した壺と、住居址周壁の北西わきに検出した径40cmあまりの土壙上で出土した壺の2点のことである。

53は明褐色をした非常に丁寧な作りの広口壺になると思われる土器である。頸部はゆるやかに外彎しながらもほぼまっすぐに立ち上り、口縁は比較的大きく開くものと思われ



第29図 3号住居址の周辺出土土器

る。頸部から体部へとなだらかに移り、胴部最大径は器高の約3分の1あたりにあって大きく張り出している。底部は欠損するが、安定した大きめの平底がついていたものと思われる。外面には三分割して施した笠磨きがあざやかに残っている。口縁部から頸部まではほぼ縦方向に施し、その後頸部から胴部最大径部分までを同じように縦方向に磨いている。最後に胴部最大径部分以下を左上方から右下方へななめに磨きあげている。内面はナデを基本調整としているが、胴部上半の一部には指頭圧痕がナデけされずに残ったままになっている。胎土・焼成とも他のものに較べると著しく良好なものであり、他の土器とは異質な感じを受ける。

54は住居址北西の土壤に関連するとはいっても壇底からは15cmあまり浮いており、土壤内に埋めこんだというより、後で落ちこんだ可能性が十分に考えられる。土器は胴部のみであるが、内外面ともナデ調整を基本としており、底部のつくり出しは指おさえをもっておこなっている。胴部はゆるやかに内湾しながら開いてゆき、球形に近い形態をなしている。底部は厚く、大きな平底となっている。

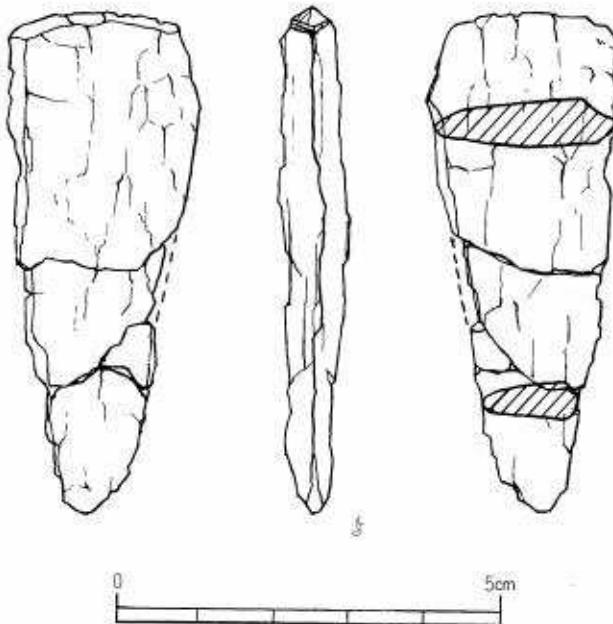
その他の遺物

3号住居址からの土器以外の遺物としては、石鎌・投弾などの石器類があるが、これについて第5章でくわしくふれるので、ここでははぶき、鉄製品についてのべてみたい。

鉄製品（第30図）は床

面の直上に検出されたものではなく、竪穴住居址の埋土の中程より出土した。出土状況などからみて、後世遺構に伴う混入ではなく、他の土器同様住居址内埋土に包含されたものであることはまちがいない。

本資料は、長さ約6.5cm、厚さ約8mmをはかる。平面形は三角形をしており、上辺が約2.5cmの幅をもっている。全面錆におおわれているが、その断面をみると、長い2辺

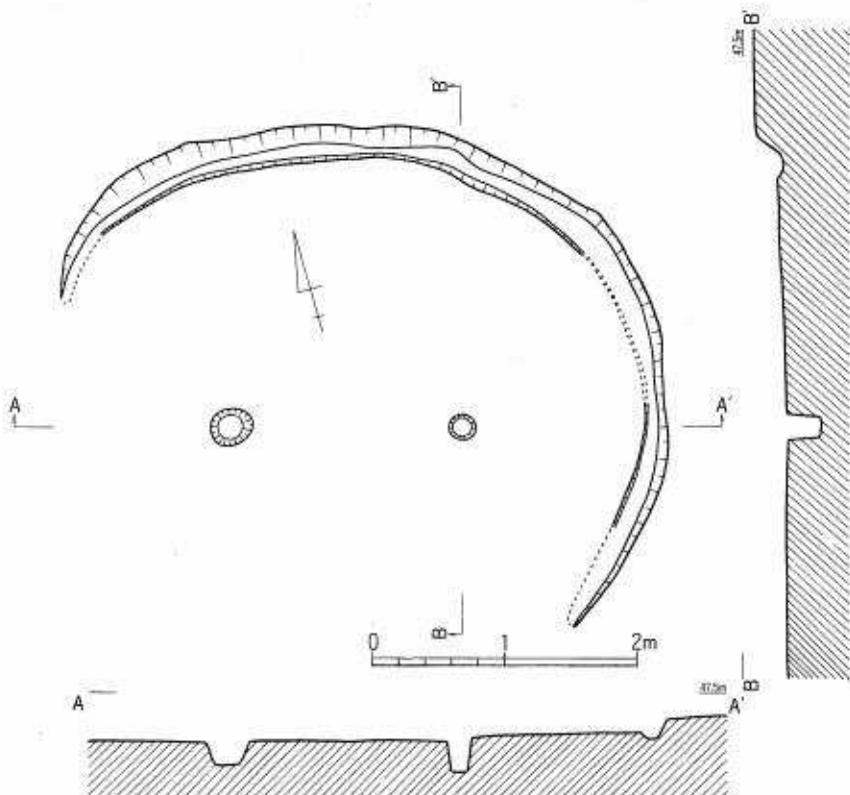


第30図 鉄製品

のうち一辺は丸く作られ、もう一辺にむかってしたいに薄くなっている。かといって明確に刃部だとも言えず、先端も鋭利に作り出しているわけではないため、その使用目的をはっきりと知ることはできない。

3. 4号住居址

調査区の西には深い谷が入りこんでいるため、その西端は谷にむかって大きく落ちこんでいる。4号住居址は3号住居址と4mを隔てて西にあり、かろうじて谷に落ちることなく築かれている。ただ、こうした位置にあるため、住居址の西側約3分の1はすでに消失している。



第31図 4号住居址

住居址の平面形は復元すると径約5mの比較的小型の円形住居址であったと思われる。壁部などは流失と後世の削平のためにかなり低くなってしまっており、最も深い北東部でかろうじて20cmを残す程度である。幅約30cmの周壁溝はきわめて浅くしか掘りこかれておらず、その断面は幅広い丸底形をなしている。中央土壇などの施設はまったく作られておらず、排

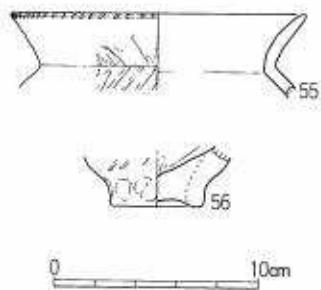
水溝も現状ではまったく検出できなかった。柱は東西方向にならぶ2本柱であり、柱間は1.8mをはかる。

4号住居址出土土器（第32図）

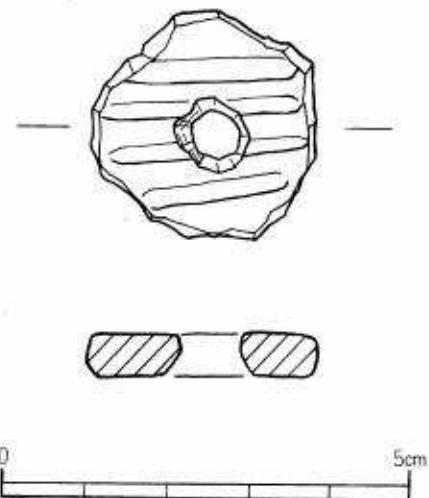
本住居址ではごく少量の土器片しか出土していないため、図示できるのは2点のみである。55は甕であるが、胴部以下がない。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁は外反しながら開いて丸くおさまる。口唇部には小さなきざみ目が加えられている。頸部には刷毛目が残っており、胴部外面には右あがりの叩きが施される。56は甕の底部である。指おさえによって高台状に底部をつくり出している。胴部外面には右あがりの叩きの痕跡がわずかに残っている。

その他には、叩きを加えた甕の胴部の破片を丸く打ちかいて径約3cmぐらいにし、その中央に7mmあまりの孔を穿った土器片（第33図）が1点出土している。

土器の資料が非常に少ないため、これをもって4号住居址の時期を決定することにはかなりの無理があると思われるが、その限られた資料からみて、弥生時代後期にはいるものであろうと考えている。図化できなかつたが3号住居址でも同様の形態をした甕の破片が若干みられるため、両住居址はそう大きな時間の隔たりをおかずに存在していたものと考えることもできる。



第32図 4号住居址出土器



第33図 有孔円板

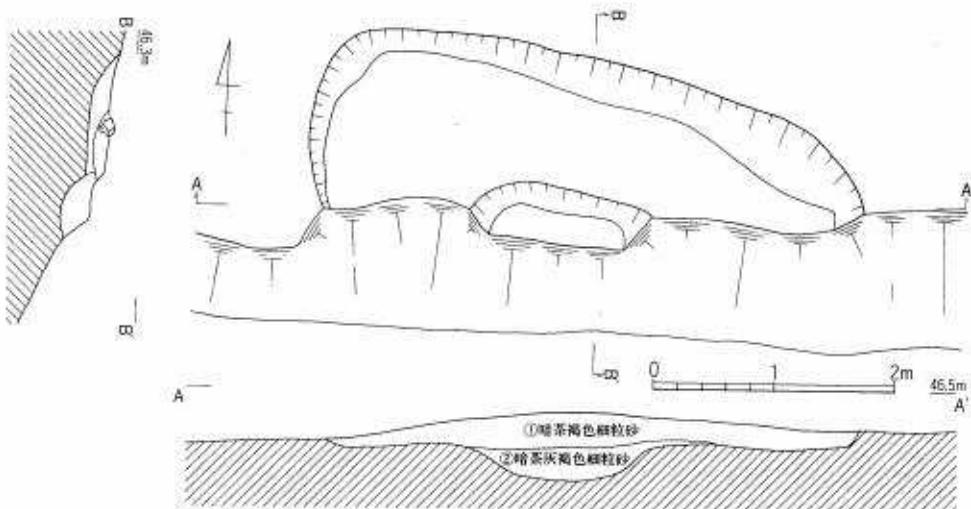
4. 大形土壙

調査区の東側に入りこんでいた小さな谷の西斜面に掘りこまれている。南半分は後世の開墾の際に切り取られているが、東西約4.6m、南北現長約1.3mの隅円方形をしている。南側に露出している断面をみると、塙底が水平に近く、その中央部が大きく一段落ちこんでいるため当初は隅円方形の住居址を想定していた。

ただ掘りあげてみると、壁が垂直に近く立ちあがる傾向がまったくなく、かなりゆるやかにそして大きく開いてしまう。また、本遺跡の住居址にはすべてに周壁溝が設けられて

いるが、ここにはその痕跡がまったくみられない。さらに、南側を消失しているとはいえ半分以上は確実に残っているにもかかわらず柱穴がまったく遺存していない。たとえ2本柱であったとしても、全体の半分以上を残すため、少なくとも一方の柱穴は検出できるものと思うがそれさえも知ることができない。

以上の状況から考えて本遺構を住居址とするよりも、大形の土壙と考えた方がより妥当と思い住居址とはしなかった。



第34図 大形土壙

大形土壙出土土器（第35図）

本遺構からもかなり多量の土器が出土しているが、小さな破片が多く、図化できるものはごくわずかであった。そのなかでも甕はいくつかの型式に分類することができるが、壺はほとんどその資料をみることができなかった。

壺形土器

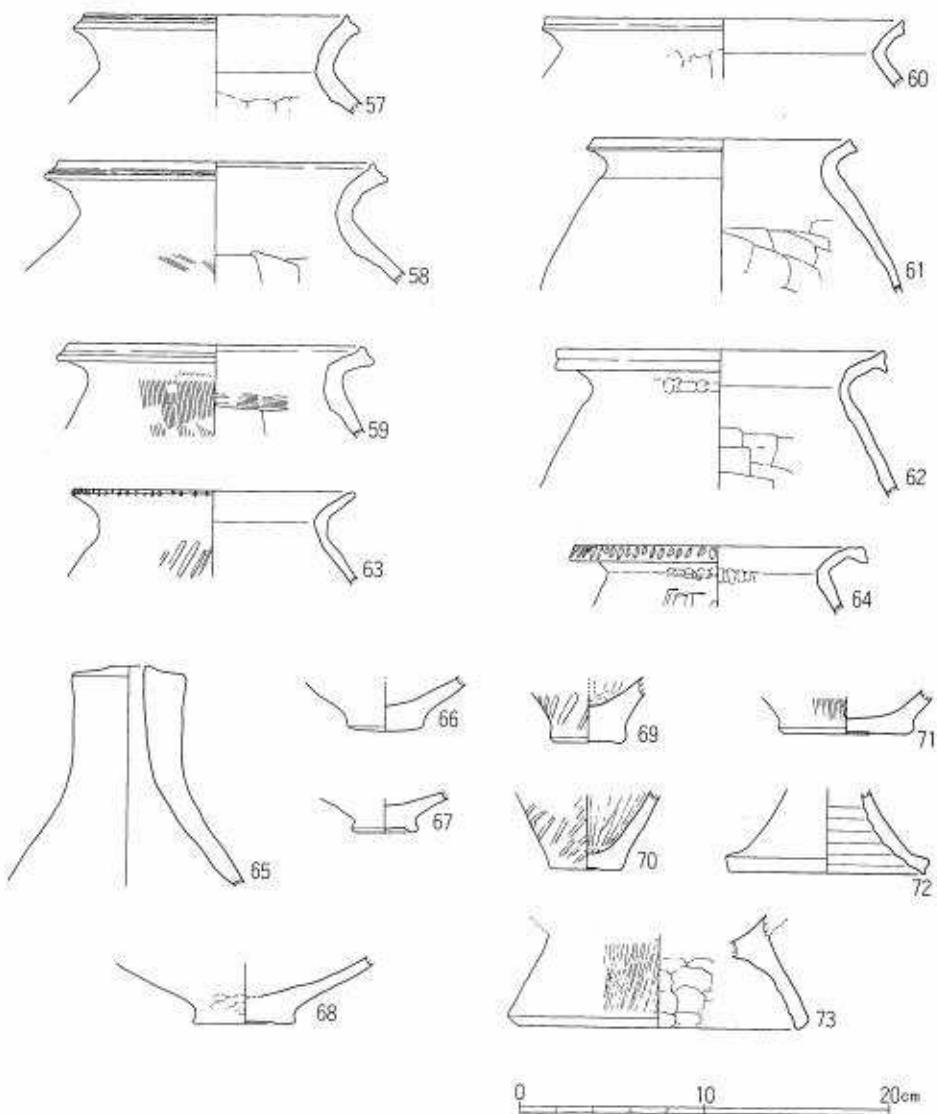
57～59は胴部以下を欠損するが、頸部はゆるやかに「く」字状に屈曲し、口縁部はわずかに外彎しながら短かく開く。口縁端部は斜め下方につまみ出し、断面三角形に整形している。これによってできた口唇部の狭い面には沈線がめぐらされている。胴部外面には刷毛目を施したものもみられる。内面はいずれも頸部以下を横方向に短かく窪削りしているが、器壁はかなり厚いままである。

60は頸部が「く」字状に強く屈曲し、短かく開いた口縁の端部はごく狭い垂直面になっている。62は、60の頸部をしづらりこんで径を小さくしたもので、口縁端部の下端を下方にくりさげている。内面の頸部以下には横方向の窪削りがみられる。61は、62同様胴部の最大径がほぼ中位にくる形態をなしているが、口縁はさらに短くなっている。頸部外面に

はしづりこんだ痕跡が明瞭にみられる。内面は胸部の上方より横方向に箆で削られている。63は4号住居址出土の55に近く、「く」字に屈曲した口縁端部にはきざみをもつてゐる。胸部外面には右あがりの叩きが残る。64は短かく屈曲した口縁の端部が、ななめ下方に大きく肥厚している。それによって形成された口唇面に米粒大のきざみ目が加えられる。頸部の内外には指頭圧痕をみられ、胸部外面を縦方向にあらく箆で磨いてゐる。

用途不明土器

65は短かい柱状部から大きく下方にひろがるが、下半は欠損している。内側は柱状部ま



第35図 大形土壤出土土器

で完全にくり抜かれて上まで貫通している。資料の正位もはっきりしないが、上端が台形になっているため、図示したように天地をとる蓋状の土器と思われるが、はっきりとした器種についても不明である。

土器底部

底面部の形態によって3つに分類できる。

66～68はゆるやかに大きく開く体部に、高台状に成形した比較的小さな底部がついている。69・71は体部がかなりの上方をめがけてのびてゆく。外面は叩き、内面には範磨きをほどこしている。ただ、69はかなり高台状に作られている。70は明瞭な底部の区別がなされているが、66～68ほど小型ではなく、大きな安定した底面となっている。

脚台部

72は高環形土器等の脚部と思われる。大きく開いた脚部は、端部付近でさらに大きく短く広がる。端部は若干内縫しながら内傾しその下端が小さくくりきがる。内面には粘土紐を輪積みし、横方向になでた痕跡が明確に残っている。

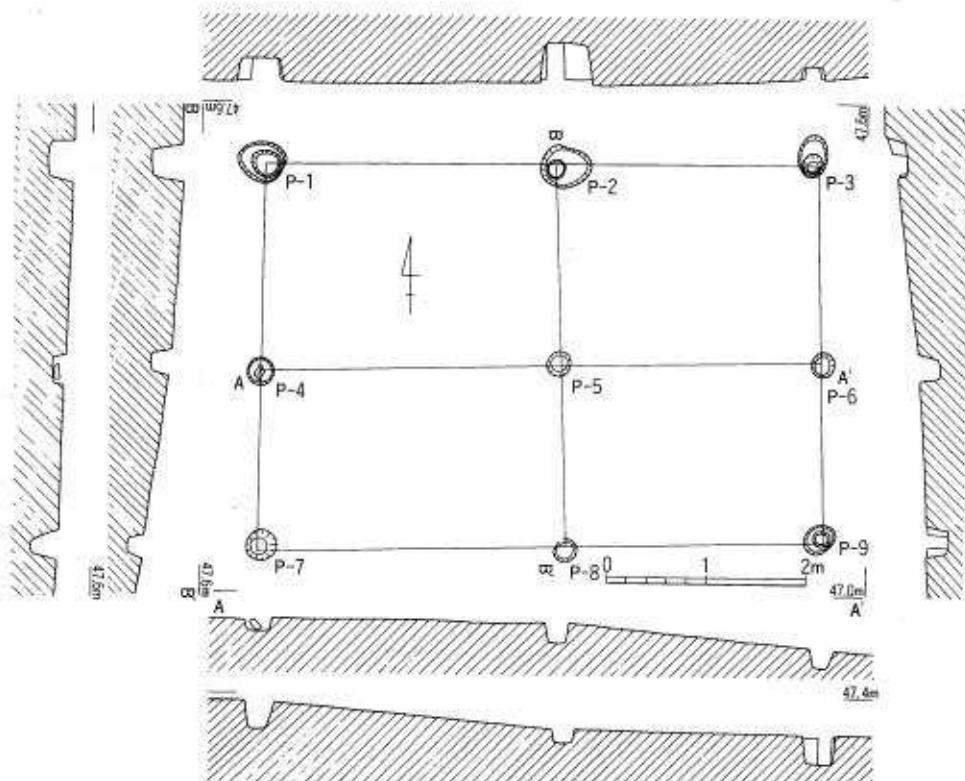
73は、菱形土器等の脚台部と思われる。かなり厚手のつくりであり、小さく開いた脚台部は、端部が内傾して、丸くおさまる。外面には縦方向の細かな範磨きが入り、内面には横方向の小さな範削りが施される。

5. 堀立柱建物址

掘出柱建物址 6

弥生時代の3号住居址の北西部に重複して建てられている。2間×2間の総柱建物であるが、東西方向が1mあまり長く作られている。平面規模は東西行で北側の柱の心々で5.5m、南側が5.67mをはかり、南北行も西側で3.83m、東側で3.72mとはほぼゆがみのない長方形プランをしている。

ただ、中央の東西柱行の柱ならびが若干南に偏しており、さらに中央の南北方向の柱ならびも東側によっている。このため、P₁—P₂ : P₄—P₅ : P₇—P₈、P₂—P₃ : P₅—P₆ : P₈—P₉さらにP₁—P₄ : P₂—P₅ : P₃—P₆、P₄—P₇ : P₅—P₈ : P₆—P₉の柱間はほぼ似かよった距離になるが、東西柱間と南北柱間との間には大きな差がみられる。掘方はすべて不定円形をしており、P₁、P₂、P₃、P₉には柱当りも認められる。また、掘方の深さをみても北側の東西柱行(P₁—P₂—P₃)は浅い包含層の下の地山に深く掘りこんでいるが、同方向の中・南の柱行は、南にむかってしだいにさがっている地山に達し、さらにそれを若干掘りこんでいるため、中の柱行・南の柱行としだいに深くなり、その深さはP₁—P₂—P₃柱行をはるかにしのぐ深さとなっている。礫を多量に含む砂質系のしまりの悪い土質では、それを掘り抜いて地山にまで掘りこまなければ柱を支えることができなかつたことが知れる。



第 36 図　掘立柱建物址 6

P₄ の掘方にはその底に石を入れて柱をもたせている。

6. 小 結

弥生時代の 2 軒の竪穴住居址は、いずれも西側にのびた小さな尾根の上に造営されていることが明らかとなった。特に 3 号住居址は、3 度も建替えられており、この遺跡の中でも、特別な意味をもった住居址であったのではなかろうかと思われる。ただ、本遺跡でも数少ない鉄製品と 1 点の石鎌（本遺跡では 2 点出土）をのぞいては、3 号住居址の特殊性を積極的に意味づける遺物や関係遺構もないため、具体的な性格にまで言及することはできなかった。

前節において、3 号住居址のある段階において、4 号住居址と並存していたのではなかろうかと述べたが、その関係についても積極的にそれを語る資料は皆無にひどい。4 号住居址からの出土遺物が少ないので、その時期を限定することは困難であったものの、有孔円板に使用されていた土器片や、数少ない出土土器片からみて、弥生時代後期の初頭を前後する範囲でおさめることができようと思われる。そうすると、時期が上ったとしても

3号住居址の最後の段階と大きく隔たるものではないため、両住居址が並存していた可能性も十分にありえると思われる。

もし、3号住居址のある段階に、その西側に4号住居址が建られていたとすれば、本遺跡の中で他にこれほど接近して建てられている住居址がないため、この3号と4号の住居址の有機的な関係を示すことになるかと思われる。こうした状態が、3号住居址が径8mあまりになる最終段階にあったとすれば、4号住居址の規模（径4mという規模の小ささ）、2本柱、中央土壙・排水溝をもたないといった構造上の特色等が、この住居址が3号住居址の付属的な性格をもつ建物であったことを示す要素とすることもできると思われる。

3号住居址出土の土器を見ると、壺・甕形土器などに中期後葉の様相を残しそうなものもみられる。特に目につくのは、器台が2点出土していることである。受部のみの資料であるが、著しい精製品であり、他の住居址には例をみていない。また、大形土壙の遺物をみると、壺がほとんどなく甕が非常に多いことに気がつく。さらに、特殊な器形の土器が2点ほど含まれている。こうしてみると、それぞれの遺構にも特徴をもった土器がわずかづつ含まれており、各遺構の性格をおぼろげながら把握できそうにも思われる。ただ、こうした要素だけで、各遺構が遺跡全体のなかでどのような役割をもっていたかにまでその意義を高揚させることには、かなりの無理があるようと思われるため、ここまで推察にとどめておきたい。



第3節 Ⅲ地区の調査

1. 調査の概要

南北約16m、東西約5.5mの南北に長い四辺形の調査区である。北に高く、南東に低くなっている。北東隅で海拔47m、南東隅で約44mをはかる。調査区の東側には小さいが、かなり深い谷がはいりこんどおり、調査区の東半分にもこの谷が現われている。

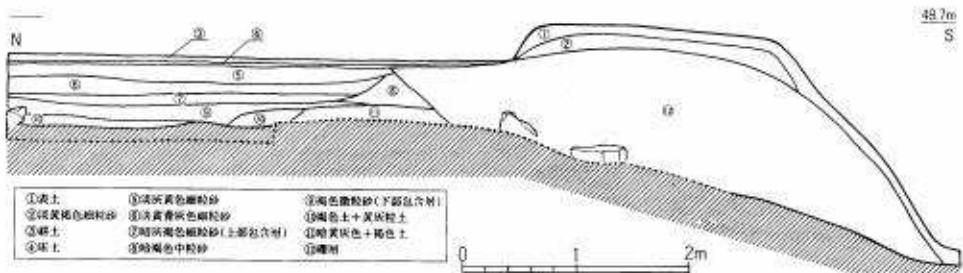
第5トレンチの断面をみても耕土の下に厚さ40cmほどの旧耕土があり、その下には西側半分に地山が現われる。東半分には包含層が谷をうめている状況が、よくうかがえる。この包含層にはⅠ・Ⅱ地区の上・下両包含層と同じように、多量の弥生時代後期を中心とする（中期後葉も少量含まれる）土器が含まれている。トレンチ調査の際には谷の東側および北側の斜面が著しく急であるため、これらの土器はトレンチ両側の平坦面に遺構が存在し、そこより流れこんだものと考えて、この地区的全面調査を実施した。

調査の結果、当初の予測に反して弥生時代の遺構はまったく存在せず、Ⅰ地区で多数検出された性格不明のピット・柱穴群がこの地区にも続いていることが判明した。

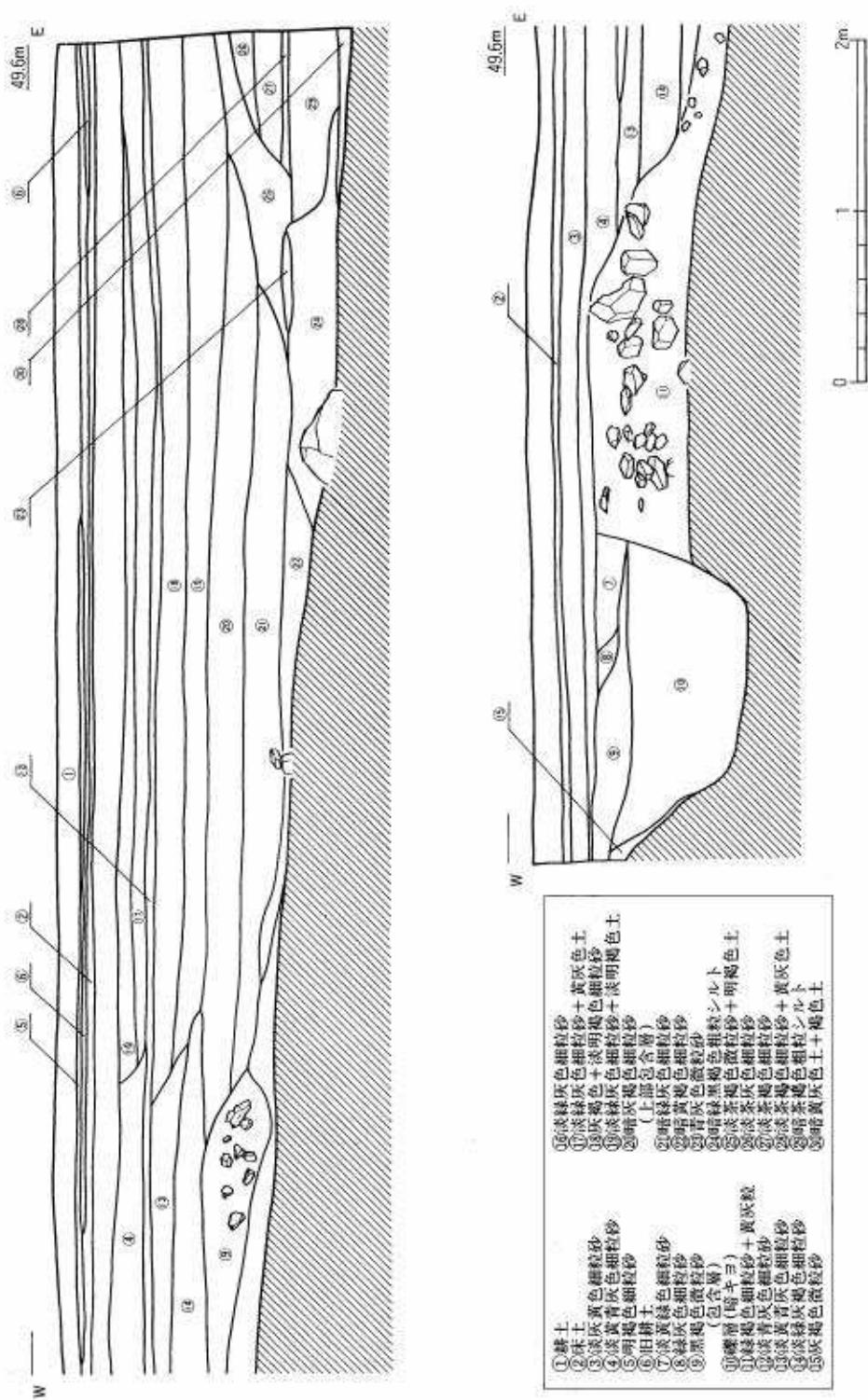
トレンチ調査

第1トレンチを東へのばし、現農道の東側に第5トレンチを設定した。このトレンチでは、西側半分で耕土直下に地山がみられ、Ⅰ地区の北側で検出したものと同様のピット群が存在していることを確認した。さらに、トレンチの東半分は地山がゆるやかに落ちてゆき、そこに上・下包含層が厚く堆積して谷を埋めており、その中に多量の後期弥生土器が含まれている。よって、もっと上方に住居址が存在していることが十分に予測されたため、第6・第7・第8の3本のトレンチを設定した。

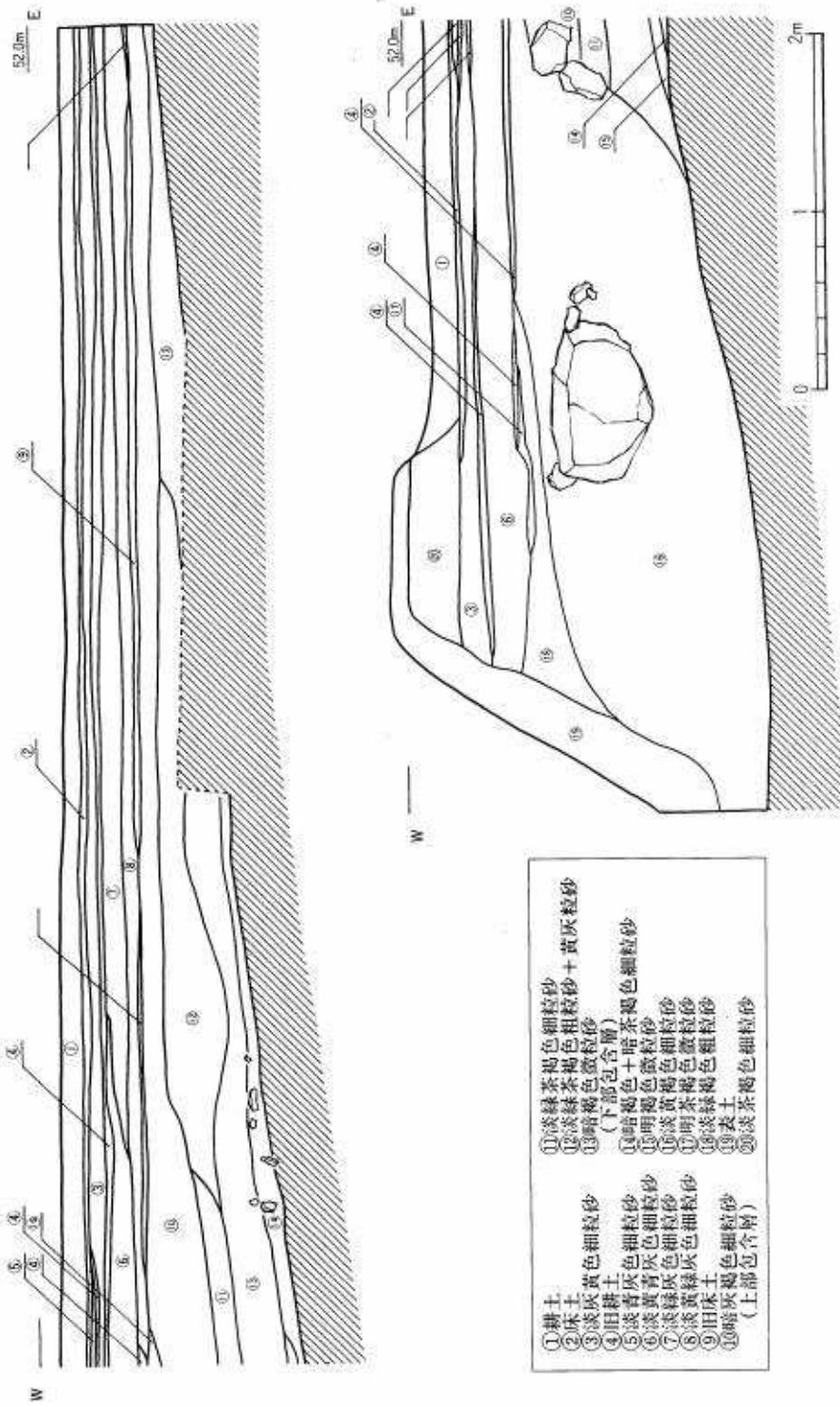
第6トレンチでは南におちこむ谷地形の肩部を確認した。この肩部以北にもかなりフラットな地山面が広く続いている。上・下の2つの包含層も北よりのびてきて、谷におちる北側で消えている。包含層には谷部同様、かなりの量の弥生土器片が含まれているが、フラットな地山には遺構を検出できなかった。第7トレンチでも、西からゆるやかに東へさ



第37図 第6トレンチ東壁土層図



第38図 第7トレンチ北壁土層図



第39図 第8トレーニチ北壁土層図

がってゆく谷地形がみられるが、ここでは上部包含層のみみられ、下部包含層は堆積していない。第8トレンチでは、前2トレンチとは逆に、大森谷の本谷筋にむかって西へさがる地山面がみられる。上・下の包含層は同様にみられるが、第7・第8トレンチでとらえた多量の弥生土器片を含む谷は、本トレンチのさらに東側へはいりこむようである。

以上4本のトレンチの結果より、谷部へ流れこんでいる土器片は路線内よりさらに北方の、平坦地から流されたものと考えられる。

2. 調査結果

包含層の土器に伴う明確な弥生時代の遺構は、最終的には存在していなかった。調査区の南半分は先山からの転落石（径50cm～人頭大）で覆われているために利用することができなかつたらしく、かろうじてⅠ地区でみられたようなピット・柱穴群をそれ以北に検出したのみであった。したがって、これらの遺構について若干記述するにとどめておきたい。

溝1・2

溝1は幅40～80cm、深さ10cm、現長約5.6mをはかる。調査区の北辺（現水田畦畔）に平行して、北東から南西方向に走っている。ただ、北端は削平のために消失している可能性が強いように思われる。

溝2は溝1に直交する方向に走っている。現長約1.6m、幅は15～50cmあり、南端に深くなっているが、10cmほどの深さを残すのみである。

両方の溝とも旧耕土と思われるような淡乳灰色土がはいっている。また、溝2の北端が溝1の延長上にある。それと各溝の北端が削平されているという共通点をもっている。これは、現在2本の溝になっているが、本来この両溝は、直角にクランクする一連の溝であったことを示すものではないかと思われる。ただ、その時期はまったくわからず、その性格についても、知ることはできなかった。

ピット・柱穴群

ピット・柱穴は混在しており、主に北辺より5mの範囲に集中する傾向がみられる。ただ、調査区の北辺部には少なく、海拔46.75mコンタ周辺に多く検出できる。それも、平坦面に限られ、谷部にはほとんど見られない。その大半は径20cm前後の平面形円形のものである。建物の柱穴になるものはまったくみられないため、Ⅰ地区で検出されたピット・柱穴群と同様に、水田開発等に伴う痕跡かとも思われる。

3. 小結

調査区より北の水田は幅が狭い棚田状になっており、それ以南はゆるやかな山裾のひろ

がりを示している。調査区も約16mにわたる平坦面をもっているが、南半分は先山からの転落石によって形成されているために、弥生時代の当時において利用できたのは、おそらくその半分たらずにすぎなかつたものと思われる。そうすると、谷部にはいりこんでいた、多量の土器の使用されていた地点が問題となってくる。

前記したように、調査区の東側の斜面は著しい急勾配であり、確認調査の結果においても、遺物・遺構がほとんど発見されていないため、この地区に遺構が存在しなかつたことは確実である。そうなると、その北側の水田が問題となる。ところが、北の水田にもトレッソを入れたが、遺構を確認できなかつた。ただ、遺構はないのに多量の遺物が谷内に含まれていること、また場所によつては（谷の中はもちろん）転落石が多量に露頭している状況は、Ⅲ地区の調査結果とまったく同じである。

Ⅲ地区の谷に流れこんでいた多量の土器群は、北方のさらに高い所から搬ばれたと思わざるをえない。そこは淡路縦貫道建設予定地内にはいっていないため、発掘調査にはおよばなかつたが、Ⅲ地区から北へ約50mほど離れた所にかなり広い平坦地がある。現在2軒の民家が建てられていることからも、その広さを知ることができる。この民家より北は、調査区の北斜面よりさらに急な斜面となって先山にいたついている。よつて、そこが山腹の小さなテラス状の地形になつてゐる。おそらく、そこに何軒かの住居が営まれていたものと思われる。そこで使用されていた土器が、土石流などによつて一気に流されたために、磨滅の少ない多量の土器が、谷を埋める結果になつたように思われる。この地区の状況が明らかになれば、本遺跡の性格もより一層明確なものになることであろう。

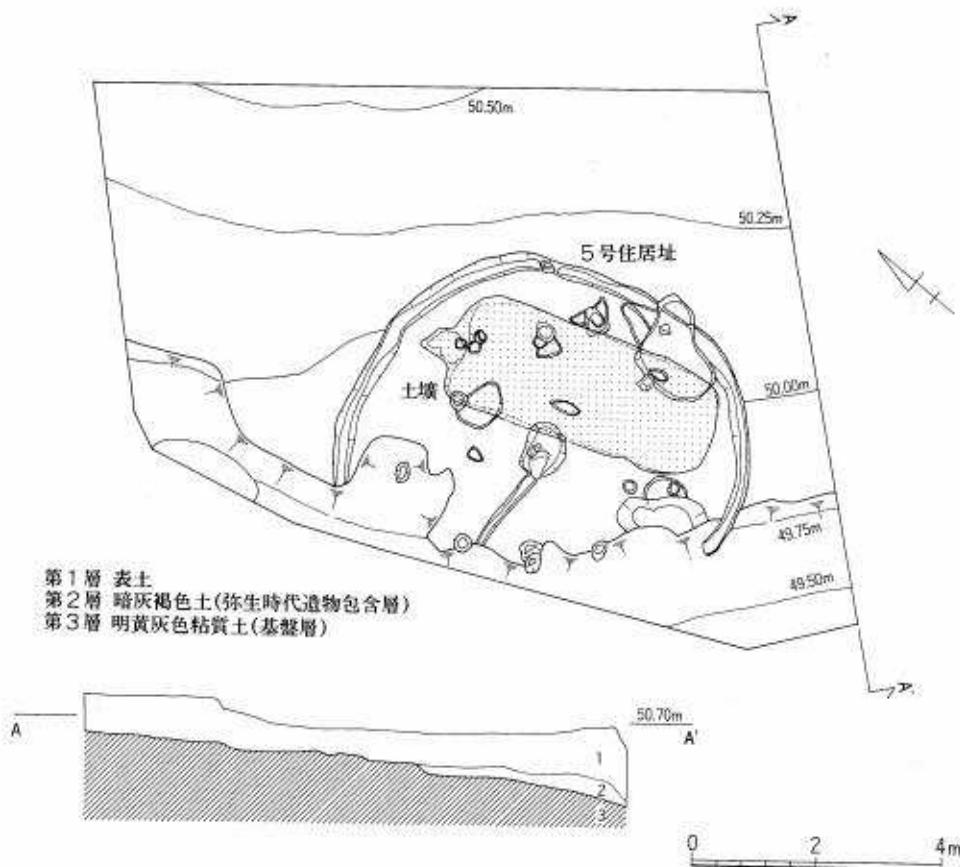
第4節 IV地区の調査

1. 調査の概要

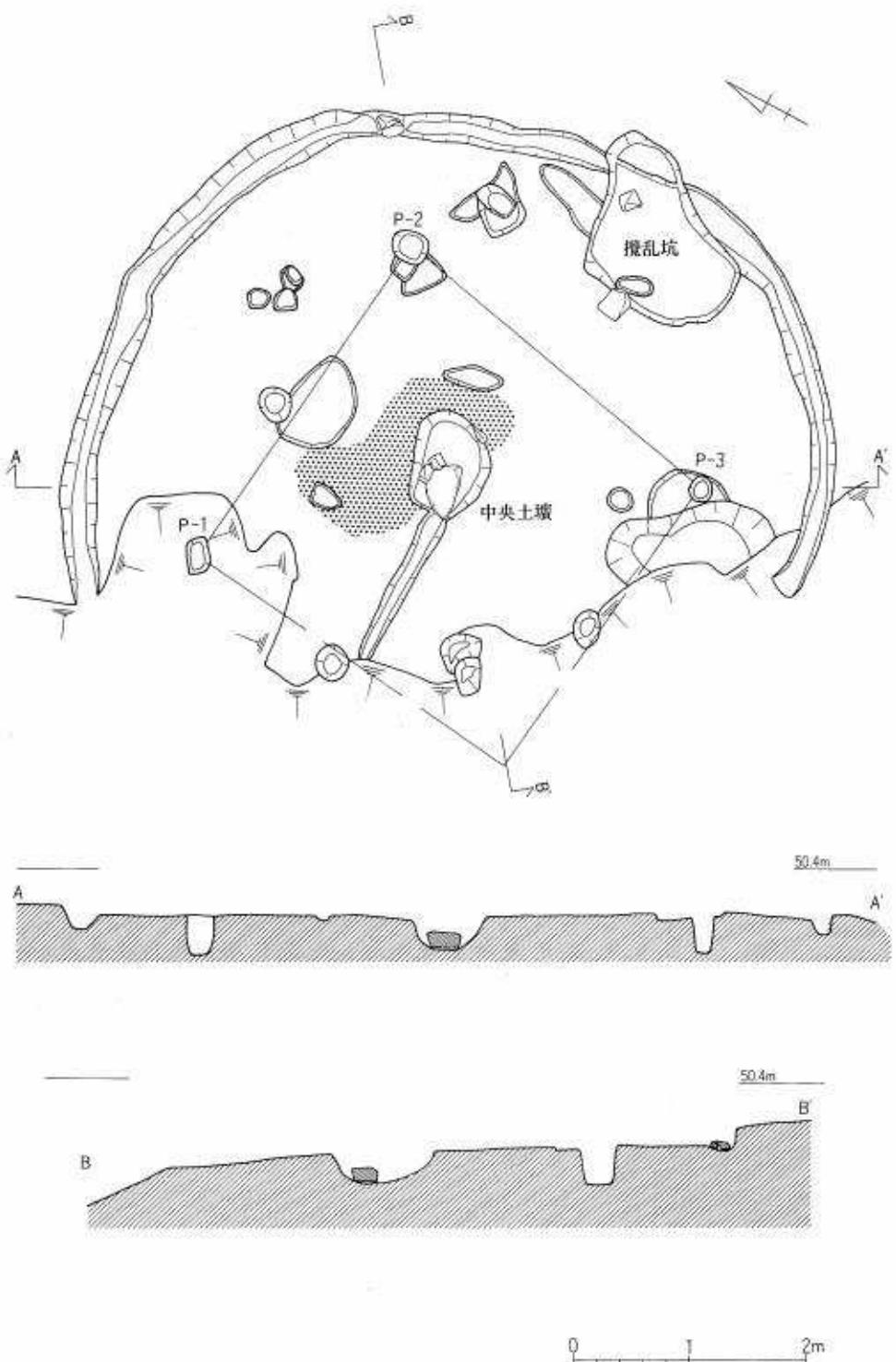
IV地区は、V地区から東西にのびてくる主尾根の南西向き斜面に位置する。調査区の東側と北側は、現道路の造成工事によって破壊され、地貌が大きく変容していた。また西側は谷地形になっていて、I～III地区へ向け急傾斜で落ち込んでいる。したがって遺構は、きわめて限定された範囲にあると判断でき、約184m²を発掘調査した。

調査区の土層堆積状況は、南東壁で観察した（第40図）。第1層は表土で、現在の水田耕土と床土、および水田造成土を含んでいる。第2層は暗灰褐色の弥生時代遺物包含層、第3層は明黄灰色粘質土の基盤層である。包含層は最も厚いところで約30cmを測るが、調査区東半では削平を受け、また、谷に落ち込む西寄り部分では流失してしまっていた。

遺構としては、第2層の上面に切り込まれた土壙1基と、第2層の下面に弥生時代竪穴



第40図 IV地区遺構配置図



第41圖 5号住居址

住居址1棟（5号住居址）を検出した。

2. 5号住居址（第41図）

5号住居址は、調査区の中央やや南寄りに位置する。細かく立地をみてみると、主尾根から南西に向かってのびた標高約50mの小さな張り出し部の先端にあたる。住居址の西半は斜面のため流失しており、その結果、現存

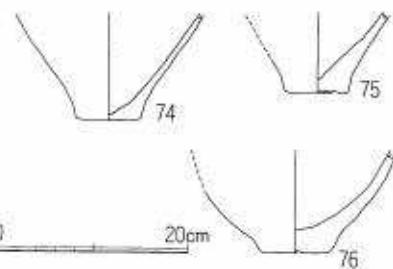
平面はほぼ半円形を呈している。残った東半部から原形を推定すれば、直径約6.7m、面積約35.3m²の円形プランと思われる。現存部分の壁高は、最も高いところで約15cmを測り、ほぼ70度の角度で立ち上る。また壁の内側に沿って、幅20~30cm、深さ8~12cmの周壁溝が走っている。床面は西方向にわずかに傾斜しており、南西部に近くなるにしたがってその状態は悪くなる。屋内のほぼ中央部には土壙が掘られ、そこから西の方向へ幅約15~20cm、深さ10~13cmの排水溝が掘られている。

中央土壙は、東西88cm、南北68cmの不整橢円形を呈する。底面はすり鉢状をなし、厚さ数cmの炭灰層がレンズ状に堆積していた。また、壙底に接して上面が平坦な石が置かれていたが、石および壙壁には火熱を受けた明らかな様子はうかがえなかった。しかし、中央土壙の北辺沿いに東西1.8m、南北1mの範囲にわたり、床面が火を受け、赤変しているのがみられた（第41図アミ部分）。ピットは、屋内に15個を数える。そのうち、いずれが柱穴とも定め難いが、形状、深さ等がしっかりとしていることから、Pit 1~3を主柱穴としてよからう。他の1つは流失したと推定でき、4本柱の円形住居と考えられる。

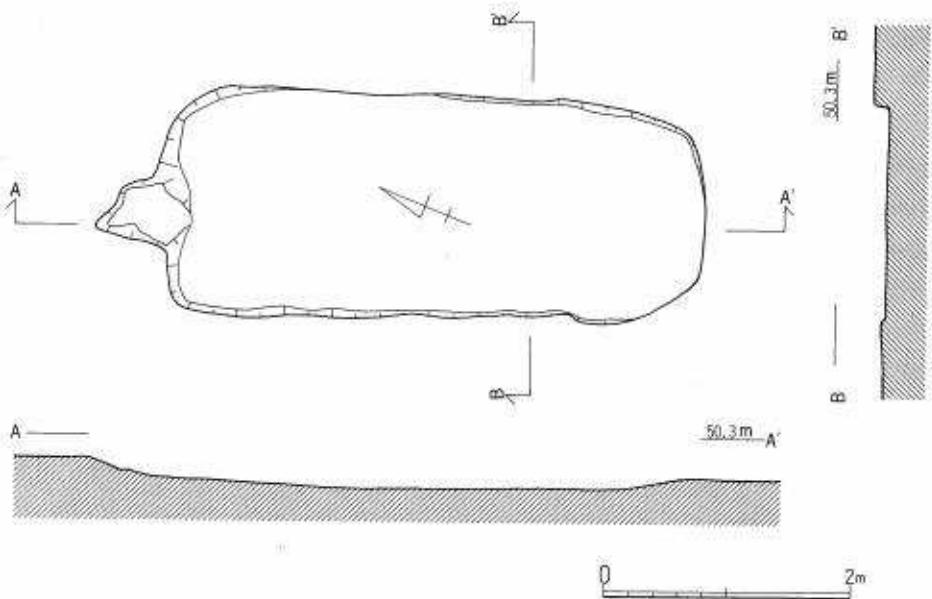
遺物の出土量は少なく、図示し得るものは住居址埋土から出土した3個体分のみである（第42図）。いずれも壙あるいは壙の底部で床面上から発見されたものではないが、本住居址に付随するものとみて差しつかえない。

3. 土壙（第43図）

土壙は、弥生時代遺物包含層の上面より切り込まれ、5号住居址とほぼ重なる場所に位置している。平面形は、長辺約4.5m、短辺約1.8mの隅丸長方形を呈し、北側短辺中央に、1辺約0.5mの方形突出部をもつ。また、土壙の主軸はN-20°-Wにとっている。壙壁は急な立ち上りをみせ、高さ約10cmを測るが、南側短辺付近は削平されていて壁の一部を失っている。底面はほぼ平坦であるが、突出部から本体にかけてはゆるやかに傾斜している。壙内には炭化物が充満していた。炭化物は、直径約1cmほどの小枝を多く含んでおり、純粹な炭層をなしている。しかし、壙底、壙壁には火を受けた痕跡は認められなかった。



第42図 5号住居址出土土器



第43図 土 墓

出土遺物は、流れ込みと思われる土器片数点を除いてはほかになく、したがって所属時期を明確にし得なかった。また、骨片なども検出していない。

4. 小 結

IV地区の調査では、弥生時代の5号住居址と、時期不明の土壙1基を検出した。5号住居址の時期については、出土遺物が少なく、決め手となる資料を欠くが、他の住居址群とほぼ同時期と考えて大過ないであろう。

土壙は、隅丸長方形の1方の短辺に小さい突出部をもつこと、付随施設をもたず、また単独で存在すること、内部に炭化物が充満すること、などがその特性として挙げられる。しかし、所属時期、性格については不明な点が多い。火葬墓あるいは何らかの生産遺構といったものが候補として考えられるが、壇内から骨片等、火葬墓と断定するに足る資料は見い出していない。また、火を使用した痕跡もない。このような土壙の類似例は、淡路地域では発見されていないが、神戸市西区長谷遺跡など、神戸市域で増加しつつある。今後、類似資料の蓄積をまって再検討したい。

註 「2. 西神戸中央線長谷遺跡」『昭和57年度神戸市文化財年報』神戸市教育委員会
1984.

なお、上文献では類似の土壙を、12世紀後半～13世紀のものとされている。

第5節 V地区の調査

1. 調査の概要

V地区は、大森谷東側の主尾根上にのり、全調査地区中最高所にある。調査区は西北から東南にかけて細長く、東西の端は急斜面となっている。ことに東側は地滑りが起こると言われており、確認調査でも深い谷の傾斜を出している。調査区の北側は、約3mの段差で上っており、溜池・畠地となっている。更に上方は自然石の露出する雜木林となる。南側は溜池になっているが、小谷を利用して作られたもので急傾斜で落ちている。

調査地の北半は、削平の為平坦になっており、耕土直下が地山面となる。南半は南に傾斜しており、中世以降の土器片や炉壁片を含む整地層、弥生土器を含む暗褐色シルトのいわゆる下部包含層が見られる。南西部の溜池付近では攪乱土が入っており近世土器が出土している。

遺構は、円形竪穴住居址・溝状遺構・小柱穴・土壙が検出された。

2. 6号住居址

標高約63mにあり、今回調査した住居址では最も高い地点にある。立地は、主尾根のはば中央、小谷の谷頭に近い平坦地にある。

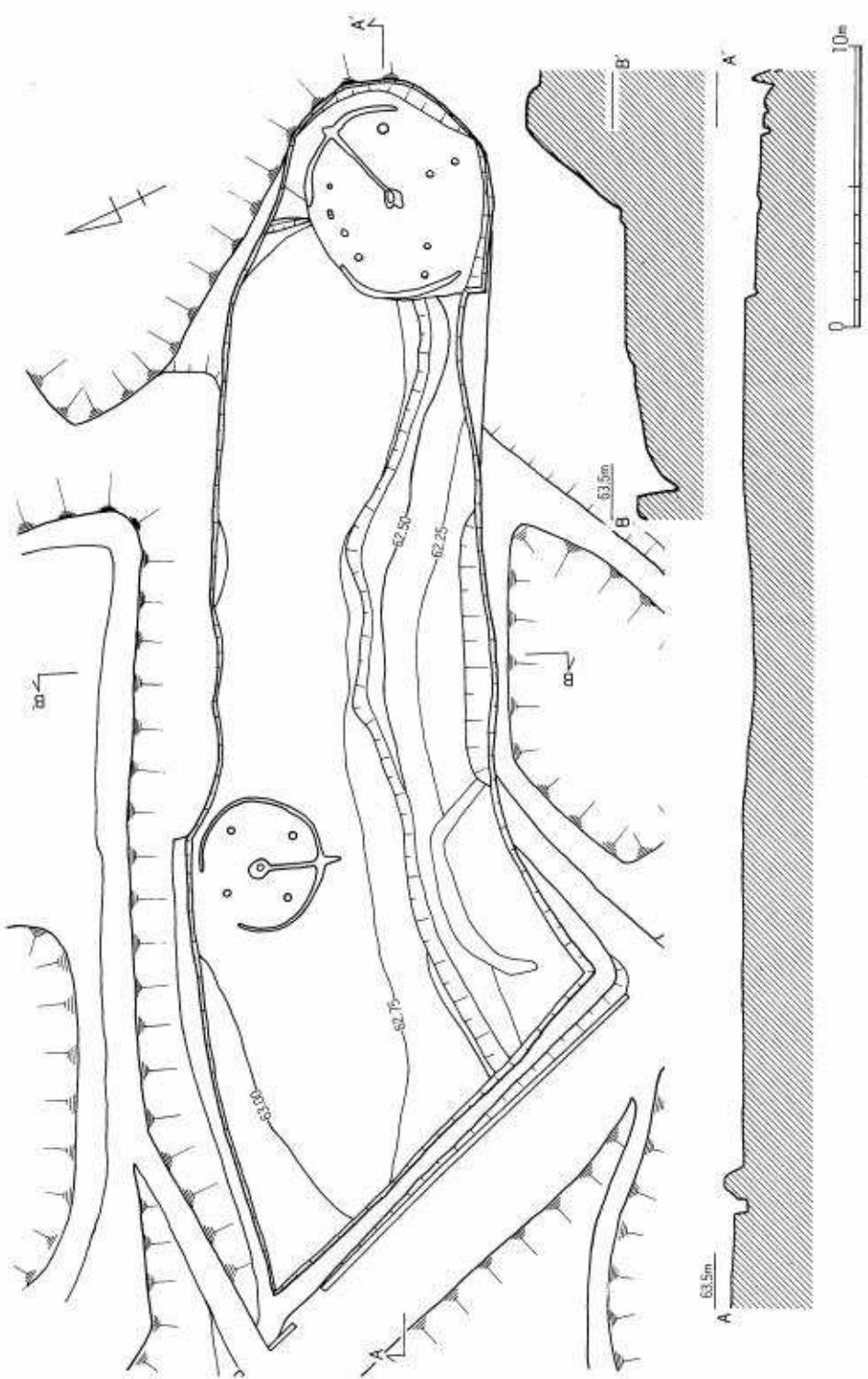
削平が著しく、また後世の溝が床面を切っている。周壁は失われており、床面も削平の影響を受けているが、周壁溝は斜面下方も残存している。床は斜面に立地する住居址の様に埋め出しを行って作っているのではなく、地山面を利用している。床面の規模は、長径で約4.4m、短径で約3.9mで、東西にやや長い椭円形になる。主柱穴は4本であり、各々の柱穴の規模は、P-1が直径約20cm、深さ約21cm、P-2が直径約28cm、深さ約21cm、P-3が直径約26cm、深さ約26cm、P-4が直径約20cm、深さ約39cmである。主柱穴間の距離は、やはり東西の長径方向が長く、P-1・P-2間およびP-3・P-4間が約2.2mであるのに対し、P-1・P-4間、P-2・P-3間は共に約1.9mと短くなる。支柱穴やその他の小穴は見られない。

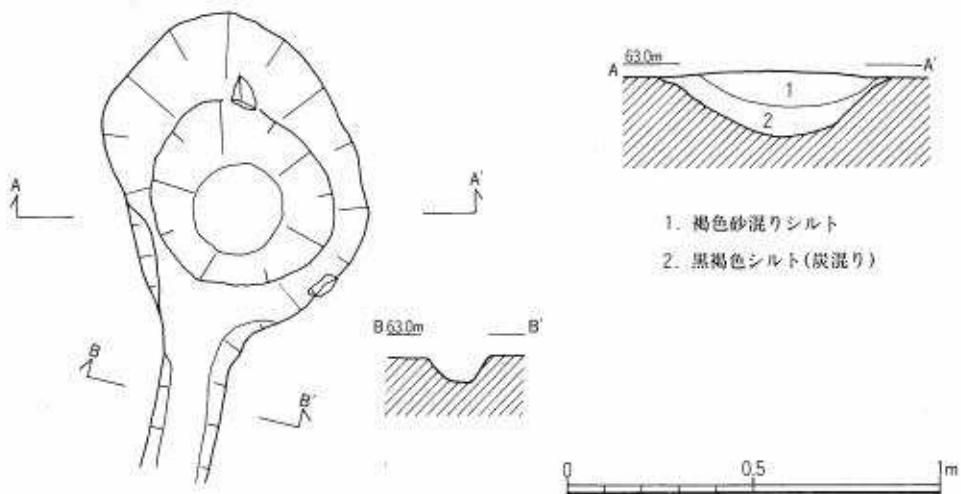
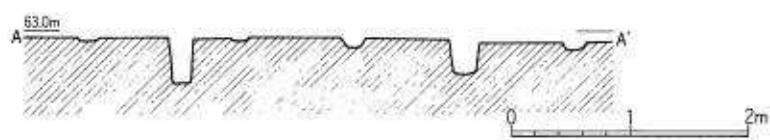
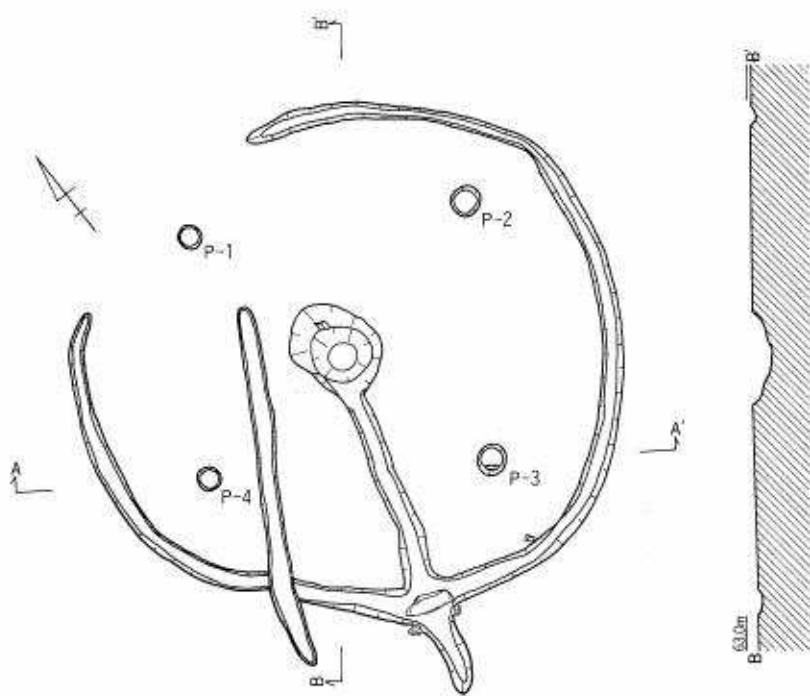
周壁溝は、削平の為か北側で途切れているが、ほぼ全周まわっている。現存する幅は約18cm、深さは遺存の最も良い所でも約6cmである。

中央土壙は、不整な椭円形を呈し2段になっている。深さは約17cm。土壙内の壁には火を受けた様子は見られないが、埋土中下層には炭片が含まれている。

この中央土壙から南の斜面下方に向って排水溝が走っており、周壁溝を抜けて屋外まで伸びている。遺存状況の良い所で、幅約18cm、深さ約7cmである。1号住居址でも見られた様に、排水溝が周壁溝と交わる位置に長細い自然石を配している。

第44圖 V地區全圖





上・第 45 図 6 号住居址

下・第 46 図 6号住居址中央土壤

3. 7号住居址

V地区の東端に位置し、またこの遺跡においても東端にあたる。主尾根がやや東に傾斜する面にのっており、東及び南側は急に落ちている。

床面の直径は約6.6m、北西部に全周の約1/3程周壁が残っており、現存する高さは約45cmある。周壁溝は、全周の半分しか残存しておらず、北側で2m程途切れている。西側の溝は、周壁に沿って5m強の長さをもつ。幅は約25cm、深さ約4cm、東側の溝も同様の長さをもち幅約30cm、深さ約13cmである。この東側の周壁溝には、中央土壌から伸びる排水溝が取り付き、屋外に抜けている。この排水溝は、幅約16cm、深さ約24cmで、両壁がほぼ垂直にたつ形状をもつ。

中央土壌は、不整形で13cm強の深さである。壁の2ヶ所に18cmと13cmの深さの小ピットがある。壁は焼けていないが、埋土中に炭が見られる。

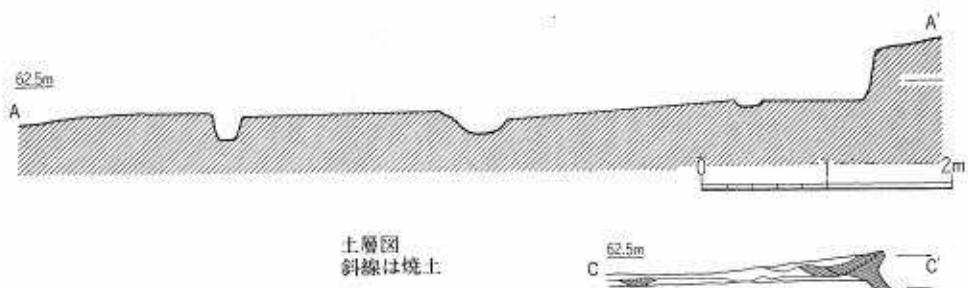
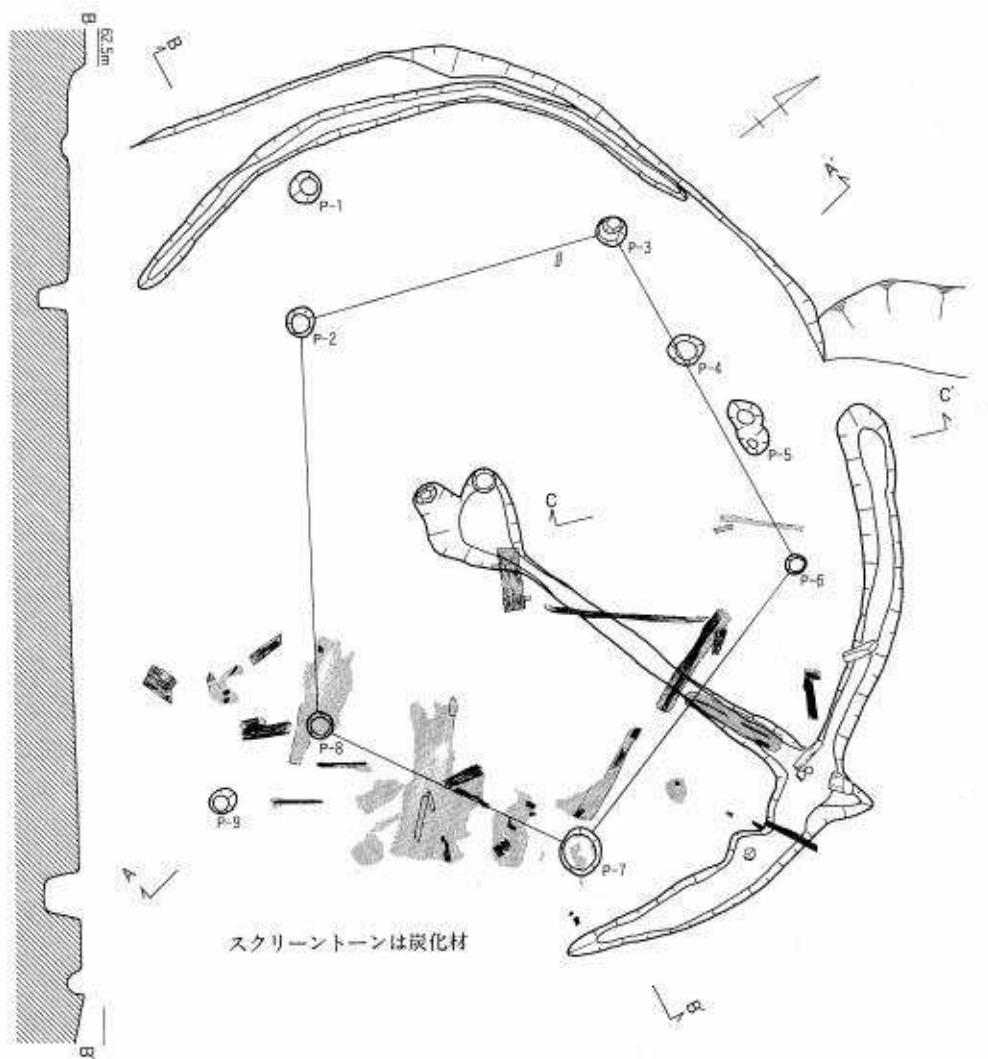
主柱穴は、基本的にはP-2（直径約23cm、深さ約23cm（以下同順）、P-3（23cm・16cm）、P-6（17cm・29cm）、P-7（35cm・29cm）、P-8（20cm・20cm）の五本柱が想定できるが、P-1（26cm・31cm）、P-9（22cm・13cm）は規模もしっかりしており、P-2、P-8と対をなしていることから主柱穴に準ずるものと考えられる。またP-4（30cm・3cm）、P-5（27cm及び22cm・8cm及び5cm）は共に浅いもので主柱穴には成り得ないが、周壁溝の途切れる位置にあたることから、住居址の付随施設に伴うものと思われる。P-7は他の柱穴より規模が大きく炭化した柱材が一部残存していた。

この住居址は火災に遭っており、前述のP-2や東側周壁溝内・床面上に焼土・炭化木材が広がっていた。炭火木材は中央土壌に対して放射状にあるものと、それに直交する方向にあるものが見られるが、確認できた最も長いものでも1.3m弱しかなく、積極的に上屋の構造を伺えるものではない。また炭化木材の分布は床面の東南半に集中している。

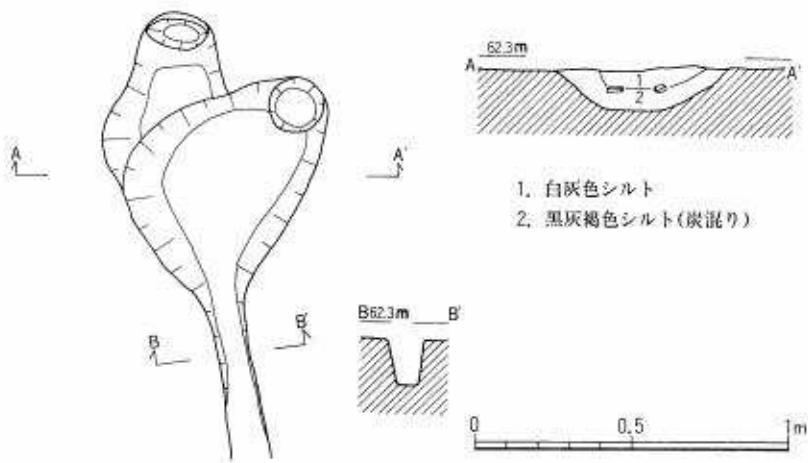
焼土も東南半で顯著に見られるが、特に東側周壁溝に沿う部分が著しく、厚さ20cm程にもおよび、一部溝内に入っている。これは床面が焼けたものではなく、火を受けた周壁が崩壊した結果であろう。

遺物は、土器・石製品等がある。土器は埋土中や周壁溝内から出土しているが、火を受けた為か残りが非常に悪く底部及び脚部のみである。東側周壁溝内から砥石及び投弾が出土している。

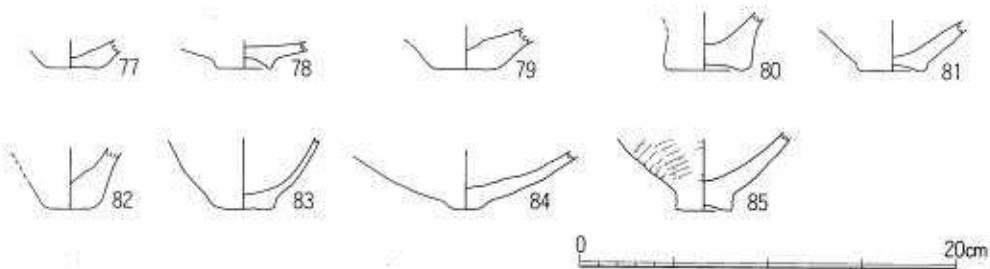
砥石は周壁溝肩に裏面を上にして落ち込んでおり、一部火を受けている。投弾は周壁溝と排水溝が交わる地点の溝底から出土している。この他にも用途不明の礫が数点出土している。これらは、付近では見られない表面の平滑な礫で、形状は板状のものや、直方体状をなすものと様々である。



第47図 7号住居址



第 48 図 7 号住居址中央土壤



第 49 図 7 号住居址出土土器

4. 溝状遺構

6号住居址のある平坦面から、小谷状地形に至る傾斜変換点上に、8条の溝が東西に連なって位置しており、等高線にはほぼ沿って走向する。

これらの溝状遺構は、両端或いは一端が斜面下方に向ってわずかに屈曲するものであるが、その規模は一様ではない。中には6号溝の様に溝状を呈さなく段状をなすものもあるが、ここでは便宜的に一括して溝状遺構とした。また、竪穴住居址の周壁溝の一部とも考えられるものもあるが、溝下方に平坦面を持たず、柱穴・焼土も見られないこと、8条の溝が集中して連なっていることなどから、住居址の一部とは断定し難いと思われる。

これらの溝状遺構は、規模が小さいこと、平坦面の下方にあること、斜面下方は谷状地形となることから、他の丘陵上遺跡で見られる様な住居址に付随する施設とは考えられない。溝内からは弥生時代後期の土器が出土している。

1号溝

一連の溝状の西端に位置し、最も規模の大きなものである。ほぼ直線状に走向し、両端をわずかに斜面下方に屈曲させる。直線部の長さは約5.8m、幅約30cm、深さ約5cmである。

溝の上方に溝に近接して土壤が存在する。直径約1mの梢円形を呈するもので、深さ約15cm、底は平らになる。

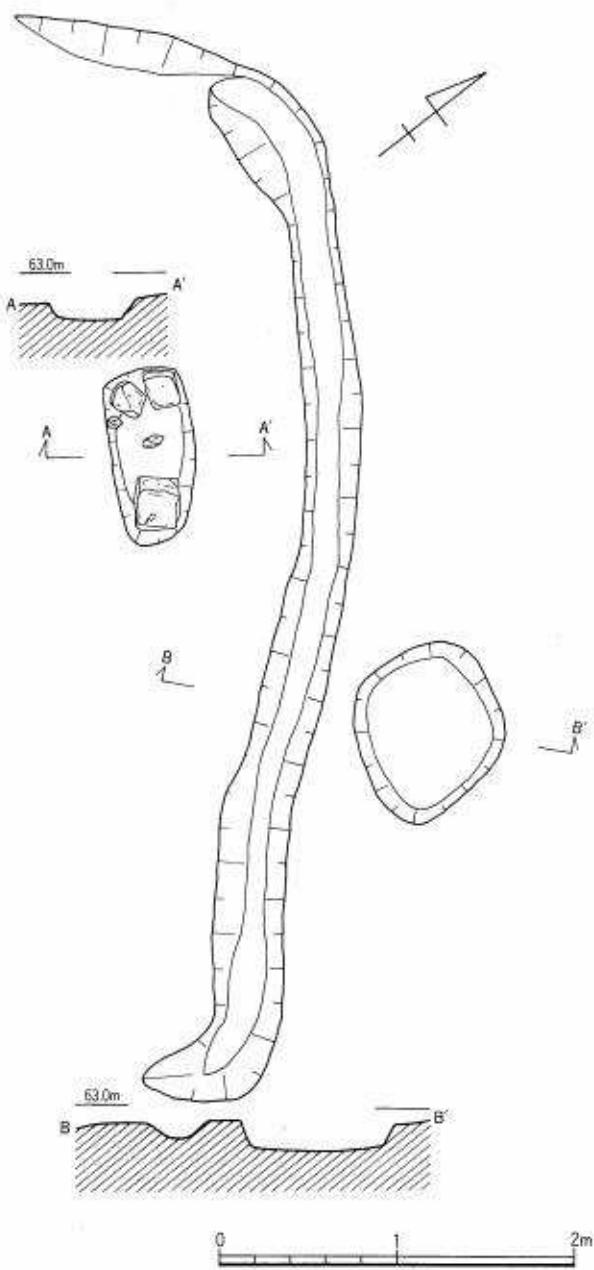
また溝中央下方にも、約1m×50cmの隅丸長方形を呈する土壤がある。深さは約12cm、両短辺に角のある山石が見られる。

1号溝からは弥生土器底部（第53図90・91）が出土している。

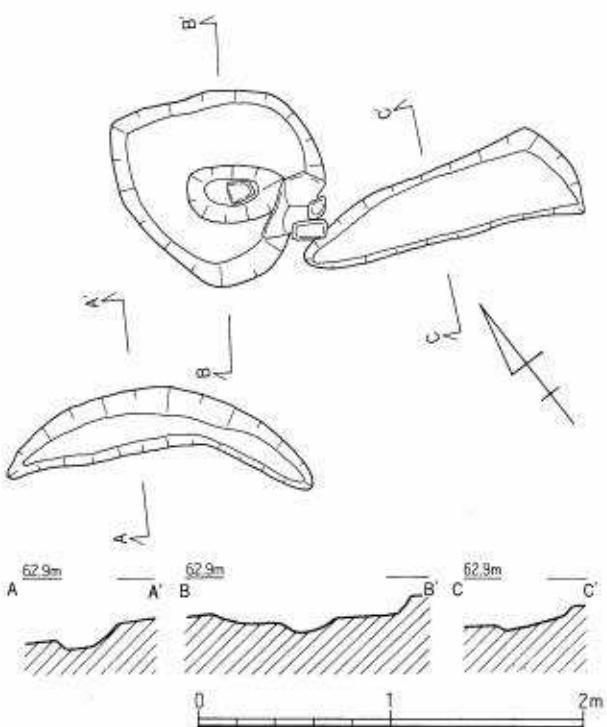
周辺の土壤からは遺物の出土は見られなかった為、1号溝に伴う遺構と判断することはできない。埋土での識別もできなかった。

2号溝

2号溝は、1号溝東端の斜面下方約60cmの位置にある。三日月形に弧状をなす、小規模なもので、長さ約1.6m、幅約30cm、深さ約10cmである。形状から



第50図 1号溝



第51図 2・3号溝

約1.7mの距離にあり、6号住居址の斜面下方東寄りに位置する。全長約3.6mの緩く弧状を呈する溝で、西端をわずかに斜面下方に屈曲させている。幅は平均して約40cm、深さ約16cmである。遺物は弥生土器小片が出土している。

4号溝の東端は、5号溝と重複している。

5号溝

5号溝は、4号溝東端と重複して始まっており、両溝の走向する方向は、ほぼ一致する。また、5号溝の下方には、これと平行して8号溝が存在する。

西端のみを鈍角に斜面下方に向けて屈曲させている。屈曲部の長さは約1.2m、直線部の長さ約4.4m、幅約20cm、深さ約18cmである。

5号溝の屈曲部上方に近接して土壙がある。直径約80cm、斜面上方からの深さは約25cmである。

5号溝は、確認調査の際、トレント10で検出しておらず、溝底に変形土器（第53図87）高坏形土器（同 86）が横転した状態で出土している。この他に底部（同 92）や磨石（第71図8）が出土している。

は、溝状とは見做し難いが、一連のものとして含めた。遺物は出土していない。

3号溝

3号溝は、1号溝の東端から東へ約1.3mの距離を持つて位置する。2号溝の西端の上方にあり、約1.2m離れている。長さ約1.5m、幅約40cm、深さ約13cmで、これも小規模なものである。遺物の出土は見られない。

3号溝の西端に接して、直径約1mの不整形の土壙が存在する。深さは約18cmで2段になっている。

4号溝

4号溝は、3号溝東端の東

6号溝

6号溝は、5号溝東端上方に接して始まっており、ほぼ同じ走向方向をもつ。溝状遺構と言うよりは、むしろ段状遺構と呼ぶ方が適確かと思われる。

長さ約3.2m、高さ約25cmである。遺物は、弥生土器口縁部・底部が出土している（第53図89・93～95）。

7号溝

7号溝は、6号溝東端に接しており、東端は斜面下方を向く。弧状を呈する小型のもので、長さ約2m、幅約20cm、深さ約26cmである。

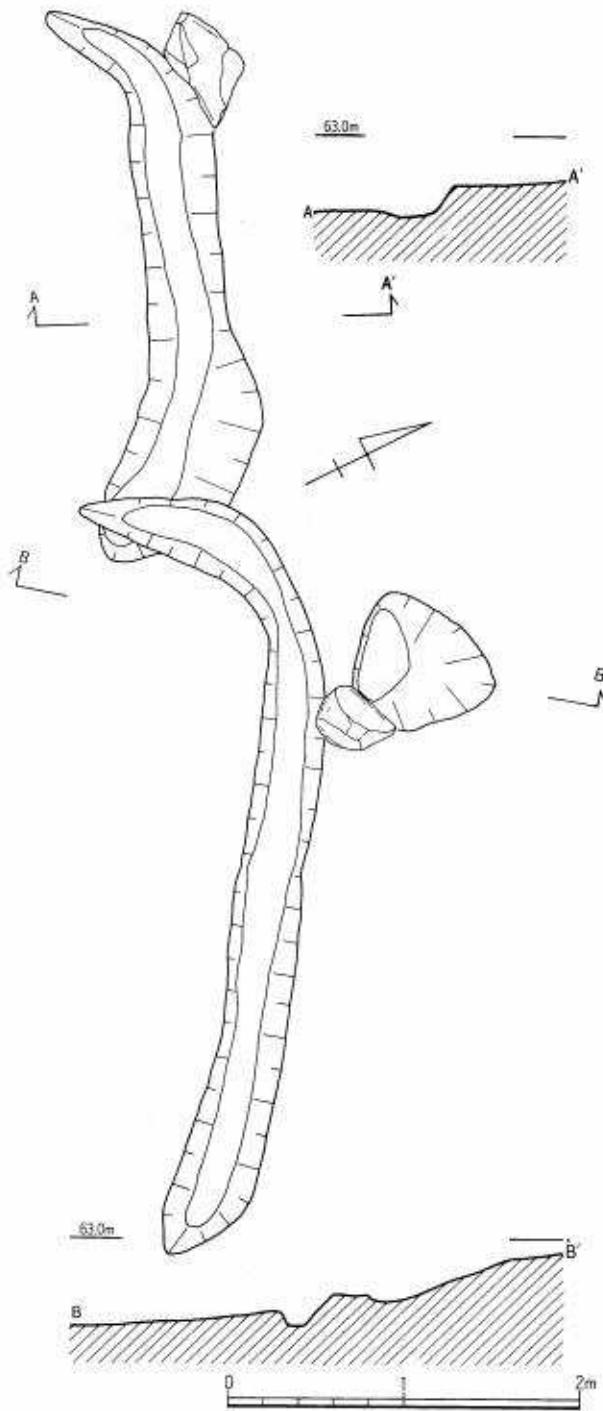
確認調査の際、溝内から壺形土器口縁部が出土している（第53図88）。

8号溝

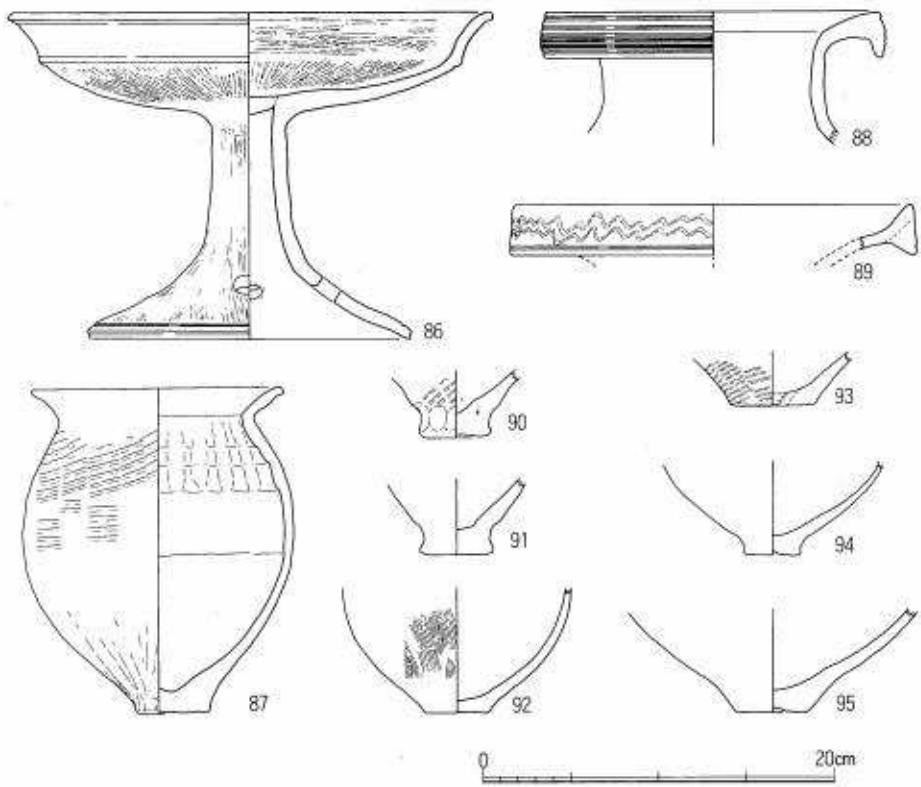
8号溝は、5号溝の斜面下方約1.4mの位置に、5号溝とほぼ平行して走向する。

全長約4.2m、幅約30cm、深さ約10cm。西端は、下方や広げており、幅は約50cmとなる。東端は、もはや溝状をなしておらず、上方に抉れて段状になっている。

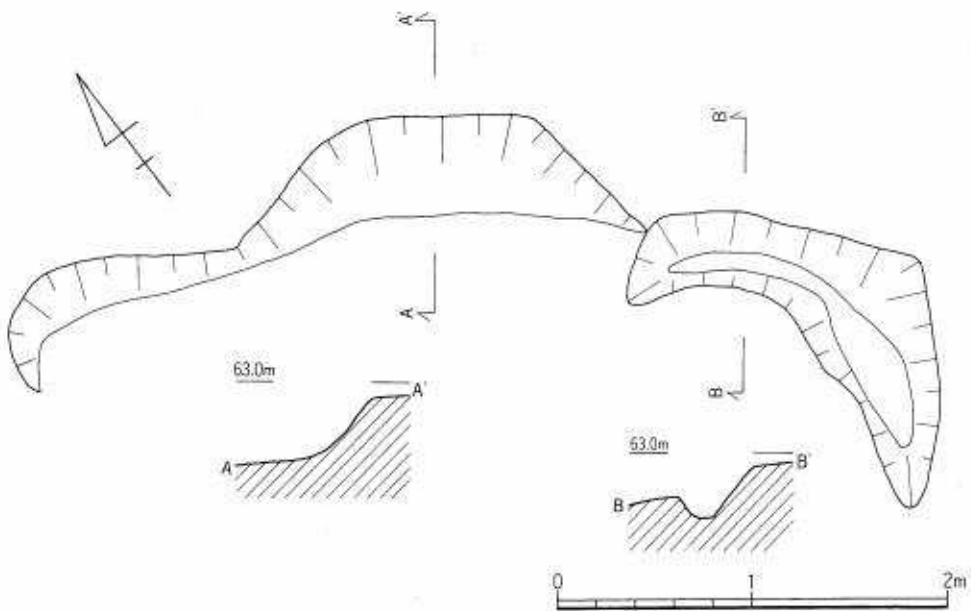
遺物の出土は細片のみである。



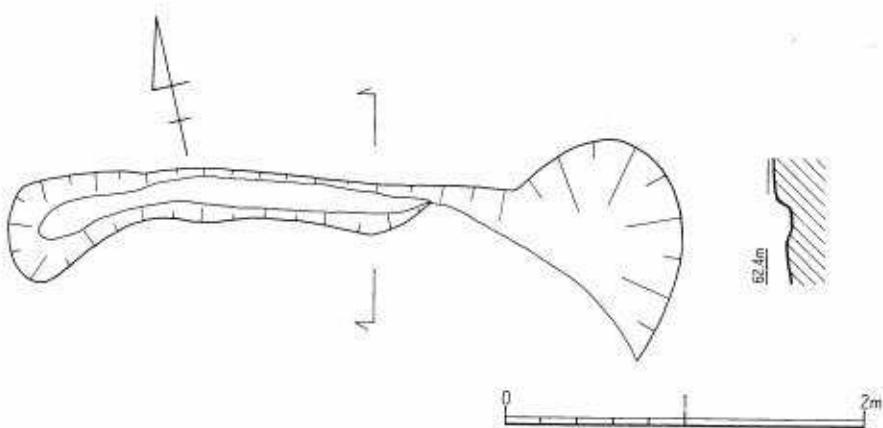
第52図 4・5号溝



第 53 圖 溝狀遺構出土土器



第 54 圖 6・7 号溝



第55図 8号溝

5. 近世遺構

調査区の東南部に位置し、弥生時代の溝状遺構の下方にある為、当初同時代の堅穴住居址かと思われたが、溝に囲まれた中の土層はすべて攪乱土であり、溝底から陶磁器片が出土したことから近世溝とわかった。

全長は約10mで、形状は緩く弧状を呈しながら屈曲している。西端は鈍くわずかに屈曲して終わるが、東端は攪乱によって切られている。斜面上方では2段になって落ち、深さ約40cmを測る。

また溝の周辺には直径10~30cm、深さ10~30cmの小柱穴がいくつか見られるが、杭状のものが想定できる。

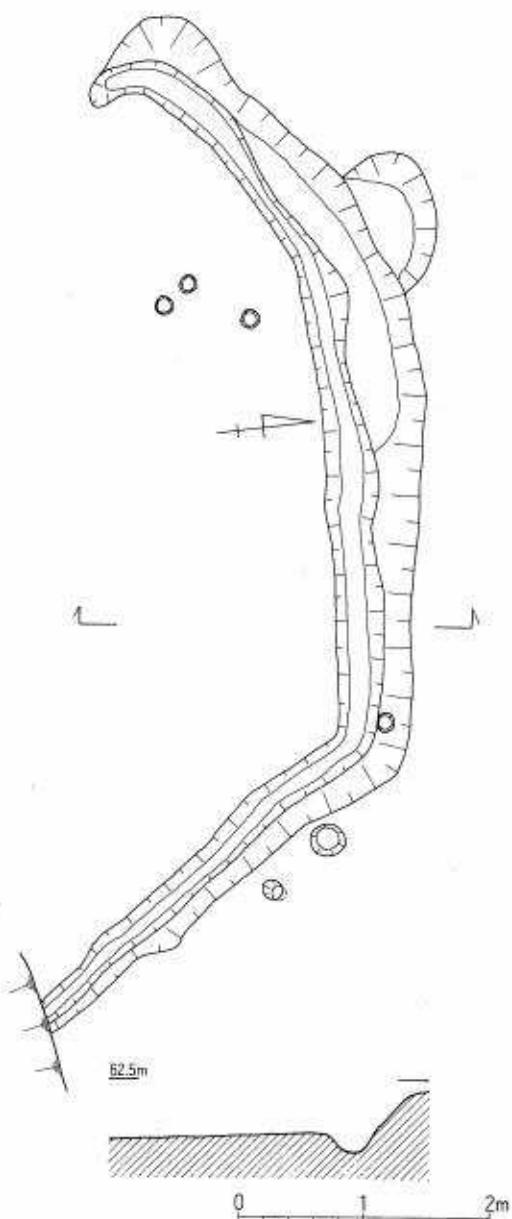
この溝は、調査区南の溜池の縁に沿って走向することから、溜池に付随するものであろう。この溝内や溝に囲まれた攪乱土中から近世陶磁類が廃棄された形で出土している（第76図）。

6. 小結

V地区は、他のIからIVまでの調査地区が谷内にあるのに対して主尾根上にあり、両者の間には急斜面が存在している。V地区からは東への展望が開け、麓には下内膳遺跡等が見られ、洲本川の下流域・河口、更には大阪湾を通して対岸まで望むことができる。

調査区内の地形を詳細に見ると、主尾根の中央に小谷状の地形があり、調査区の南で2本の張り出しに分かれる。その張り出しの東西は急激に落ちているが、谷頭部や張り出し基部にはわずか平坦部が見られ、そこに遺構が作られている。

6号住居址は谷頭の上方に営まれており、周壁溝がほぼ全周残っていることから平坦面を選んで作られたものと思われる。しかしながら住居址の平面形は正円とはならず、谷と



第 56 図 近世溝

直交する方向にやや長くなる。排水溝は、谷に向って抜ける。

7号住居址は、東側の張り出し基部に営まれており、東側急斜面の肩に乗っている。この為、この住居址の排水溝は、他の住居址が小谷に向って走向するのに對して主尾根東傾斜面に向っている。

7号住居址は火災に見舞われており、炭化材や焼土が東半に集中して検出された。特に焼土は周壁溝に沿って厚く堆積しているが、東半部については周壁が全く見られない為、土盛りをした周堤が崩壊したものと考えられるが、全てがそうであるとは断定し難い。上屋構造に伴うものであろうか。

V地区の竪穴住居址は、他地区的同規模の住居址に比して主柱数が多い。これは住居址の営まれた立地によるもの、或いは住居址の機能が異なる為と考えられる。

溝状遺構は、弥生時代後期に属するもので、本遺跡では確実に同時期のものと言えるものは見られない。これらの溝状遺構の機能は不明である。

第5章 遺物

第1節 弥生時代の遺物

1. 土器

大森谷遺跡の調査では、コンテナに約60箱の出土遺物があった。そのうちの50箱強を弥生土器が占める。弥生土器は1～7号住居址、大形土壙、1～8号溝、及び各地区の包含層から出土した。しかし、遺構に伴うものは少なく、大半が包含層からの出土であった。また、数例を除くと、すべて口頸部・体部・底部の各小片で、しかも器表面の磨滅が著しく調整が不明瞭なものが多い。

これらの弥生土器は、弥生時代後期に位置づけられるものが大多数を占める。若干中期の様相を残すものが認められるが、数が少ないうえに、いずれも弥生時代後期の土器に混じって包含層から出土している。淡路の弥生土器の実体が明らかにされていないため時期をおさえ難いが、出土状況を考えて、中期的様相を残すものについては弥生時代後期初頭のものとして捉えることにした。

各地区の概要

大森谷遺跡では、一括資料として扱える遺構をもたないうえに、先後関係が明らかな状態での土器出土も見られなかった。遺構に伴う土器は、ほとんどが埋土中から出土したものであり原位置を保っているのは僅少である。こういう状況では、各遺構の土器について検討してもそれほど成果があるとは思えない。そこで、便宜的ではあるが各地区ごとに概要を見ていくことにしたい。

まず、I地区では、1号住居址から比較的まとまった土器の出土があった。1号住居址

遺構	壺	甕	鉢	高坏	器台	脚	底部
1号住居址	4	4	1	4	1	9	8
3号住居址	24	7	1	0	2	6	62
4号住居址	1	3	0	0	0	1	7
大形土壙	3	9	1	1	0	3	8
5号住居址	0	0	0	0	0	0	3
7号住居址	0	0	0	0	0	1	9
1～8号溝	2	1	0	1	0	0	6

第4表 弥生土器遺構別出土量

出土の土器は、広口壺・鉢・高坏・器台・甕で構成されおり、高坏が壺・甕と共に約3割を占め、高率を示している。ここからは、坏部を完全な形で残す高坏や生駒西麓産の胎土をもつ無文の広口壺、手捏ね土器などが出土している。

またI地区では、灰褐色

土層・上部包含層・下部包含層から弥生土器が出土しているが、層位によるちがいは認められなかった。包含層の土器構成については、1号住居址と同様であるが、甕の占める割合が最も高く、次いで壺・高坏・鉢・器台と続く。

次にⅡ地区であるが、ここでは3号・4号住居址及び大形土壙から比較的多くの土器が出土した。3号住居址からは、遺構出土土器中の53%を占める出土量があった。3号住居址出土の土器は、広口壺・二重口縁壺・短頸壺・鉢・高坏・器台・甕で構成される。また、壺が甕の3倍と多く、高坏が僅少であることが指摘できる。4号住居址については、小片ばかりの出土で図示可能なものも少なく、出土土器の傾向を指摘することはできない。大形土壙からは、広口壺・鉢・高坏・甕が出土しており、甕が全体の6割強を占めている。大形土壙出土の甕は内面調整にヘラケズリ技法を用いているものが多い。

包含層出土土器については、Ⅰ地区包含層とほぼ同じ傾向が見られる。また、ここからは把手片の出土がやや多く見られる。なお、土器はⅡ地区北側にいれたトレンチから多く出土した。^{註⑤}

Ⅲ地区出土土器は、広口壺・短頸壺・鉢・高坏・甕などで構成されており、器台の出土を見ない。また短頸壺がやや多い傾向にある。

Ⅳ地区については、出土量が少なく、特に傾向を伺うことはできない。なお、破片ではあるが蓋の出土が見られた。

Ⅴ地区では、住居址からの良好な出土資料は見られなかった。しかしながら、5号溝から僅少ではあるが、まとまった土器の出土があった。完形品の甕と高坏、及び鉢底部である。これらは、大森谷遺跡で唯一の全容を知り得る資料となった。

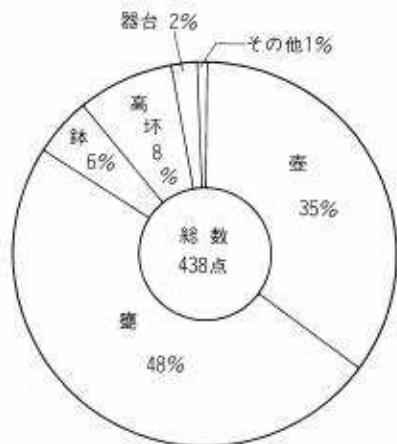
包含層出土の土器は、広口壺・二重口縁壺・短頸壺・鉢・高坏・器台・甕などで構成されており、器台の占める割合がやや高くなっている。

以上のように各地区を簡単にまとめてみたが、各地区とも同様な土器構成を示し、時期差を見い出すことはできなかった。

器種構成

大森谷遺跡の弥生土器は、僅か数点の完形品を除くとその大半が小片となっての出土であり、しかも器表面が磨滅しているものが多かった。このため今回は器種の判別が可能な土器片のみを観察の対象として扱った。また、器種構成の割合を見るときは、重複を避けるために底部・脚部などは除き、口縁部のみを対象とした。

器種としては壺・甕・鉢・高坏・器台・蓋などがある。構成中の割合は甕が最も高く48%とほぼ半分を占める。次いで壺の35%がくるが、甕と壺を合わせると80%を超えることになり、かなりの高率を示す。そして、高坏の8%、鉢の5%、器台の2%と続く。これは、破片数による比率のために良好な資料とはいえないが、同時期の他遺跡と比べると壺



第5表 器種別による百分比

及び甕の占める割合が極めて高いことになる。

次に、各器種について特徴を見していくことにしたい。

広口壺 外方にひらく口頸部をつける壺である。口頸部の形態についてみれば、直立する筒状の頸部からほぼ水平にひらく口縁部をもつもの(4・15・97・105・119・166)、筒状の頸部から稜をつくって斜め外方にひらく口縁部をもつもの(88・96・164・196・237・241)、短く立ち上がった後、斜めにひらく口頸部をもつもの(17・219・238・240)、直線的に斜めにひらく口頸部をもつもの(1)、強く外彎する口頸部

をもつもの(13・167・208)などがある。口縁端部の形態としては、擬口縁下に粘土帯を貼り付け、垂下状の口縁端部をつくるもの(88・196・219・237・238)、口縁部を肥厚させ、端部を下方又は上下に拡張するもの(15・16・17・97・105・119・164・239・240)、拡張せず口縁端部に面をつくるもの(13・96・167・218)などがある。

口縁部を拡張するものは、口縁端面を加飾するのを常とする。凹線文をめぐらすものが多く、竹管円形浮文を附加するものもある。凹線文に斜線文を加えた108・119は古い様相を呈するものであろう。桿描きの波状文や竹管文もよく見られる文様である。頸部と体部の境に凸帯文をめぐらすものもある。

体部については、やや肩の張る球形を呈するものや頸部から体部へなだらかに移行するものがある(53・122)。53については瓜破北遺跡に類例が見られる。^{註⑥}

二重口縁壺 一度ひらいた後、屈曲して立ち上がる口縁部をもつ壺である。粘土帯を擬口縁上方に追加することにより外反する口縁部をつくるもの(19・20)と、口縁部外面に粘土を附加し屈曲部をつくり出すもの(21・242・243)がある。口縁端部に刻み目を施したり、口縁部外面に施文するなど、装飾性に富む。弥生時代後期の二重口縁壺としては異例である。

短頸壺 長胴の体部に外反気味に立ち上がる口頸部をつけた壺であるが、体部の詳細は不明である。口頸部が比較的長いもの(207・209・245)と短いもの(18・200)がある。後者は球形の体部をつける可能性がある。

その他の壺 やや外開きの頸部に内彎する口縁部をつける、いわゆる細頸壺である(120)。出土は生駒西麓産の胎土をもつ1点のみである。

鉢 直口のものと口縁部が外反するものがある。また、体部に縦位の半環状把手をつけ、口縁部に凹線文をめぐらすものがある(214)。鉢は全体的に遺存状態が悪い。

高坏 いずれも屈曲して立ち上がる口縁部をつけるものであるが、坏部から口縁部にかけての形態差により、二分することが可能であろう。

a 外反気味にひらいた後、稜をつくりほぼ直角に立ち上がる口縁部をつけるもので、口縁部外面に退化凹線文をめぐらすことを特徴とする。屈曲部の稜は明瞭である。口縁端部を拡張するもの（171・190）と拡張しないものがある（127・129）。後者は前者に比べて外傾度がきついせいもあって、口縁部の立ち上がりにシャープさを欠く。脚部を欠損するため、成形技法及び脚部の形態については明らかでない。

b 内彎してひらいた後、外反する口縁部をつけるもので、広範囲な地域に普遍的に分布している高坏である。浅い大きな坏部を、円筒状の柱状部をもつ据ひろがりの高い脚部にのせるもの（86）と、これに比べると小形で、坏部が強く内彎するもの（169）がある。どちらも連続して脚部から坏底部までを作りあげているが、前者が径2.5cm程の小さい円盤を充填するのに対し、後者は円盤をつくらず、粘土を上方から押し込んで充填している。

他に、斜めにのびる坏部にやや外傾する口縁部をつけたものがある（6）。口縁部と坏部下半の境の稜は鈍く、口縁部は肥厚して端面をつくる。成形技法は「接合法」による。

器台 精製のものと粗製のものがある。精製の器台は、口縁部の拡張が著しいもの（24・25・244・246）とこれにくらべると拡張が小さいもの（106・107・153・222）に大別できる。前者は、擬口縁上方に粘土帯を追加し、さらに下方にもくり下げるもので、二重口縁を呈する。両者とも口縁部に、凹線文・波状文・鋸歯文・竹管文・円形浮文をそれぞれに組み合わせて加飾しており、装飾性に富んでいる。器表面は内外面とも丁寧なヘラミガキによって仕上げている。244・246は内面に段を有する。24・25については、六条山遺跡、寺中遺跡に類例がみられる。

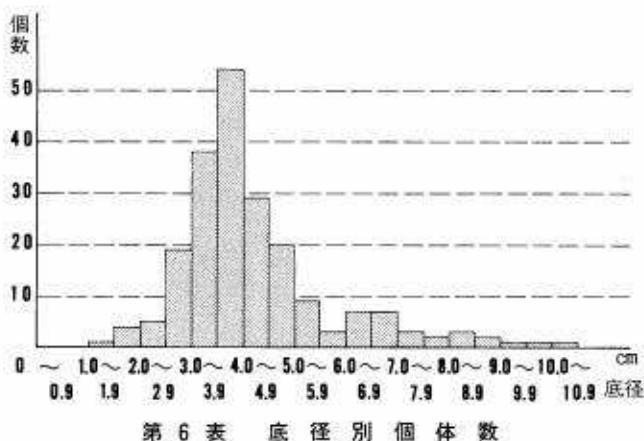
253は粗製の器台である。「淡路型器台」と仮称されている器台の粗製のものとの関連が考えられる。

甕 形態的には、腹径が口径を凌ぐもの（a）と口径と腹径がほぼ等しいもの（b）に大別できる。

a 口縁端部を肥厚させ、端面にヨコナデか又は退化凹線文を施すものである。内面調整にヘラケズリ技法を用いるものが多いことが指摘できる。ヘラケズリは、頸部付近にまで及ぶもので、横方向に施す。またヘラケズリには、単位が明瞭なもの（57・58・59・61）と、不明瞭なもの（139・178・180）がある。外面調整はハケ目か、ハケ目の上にナデ調整を施す。57・58・59・211は形態・技法ともに山陽地方の甕に類似している。山陽地方の影



甕形土器底部



とがわかる。また口縁端部に刻み目を有するものがある(22・55・63)。

脚部 ややなかふくらみの円筒状の柱状部に屈曲してひらく裾部をつけるものと、円錐状を呈するものがある。他に鉢か甕の脚台になると思われる器高の低いものが見られる。透しはすべて円形透しで、孔数は3ないし4個のものが多い。7のように多数の透しをもつものは極めて少ない。

底部 多数の出土をみたが、器種の判別及び成形技法については明らかにし得なかった。底部には、平底・あげ底・ドーナツ状のあげ底を呈するものがあり、小型のものが多いように思われた。そこで約200個体について、底径別に個体数を調べてみた(第6表)。その結果、底径が3.5cmから4cmのものが最も多く、底径が5cmまでのものが8割強を占めることがわかった。また底面に木の葉圧痕を残すもの、タタキを施すもの、内側から粘土を押し込んだような痕跡が見られるものなどがある。外面の調整はタタキが多く底部下端にまで及ぶものと、底部側面に指頭圧痕が見られるものがある。内面調整にヘラケズリを用いるものが若干見られる。また、底面を穿孔するものがある。孔数は1個のものが多いが、複数穿孔するものも2点出土している。

大森谷遺跡の弥生土器は弥生時代後期初頭から中頃のものとして捉えることができる。しかしこの時期に特徴的な長頸壺を欠くこと、また、山陽地方の影響を受ける土器の出土が見られることが特徴としてあげられる。今後の良好な資料の増加に期待したい。

註 ① 図及び観察表では「地区周辺部」として記載した。

② 財団法人大阪市文化財協会『瓜破北遺跡—共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書』1980年

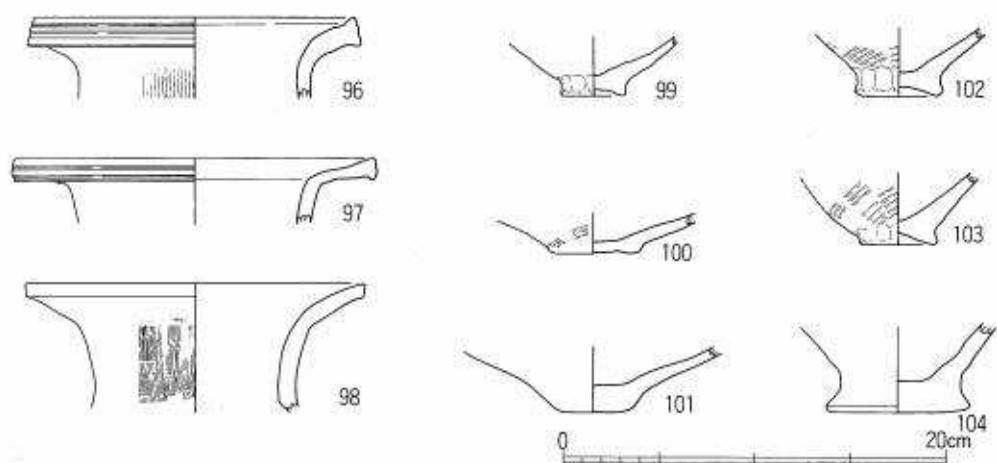
③ 奈良県立橿原考古学研究所『六条山遺跡』(奈良県文化財調査報告書第34集)1979年

④ 洲本市納字寺中に所在する。58年度に兵庫県教育委員会が調査した。

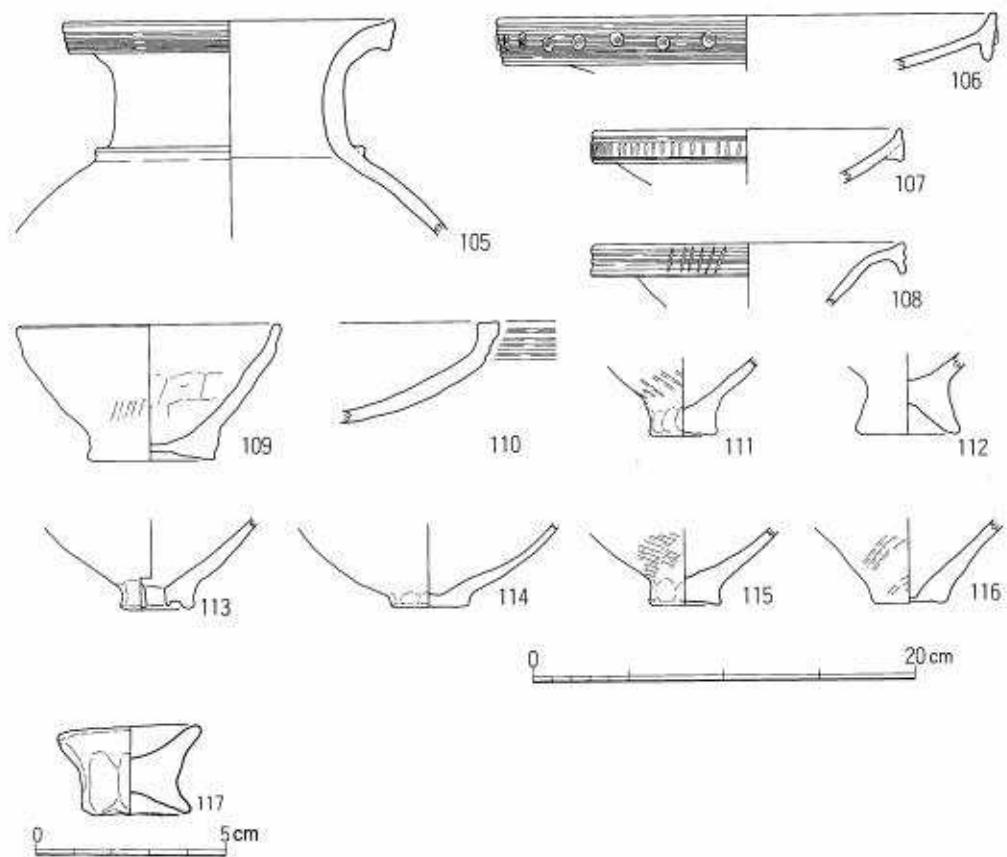
⑤ 岡本稔、広岡俊二、松下勝「北淡路の遺物」『兵庫考古』第9号1980年

響というだけでなく、山陽地方からの搬入品とも考えられる。

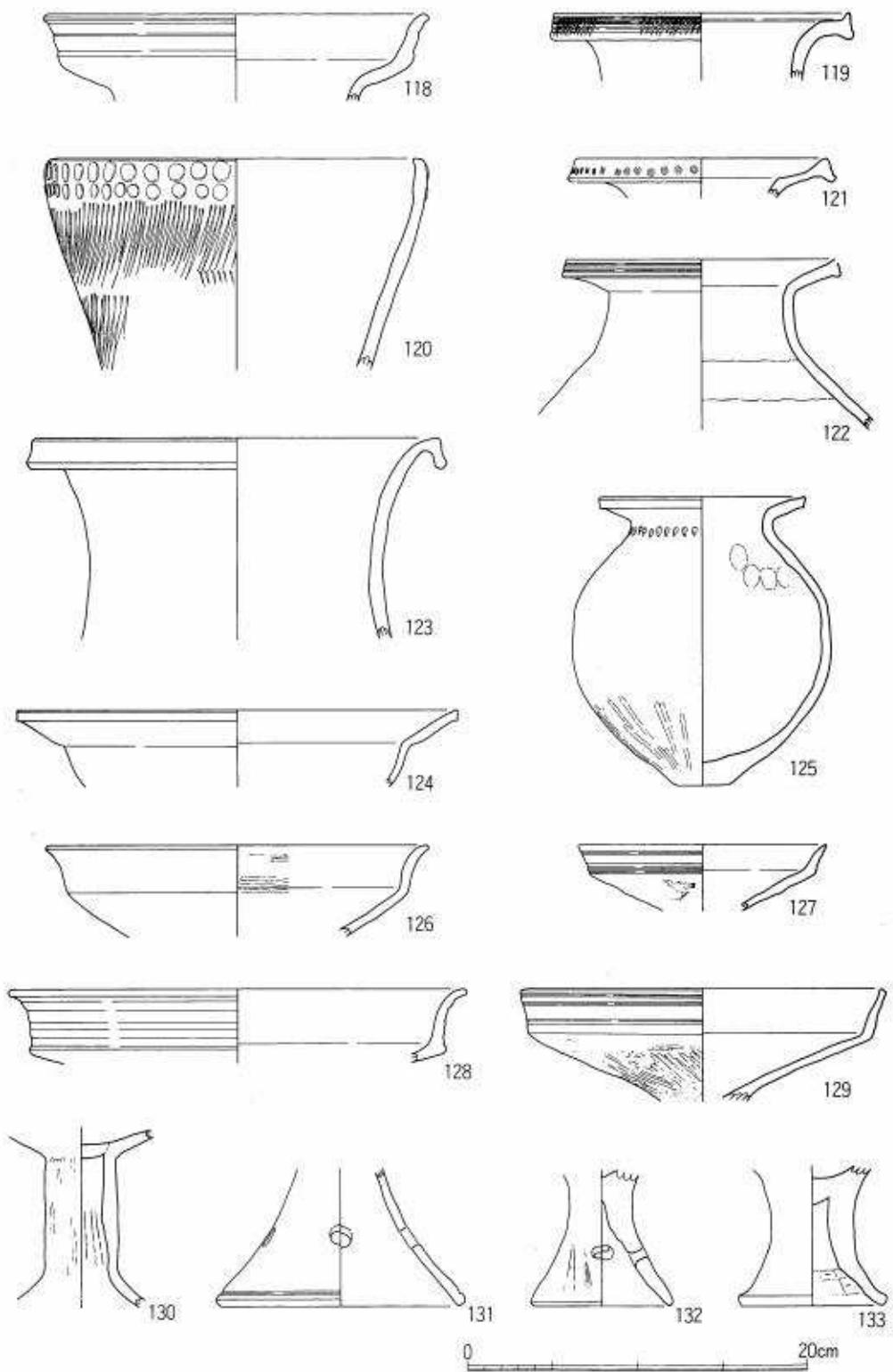
b 87を代表とする。87は体部の上位・中位・下位でタタキの方向が異なり、これが内面の接合痕とも一致することから、3分割による分割成形技法によってつくられたこ



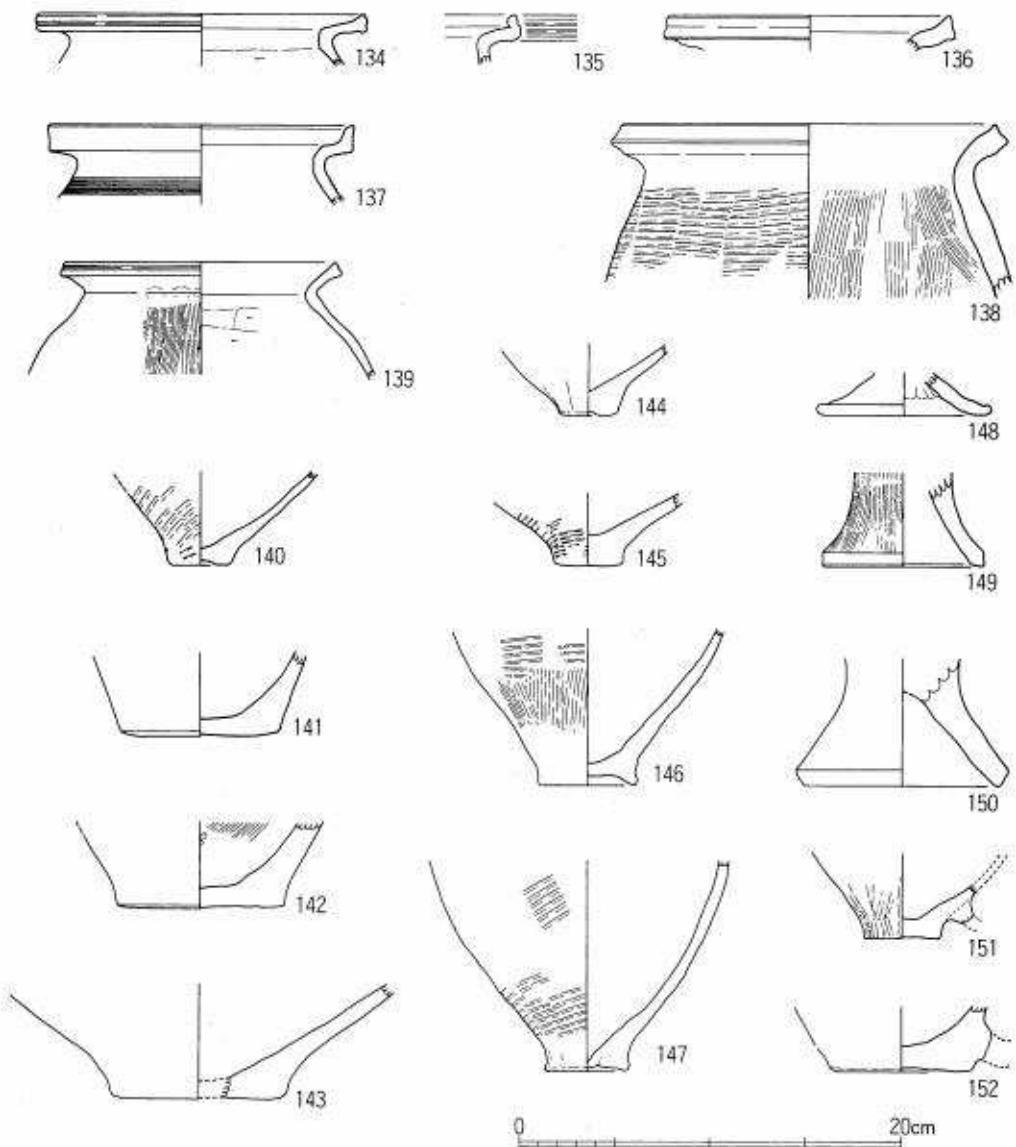
第 57 図 弥生土器—1 (1 地区 灰褐色土層出土土器)



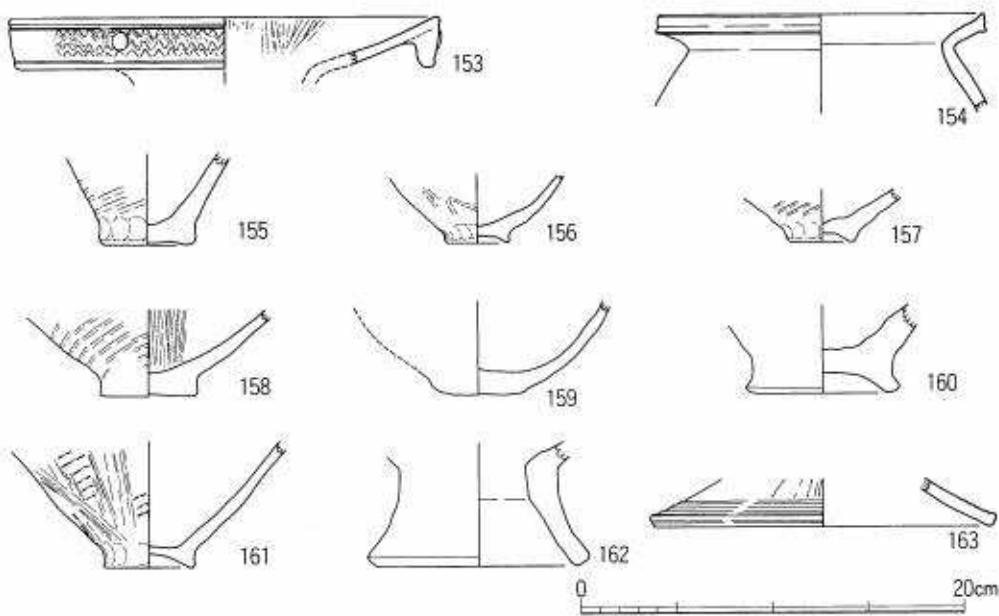
第 58 図 弥生土器—2 (1 地区 上部包含層出土土器)



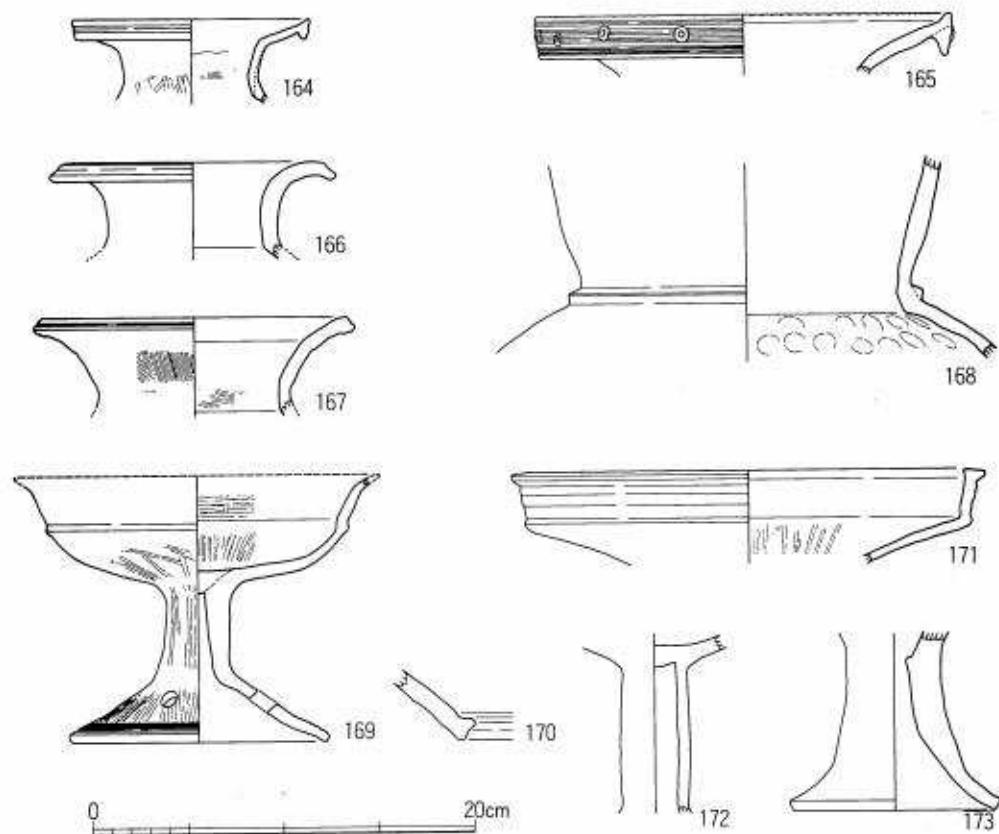
第 59 図 弥生土器—3 (I 地区 下部包含層出土土器)



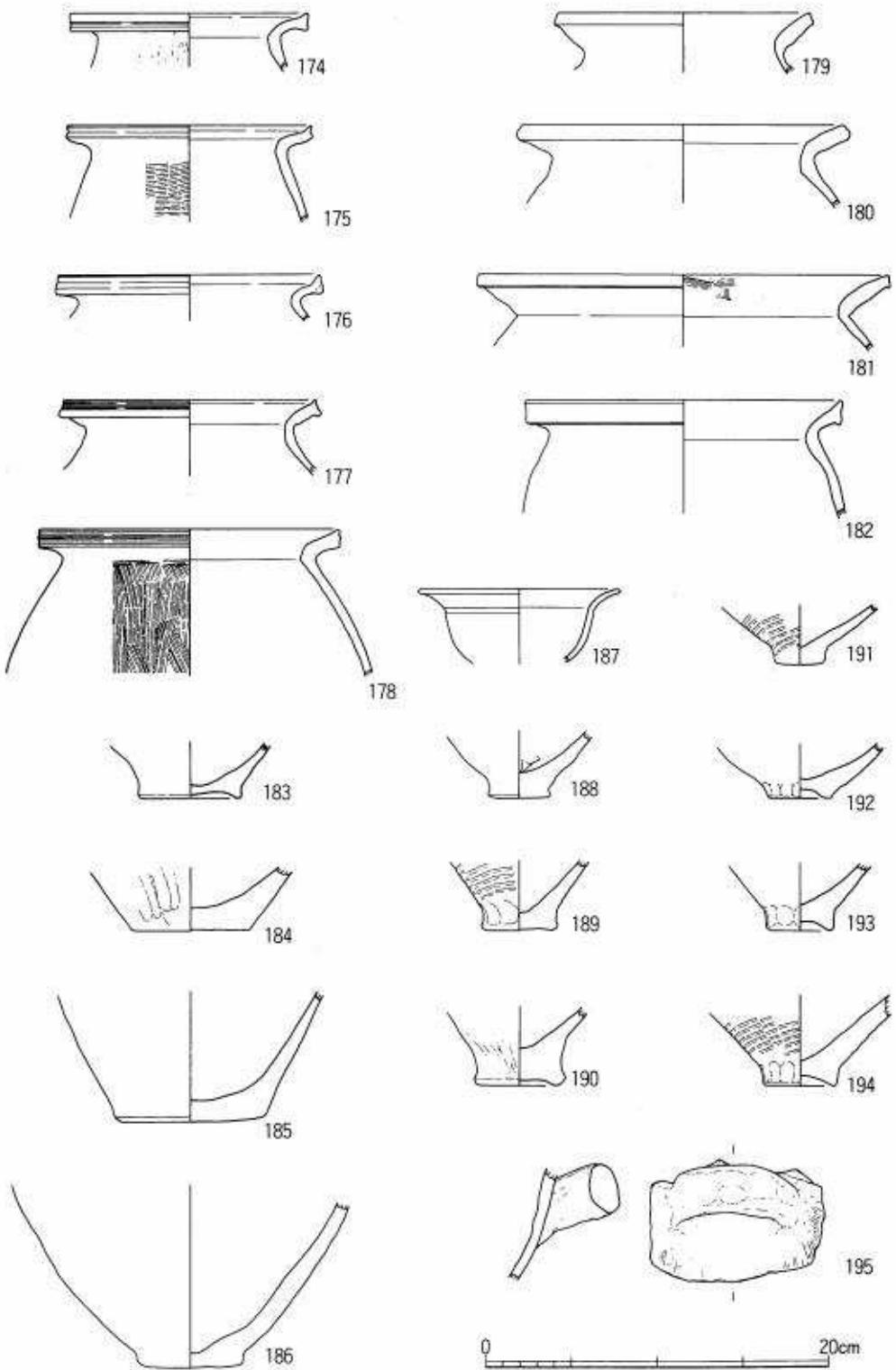
第 60 図 弥生土器—4 (I 地区 下部包含層出土土器)



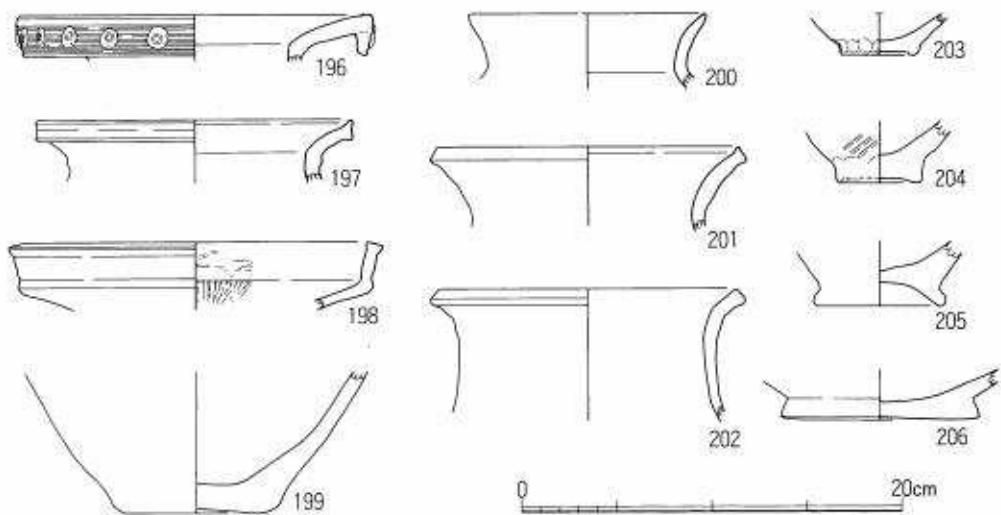
第 61 図 弥生土器—5 (II 地区周辺部 上部包含層出土土器)



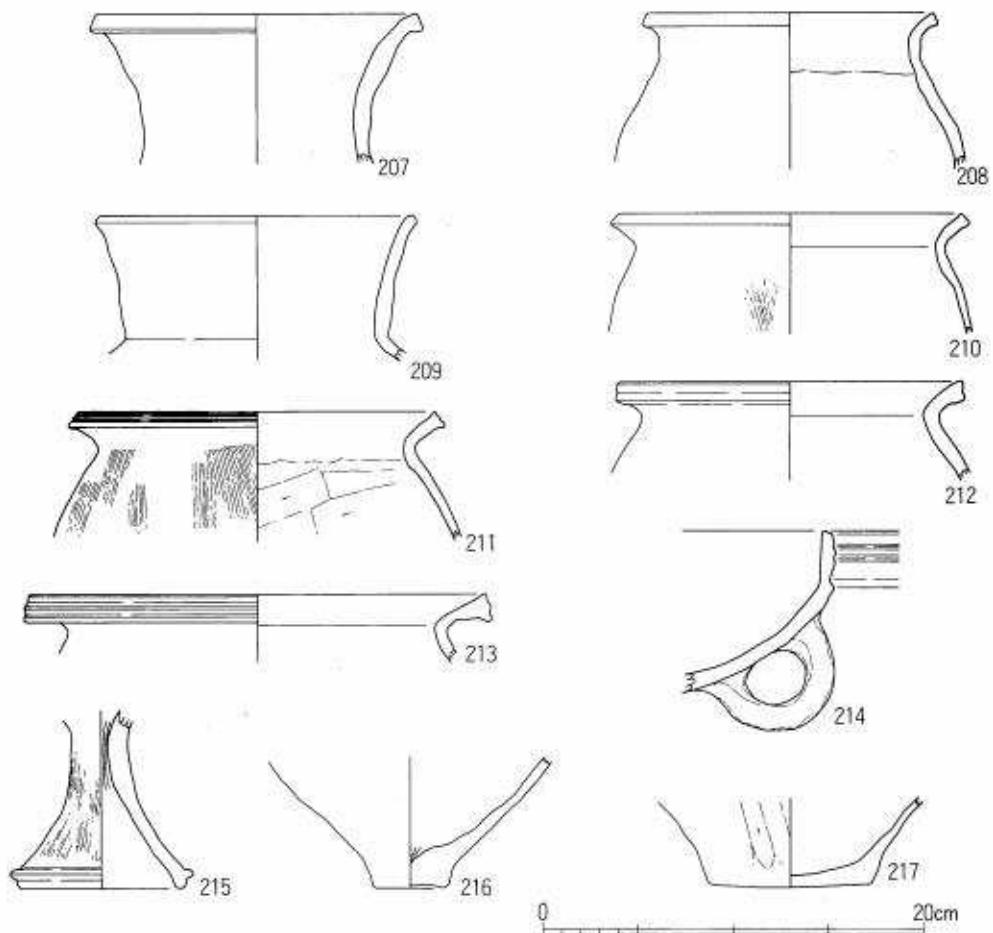
第 62 図 弥生土器—6 (II 地区周辺部 下部包含層出土土器)



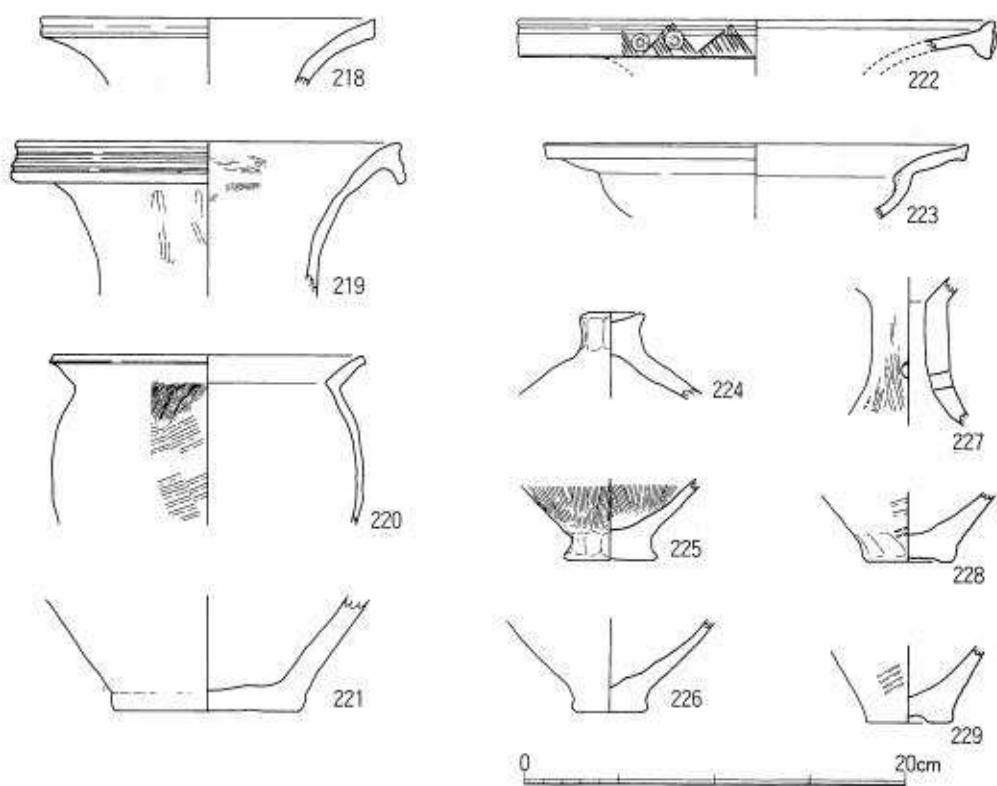
第 63 図 弥生土器—7 (II 地区周辺部 下部包含層出土土器)



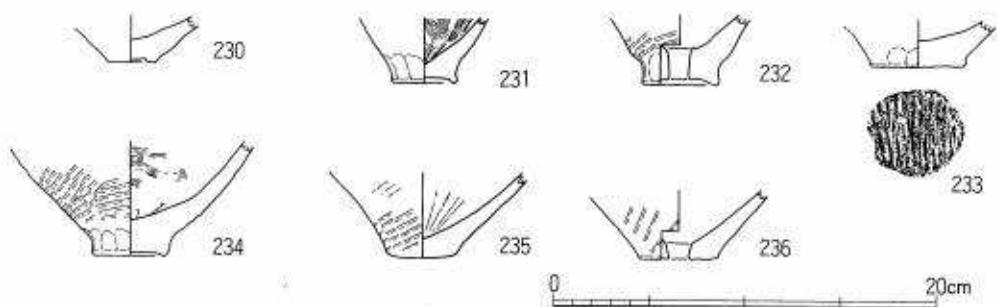
第 64 図 弥生土器—8 (II 地区 包含層出土土器)



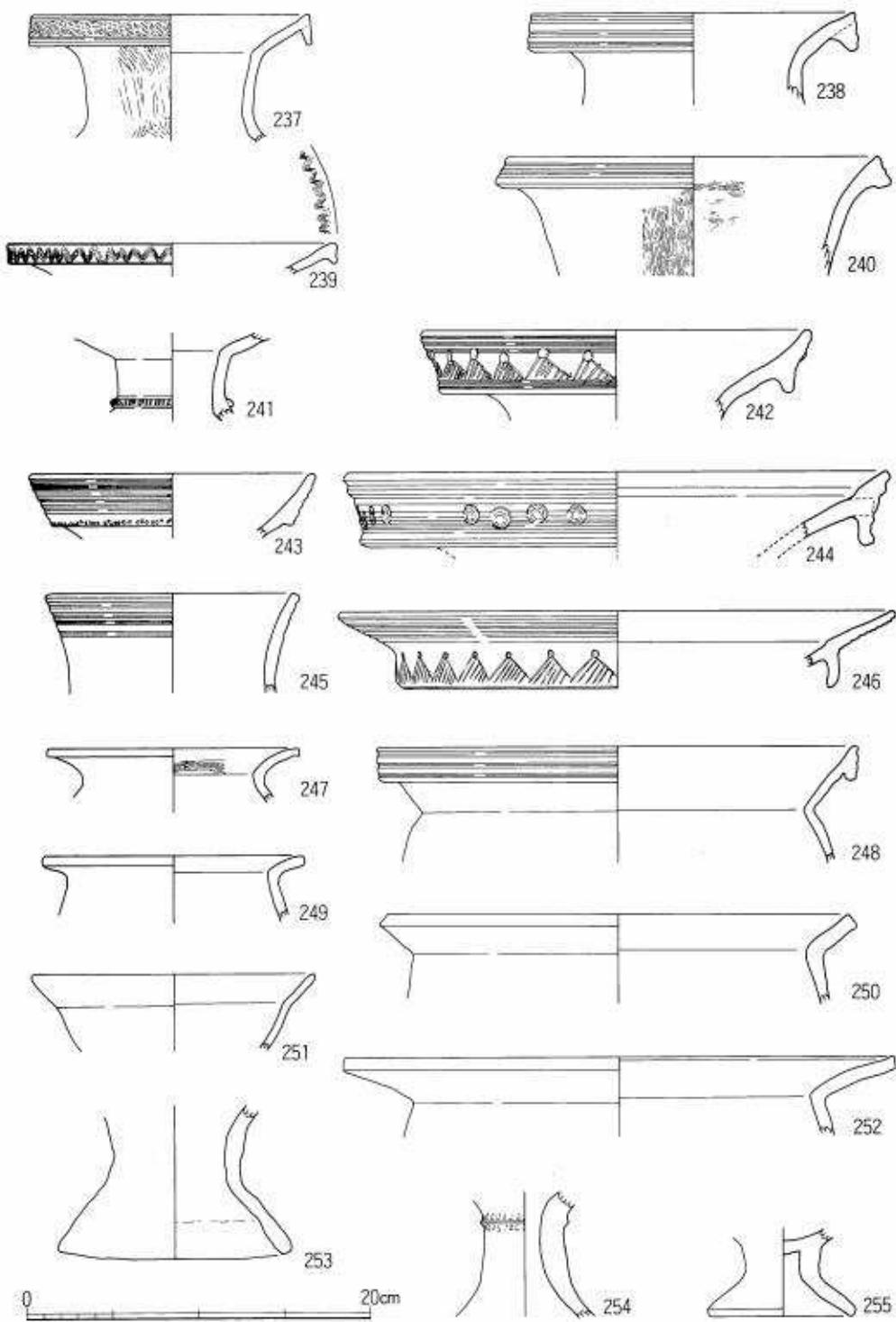
第 65 図 弥生土器—9 (III 地区 包含層出土土器)



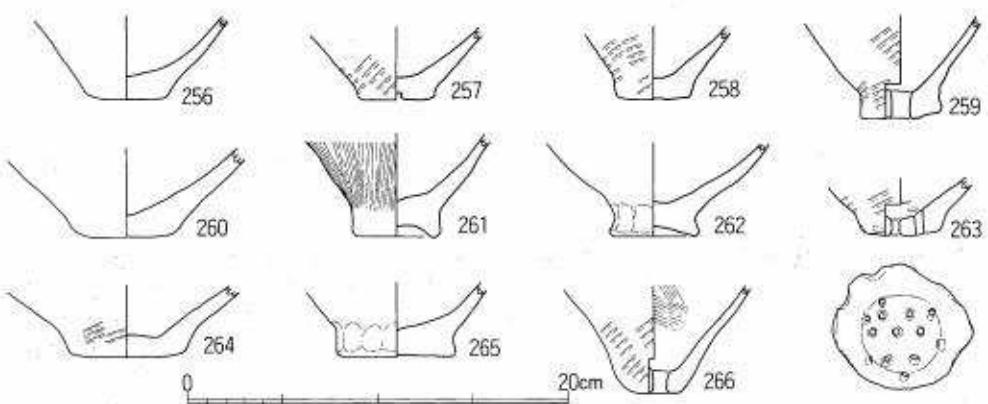
第 66 図 弥生土器—10 (N 地区 包含層出土土器)



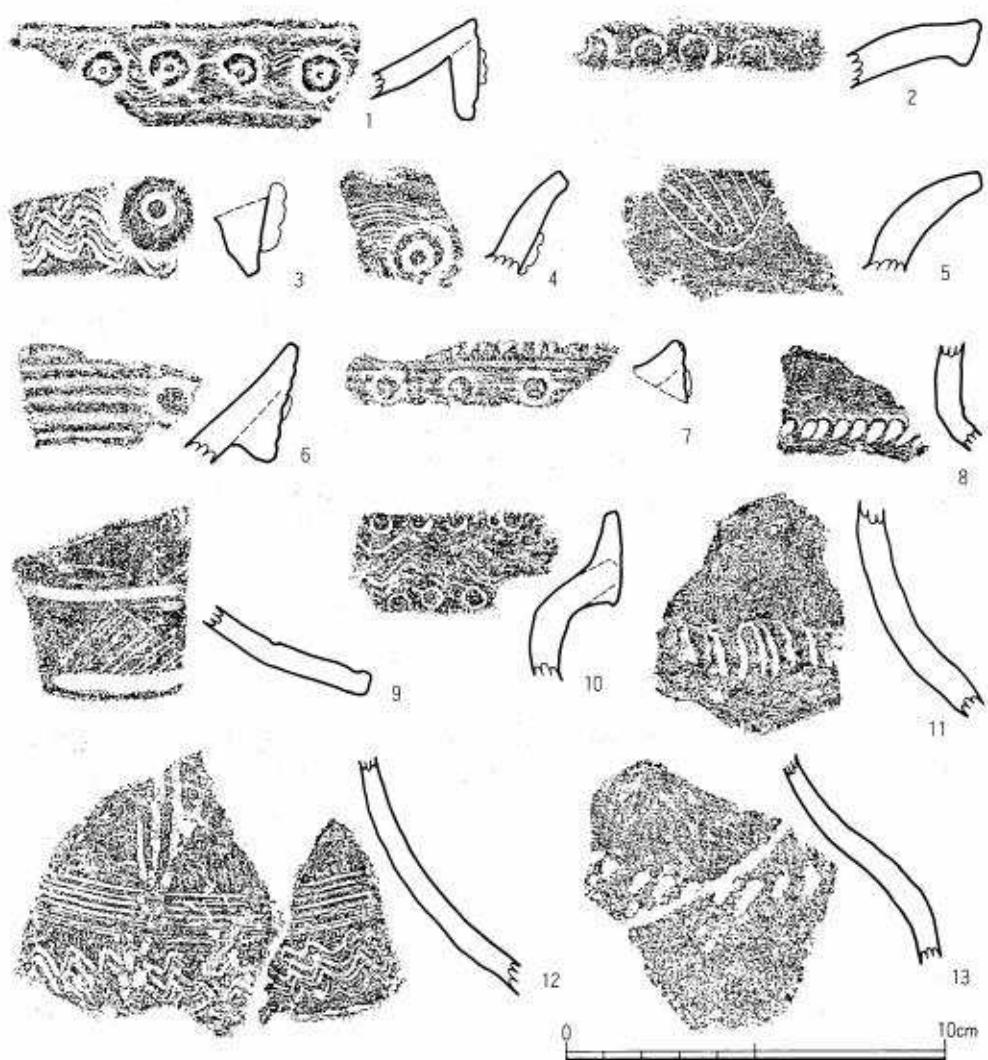
第 67 図 弥生土器—11 (V 地区 上部包含層出土土器)



第 68 図 弥生土器—12 (V 地区 下部包含層出土土器)



第 69 圖 弥生土器—13 (V 地區 下部包含層出土土器)



第 70 圖 弥生土器—14 (拓 影)

第7表 弥生土器觀察表

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
1号住居址						
広口壺	1	1号住居址 埋土	(26.0) — — —	口頸部のみ残存。直線的に斜め上方にのびる口頸部。 口縁端部は下方に拡張。	口縁部外面・端面はヨコナデ。頸部外面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	褐色 (7.5YR 4/4) 角閃石、雲母、長石等を含む。
器台	2	1号住居址 埋土	(17.9) — — —	口頸部のみ残存。外側する口頸部。口縁端部は丸く納める。	外面は、磨滅のため調整不明。口頸部内面はナデ。口縁部上端に強いヨコナデを施す。	橙色 (7.5YR 6/6)
広口壺	3	1号住居址 埋土	(14.9) — — —	口頸部のみ残存。斜め上方へ立ち上がる頸部から、外ケ目(ハケ目)の後、口縁部のみヨコ反する口縁部。口縁端部はナデ。内面は磨滅のため調整不明。下方に肥厚し、面をなす。	口頸部外面は、縦方向のハケ目(ハケ目)の後、口縁部のみヨコ反する口縁部。口縁端部はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (7.5YR 6/6)
広口壺	4	1号住居址 埋土	(12.3) — — —	口頸部のみ残存。直立する頸部から屈曲してほぼ水平にひらく口縁部は、下方に肥厚。端部は面をなす。	口縁端面・口縁部外面はヨコナデ。頸部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目の後ナデ。	橙色 (7.5YR 7/6)
甕	5	1号住居址 埋土	(12.1) — — —	口頸部・胸肩部残存。張りのない体部から「く」字形に外反する口頸部。端部は面をつくる。	内外面とも磨滅のため調整不明。	明黄褐色 (10YR 7/6)
高坏	6	1号住居址 埋土	20.9 — — —	脚部欠損。斜めにのびる体部から、鋭い稜をつくって外傾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は内方に僅かに拡張。	口縁部は内外面とも横方向のヘラミガキ。体部外面は縦、内面は斜め方向のヘラミガキ。口縁端面はヨコナデ。	橙色 (7.5YR 7/6)
高坏脚	7	1号住居址 埋土	(7.7) — — —	坏部欠損。外反する円錐状の脚部。脚端部は面をつくる。	外面は、縦方向のヘラミガキ。内面は横方向のハケ目。脚端面はヨコナデ。柱状部に沈線文をめぐらし、上段に6個、下段に9個の円孔を穿つ。	明赤褐色 (5YR 5/8)
手捏ね 土器	8	1号住居址 埋土	— — — —	底部欠損。丸味をもつ体部から立ち上がる口縁部。	内外面ともナデ。体部外面に2条、口縁部外面に1条の接合痕。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
底部	9	1号住居址 埋土	— — — (9.5)	平底。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色 (7.5YR 7/6)
底部	10	1号住居址 埋土	— — — (3.8)	平底。	外面は、磨滅のため調整不明。内面はナデの後ヘラミガキ。	橙色 (5YR 6/8)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	11	1号住居址 埋土	— — — 3.4	平底。	内外面ともナデ。底部側面 に指頭圧痕。	橙色 (7.5 YR 7/6) 黒斑
底部	12	1号住居址 埋土	— — — 8.0	平底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	橙色 (5 YR 7/6)

3号住居址

広口壺	13	3号住居址 埋土	(17.0)	口頸部のみ残存。立ち上がり た後、内面に稜をつくり、 大きく外反する口頸部。口 縁端部は面をなす。	内外面ともナデ。	橙色 (7.5 YR 7/6)
広口壺	14	3号住居址 下層埋土	(18.5)	口頸部のみ残存。外反する 口頸部。口縁端部は下方に 拡張。	口縁部は、端面・内外面と もヨコナデ。頸部外面は縦 方向、内面は横方向のヘラ ミガキ。	橙色 (7.5 YR 6/6)
広口壺	15	3号住居址 下層埋土	(14.0)	口頸部・胴肩部残存。筒状 の頸部から、ほぼ水平にひ らく口縁部。口縁端部は下 方に拡張。	口縁部外面はヨコナデ。頸 部・肩部外面は縦方向のハ ケ目の後ヘラミガキ。内面 は磨滅のため調整不明。口 縁端面に2条の凹線文をめ ぐらす。	浅黄橙色 (10 YR 8/4)
広口壺	16	3号住居址 埋土	(19.8)	口縁部のみ残存。外反する 口縁部。口縁端部は、上下 に僅かに拡張。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。口縁端面に5条の浅い 凹線文をめぐらし、竹管文 を押捺した円形浮文を貼り 付ける。	橙色 (5 YR 6/6)
広口壺	17	3号住居址 床面直上 上層埋土	20.4	口頸部のみ残存。外反する 口頸部。口縁端部は下方に 拡張。	口縁部外面はヨコナデ。頸 部外面は縦方向、体部との 境は横方向のヘラミガキ。 口頸部内面は横方向のヘラ ミガキ。口縁端面に3条の 凹線文をめぐらす。	橙色 (7.5 YR 6/6)
短頸壺	18	3号住居址 下層埋土	(9.0)	口頸部のみ残存。外傾する 口頸部。口縁端部は尖頭状 をなす。	口頸部内外面ともナデの後 ヘラミガキ。	橙色 (7.5 YR 6/6)
二重口 縁壺	19	3号住居址 埋土	(18.4)	口頸部のみ残存。筒状の頸 部から強く外反した後、立 ち上がって、外反する口縁 部。口縁端部は面をなす。	口縁部は内外面とも横方向 ナデの後縦方向のヘラミガ キ。頸部内面は、上半が縦 方向、下半が横方向のヘラ ミガキ。口縁端部に刻み目 を施す。	橙色 (7.5 YR 7/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
二重口 縁壺	20	3号住居址 埋土	(29.6)	口頸部のみ残存。外方にひらいた後、明瞭な棱をつくって屈曲し、さらに外反する口縁部。口縁端部は面をつくる。	口頸部内面は磨滅のため調整不明。頸部外面はヘラミガキ。口縁部外面は9条の凹線文をめぐらした後、竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。	明赤褐色 (7.5YR5/6)
二重口 縁壺	21	3号住居址 埋土	(25.6)	口頸部のみ残存。なだらかに外反する口頸部。口縁部外面に粘土を補充し、明瞭な棱をつくる。	口縁部外面はナデの後ヘラミガキ。頸部外面は縦方向のハケ目。口頸部内面は横方向のナデ。	にぶい橙色 (7.5YR7/4)
壺	22	3号住居址 中央土礗	(16.5)	口頸部のみ残存。緩やかに屈曲して外反する口頸部。口縁端部は面をつくる。	口縁部外面はナデ。頸部外面は、右上がりのタタキの後、縦方向のハケ目。口頸部内面はナデ。	にぶい黄橙色 (7.5YR6/4)
鉢	23	3号住居址 下層埋土	(30.0)	体部下半欠損。緩やかに屈曲してほぼ水平にひらく口縁部。口縁端部は面をつくる。	口縁部外面はナデ。体部外面は磨滅のため調整不明。内面は、口頸部が横、体部が縦方向のヘラミガキ。口縁端面に刻み目を施す。	橙色 (7.5YR6/6)
器台	24	3号住居址 埋土		口頸部のみ残存。ほぼ水平にひらいた後、屈曲して外反する口縁部は、屈曲部で下方に拡張する。	口縁部外面はナデ。頸部外面は磨滅のため調整不明。内面は、口縁部が横、頸部が縦方向のヘラミガキ。口縁部下位に3条の凹線文をめぐらし、竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
器台	25	3号住居址 埋土		口頸部のみ残存。ほぼ水平にひらいた後屈曲して外反する口縁部。屈曲部で下方か。口縁部下位に円形浮文を貼り付ける。	口頸部外面は磨滅のため調整不明。内面はヘラミガキ。	橙色 (7.5YR7/6)
高坏脚	26	3号住居址 埋土	(13.8)	裾部のみ残存。大きく外方にひらく裾部。裾端部は丸く納める。	裾部外面は磨滅のため調整不明。内面はナデ。円孔を穿つ。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
高坏脚	27	3号住居址 埋土		坏底部・柱状部残存。円錐状に外反する短い脚部。	外面は坏部・脚部ともヘラミガキ。坏部内面は磨滅のため調整不明。脚部内面は裾部にナデ調整を施すが、絞り目が残る。4方に円孔を穿つ。	橙色 (7.5YR6/6)
器台脚	28	3号住居址 埋土		柱状部のみ残存。	外面はヘラミガキ。内面はナデ。	橙色 (7.5YR6/8)
器台脚	29	3号住居址 下層埋土		脚部のみ残存。直線的にひらく円錐状の脚部。	外面は、縦方向のヘラミガキ、くびれ部をナデ。内面はナデの後ハケ目。	にぶい橙色 (7.5YR7/4)

器種	図版 No.	出土地区 層・位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
高坏脚	30	3号住居址 上層埋土	— — — —	柱状部のみ残存。内側気味 にひらくいびつな脚部。	外面は板ナデ、内面は箆状 工具による強いナデ。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
底部	31	3号住居址 下層埋土	— — — 4.4	突出する平底。	外面は縦方向のヘラミガキ。 内面は磨滅のため調整不明。 底面に木の葉圧痕。	橙色 (7.5YR 6/6)
底部	32	3号住居址 埋土	— — — 3.6	平底。	外面は板ナデ。内面はナデ。	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)
底部	33	3号住居址 埋土	— — — 2.8	平底。	外面はヘラミガキ。内面は 磨滅のため調整不明。	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)
底部	34	3号住居址 下層埋土	— — — 2.2	平底。	外面は縦方向のヘラミガキ。	にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 底部側面に黒斑
底部	35	3号住居址 下層埋土	— — — 2.4	突出する小さいあげ底。	体部外面はナデの後、底部 付近のみハケ目。底部側面・ 底面に指頭圧痕。内面 はハケ目。	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)
底部	36	3号住居址 埋土	— — — 3.4	あげ底。	外面はハケ目。内面はクモ の巣状のハケ目、中央に半 載竹管状の圧痕が残る。	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)
底部	37	3号住居址 下層埋土	— — — 3.6	平底。	外面はナデ、内面はハケ 目。底面に木の葉圧痕。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 外面に黒斑
底部	38	3号住居址 下層埋土	— — — 4.0	突出するあげ底。	底部側面・底面に指頭圧 痕。内面はナデ。	橙色 (7.5YR 6/6)
底部	39	3号住居址 下層埋土	— — — 3.6	突出する平底。	外面は磨滅のため調整不 明。内面はハケ目。	にぶい黄橙色 (10YR 7/3) 底面に黒斑
底部	40	3号住居址 下層埋土	— — — 3.2	突出するあげ底。	体部外面はタタキの後ナデ 消す。底部側面は指頭圧痕 の後ナデ。内面はハケ目。	にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 体部外面に黒斑
底部	41	3号住居址 埋土	— — — (4.4)	平底。	外面は右上がりのタタキ (2.5条/cm)の後、底部側面 をナデ。内面は磨滅のため 調整不明。木の葉底。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	42	3号住居址 埋土	— — — 5.6	突出する平底。	外面は底部下端に及ぶタタキの後、縦方向のハケ目。内面・底面はヘラケズリ。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
底部	43	3号住居址 埋土	— — — 4.0	平底。	外面は底部下端に及ぶタタキの後、ナデ消す。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	44	3号住居址 中央土壤	— — — 3.8	突出するドーナツ状のあげ底。	外面は底部下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)の後、一部ナデ消す。内面底面に黒斑はハケ目。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	45	3号住居址 埋土	— — — (4.4)	ドーナツ状のあげ底。	外面はタタキ(2.5条/cm)、橙色底部側面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	(5YR 6/6)
底部	46	3号住居址 上層埋土	— — — 3.8	突出するドーナツ状のあげ底。	外面は底部下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)の後、一部ナデ消す。内面外面に黒斑はハケ目。	橙色(7.5YR 6/6)
底部	47	3号住居址 上層埋土	— — — (3.2)	平底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)、底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色(5YR 6/6)
底部	48	3号住居址 下層埋土	— — — 3.7	ドーナツ状のあげ底。	外面はタタキの後、ナデ消す。内面はハケ目。	橙色(7.5YR 6/6)
底部	49	3号住居址 下層埋土	— — — 4.8	平底。底部に複数の穿孔。	外面はタタキの後、ナデ消す。内面はナデ。底部の孔(5YR 7/6)は焼成前の穿孔。	橙色(5YR 7/6)
底部	50	3号住居址 下層埋土	— — — 2.8	平底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面は縦方向のハケ目。	赤色(10R 5/6)
底部	51	3号住居址 中央土壤	— — — 3.5	平底。	外面は底部下端に及ぶタタキ(2条/cm)の後、縦方向のハケ目。内面は磨滅のため調整不明。底面にタタキを施す。	にぶい黄橙色(10YR 7/3)
底部	52	3号住居址 埋土	— — — —	丸底。	内外面ともにナデ。	にぶい褐色(7.5YR 5/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
3号住居址周辺						
広口壺	53	排水溝	— — 20.3 —	口縁部・底部欠損。長い筒状の頸部から肩の張らない扁球形の体部へなだらかに移行。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は磨滅のため調整不明。体部中位に1条、上位に3条の接合痕を残す。	橙色 (5 Y R 6/8) 体部中位に黒斑
広口壺	54	土壤	— — (20.8) 6.0	口頸部・体部上半欠損。球形の体部。平底。	外面は斜め方向のヘラミガキ。底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。体部中位に2条の接合痕。	にぶい橙色 (7.5 Y R 7/4)
4号住居址						
壺	55	4号住居址 埋土	(14.2)	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に屈曲し、立ち上がり気味に外反する口頸部。口縁端部は丸く納める。	口縁部外面はハケ目、内面は磨滅のため調整不明。体部外面は右上がりのタタキ(2条/cm)、内面はナデ、接合痕を残す。口縁端部に刻み目。	橙色 (7.5 Y R 6/6)
底部	56	4号住居址 埋土	— — 4.4	あげ底。	外面は右上がりのタタキ、底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	にぶい黄橙色 (10 Y R 7/4)
大形土壺						
甕	57	大形土壺 下層埋土	(14.2)	口頸部・胴肩部残存。張りのある体部から、斜め上方に外反する口縁部。口縁端部は上方につまみあげる。	口縁部内外面・体部外面はヨコナデ。体部内面は横方向に1条の凹線文。	橙色 (5 Y R 6/6)
甕	58	大形土壺 埋土	(17.0)	口頸部・胴肩部残存。張りのある体部から、斜め上方に外反する口縁部。口縁端部は上下に拡張。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケ目の後ヨコナデ、内面は横方向のヘラケズリ。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	橙色 (5 Y R 6/6)
壺	59	大形土壺 埋土	(15.8)	口頸部・胴肩部残存。張りのある体部から、ほぼ水平にひらく口縁部。口縁端部は肥厚し、上方につまみあげる。	体部外面を縦方向のハケ目(5 Y R 6/6)の後、口縁部内外面をヨコナデ。体部内面は横方向のハケ目をナデ消した後、ヘラケズリ。	橙色 (7.5 Y R 6/6)
甕	60	大形土壺 埋土	(19.4)	口頸部のみ残存。「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は上方につまみあげる。	体部外面は縦方向のハケ目。口頸部内外面・体部内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (5 Y R 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	61	大形土壙 下層埋土	(14.0) — — —	体部下半欠損。「く」字形に外反する短い口頸部、口径。口縁端部は面をつくる。腹径が口径を凌ぐ。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケ目その後ナデ消す。内面はナデの後横方向のヘラケズリ。口縁端面はヨコナデによりやや窪む。	橙色 (7.5Y R 6/6) 黒斑
甕	62	大形土壙 埋土	(17.6) — — — —	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に外反する口頸部。口径端部は肥厚し、下方に僅かに拡張。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はナデ。内面はナデの後、横方向のヘラケズリ。口縁端面はヨコナデによりやや窪む。	明褐色 (7.5Y R 5/6)
甕	63	大形土壙 埋土	(15.0) — — —	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に外反する口頸部。口径端部は丸く納める。	体部外面は右上がりのタタキ(1.5条/cm)。口縁部内外面・体部内面はナデ。口縁端部に刻み目。	橙色 (7.5Y R 6/6)
甕	64	大形土壙 埋土	(15.6) — — —	口頸部のみ残存。「く」字形に外反する口頸部。口径端部は下方に拡張。	口縁部外面はナデ、体部外面は縦方向のハケ目。内面は口縁部・体部ともナデ。口縁端面に刻み目。	橙色 (7.5Y R 6/6)
用途不明土器	65	大形土壙 埋土	— — — 6.2		外面はナデ、内面は磨滅のため調整不明。	明黄褐色 (10Y R 7/6)
底部	66	大形土壙 埋土	— — — 4.0	平底。	内外面とも磨滅のため調整不明。	黄橙色 (7.5Y R 7/8)
底部	67	大形土壙 下層埋土	— — — 3.0	あげ底。	外面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	明黄褐色 (10Y R 7/6)
底部	68	大形土壙 埋土	— — — (5.4)	平底。	内外面ともにナデ。外面に指頭圧痕残存。	橙色 (7.5Y R 6/6)
底部	69	大形土壙 下層埋土	— — — 3.6	平底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はナデ。	橙色 (7.5Y R 7/6)
底部	70	大形土壙 下層埋土	— — — 3.8	ドーナツ状のあげ底。	底部外面は下端に及ぶタタキ(2条/cm)。内面はハケ目。	橙色 (7.5Y R 7/6) 黒斑
底部	71	大形土壙 下層埋土	— — — (6.8)	平底。	外面はハケ目、内面は板ナデ。	明黄褐色 (10Y R 7/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
脚部	72	大形土壙 下層埋土	— — — 10.5	裾部のみ残存。「ハ」字形 に外反する裾部。口縁端部 は肥厚し、面をつくる。	外面は磨滅のため調整不 明。内面はヨコナデ。脚端 面はヨコナデにより窪む。	橙色 (7.5 YR 6/8)
脚台	73	大形土壙 下層埋土	— — — (15.2)	脚台部のみ残存。「ハ」字形 にひらく脚台部。脚端部 は面をつくる。	外面は縦方向のヘラミが キ。内面は横方向のヘラケ ズリ。	明黄褐色 (10 YR 7/6)

5号住居址

底部	74	5号住居址 下層埋土	— — — 3.3	平底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	橙色 (5 YR 6/6) 黒斑
底部	75	5号住居址 埋土	— — — 3.2	あげ底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	橙色 (2.5 YR 7/6) 黒斑
底部	76	5号住居址 上層埋土	— — — 3.5	ドーナツ状のあげ底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	浅黄褐色 (10 YR 8/3) 黒斑

7号住居址

底部	77	7号住居址 埋土	— — — 2.8	平底。	内外面とも剥離のため調整 不明。	黄橙色 (7.5 YR 7/8)
底部	78	7号住居址 埋土	— — — 2.7	あげ底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	橙色 (7.5 YR 6/8)
底部	79	7号住居址 埋土	— — — 3.3	平底。	内外面とも剥離のため調整 不明。	橙色 (7.5 YR 7/6)
底部	80	7号住居址 埋土	— — — 4.0	あげ底。	外面は剥離のため調整不 明。内面はハケ目。	明褐色 (7.5 YR 5/6)
底部	81	7号住居址 埋土	— — — 3.3	あげ底。	内外面とも剥離のため調整 不明。	橙色 (5 YR 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	82	7号住居址 埋土	— — — 2.3	突出する平底。	内外面とも剝離のため調整 不明。	明褐色 (7.5 YR 5/8)
底部	83	7号住居址 埋土	— — — 3.0	平底。	内外面とも剝離のため調整 不明。	橙色 (7.5 YR 6/8)
底部	84	7号住居址 埋土	— — — —		内外面とも磨滅のため調整 不明。	明褐色 (7.5 YR 5/8)
底部	85	7号住居址 周溝	— — — 2.9	突出する小さいドーナツ状 のあげ底。	外面は右上がりのタタキ (2.5条/cm) の後ナデ。内 面は磨滅のため調整 不明。	明赤褐色 (5 YR 5/8)

溝

高環	86	5号溝	27.2 18.6 — 18.1	完形品。环部は、内彎気味 に大きくひらいた後、外反 する口縁部を有する。口縁 端部は面をつくる。脚部は 長い円筒状の柱状部からゆ るやかに広がる。脚端部は 面をなす。	口縁部外面は縦、内面は横 方向のヘラミガキ。环部下 半は内外面とも縦方向のヘ ラミガキ。脚部外面は縦方 向のヘラミガキ、内面はナ デ。裾部下端に1条の凹線 文をめぐらす。4方に円孔 を穿つ。	橙色 (5 YR 6/8)
甕	87	5号溝	14.0 18.7 15.4 3.9	完形品。「く」字形に屈曲 し、外反する口縁部。口縁 端部は丸く納める。中位に 最大径をもつ卵形の体部。 底部は平底。口径と復径が ほぼ等しい。	口縁部は内外面ともナデ。 体部外面は、上位が右上 り、中位が水平のタタキ (2条/cm)。体部下位は右 上がりのタタキの後ナデ、 さらに縦方向のヘラミガキ を施す。内面は肩部以下を ナデ調整。肩部内面は縦方 向にナデあげる。体部中位 に1条、上位に3条の接合 痕残存。	橙色 (5 YR 6/6) 体部上位と底 部に黒斑
広口壺	88	7号溝	18.9 — — —	口頸部のみ残存。筒状の頸 部から、内面に稜をつくっ て外方にひらく口縁部は、 肥厚した後、端部を下方に 拡張させる。	口縁部内面はヘラミガキ。 口縁部外面・頸部内外面は 剝離のため調整不明。口縁 端面に6条の凹線文をめぐ らす。	橙色 (5 YR 6/8)
器台	89	6号溝	(22.4) — — —	口縁部のみ残存。口縁部は 内彎してひらく。口縁端部 を下方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整 不明。口縁端面には、波状 文と1条の凹線文をめぐら す。	明赤褐色 (5 YR 5/8)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	90	1号溝	— — — 3.6	あげ底。	外面はタタキ(2.5条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面(7.5YR 6/6)は板ナデ。	橙色 黒斑
底部	91	1号溝	— — — 3.1	突出する平底。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色 (5YR 6/6)
底部	92	5号溝	— — — 3.5	平底。	外面は縦方向のハケ目、内面は磨滅のため調整不明。	明赤褐色 (5YR 5/6) 底面から全体部 外面にかけて 黒斑
底部	93	6号溝	— — — (4.8)	平底。	外面は底部下端に及ぶ右上がりのタタキ。内面は磨滅のため調整不明。底面に木の葉圧痕。	明赤褐色 (5YR 5/8)
底部	94	6号溝	— — — 2.7	突出するドーナツ状のあげ底。	外面はナデ。内面は剥離のため調整不明。	橙色 (5YR 6/6)
底部	95	6号溝	— — — 3.8	ドーナツ状のあげ底。	内外面ともに磨滅のため調整不明。外面はヘラミガキ(10YR 7/4)か。	にぶい黄橙色 黒斑

I 地区

広口壺	96	灰褐色土層	(18.8)	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、稜をつくり屈曲する口縁部。口縁端部は下方に拡張。	内外面ともに磨滅のため調整不明。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	橙色 (7.5YR 7/6)
広口壺	97	灰褐色土層	(16.6)	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、ほぼ水平に短く外反する口縁部は、肥厚し、端部を上下に拡張。	頸部外面を縦方向のハケ目の後、口縁部をヨコナデ。内面は磨滅のため調整不明。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	にぶい橙色 (5YR 6/4)
広口壺	98	灰褐色土層	(17.7)	口頸部のみ残存。立ち上がった後、大きく外反する口頸部。口縁端部は面をつくる。	頸部外面を縦方向のハケ目の後、口縁部をヨコナデ。頸部内面は横方向のハケ目の後ナデ。	橙色 (7.5YR 7/6)
底部	99	灰褐色土層	— — — (3.1)	突出するあげ底。	外面はタタキ。底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	明黄褐色 (10YR 7/6) 外面に黒斑
底部	100	灰褐色土層	— — — (4.4)	平底。	外面はタタキの後、縦方向のハケ目。内面は磨滅のため調整不明。	浅黄橙色 (10YR 8/4) 外面に黒斑

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	101	灰褐色土層	— — — (3.3)	平底。	外面は磨滅のため調整不明。内面はハケ目。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	102	灰褐色土層	— — — (4.4)	突出するあげ底。	外面は右上りのタタキ(3条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
底部	103	灰褐色土層	— — — (3.8)	あげ底。	外面は右上りのタタキ(3条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	黒褐色(10YR 3/1)
底部	104	灰褐色土層	— — — (6.7)	平底。外方に張り出す。	内外面とも磨滅のため調整不明。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
広口壺	105	上部包含層	(17.3)	口頸部・胴肩部残存。筒状の頸部から、ほぼ水平に短く外反する口縁部。口縁端部は上下に僅かに拡張。	口頸部内外面、肩部外面は磨滅のため調整不明。肩部内面はナデ。口縁端面に3条の凹線文、体部上位に凸帯文をめぐらす。	赤褐色(2.5YR 4/6)
器台	106	上部包含層	(25.5)	口縁部のみ残存。内側気味にひらく口縁部。口縁端部は上下に大きく拡張。	内外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面に5条の凹線文をめぐらし、竹管文を黒斑押捺した円形浮文を貼り付ける。	橙色(5YR 6/6)
器台	107	上部包含層	(16.0)	口縁部のみ残存。内側気味にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面は上下に各1条の沈線をめぐらし、条間に刻み目を施す。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
広口壺	108	上部包含層	(16.0)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。口縁端部は下方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面に2条の凹線文をめぐらした後、斜線文を施す。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
鉢A	109	上部包含層	(13.4) 7.1 6.6	斜めに立ち上がる体部から直立する口縁部。口縁端部は丸く納める。底部はあげ底。	外面は磨滅のため調整不明。内面は横方向のナデケ。口縁部はヨコナデ。	灰白色(2.5YR 8/2)
高壺	110	上部包含層	— — — —	斜めにひらく体部から、立ち上がる口縁部。口縁端部は外方に拡張し、なか窪みの水平端面をつくる。	立体部外面はハケ目。内面は磨滅のため調整不明。口縁端部に4条の凹線文をめぐらす。	黒褐色(10YR 3/1)
底部	111	上部包含層	— — — 3.3	突出する平底。	外面は左上がりのタタキ(2条/cm)、底部側面に指頭圧痕。内面はナデの後ヘラミガキ。	橙色(7.5YR 7/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	112	上部包含層	— — — 5.3	突出するあげ底。	外面ともナデ。	橙色 (7.5YR 7/6)
底部	113	上部包含層	— — — 4.8	平底。	外面は磨滅のため調整不明。内面はナデ。	橙色 (5 YR 6/6) 黒斑
底部	114	上部包含層	— — — 4.7	突出するドーナツ状のあげ底。底部中央に穿孔。	外面は右上がりのタタキの後ナデ。底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。底部の孔は内から外へ焼成前に穿孔。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 黒斑
底部	115	上部包含層	— — — 3.4	突出するあげ底。	外面は左上がりのタタキ。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色 (5 YR 3/2)
底部	116	上部包含層	— — — 3.2	平底。	外面は底部下端に及ぶ右上がりのタタキ。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 黒斑
ミニチュア土器	117	上部包含層	3.6 2.4 — 2.5		外面ともナデ。外面に指頭圧痕。	橙色 (7.5YR 7/6) 黒斑
広口壺	118	下部包含層	(22.0) — — —	口頸部のみ残存。内縫気味にひらいた後、上外方に立ち上がる口縁部。	頸部外面はハケ目の後ナデ。内面は磨滅のため調整不明。口縁部に3条の凹線文をめぐらす。	橙色 (5 YR 7/6)
広口壺	119	下部包含層	(17.2) — — — —	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、水平にひらく口縁部。口縁端部は上下に拡張。	外面とも磨滅のため調整不明。口縁端面に3条の凹線文をめぐらし、ヘラ書きの斜線文を施す。	橙色 (7.5YR 6/6)
細頸壺	120	下部包含層	(20.9) — — — —	口頸部のみ残存。外傾気味に直立する頸部にやや内縫する口縁部。口縁端部は面をもつ。	内面は磨滅のため調整不明。柳状工具を縦に用い押し引きを繰り返すことに角閃石と少よって、松葉様の文様を施す。口唇下に2列の円形浮出部、雲母を含む。	にぶい赤褐色 (5 YR 4/4)
広口壺	121	下部包含層	(14.6) — — — —	口縁部のみ残存。屈曲した後、内縫してひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	口縁部外面はヨコナデ。内面は磨滅のため調整不明。口縁端面に竹管文を押捺する。	橙色 (7.5YR 7/6)
広口壺	122	下部包含層	(15.7) — — — —	口頸部・胴肩部残存。内傾する頸部から、屈曲し、外方にひらく口縁部。口縁端面は上下に僅かに拡張。肩部は張らず、頸部からなだらかに移行。	口縁部外面はナデ、頸部外方にハケ目の後ヘラミガキ。内面は磨滅のため調整面は上下に僅かに拡張。肩部に2条の接合痕部を残す。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	橙色 (7.5YR 7/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
広口壺	123	下部包含層	(23.5) — — —	口頸部のみ残存。筒状の頸部から外反する口縁部。口不明。縁端部は下方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)
鉢	124	下部包含層	(25.8) — — —	体部下半欠損。屈曲した後、大きくひらく口縁部。口縁端部は面をなす。	外面は磨滅のため調整不 明。内面はヘラミガキ。口縁端部はヨコナデ。	橙色 (5YR 6/8) 口縁部から体部に黒斑
広口壺	125	下部包含層	(12.0) (15.1) (17.0) 3.1	球形の体部から、頸部をつくり、そのまま外方へひらく短い口縁部。口縁端部は面をなす。	口縁部は内外面ともにナデ。体部外面は縦方向のハケ目。後へラミガキ。内面はナデ、肩部に指頭圧痕を残す。肩部上位に烈点文をめぐらす。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4) 体部上半に黒斑
高坏	126	下部包含層	(22.1) — —	坏底部欠損。内焼気味にひらく体部から、鈍い棱をつくり、外反する口縁部。口縁端部は丸く納める。	外面は磨滅のため調整不 明。内面は口縁部が横、体部が縦方向のヘラミガキ。	灰黄色 (2.5Y6/2) 黒斑
高坏	127	下部包含層	(14.4) — — —	坏底部欠損。斜めにのびる体部から、屈曲し、外傾する口縁部。口縁端部は尖頭状を呈す。	体部外面はハケ目。内面はナデの後、口縁部をヨコナデ、さらに粗いヘラミガキを施す。口縁部外面に退化凹線文をめぐらす。	にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 黒斑
高坏	128	下部包含層	(26.7) — — —	口縁部のみ残存。鋭い棱をつくって屈曲した後、強く外反する口縁部。口縁端部は丸く納める。	口縁部内面はナデの後、横方向のヘラミガキ。外面は退化凹線文をめぐらす。	橙色 (5YR 6/8)
高坏	129	下部包含層	20.9 — — —	脚部欠損。斜めに外反気味にのびる体部から、屈曲し、外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。	内面は口縁部をヨコナデ、体部をヘラミガキ。体部外面は斜めのヘラミガキ、下半はハケ目の後ヘラミガキ。口縁部に退化凹線文をめぐらす。組み合わせ成形技法か。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 内面
高坏脚	130	下部包含層	— — — —	柱状部のみ残存。ややなかふくらみの円筒状の柱状部から屈曲してひらく裾部。	外面は縦方向のヘラミガキ。柱状部内面は絞り目、裾部内面はナデ。	にぶい橙色 (5YR 7/4)
高坏脚	131	下部包含層	— — 14.0	坏部欠損。「ハ」字形にひらく脚部。脚端部は面をつくる。	外面はハケ目の後ヘラミガキ。内面は磨滅のため調整不明。裾部下端に1条の凹線文をめぐらす。4方に円孔を穿つ。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4)
高坏脚	132	下部包含層	— — (7.8)	坏部欠損。円錐状の脚部。脚端部は丸く納める。	外面はハケ目。内面は上半をナデ、下半をナデケズ。4方に円孔を穿つ。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
高环脚	133	下部包含層	— — — 8.3	坏部欠損。太い柱状部から外反する裾部。脚端部は丸く納める。	外面は磨滅のため調整不鮮明。内面は横方向のヘラケズリ。	橙色 (7.5YR 6/6)
甕	134	下部包含層	(17.0) — — —	口頸部のみ残存。屈曲した後、ほぼ水平にひらく口縁部。口縁端部は上下に僅かに肥厚。	外面は縦方向のハケ目。内面は横方向のヘラケズリの後、口縁部を内外面ともヨコナデ。口縁端面に2条の退化凹線文をめぐらす。	にぶい褐色 (7.5YR 5/4)
甕	135	下部包含層	— — — — —	口頸部のみ残存。屈曲した後、ほぼ水平にひらく口縁部。口縁端部は上方に立ちめぐらす。	内外面ともヨコナデ。口縁端面に2条の退化凹線文をめぐらす。	橙色 (7.5YR 6/6)
甕	136	下部包含層	(14.6) — —	口頸部のみ残存。内側気味にひらく口縁部。口縁端部は上下に肥厚。	口縁端面・内外面ともヨコナデ。	橙色 (7.5YR 6/6)
甕	137	下部包含層	(16.0) — — — —	口頸部・胸肩部残存。屈曲した後、さらに屈曲し、上方へ立ちめぐらる口縁部。	内外面とも磨滅のため調整不鮮明。肩部に櫛描き直線文(5YR 4/6)を施す。	赤褐色 (5YR 4/6)
甕	138	下部包含層	(19.5) — — — —	体部下半欠損。張りの少ない体部から、屈曲し斜上方にひらく短い口縁部は、下方に肥厚し、口縁端部に面をつくる。器壁が厚い。	外面は、浅い水平のタタキ(1.5条/cm)の後、口縁部をヨコナデ。内面は縦方向の粗いハケ目の後、口縁部をヨコナデ。口縁端面はヨコナデ。	橙色 (5YR 6/6)
甕	139	下部包含層	(14.2) — — — —	体部下半欠損。張りのある体部から「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は僅かに肥厚。腹径が口径を凌ぐ。	口頸部は内外面とも磨滅のため調整不鮮明。体部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリ。口縁端面に1条の凹線文をめぐらす。	にぶい橙色 (7.5YR 6/4)
底部	140	下部包含層	— — — 3.0	ドーナツ状のあげ底。	外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面は磨滅のため調整不鮮明。	橙色 (7.5YR 7/6)
底部	141	下部包含層	— — — 7.4	平底。	内外面とも磨滅のため調整不鮮明。	橙色 (7.5YR 6/6) 黒斑
底部	142	下部包含層	— — — 8.7	平底。	外面は縦方向のヘラケズリ。内面は、底部にナデ、体部にハケ目を施す。	橙色 (7.5YR 6/6)
底部	143	下部包含層	— — — (8.6)	平底。	内外面とも磨滅のため調整不鮮明。	褐色 (10YR 7/4) 石英、長石の他、角閃石、雲母を少量含む

器種	図版 No.	出土地区 層位	汎量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	144	下部包含層	— — — 1.8	ドーナツ状のあげ底。	外面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	145	下部包含層	— — — 3.4	突出する平底。	外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(5条/cm)。内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (7.5YR 6/6) 黒斑
底部	146	下部包含層	— — — 5.0	あげ底。	外面は、水平のタタキ(2条/cm)の後、縦方向のハケ目。底部側面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい赤褐色 (5YR 5/4)
底部	147	下部包含層	— — — 4.2	あげ底。	外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)の後、底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (7.5YR 6/6) 黒斑
脚台	148	下部包含層	— — — (8.4)	脚台部のみ残存。大きく斜めに外反する脚台部。脚端部は丸く納める。	外面はナデの後ヘラミガキ。内面はナデ。	にぶい黄橙色 (10YR 7/2)
脚台	149	下部包含層	— — — (8.2)	脚台部のみ残存。「ハ」字形に外反する脚台部。脚端部は直におちる。	外面は縦方向のハケ目。内面は横方向のヘラケズリの後上半をナデ。脚端は内外ともナデ。	橙色 (7.5YR 7/6)
脚台	150	下部包含層	— — — (10.0)	脚台部のみ残存。「ハ」字形にひらく脚台部。脚端部は面をつくる。	内面とも磨滅のため調整不明。	にぶい黄橙色 (10YR 7/3)
底部	151	下部包含層	— — — 3.9	平底。縦位の半環状把手もつが欠損。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (5YR 6/6)
底部	152	下部包含層	— — — 7.2	平底。縦位の半環状把手もつが欠損。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は磨滅のため調整不明。	橙色 (5YR 6/6)

II 地区周辺部

器台	153	上部包含層	(22.0)	口縁部のみ残存。内側氣味にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	外面はハケ目の後ヘラミガキ。内面はヨコナデの後ヘラミガキ。口縁端面は上下に各1条の凹線文をめぐらし、条間に描書きの波状文と円形浮文を加飾。	橙色 (7.5YR 6/6)
甕	154	上部包含層	(17.0)	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は上下に僅かに肥厚。	内面とも磨滅のため調整不明。	橙色 (2.5YR 6/8)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	155	上部包含層	— — — 4.0	平底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色(5YR 7/6)
底部	156	上部包含層	— — — 3.2	あげ底。	外面はナデの後ヘラミガキ。内面はナデ。	にぶい黄橙色(5YR 7/4) 黒斑
底部	157	上部包含層	— — — 3.4	あげ底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色(5YR 7/4)
底部	158	上部包含層	— — — 5.0	突出する平底。	外面は、下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)の後、底部側面をナデ。内面黒斑は縦方向のハケ目。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	159	上部包含層	— — — 4.5	平底。	内外面ともナデ。	橙色(7.5YR 7/6)
底部	160	上部包含層	— — — (6.6)	あげ底。外方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色(2.5YR 6/6)
底部	161	上部包含層	— — — 4.6	あげ底。	外面は右上がりのタタキ(2.5/条cm)の後、縦方向のハケ目。内面はナデ。	橙色(7.5YR 7/6) 黒斑
器合脚	162	上部包含層	— — — (10.3)	口縁部欠損。「ハ」字形にひらく脚部。脚端部は面をもつ。器壁が厚い。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色(2.5YR 6/8)
高坏脚	163	上部包含層	— — — (17.7)	裾部のみ残存。大きくひらく裾部。脚端部は面をもつ。	外面は磨滅のため調整不明。内面はハケ目の後ナデ。端部はヨコナデ。裾部下位に5条の凹線文をめぐらす。	にぶい黄橙色(10YR 6/4)
広口壺	164	下部包含層	(12.2)	口縁部のみ残存。筒状の頸部から、鈍い稜をつくって屈曲し、斜め外方にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	頸部外面はハケ目の後ヘラミガキ。内面は、頸部が横方向のハケ目の後ナデ、口縁部はヘラミガキ。口縁端面に1条の凹線文をめぐらす。	明赤褐色(2.5YR 5/8)
広口壺	165	下部包含層	(21.5)	口縁部のみ残存。外反してひらく口縁部。口縁端部は上下に拡張。	外面はナデ、内面は磨滅のため調整不明。口縁端面に5条の凹線文をめぐらし、円形浮文を貼り付ける。口縁端部に刻み目を施す。	橙色(7.5YR 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
広口壺	166	下部包含層	(11.9)	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、水平に外反する口縁部。口縁端部は斜め下方に拡張。	口縁端面・内外面ともヨコナデ。頸部は磨滅のため調(5 YR 6/6)	橙色
広口壺	167	下部包含層	(16.0)	口頸部のみ残存。外彎する口頸部。口縁端部は面をつくる。	外面は、縦方向のハケ目の後、口縁部と頸部下位をヨコナデ。内面はハケ目の後ナデ、さらに口縁部をヨコナデ。	明赤褐色(5 YR 5/6)
広口壺	168	下部包含層	—	頸部・胴肩部のみ残存。肩の張る体部から直立する頸部。	内外面とも磨滅のため調整不明。肩部内面に指頭圧痕を残す。頸部と体部の境目に貼り付け凸帯文をめぐらす。	暗褐色(10 YR 3/3)
高坏	169	下部包含層	—	内彎する体部から、稜をつくり、外反する口縁部。短い中空の柱状部から、屈曲してひらく裾部。脚端部は面をもつ。	坏部外面は縦方向のヘラミガキ、口縁部は磨滅のため調整不明。坏部内面は口縁部が横、体部が縦方向のヘラミガキ。脚部外面は縦方向のハケ目の後ヘラミガキ。外面は裾部がナデ、柱状部には絞り目。裾部中位に3個の円孔、下位に3条の沈線文を施す。粘土充填。	橙色(2.5 YR 6/6) 裾部に黒斑
高坏脚	170	下部包含層	—	裾部のみ残存。斜めにひらく裾部。脚端部は上方に拡張。	内外面とも磨滅のため調整不明。裾部下位に1条の凹線文をめぐらす。	橙色(7.5 YR 6/6)
高坏	171	下部包含層	(22.8)	坏底部欠損。外反気味にひらく体部から、ほぼ直角に立ち上がる口縁部。口縁端部は外方に拡張。	外面は磨滅のため調整不明。口縁部内面はヨコナデ。体部内面はハケ目の後ナデ、さらに縦方向のヘラミガキ。口縁部外面に4条の退化凹線文をめぐらす。	明赤褐色(5 YR 5/6)
高坏脚	172	下部包含層	—	柱状部のみ残存。ややながくくらみの柱状部。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色(5 YR 7/6)
高坏脚	173	下部包含層	(10.3)	坏部欠損。外反する円錐状の脚部。脚端部は面をつくる。	内外面とも磨滅のため調整不明。	にぶい橙色(7.5 YR 7/4)
甕	174	下部包含層	(13.8)	口頸部のみ残存。「く」字形に外反する口頸部。口縁部は肥厚し、口縁端部を上方につまみあげる。	外面はタタキの後縦方向のハケ目、さらに口縁部をヨコナデ。内面は横方向のハケ目の後ナデ、口縁部はヨコナデ。口縁端面に1条の凹線文をめぐらす。	にぶい赤褐色(5 YR 4/3) 外面スス付着

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	175	下部包含層	(14.1)	口頸部・胴肩部残存。張り ——のない体部から、屈曲し、 ——ほぼ水平にひらく口縁部。 ——口縁端部は上方につまみあ げる。	外面は右上がりのタタキ (3.5条/cm)の後、口縁部の(5YR 7/6) みヨコナデ。内面はヘラケ ズリ、口縁部はヨコナデ。 口縁端面に1条の凹線文。	橙色
甕	176	下部包含層	(15.0)	口頸部のみ残存。「く」字 形に外反する口頸部。口縁 部は肥厚し、口縁端部を上 方につまみあげる。	内外面ともヨコナデ。口縁 端面に2条の退化凹線文を (10YR 6/4)	にぶい黄橙色
甕	177	下部包含層	(14.6)	口頸部のみ残存。「く」字 形に外反する口頸部。口縁 端部は上下に僅かに拡張。 ——	口縁部外面はヨコナデ。内 面及び体部外面は磨滅のた め調整不明。口縁端面に2 条の退化凹線文をめぐらす。	橙色 (7.5YR 6/6)
甕	178	下部包含層	(17.4)	体部下半欠損。張りのある ——体部から、「く」字形に外 反する口頸部。口縁端部は 上下に肥厚。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。体部外面は縦方向のハ ケ目、内面は横方向のヘラ ケズリ。口縁端面に2条の 凹線文をめぐらす。	にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 外面スス付着
甕	179	下部包含層	(14.5)	口頸部のみ残存。「く」字 形に外反する口頸部。口縁 端部は面をつくる。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	にぶい褐色 (7.5YR 7/4)
甕	180	下部包含層	(18.6)	口頸部のみ残存。「く」字 形に外反する口頸部。口縁 端部は面をもつ。	口縁部は内外面とも磨滅の ため調整不明。体部外面は ハケ目、内面は横方向のヘ ラケズリ。	褐色 (7.5YR 4/6)
甕	181	下部包含層	(23.7)	口頸部のみ残存。「く」字 形に外反する口頸部。口縁 端部は面をもつ。	体部外面はタタキの後ハケ 目、口縁部外面はハケ目の(5YR 6/6) 後ナデ。内面は、口縁部を ハケ目、体部をナデ。	橙色
甕	182	下部包含層	(18.3)	口頸部・胴肩部残存。「く」 字形に外反する口頸部。口 縁部は肥厚し、端部は面を なす。	口縁部は内外面ともヨコナ デ。体部外面は磨滅のため (2.5YR 6/6) 調整不明、内面は横方向の ヘラケズリ。	橙色
底部	183	下部包含層	—— —— 5.7	あげ底。	内外面とも磨滅のため調整 不明。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
底部	184	下部包含層	—— —— 6.8	平底。	外面は縦方向のヘラミガ キ。内面はナデ。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4) 黒斑
底部	185	下部包含層	—— —— 8.4	平底。	外面は磨滅のため調整不 明。内面はヘラケズリ。	にぶい褐色 (7.5YR 7/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	186	下部包含層	— — — 5.7	平底。	外面はタタキの後ナデ。内面は縦方向の強いナデ。	橙色(7.5YR 6/8)
鉢	187	下部包含層	(11.2) — — —	底部欠損。塊状の体部から外反する口縁部。口縁端部は丸く納める。	口縁部外面はナデ。体部外側面はタタキの後ナデ。内面は磨滅のため調整不明。口縁部と体部の境に1条の沈線をめぐらす。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
底部	188	下部包含層	— — — 3.4	突出する小さな平底。	外面はナデ。内面はハケ目。	橙色(5YR 6/6)
底部	189	下部包含層	— — — 3.8	平底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色(7.5YR 7/6)
底部	190	下部包含層	— — — 5.0	突出するあげ底。	内外面とも縦方向のヘラミガキ。	橙色(5YR 7/6)
底部	191	下部包含層	— — — 2.7	突出する小さな平底。	底部外面は下端に及ぶ右上にぶい橙色がりのタタキ(2.5条/cm)。内面はハケ目。	にぶい橙色(7.5YR 7/4)
底部	192	下部包含層	— — — 3.5	あげ底。	外面は磨滅のため調整不明。底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	橙色(7.5YR 7/6)
底部	193	下部包含層	— — — 3.6	あげ底。	外面は磨滅のため調整不明。底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	にぶい橙色(7.5YR 7/4)
底部	194	下部包含層	— — — (3.1)	あげ底。	外面は右上がりのタタキ(2.5条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	橙色(5YR 6/8)
把手	195	下部包含層	— — — —	横位の半環状把手。	外面接合部は強いナデの後ハケ目。内面はナデ。	橙色(7.5YR 7/6)
II 地区						
広口壺	196	上部包含層	(18.3) — — — —	口頸部のみ残存。稜をつくって屈曲した後、外方にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	外面ともヨコナデ。口縁端面に4条の凹線文をめぐらし、その上に、竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。	橙色(7.5YR 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
広口壺	197	上部包含層	(16.5)	口頸部のみ残存。屈曲し、斜め外方にひらく口頸部。口縁端部は上下に僅かに肥厚。	内外面ともヨコナデ。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
高坏	198	下部包含層	(18.0)	坏底部欠損。屈曲した後、外傾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は外方に肥厚。	外面は磨滅のため調整不明。内面は、口縁部が横方向、体部が縦方向のヘラミガキ。	橙色(5YR 6/8)
底部	199	下部包含層	— — 7.6	平底。	外面は磨滅のため調整不明。内面は縦方向のヘラケ	明黄褐色(10YR 6/6)ズリ。
短頸壺	200	下部包含層	(12.3)	口頸部のみ残存。外反して立ち上がる短い口頸部。口縁部は尖頭状を呈する。	内外面とも磨滅のため調整不明。	浅黄橙色(10YR 8/3)
広口壺	201	下部包含層	(15.6)	口頸部のみ残存。外側する口頸部。口縁端部は上方に僅かにつまみあげる。	外面はヨコナデ。内面は横方向のハケ目の後ナデ、さらに口縁部のみヨコナデ。	橙色(5YR 6/6)
広口壺	202	下部包含層	(15.6)	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、短く外反する口縁部。口縁端部は僅かに肥厚し、面をなす。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色(7.5YR 6/8)
底部	203	下部包含層	— — 4.0	あげ底。	外面はナデ。底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。	橙色(7.5YR 7/6)
底部	204	上部包含層	— — 4.6	あげ底。	外面は右上がりのタタキ(3条/cm)。底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。	にぶい黄橙色(10YR 7/4)
底部	205	下部包含層	— — 5.4	あげ底。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色(5YR 7/6)
底部	206	上部包含層	— — 10.4	平底。外方に突出する。	外面は磨滅のため調整不明。内面はヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR 7/4)
III 地区						
短頸壺	207	下部包含層	(16.5)	口頸部のみ残存。外反する口頸部。口縁端部は上下に肥厚。	内外面とも磨滅のため調整不明。	にぶい橙色(5YR 7/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
			—	僅かに肥厚。		
			—			
壺	208	下部包含層	(14.9)	口頸部・胴肩部残存。張り のない体部から緩やかに外 反する短い口頸部。口縁端 部は面をもつ。	外面とも磨滅のため調整 不明。肩部上位に1条の接 合痕を残す。	にぶい橙色 (7.5Y R7/4)
短頸壺	209	下部包含層	(16.1)	口頸部のみ残存。外反気味 に立ち上がる口頸部。口縁 端部は丸く納める。	外面とも磨滅のため調整 不明。	褐色 (7.5Y R4/6) 角閃石、長石、 雲母を含む。
壺	210	下部包含層	(17.8)	口頸部・胴肩部残存。張り のない体部から、緩やかに 外反する口頸部。口縁端部 は面をなす。	体部外面は縦方向のハケ 目。口縁部内外面・体部内 面は磨滅のため調整不明。	にぶい褐色 (7.5Y R6/3)
壺	211	上部包含層	(18.5)	口頸部・胴肩部残存。張り のある体部から「く」字形 に外反する口頸部。腹径が 口径を凌ぐ。	外面は、縦方向のハケ目の 後、口縁部のみヨコナデ。 内面は、体部が横方向のヘ ラケズリ、口縁部は磨滅の ため調整不明。肩部上位に 1条の接合痕を残す。口縁 端面に2条の退化凹線文を めぐらす。	にぶい橙色 (7.5Y R7/4)
壺	212	上部包含層	(17.8)	口頸部・胴肩部残存。「く」 字形に外反する口頸部。口 縁部は下方に肥厚。	外面とも磨滅のため調整 不明。	橙色 (2.5Y R6/6)
壺	213	下部包含層	(23.7)	口頸部のみ残存。屈曲した 後外方にひらく口縁部は、 肥厚し、端部を下方に拡 張。	外面とも磨滅のため調整 不明。口縁端面に2条の凹 線文をめぐらす。	にぶい橙色 (7.5Y R6/4)
鉢	214	上部包含層	—	底部欠損。斜め上方にのび る体部から直立する口縁 部。端部は面をつくる。縦 位の半環状把手をもつ。	外面はナデの後ヘラミガ キ。内面はナデ。口縁部に 3条の凹線文をめぐらす。 把手接合部はナデ。	にぶい橙色 (7.5Y R7/4)
高坏脚	215	上部包含層	— 8.3	坏脚欠損。なだらかに外反 する円錐状の脚部。脚端部 は上下に肥厚。	外面は縦方向のヘラミガ キ。内面は下半を横方向の ヘラケズリ、上半には絞り 目が残る。	橙色 (5 YR 6/8)
底部	216	上部包含層	— 3.6	平底。	外面は右上がりのタタキ (2条/cm) の後、縦方向 のハケ目。内面はナデ、底 部中央に絞り目。	橙色 (2.5Y R6/6)
底部	217	上部包含層	— 8.5	平底。	外面とも縦方向のヘラケ ズリ。底面にタタキを施す。	にぶい橙色 (7.5Y R6/4)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
IV 地区						
広口壺	218	IV地区周辺部 包含層	(17.3) — — —	口頸部のみ残存。大きく外反する口頸部。口縁端部は上方にややつまみあげる。	内外面とも磨滅のため調整 内外面ともヨコナデ。頸部外面は縦方向のラミガキ、内面は横方向のハケ目。口縁端面に3条の凹線文をめぐらす。	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)
広口壺	219	IV地区周辺部 包含層	(19.9) — — —	口頸部のみ残存。短く立ち上がった後、大きく外反する口頸部。口縁端部は下方に拡張。	口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面は縦方向のラミガキ、内面は横方向のハケ目。口縁端面に3条の凹線文をめぐらす。	橙色 (2.5YR 6/8)
甕	220	IV地区周辺部	(16.2) — — — —	体部下半欠損。「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は面をつくる。口径と腹径がほぼ等しい。	口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケ目。体部外面は、右上がりのタタキ(2.5条/cm)の後、肩部のみハケ目。内面はナデ。	にぶい橙色 (5YR 6/4)
底部	221	IV地区周辺部	— — — 9.5	平底。	内外面とも磨滅のため調整 内外面とも磨滅のため調整 内外面とも磨滅のため調整 内外面とも磨滅のため調整	橙色 (5YR 6/8)
器台	222	IV地区周辺部 包含層	(24.5) — — — —	口縁部のみ残存。ほぼ水平にひらく口縁部。口縁端部は上下に拡張。	外面はヨコナデ、内面はヨコナデの後へラミガキ。口縁端面は上位に1条の凹線文をめぐらした後、鋸歯文、さらに竹管文を押捺した2個1組の円形浮文。	橙色 (5YR 6/8)
鉢	223	IV地区周辺部 包含層	(21.8) — — —	体部下半欠損。内側する体部から稜をつくって屈曲し、外方にひらく口縁部。口縁端部は僅かに肥厚し、面をつくる。	内外面とも磨滅のため調整 内外面とも磨滅のため調整 内外面とも磨滅のため調整	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)
蓋	224	IV地区周辺部	— — — 3.0	天井部のみ残存。	内外面ともナデ。	明黄褐色 (10YR 7/6)
底部	225	IV地区周辺部	— — — 4.6	平底。	外面は縦方向のハケ目。底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目の後、底部のみナデ。	橙色 (7.5YR 6/6)
底部	226	IV地区周辺部	— — — 3.4	突出する平底。	内外面ともナデ。	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)
脚部	227	IV地区周辺部	— — —	柱状部のみ残存。	外面は縦方向のハケ目の後へラミガキ。内面はナデ。4方に円孔を穿つ。	橙色 (7.5YR 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	228	IV 地区周辺部	— — — 4.2	あげ底。	外面はタタキ、底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。底面はタタキの後ナデ。	橙色(2.5Y R 6/6)
底部	229	IV 地区	— — — 4.2	ドーナツ状のあげ底。	外面は右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は磨滅(10Y R 7/4)のため調整不明。	にぶい黄褐色

V 地 区

底部	230	上部包含層	— — — 2.4	ドーナツ状のあげ底。	外面はナデ。内面は磨滅のため調整不明。	橙色(5Y R 6/8)
底部	231	上部包含層	— — — 3.1	あげ底。	外面は右上がりのタタキの後ナデ。底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	橙色(5Y R 6/6)
底部	232	上部包含層	— — — 3.8	あげ底、底部中央に穿孔。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はナデ。底部の孔は、内から外へ焼成前に穿孔。	にぶい黄橙色(10Y R 7/4)
底部	233	上部包含層	— — — 4.7	平底。	外面はタタキ(2条/cm)の後ナデ。内面はナデ。底面にタタキを施す。	にぶい褐色(7.5Y R 5/4)
底部	234	上部包含層	— — — 3.4	突出するあげ底。	外面は右上がりのタタキ(2条/cm)、底部側面に指頭圧痕。内面はハケ目。	橙色(5Y R 6/6)
底部	235	上部包含層	— — — 3.1	平底。	底部外面は、下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はハケ目。底面はタタキか。	橙色(7.5Y R 7/6)
底部	236	上部包含層	— — — 4.3	平底。底部ほぼ中央に穿孔。	外面は、下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)。内部は磨滅のため調整不明。底部の孔は内から外へ焼成前に穿孔。	橙色(7.5Y R 6/6)
広口壺	237	下部包含層	(15.8)	口頸部のみ残存。筒状の颈部から、稜をつくって屈曲し、斜め外方にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	外面は、口縁部がヨコナデ、頸部がナデの後縦方向のヘラミガキ。内面は口縁部・頸部ともナデの後ヘラミガキ。口縁端面は上下に各1条の凹線文をめぐらし、条間に櫛書きの波状文を施す。	橙色(9.5Y R 6/8)

器種	図版 No.	出土地区 層	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
広口壺	238	下部包含層	(18.6)	口頸部のみ残存。筒状の頸部から外彎する口縁部。口縁端部は下方に拡張。	口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデの後横方向のヘラミガキ。頸部外面はナデの後縱方向のヘラミガキ、内面はナデ。口縁端面に3条の凹線文をめぐらす。	橙色 (5 YR 6/6)
広口壺	239	下部包含層	(18.8)	口縁部のみ残存。斜め外方にひらく口縁部。口縁端部は下方に拡張。	内外面ともヨコナデの後、縦方向のヘラミガキ。口縁端面と内面に描書きの波状文を施す。	橙色 (7.5 YR 6/6)
広口壺	240	下部包含層	(24.0)	口頸部のみ残存。斜め上方にのびた後外反する口頸部。口縁端部は下方に拡張。	外面は縦方向のハケ目の後、口縁部をヨコナデ。内面は横方向のハケ目の後、口縁部をヨコナデ。口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。	橙色 (5 YR 6/6)
広口壺	241	下部包含層	—	口頸部のみ残存。筒状の頸部から、稜をつくって屈曲し、斜め外方にひらく口縁部。	外面はヘラミガキ、内面はナデ。頸部と体部の境に刻み目をもつ貼り付け凸帯文をめぐらす。	にぶい橙色 (5 YR 6/4)
二重口 縁壺	242	下部包含層	(22.3)	口頸部のみ残存。外反してひらいた後、内彎気味に立ち上がる口縁部。屈曲部で下方に拡張。	内外面ともナデ。口縁部は、上位に3条、下位に2条の凹線文をめぐらし、条間に鋸歯文と円形浮文を加飾。	橙色 (7.5 YR 6/8)
二重口 縁壺	243	下部包含層	(16.0)	口縁部のみ残存。内彎気味にひらく口縁部は、下方に拡張。	外面はヨコナデ。内面はヨコナデの後ヘラミガキ。口縁部に5条の退化凹線と刺突文を施す。	にぶい橙色 (7.5 YR 6/4)
器台	244	下部包含層	(31.3)	口縁部のみ残存。外反する口縁部は、上下に粘土帯を追加し、大きく拡張。	外面は磨滅のため調整不明。内面は横方向のヘラミガキ。口縁部には4条の凹線文をめぐらし、竹管文を押捺する。	明赤褐色 (2.5 YR 5/8)
短頸壺	245	下部包含層	(14.0)	口頸部のみ残存。外反気味に立ち上がる口頸部。口縁端部は丸く納める。	外面はハケ目の後ナデ。内面は磨滅のため調整不明。口唇下に4条の凹線文をめぐらす。	橙色 (5 YR 6/6)
器台	246	下部包含層	(32.0)	口縁部のみ残存。直線的に外方にひらく口縁部。粘土帯を垂下させ、口縁部を拡張。	外面はヨコナデ。内面はヘラミガキ。口縁部上位に8条の凹線文、拡張部に鋸歯文と竹管文を加飾。内面に段をつくる。	橙色 (5 YR 6/8)
甕	247	下部包含層	(15.0)	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は丸く納める。	内外面とも磨滅のため調整不明。	橙色 (5 YR 6/8)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
甕	248	下部包含層	(27.5)	口頸部・胴肩部残存。屈曲した後斜め上方にのびる口縁部。口縁端部は下方に拡張。	体部外面はタタキの後ヘラミガキ、口縁部はヨコナデ。内面はヨコナデの後ヘラミガキ。口縁端面に3条の凹線文。	橙色(7.5Y R 6/6)
甕	249	下部包含層	(14.4)	口頸部のみ残存。「く」字形に外反する口頸部。口縁端部は面をなす。	外面はナデ、内面は横方向のハケ目。	橙色(7.5Y R 6/6)
甕	250	下部包含層	(26.7)	口頸部・胴肩部残存。「く」字形に外反する口頸部、口縁端部は面をなす。	内外面ともナデ。	明褐色(7.5Y R 5/6)
鉢	251	下部包含層	(16.2)	体部下半欠損。内面に鈍い稜をつくり内彎気味にひらく口縁部。口縁端部は丸く納める。	内外面とも磨滅のため調整不明。	明黄褐色(10Y R 7/6)
甕	252	下部包含層	(31.9)	口縁部・胴肩部残存。「く」字形に大きく外反する口頸部。口縁端部は上方に僅かにつまみあげる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	にぶい橙色(7.5Y R 7/4)
器台	253	下部包含層	12.6	口縁部欠損。短い筒状の体部から、内彎してひらく裾部。脚端部は丸く納める。	内外面とも粗いナデ。裾部内面に1条の接合痕。	赤褐色(5Y R 4/6)
器台脚	254	下部包含層	—	柱状部のみ残存。	外面は磨滅のため調整不明。内面はナデ。脚部上位に扁平な貼り付け凸帯文をめぐらし、2列の刺突文を加飾。	橙色(7.5Y R 6/6)
高坏脚	255	下部包含層	8.2	坏部欠損。短い柱状部から屈曲し、内彎気味にひらく裾部。脚端部は丸く納める。	外面はナデの後、裾部を板ナデ。内面は磨滅のため調査不明。	橙色(5Y R 6/6)
底部	256	下部包含層	3.5	平底。	外面はタタキの後ヘラミガキ。内面はナデ。	橙色(5Y R 6/6) 黒斑
底部	257	下部包含層	3.4	ドーナツ状のあげ底。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)。内面は磨滅のため調整不明。	橙色(5Y R 6/6)
底部	258	下部包含層	3.9	平底。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はナデの後ハケ目。	橙色(7.5Y R 6/6)

器種	図版 No.	出土地区 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
底部	259	下部包含層	— — — 4.0	突出する平底。底部ほぼ中央に穿孔。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2本/cm)。内面はハケ目。底部の孔は焼成前の穿孔。	橙色(7.5YR 6/6)
底部	260	下部包含層	— — — 4.4	平底。	外面はヘラミガキ。内面はハケ目。	橙色(5YR 6/6)
底部	261	下部包含層	— — — 4.0	あげ底。	外面は右上がりのタタキの後ハケ目、底部側面に指頭圧痕。内面はナデ。	明赤褐色(5 YR 5/6)
底部	262	下部包含層	— — — 4.5	突出するあげ底。	外面はタタキの後ナデ、底部側面に指頭圧痕。内面は磨滅のため調整不明。	橙色(5 YR 6/6)
底部	263	下部包含層	— — — 4.0	平底。底部に13個の穿孔。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2条/cm)の後ナデ。内面は磨滅のため調整不明。底部の孔は焼成前の穿孔。	橙色(7.5YR 6/6)
底部	264	下部包含層	— — — 5.7	平底。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(3条/cm)の後、縦方向のヘラミガキ。内面はナデ。	橙色(7.5YR 6/6)
底部	265	下部包含層	— — — 5.9	平底。	内外面ともナデ。底部側面に指頭圧痕。やや粗雑。	にぶい橙色(7.5YR 6/4)
底部	266	下部包含層	— — — 2.5	平底。底部に穿孔。	底部外面は下端に及ぶ右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面はハケ目。底部の孔は焼成前の穿孔。	橙色(5 YR 6/6)

※ 図版No.は弥生土器実測図と写真図版に付した番号に一致する。

※ 法量の数字は、上段からそれぞれ口径、器高、腹径、底径で、復原値は()で、計測不能は—で示す。

※ 色調名は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版、標準土色帖」によった。

2. 石器・鉄器（第71～73図）

1・2は石鎚であり、共にサスカイトを材料としている。1は1号住居址北周壁付近埋土中より出土している。基部を欠損しているが、凸基式に分類される。肉厚で断面は菱形を呈する。2は3号住居址床面付近から出土したもので凸基有茎式に属する。母岩からの剝離面が残っており、扁平な剝片の周縁に調整を加えたものである。茎の先端を欠損している。3はⅤ地区包含層出土サスカイト製剝片石器である。二次調整は一端にわずかに施されている。未製品の可能性もある。

住居址周壁溝内や包含層から、片手に入るやや細長い円礫が出土している（4～7）。これらには明確な使用痕が認められることや、法量がほぼ一致していることから投弾とした。9・10も同様の円礫であるが、やや大きくなり、一端が欠けている為、別用途に使われたのかも知れない。

8はⅤ地区5号溝より出土した磨石である。扁平な円礫の両短辺が使用されており、特に一端の使用が著しい。また一方の側面には敲打痕が見られ、敲石としても使われている。

11はⅠ地区包含層出土の大型蛤刃石斧で、刃部を欠損している。基部端面には敲打痕を残しているが、製作当時のものか、折損後、敲石として使用したものか確認できない。

13～16は、7号住居址埋土及び床面付近から出土したもので、Ⅴ地区周辺では見られず、明らかに持ち込まれた礫である。特に16は板状を呈すもので表・裏面が平滑に磨かれており、台石として使用されている。他のものについては、明確な使用痕は認められないが、同様の用途を持っていたものであろうか。

砥石（17・18）は、7号住居址及びⅤ地区東側のG-35地山直上より出土している。共に砂岩製で、一面のみを使用している。条痕・擦痕は見られない。

3号住居址からは鉄製品が、また7号住居址からも鉄片が出土している。

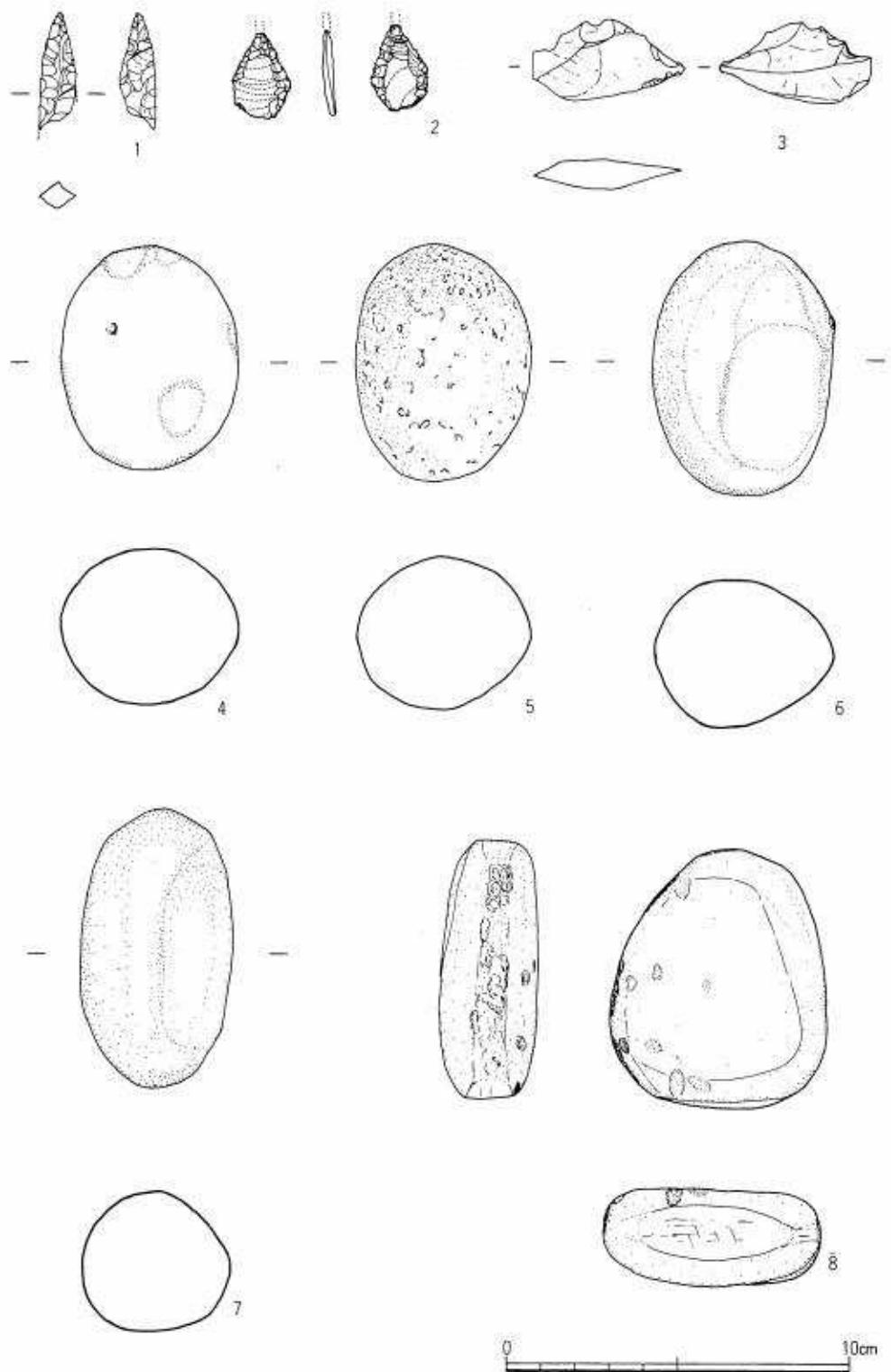
参考文献

・小林行雄・佐原真『紫雲出』 託問町文化財保護委員会 昭和39年

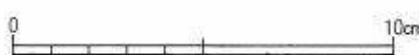
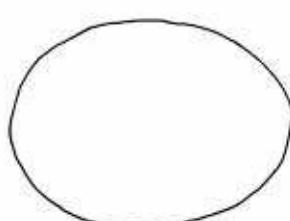
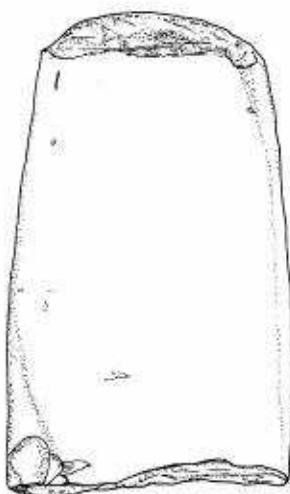
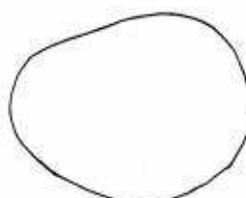
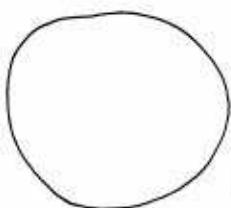
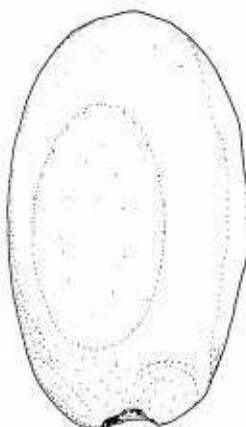
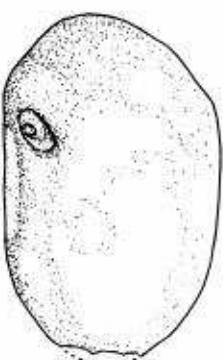
・井守徳男・佐藤良二他『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』 兵庫県教育委員会
昭和58年

掲 図 番 号	出 土 地 点	長径(cm)	短径(cm)	厚(cm)	重(g)
第71図—4 —5 —6 —7	I地区 1号住居址	6.6	5.2	4.6	230
	II地区 3号住居址	6.8	5.1	4.4	220
	V地区 7号住居址	7.4	5.2	4.2	235
	I地区 下部包含層	8.1	4.4	3.9	215
第72図—9 —10	II地区 大形土壙	(8.7)	5.8	5.4	400
	V地区 下部包含層	(10.9)	6.4	4.9	500

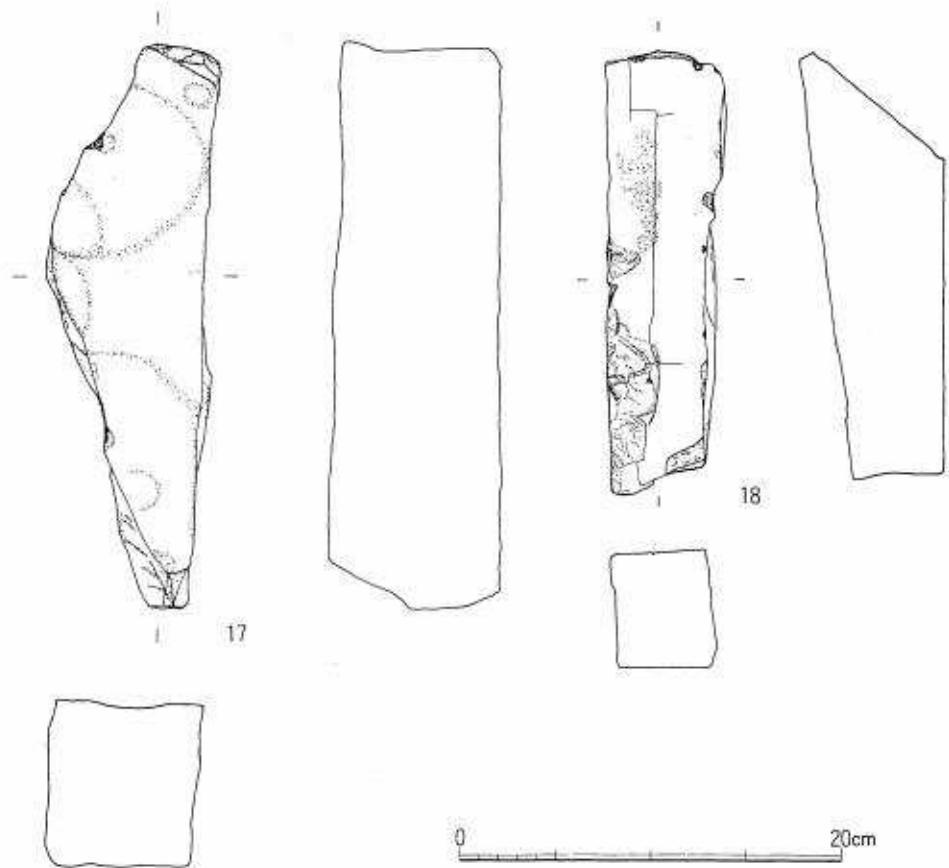
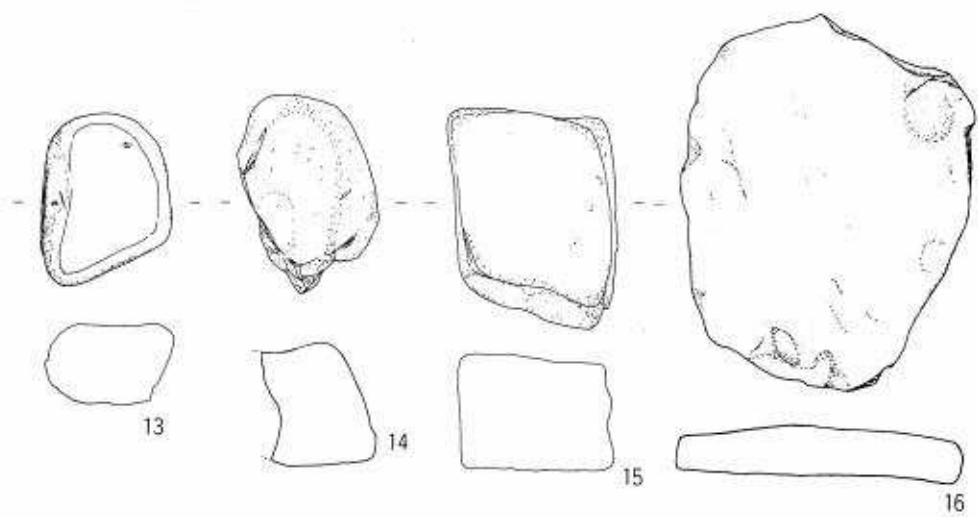
第8表 投弾法量一覧表



第 71 図 石 器—1



第 72 図 石 器—2



第 73 図 石 器—3

第2節 中・近世の遺物

1. 中世土器

大森谷遺跡から出土した中世の土器類は、ほとんどが表土および包含層から出土したもので、遺構からのものは少ない。またその多くが小片で、図示、報告できたものは、わずかに20点余りにすぎない。種別では、土師器、須恵器、国産陶器、舶載磁器がある。時期的には、中世のほぼ全時期にわたっているが、12世紀後半から13世紀代に属するものと、14世紀後半から15世紀代にかけてのものに大別できる。以下、遺物について若干の説明を加えていく。

土師器（第74図1～5、第75図12～15）

土師器には、皿（1～3）、壺（4）、羽釜（5）、堀（12～15）がある。

1は、外反気味に立ち上る短い体部と丸くおさめた口縁端部をもつ皿で、底部にはヘラ切り離し痕が明瞭である。2、3は、体部の外傾度の強い製品である。外彎しつつ立ち上る体部は中位で段をもって屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。外底部に板目状圧痕、内底部にナデの痕跡がみられる。

4は、体部と底部の境に明瞭な稜をもち、体部は斜め上方に直線的にのびる。底部はヘラ切り離しによる。

5は、羽釜のミニチュア製品で、体部が強い丸味をもつ。口縁部は内傾し、端部直下に幅約1cmの鍔をめぐらしている。器高は6cm前後になろう。

12～15は、口縁部が内傾し、口径21～27cmを測る。口縁端部はやや肥厚して内側に面をなす。口縁部外面直下に鍔をめぐらし、体部外面には右上りの平行叩き目を施している。鍔より下位にはススの付着が著しい。鍔には幅広のもの（12、14）と、幅の狭いもの（13、15）がある。前者は、むしろ土釜と呼んだ方が妥当といべきものである。また製作技法に、体部を成形した後、口縁部を繋ぎ足すもの（12）と、鍔を繋ぎ足すもの（15）との違いがみられる。

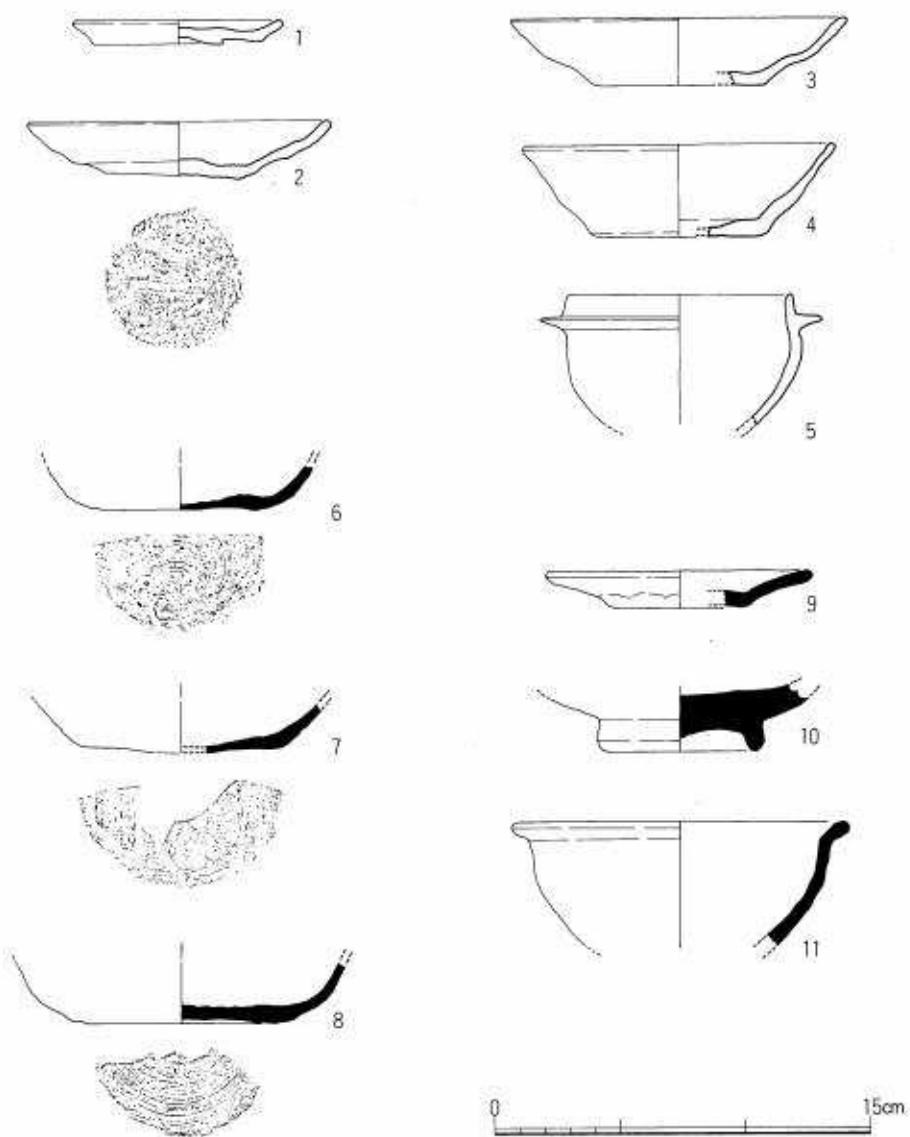
これら土師器の実年代については、淡路地方における土師器の編年が確立していない現状の下ではほとんど言及できないが、他の須恵器、陶磁器の年代から、おおむね14世紀後半から15世紀代を中心とした時期を与えておきたい。

須恵器（第74図6～8、第75図16～19）

須恵器には、塊（6～8）、鉢（17～19）、甕（16）がある。

6～8は、口縁部を欠いているが、比較的径の大きい底部から丸味をもつ体部が立ち上る。精選された胎土を用い、器壁は薄く仕上げられ、灰白色を呈し、やや軟質である。12世紀後半から13世紀初頭にかけて、備前地方で生産されたものであろう。

鉢（17～19）のうち、17、18は播磨魚住窯の製品である。18は、口縁端部を斜め方向に切り離したやや小形の鉢で、12世紀後半から13世紀前半にかけてのものである。17は、口縁部を上下にやや拡張し丸味をもたせており、13世紀後半から14世紀前半の時期が考えられる。17、18に対し、19は口縁部の形態、胎土の特徴など、異質な感じを受けるものである。口縁部が肥厚し、端部外側が外傾する面を形成する。胎土には砂粒を多量に含み、黒灰色を呈する。現在のところ、産地、時期ともに不明と言わざるを得ないが、あるいは在地窯の製品かもしれない。



第 74 図 中世土器—1

甕(16)は、頸部がほぼ垂直に立ち上り、口縁端部を上下に若干つまみ出す。頸部から体部にかけて、右上りの平行叩き目を残しており、焼成はやや甘い。鉢(17・18)と同じく、12世紀後半から13世紀前半の魚住窯産のものであろう。

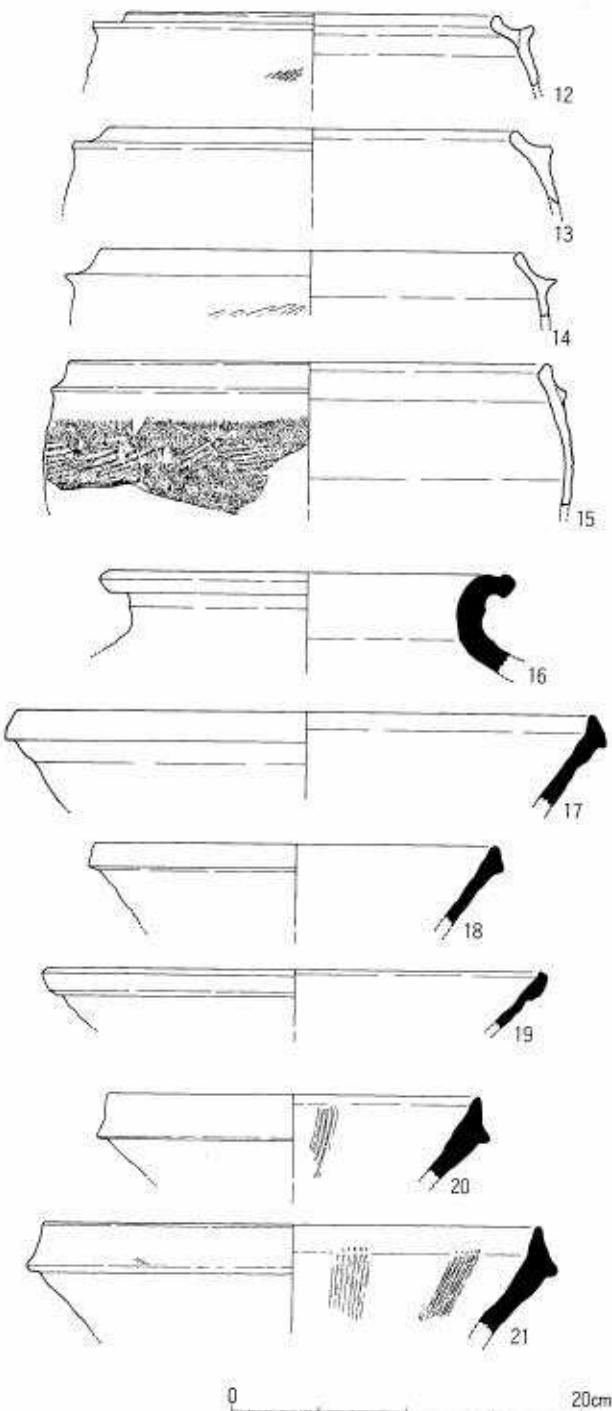
国産陶器(第75図20、21)

国産陶器は、常滑ないしは丹波産と思われる壺1点を除いて、すべて備前産のものである。ここでは描鉢2点を図示した。口縁部を上下に拡張し、21では内面に8条単位のおろし目を施している。間壁編年のⅣ期に相当するもので、14世紀後半から15世紀の時期に比定できよう。

このほか、Ⅳ期の甕と、口縁部を玉縁状に成形したⅢ期と考えられる14世紀前半の壺の破片がそれぞれ1点ずつ出土している。

船載磁器(第74図9~11)

船載磁器は青磁のみで、皿が1点あるほかはすべて碗の破片である。また時期的には、12世紀後半から13世紀代に比定できる劃花文碗を除いてすべて14世紀中葉から15世紀前半にかけての資料であ



第75図 中世土器—2

る。小破片が多く、わずかに3点を図示し得た。9は、平坦な底部と外反気味に立ち上る体部をもつ皿で、口縁部を輪花状に成形しており、体部内面には劃花文をもつ。10は、厚手の碗の底部で、高台はやや外方に開く。内外面とも淡黄緑色釉を全面に施釉するが、高台裏の釉を輪状にかき取っている。見込み部にはヘラ彫り界線と劃花文を施している。11は、丸味のある体部と強く外反する口縁部をもつ。体部外面へラ削りの後、全面に灰色味を帯びた暗黄緑色の釉をかけており、器表には細かい貫入がみられる。上田分類による青磁碗D類に相当し、14世紀中葉～15世紀前半代のものである。そのほか、図示しなかったが、体部外面に鏡のない幅広の蓮弁文を施した碗の破片などがある。

以上、概述してきたように、中世の遺物については、表土および包含層中より出土したものが多く、かなりの時期幅をもつ遺物が混在している。しかしだまかにみてみると、12世紀後半から13世紀前半にかけてのものと、14世紀後半から15世紀代に属するものとに分けることできよう。前者のグループには、備前産と思われる須恵器塊（6～8）や、魚住窯産の須恵器鉢（17、18）、甕（16）などがある。後者のグループには、土師器壺（12～15）や、備前焼擂鉢（20、21）、青磁碗（10、11）などが含まれるが、下限については、備前焼の擂鉢がⅣB期相当のものまでで、Ⅴ期のものを含んでいないことなどから、15世紀後半は下らない時期におさまると考えられる。

2. 近世土器（第76図）

近世の遺物は、整地層・石垣の裏込めなどから出土している。図化された遺物は全て、V地区南西の落込み攪乱土中より出土したものである。

出土遺物には、土師質の焰絡（11・12）、唐津系片口鉢（10）、京焼系塊（7）、陶胎染付碗（4・5）、染付磁器碗（3・6）、同壺（1）、同仏鉢（2）などがある。

1～3・9の染付磁器は所謂「くらわんか手」と呼ばれるもので、施文方法から、コンニャク印判によるもの（1～3）と、手描きによるもの（9）に分けられる。

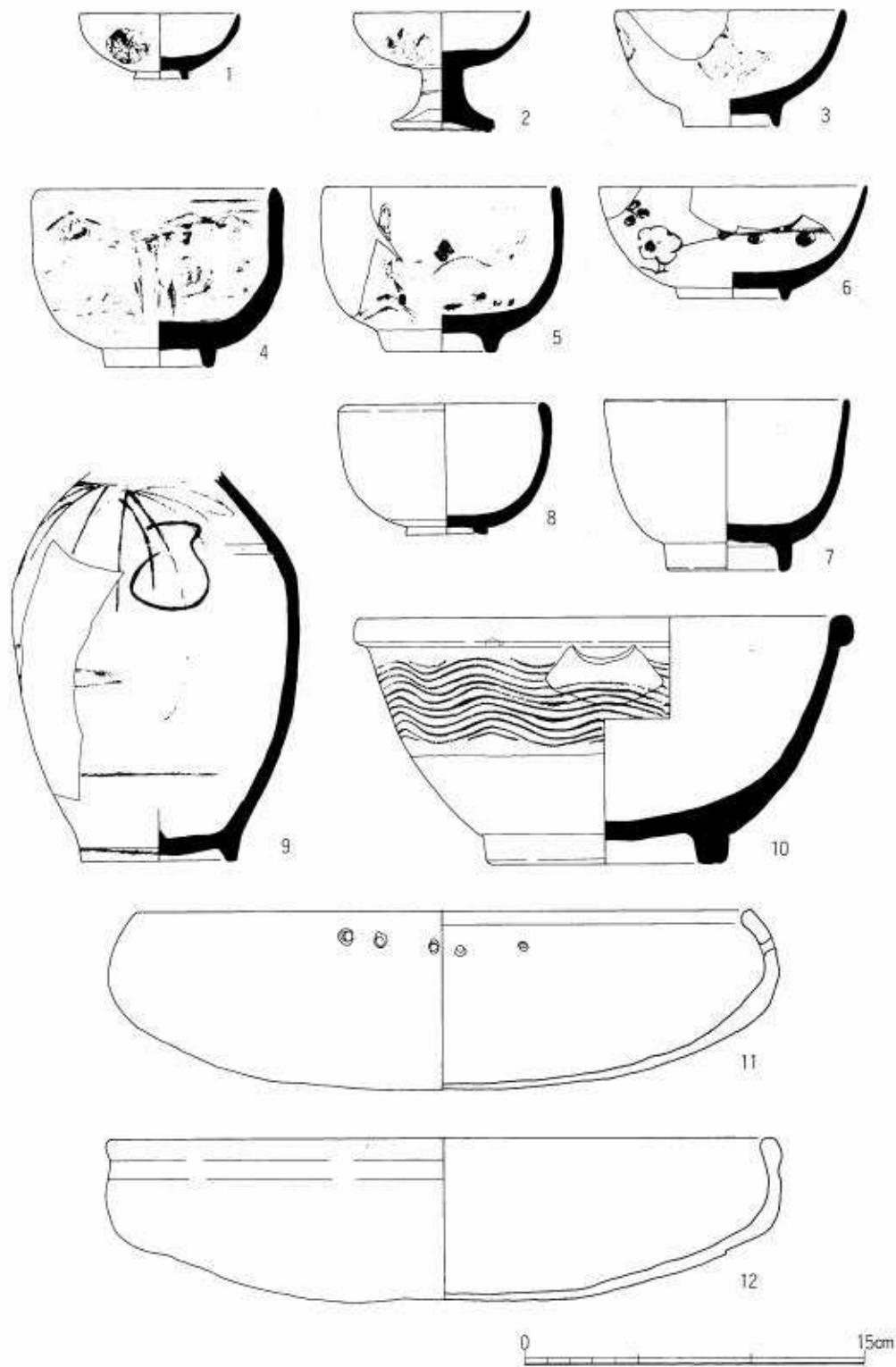
4・5の陶胎染付は、伊万里系木原窯産のものと考えられ、県下では安富中学校前東遺跡、姫路城武家屋敷などに類例が見られる。

6の染付磁器は、比較的薄手に形成され、見込み部分の釉を蛇目状にかき取るものである。形態的には、京焼風のプロボーションを強く表わしている。

7の陶器塊は全面に淡黄緑色釉を施す京焼系塊である。

10の唐津系片口鉢は全面に鉄釉を施し、内外面に白泥を施す所謂「刷毛目唐津」で、県下では姫路城武家屋敷の遺物に類例が見られる。

全体的にこれらの遺物は、18世紀代の時期が与えられる。

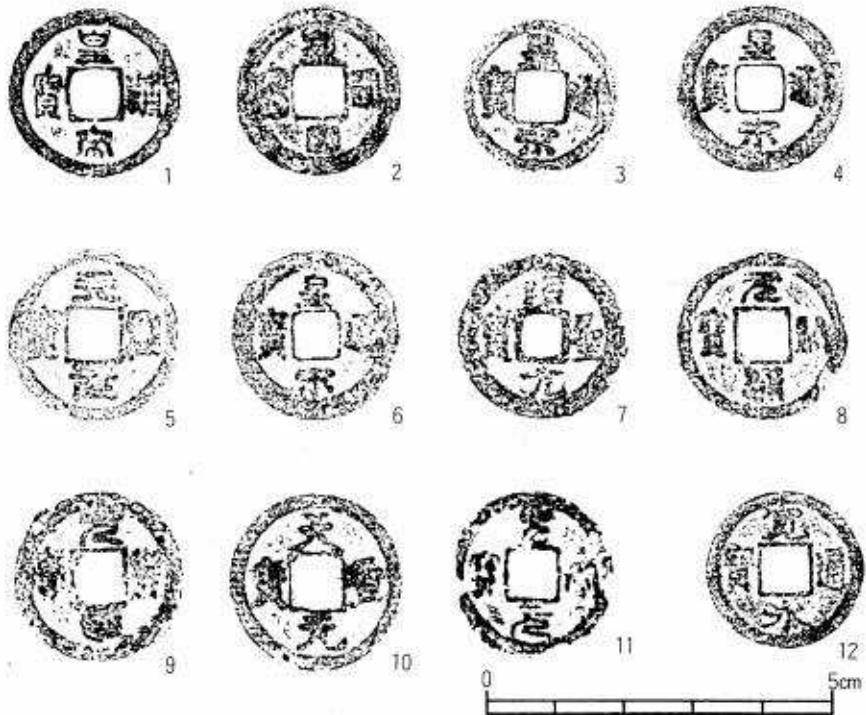


第 76 図 近世土器

3. その他の遺物

銭 貨 (77図)

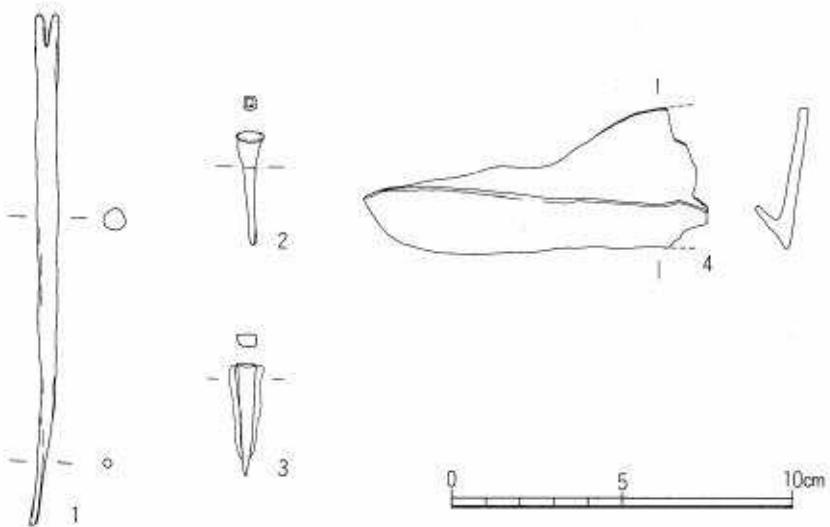
銭貨が、I地区、III地区・V地区の上部包含層・攪乱土中などから出土している。遺構に伴っての出土ではない。第77図1~11は宋銭である。1~5、6・7、8~10は互いに



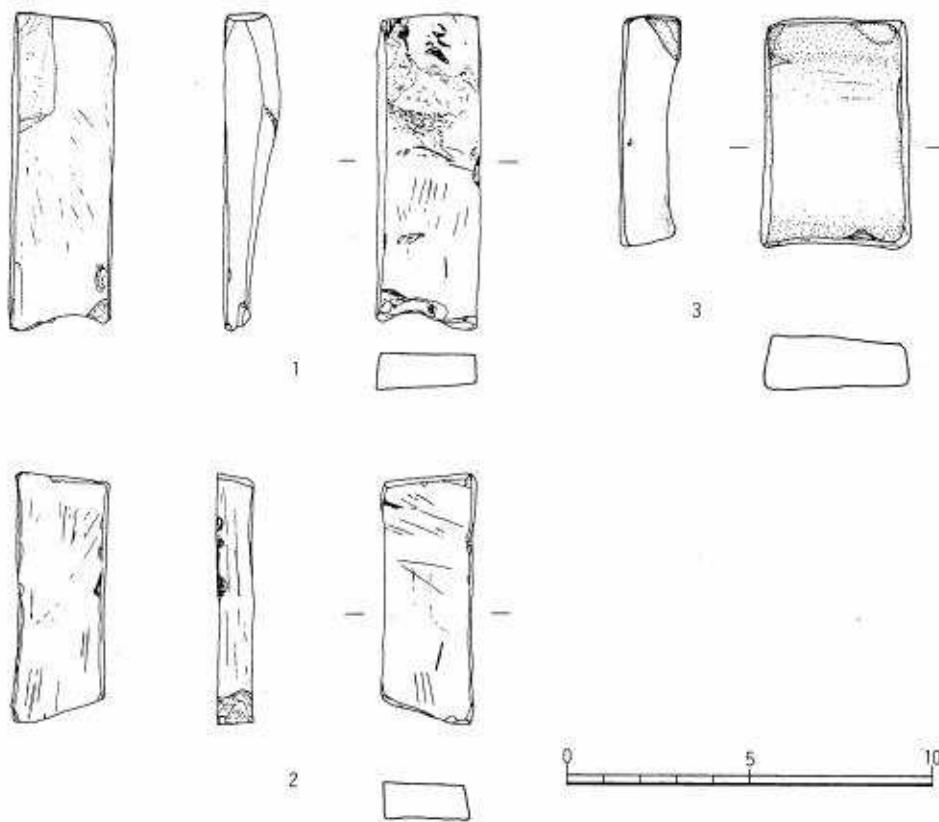
第77図 銭 貨 拓 影

	出 土 位 置	初 鑄 年	備 考
1 皇宋通宝	III 地区 包含層	1039	篆書
2 "	"	"	"
3 "	"	"	行書
4 "	"	"	"
5 元豐通宝	"	1078	"
6 皇宋通宝	I地区上部包含層直上	1039	楷書
7 紹聖元宝	"	1094	"
8 元祐通宝	"	1086	篆書
9 元豐通宝	"	1078	"
10 天聖元宝	"	1023	楷書
11 聖宋元寶	"	1101	篆書
12 寛永通宝	V 地区 西南部	1636	

第9表 銭 貨 一 覧 表



第 78 図 鉄 器



第 79 図 石

付着して連なった形で出土している。本来中世墓に伴っていたものと思われる。

この他にも、寛永通宝や明治18年の半錢硬貨などを採集している。

鉄製品（第78図）

1. 長さ15.0m、中央部の直径約0.6cmで基部は二又に分かれている。火箸と思われる。
Ⅰ地区包含層出土。
- 2・3. 釘。2は長さ3.3cmで断面は方形を呈し、頭部は平たくつぶれている。Ⅰ地区包含層出土。3は長さ3.3cm、断面は長方形を呈している。Ⅱ地区包含層出土。
4. 鋤先と思われ、刃先の角度は約45°である。Ⅰ地区包含層出土。

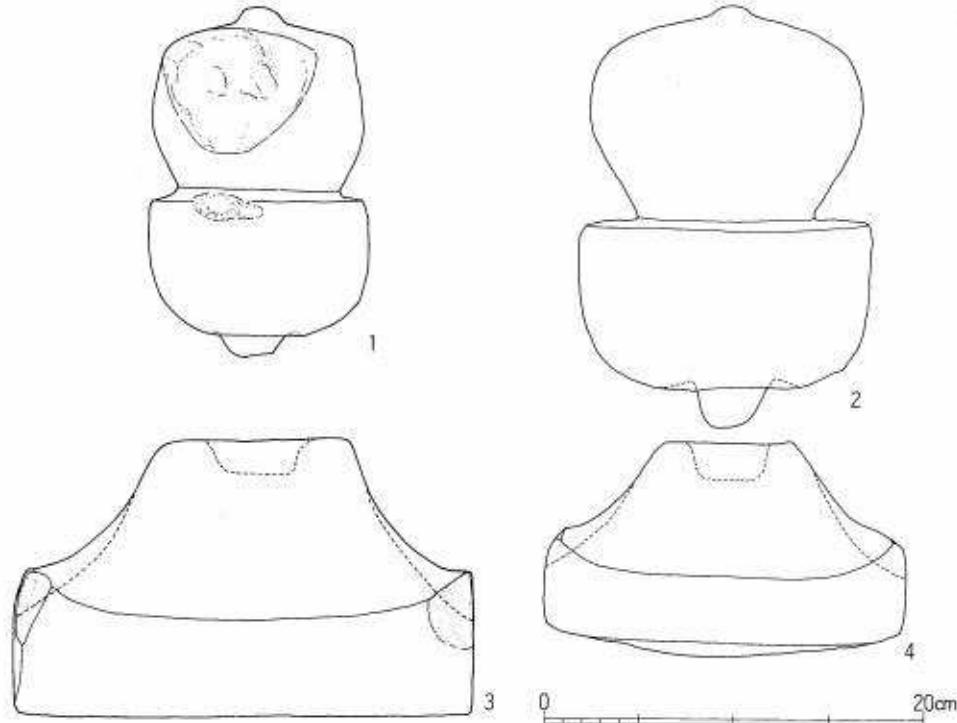
砥石（第79図）

小形の砥石が3点包含層中より出土している。

1. 幅2.7cm、厚さ1.3cm、長さ8.6cm、表裏共良く使われている。側面は平滑であるが、端面と共に製作の際の痕跡が見られる。粘板岩。Ⅲ地区出土。
2. 幅2.4cm、厚さ1.0cm、長さ6.6cm、表裏・両側面が使われている。Ⅰ地区出土。
3. 幅3.8cm、厚さ2.5cm、長さ6.0cm、表裏及び片側面が使われている。砂岩。Ⅲ地区出土。

五輪塔（第80図）

五輪塔の空・風輪、火輪が各々2個体、石垣の裏込めから出土している。



第80図 五輪塔

空・風輪（1）は、一石で作られており、全高は18.4cmである。風輪は高さ8.2cm、径は下端で5.0cm、最大11.6cmを測る。空輪は高さ10.2cm、径は下端で8.5cm、下端から4.5cmの位置で最大径11.1cmを測る。風輪の下に1.2cmの柄が付く。

空・風輪（2）も一石で作られている。全高22.1cm、風輪の高さ10.5cm、径は下端で7.7cm、最大の15.3cmである。空輪は高さ11.6cm、径は下端で7.4cm、下端から6.5cm位置で最大径14.3cmを測る。風輪の下面をわずかに窪ませて、高さ2.5cmの柄が付く。

火輪（3）は、高さ14.5cm、軒の厚さ5.1cm、幅24.0cm、軒はゆるく曲線を描き両端に近づくと反る。軒隅の高さは7.5cmとなる。上端の一辺は10.0cmで中央に径6.5cm、深さ2.0cmの柄穴をもつ。下面はほぼ平滑である。

火輪（4）は、高さ11.3cm、軒の厚さ3.5cm、幅19.0cm。軒はやはり両端で反り、隅で高さ4.9cmを測る。上端の一辺は7.0cm。柄穴は4.4cm、深さ2.0cmである。下面は凸面をなしている。

これらの五輪塔は室町時代のものと思われる。

鉄滓・炉壁片

I地区の上部包含層から鉄滓約1kg、炉壁約6.8kgが出土している。またV地区からも炉壁片が出土している。鉄滓は直径3~7cm程度の塊状のもの。表面の凹凸がはげしく断面に気泡が多く見られる扁平なものが多い。炉壁片は外面が赤褐色に焼け、内面は気泡をもって熔けただれている。また羽口部と思われる曲面をもった破片も数点出土している。

註 鉄滓・炉壁については、科学的分析を行って、追って詳細を報告する予定である。

これらに伴う確実な遺構は検出されなかったが、I地区北西端の焼土や、同地区的土壤を持つ掘立柱建物址等が関係遺構になる可能性をもつ。

大森谷遺跡とは洲本川を挟んだ対岸の金屋地区の谷一帯に炉壁、鉄滓の散布が見られる（浦上雅史氏御教授による）。

参考文献

- ① 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年
- ② 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982年
- ③ 間壁忠彦・間壁蘋子「備前焼研究ノート(1)~(3)」『倉敷考古館研究集報』第1、2、5号 倉敷考古館 1965、1966、1969年
- ④ 森岡秀人「三条岡山遺跡」『芦屋文化財調査報告』第10集 芦屋市教育委員会 1979年

- ⑤ 山本博利、秋枝芳「加茂遺跡」『姫路市文化財調査報告』V 姫路市教育委員会
1975年
- ⑥ 「国内出土の肥前陶器」 佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- ⑦ 「特別史跡姫路城址」 兵庫県立歴史博物館 1983年
- ⑧ 「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」(宍粟編) 兵庫県教育委員
会 1976年
- ⑨ 「唐津」 『世界陶磁全集』7 小学館 1980年
- ⑩ 「染付」 『日本の美術』 至文堂 1971年

No.	出土地区 層位	種別	器種	法量(cm) 口径器高	形態の特徴	技法の特徴	備考
1	I 地区 上部包含層	土 師	皿	8.1 0.9	浅い器形、体部外反、口縁端部丸味を持つ。	外底部回転ヘラ切り離し内底部ナデ、他はロクロナデ	内面磨滅はげしい明赤褐色
2	I 地区 包含層		皿	11.8 2.1	体部が中位で屈曲し、段をもつ。	外底部回転糸切り離し後、板目状圧痕、内底部一部ナデ。	淡桃褐色
3	I 地区 溝 5		皿	13.2 2.7	"	外底部回転糸切り離し後、外面体部下半一部指押え。	内面磨滅はげしい淡茶褐色
4	I 地区 南北溝		壺	12.0 3.7	体部と底部の境界に稜をもち体部は斜め上方にまっすぐ立ち上る。	外底部回転ヘラ切り離し。	体部黄褐色 底部暗灰褐色
5	I 地区 包含層		羽釜 ミニチュア	8.8	口縁部外面直下に幅 0.9 cm の鋸をもつ。	口縁部ヨコナデ、体部内面一部ナデ。	磨滅はげしい淡桃白色
6	I 地区 溝 5	須 恵 器	塊	底径 6.2	平底から丸味のある体部がたち上がる。器底うすい。	外底部回転糸切り離し後、一部ヘラ調整	灰白色を呈しやや軟質、胎土精良
7	I 地区 上部包含層		塊	底径 7.9	"	外底部回転糸切り、内部一部ナデ	
8	I 地区 溝 5		塊	底径 7.5	"	外底部回転糸切り内底部ナデ体部外面下半一部指押え	
9	III 地区 溝 5	青 磁	皿	10.3 1.5	平底、体部はやや外反気味に立ち上る。口縁部は輪花状に成形。	体部内面劃花文	内外面とも釉剝落
10	III 地区		碗	高台径 6.0	厚手に成形、高台はやや外方に聞く。	内外面とも淡黄緑色釉を全面施釉、高台裏の釉を輪状にかき取る。	14世紀後半～15世紀前半代
11	II 地区 上部包含層		碗	12.9	体部内彎、口縁部外反。	外面ヘラ削り痕、内外面とも灰色味を帯びた暗黄緑色釉を施釉、釉層はやや厚く、体部外面釉切れ(虫喰) 内外面とも細かい貫入。	上田分類、青磁碗 D類 14世紀中葉～15世紀前半
12	III 地区 包含層	土 師	壺	21.0	口縁部内彎、口縁端部肥厚し内側に面をもつ、体部内彎。	体部外面右上り平行叩き 口縁部を貼り付け。	明茶褐色、外面にスス付着、焼成良好
13	III 地区 表土		壺	23.0	"	体部外面右上り平行叩きの後、ヨコナデによる鋸の貼り付け、口縁部と体部内面ヨコナデ。	明赤褐色 外面にスス付着、焼成良好
14	II 地区 包含層		壺	24.0	"	"	淡赤褐色 外面にスス付着、焼成良好
15	II 地区 包含層		壺	27.0	"	"	"
16	I 地区 包含層	須	甕	22.7	頸部はほぼ直立し、口縁端部は上下につまみ出す。	頸部から体部にかけ、右上りの平行叩き	焼成やや甘く暗灰色
17	I 地区 包含層		鉢	32.8	口縁部を上下にやや拡張し丸味をもたせる。	全面ヨコナデ	灰色を呈し砂粒多く含む 播磨魚住窯産 13世紀後半～14世紀前半
18	I 地区 上部包含層	恵 器	鉢	23.0	口縁端部を斜め方向に切り離す。	"	灰色を呈し砂粒多く含む 播磨魚住窯産 12世紀後半～13世紀前半
19	I 地区		鉢	28.0	口縁部が肥厚し、端部外側が面をもつ。	"	砂粒を多量に含み、黒灰色を呈する。
20	III 地区 表土	国 產 陶 器	撞鉢	21.2	体部内彎、口縁部は上下にやや拡張。	積み上げ→内面押え→内外面ロクロナデ→内面おろし目→外面不定方向ナデ	備前燒、間壁 編年Ⅳ期、14世紀後半～15世紀
21	II 地区 表土	国 產 陶 器	擂鉢	28.0	"	おろし目は 8 条単位	"

第 10 表 中世土器観察表

No.	種別	器種	法量(cm) 口径×器高		形態の特徴	成形の技法・釉調・文様	備考
1	染付磁器	杯	7.0	2.9	体部内彎 口縁端部ややとがり気味 高台径比較的小	やや青味を帯びる釉調 外面 吳須による菊花文 (コンニャク印判) 高台疊付の釉カキ取り	釉生掛け 伊万里系 18C前半～中葉
2	染付磁器	仏舎碗	7.6	5.3	体部内彎 口縁端部ややとがり気味 比較的短い脚部	やや青味を帯びる釉調 外面 吳須による桐文 (コンニャク印判) 脚部 2条の界線 底部露胎 ロクロ目観察可	伊万里系 18C前半～中葉
3	染付磁器	碗	10.0	5.1	体部内彎 口縁端部ややとがり気味 比較的厚手に成形	釉調 焼成不良の為かやや赤味を帯びる 外面 吳須による 菱文及び桐文を施文(コンニャク印判) 高台疊付の釉カキ取り	釉生掛け 伊万里系(くらわんか手) 18C前半～中葉
4	陶胎染付	碗	10.3	7.3	体部は直線的に上方に伸びる 比較的厚手に成形	釉調 青味を帯びる 外面 吳須による 草花文、施文 外面とも、細かい貫入 高台疊付の釉カキ取り	釉生掛け 伊万里系(木原窯) くらわんか手 18C後半～19C
5	陶胎染付	碗	10.4	7.9	体部は直線的に上方に伸びる 比較的厚手の成形	釉調 内面は青味を帯びる 外面 全体灰白色を呈する 全面に釉切れ、釉溜り、気泡が見られる 外面 吳須による山水樓閣 図施文 高台疊付の釉カキ取り	釉生掛け 伊万里系(木原窯) くらわんか手 18C後半～19C
6	染付磁器	碗	11.7	5.0	体部内彎 口縁端部ややとがり気味比較的薄手に成形	釉調 乳白色 外面 吴須による 繕文 見込みの釉 蛇ノ目状にカキ取り、砂付着 外面ロクロ目	京焼風のプロボーション 伊万里系 18C後半～19C
7	施釉陶器	壺	10.6	7.5	直線的に伸びる体部 比較的高い高台	全面淡黄緑色釉施釉 高台疊付の釉カキ取り 全面に細かい貫入	京焼系? 18C
8	施釉陶器	壺	18.7	5.7	体部内彎 比較的幅広の高台	全面に化粧土 塗布 上絵付け剥落 高台脇以下露胎	産地・時期等不明
9	染付磁器	徳利	—	—	体部内彎	釉調 青味を帯びる 外面 吴須による草花文 高台部 1条の界線 高台裏まで全面施釉	伊万里系 17C後半
10	施釉陶器	片口鉢	20.5	10.9	体部内彎 口縁端部肥厚 比較的幅広の高台 一ヶ所に注口	全面に鉄釉施釉 内面 白泥塗布 外面 白泥による波状文釉垂れ	唐津系 刷毛目唐津 17C後半～18C 前半
11	土師器	焰炉	26.5	7.8	体部内彎	ヨコナデ	5ヶ所穿孔 内外面スス付着
12	土師器	焰炉	28.5	7.1	体部内彎	ヨコナデ	外面スス付着

第 11 表 近世土器観察表

第6章 まとめ

今回の発掘調査によって、大森谷遺跡は弥生時代後期を主とした集落址であることが判明したが、調査地の北側には平坦地が続き、遺物が散布していること。更に谷奥に行けば大森谷浜田遺跡として散布地が存在することから、ひとつの集落の一部を調査したに過ぎないと思われる。

弥生時代の遺構は、堅穴住居址・土壙・溝状遺構が尾根上から谷内にかけて見られる。全て居住に関係する遺構と思われ、墓域は北或いは南に存在する可能性がある。

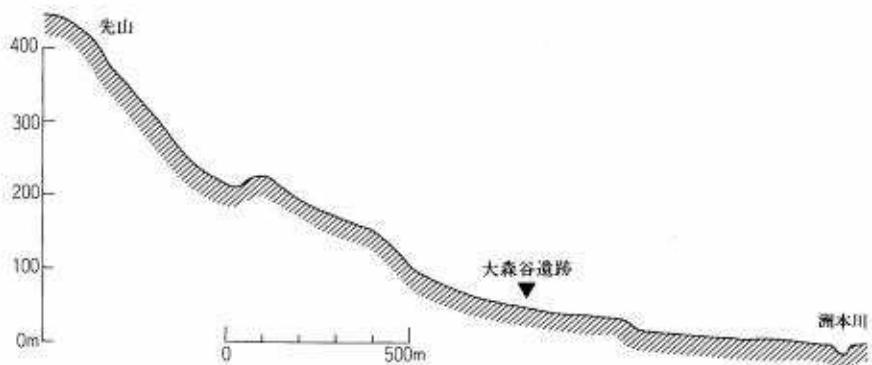
弥生土器の包含層は、小谷状地形内で濃厚に見られるが、大小の礫を混じえていることから、上流からのかなり強い土石流などによって堆積したものと思われる。

この他に中世以降の遺構では掘立柱建物址・溝・土壙などがある。これらの内いくつかは、包含層から出土した鉄滓、炉壁片と関連した遺構になる可能性を持つ。墓址は確認されなかった。

大森谷の弥生集落について

大森谷遺跡は、洲本川を西に廻ること約4kmの北岸に位置し、先山(445m)の南東斜面が傾斜を緩やかに変えた標高40~60m(比高20~40m)の丘陵上に立地する。

南流し洲本川に合流する大森谷川の東岸には、緩やかな谷内の斜面と、それから急に上の尾根上の緩斜面がある。この地形は更に小さな張り出しと小谷に分かれ、その張り出し



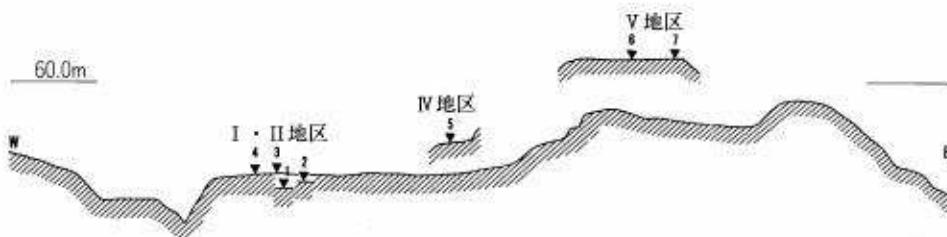
第81図 大森谷遺跡の立地概念図

上に弥生時代の住居が営まれている。

比高が高い為、生産基盤である水田可耕地から少し離れた立地をもつが、洲本川周辺で

は低地の弥生集落は確認されておらず、後期になると同様の立地をもつ遺跡が多くなることから、当地域の一般的な集落の在り方と思われる。ただより大きな集団との関係は密であったろうと思われる。^{註①}

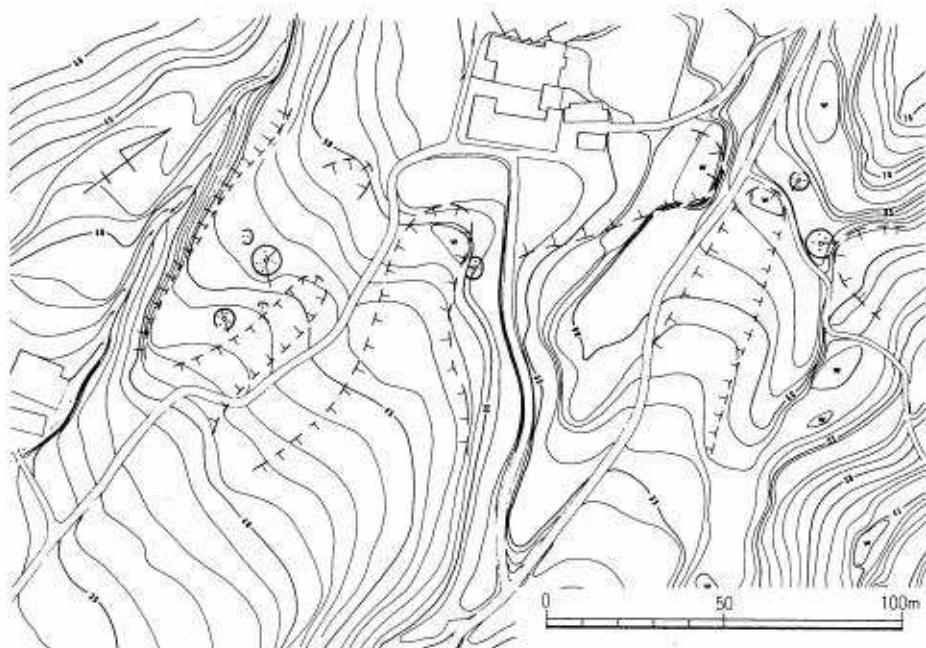
尾根上の住居址の立地には他の住居址と異なった点が見られる。比高が20m近く高いこ



第 82 図 遺跡横断面と住居址立地概定図

と、住居址からの展望が良く、洲本川下流域一帯から大阪湾まで見通せることである。こういった「見張る」機能も集落の一部に有していたものであろうか。

住居址の平面形態は、円形 6 棟、隅円方形 1 棟で、円形プランをもつ住居が主体である。斜面にある為、等高線に沿う方向に長い楕円形になるものが多い。斜面上方を40~50cm掘



第 83 図 遺跡の地形と住居址立地概念図

削し、下方では土を埋め出して床面を形成したと思われる。

主柱穴は、2本柱2棟、4本柱4棟、5本柱1棟であり、4本柱のものが主である。2本柱のものは、規模の小さなもので、中央土壙などの施設をもたない住居址である。周辺の支柱穴と思われるものは見られなかった。

周壁溝は全ての住居址に見られる。溝内から遺物が出土しており、また焼失住居では、焼土や、火を受けた砥石が転落していたことから、土留めの板を埋置したのではなく、本来から溝として存在し、排水・排湿を主目的としたと考える。

中央土壙は、不整形のものが多く、複数の土壙が錯綜する可能性がある。排水溝が、土壙の一部を切っているものもある。土壙埋土中には多寡の差はあるが炭が含まれている。壁の焼けているものは少ないが、周辺の床面が焼けており、この土壙が火の使用に伴うものと推測させる。3号住居址では、土壙内から菱形土器数個体分が出土している。

排水溝は、中央土壙からはじまって、屋外に延びるものと、一方の周壁溝からはじまって、中央土壙を通して対角の周壁溝外に出るものがある。住居址7の様に幅が狭く、深いものは、板状のものをたてて間仕切りに使われた可能性をもつが、溝が周壁溝を越えて屋外にまで延びること、その方向が斜面下方に向うこと、屋外に出る位置に配石があること等を考慮すれば、排水・排湿を主目的としたものと考えられる。しかし、この溝は必ず中央土壙と繋がっており、両者の関係を明らかにすることによって、各々の用途・目的が初めて理解されうる。

	地区	形態	床面標高 (m)	規模(床面) 長径 (m)	規模(床面) 短径 (m)	周壁溝	中央土壙 炭	中央土壙 壁焼土	床面焼土	排水溝 (中央土壙) から	備考
1号住居址	I	円形 4本柱	42.9	5.7	4.8	○	○	×	○	2方向	
2号住居址	I	隅円方形 2本柱	44.1	3.3	(3.2)	○	/	/	○	×	
3号住居址	II	円形 4本柱	47.0	9.9 10.5 10.8 11.4	9.3 10.3 10.8 11.4	○ (4重)	○	○	○	2(+1) 方向	拡張
4号住居址	II	円形 2本柱	47.2	4.4	(4)	○	/	/	×	×	
5号住居址	IV	円形 4本柱	49.8	6.2	(5.4)	○	○	×	○	1方向	
6号住居址	V	円形 4本柱	62.9	4.4	3.9	○	○	×	× (削平)	1方向	
7号住居址	V	円形 5本柱	62.3	6.6	(6.0)	○	○	×	?	1方向	火災住居址

第12表 堪穴住居址一覧表

大森谷で見られる、中央土壙・排水溝を有する円形堅穴住居址は、同じく先山山麓で同様の立地をもつ寺中遺跡^{註①}や下加茂岡遺跡でも見られる。また同様の住居址形態は、中国山地弥生時代中期末住居や、同じく中期末・後期の近畿地方での丘陵上集落に見られるものと一致している。

註

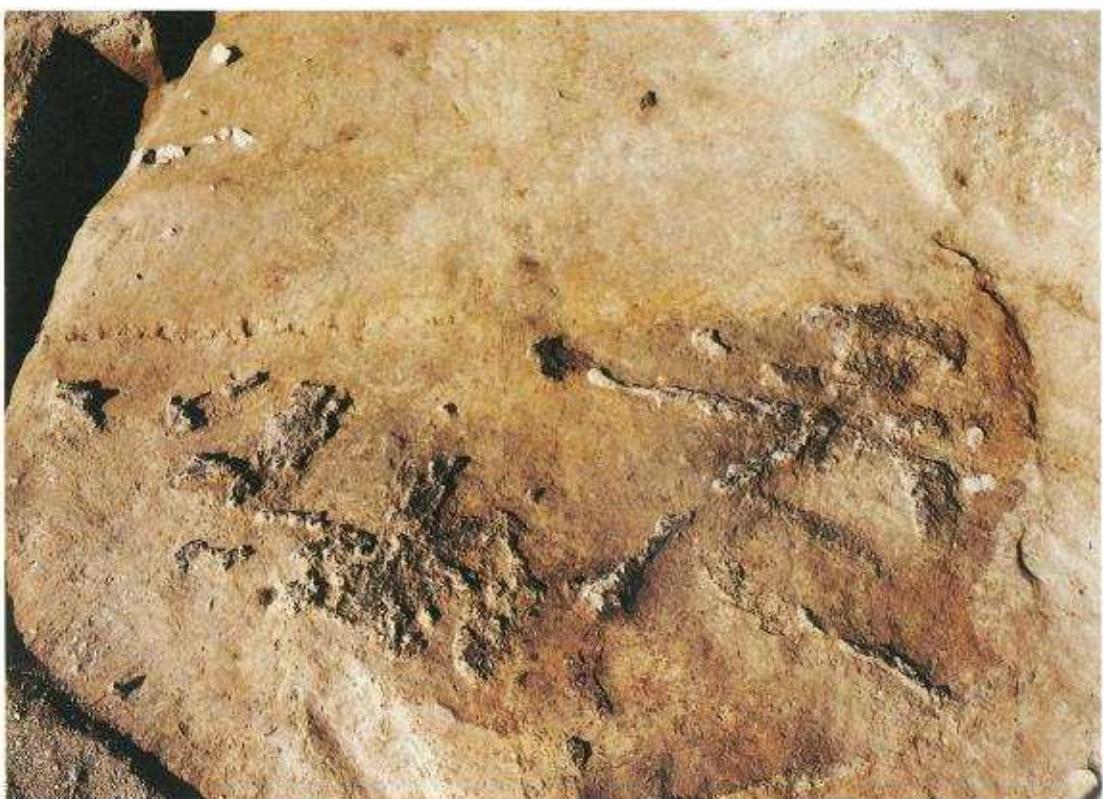
- ① 下内膳遺跡は、弥生時代前期から継続する集落址であり、大森谷の集団の母集団と考えうる遺跡であるが、これも低丘陵端に立地する。
- ② 先山の南斜面は、冬でも比較的暖かいが、時として西風が強く吹く。谷内では凌げるが、尾根上は通り抜ける。7号住居址も折からの西風に煽られて東向きに倒壊したのではないか。快適さを犠牲にしてまで住む必然性があったのだろうか。
- ③ 兵庫県教育委員会が昭和58年度に発掘調査

参考文献

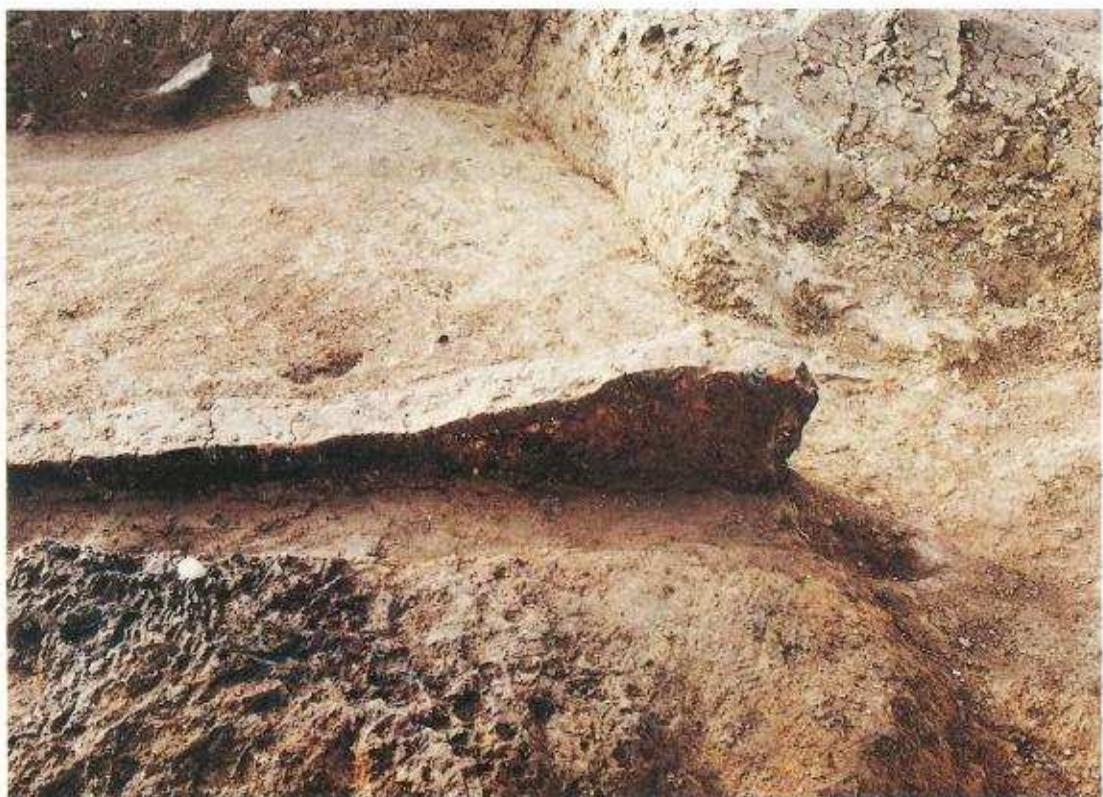
- ・都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻4号 1964年
- ・石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『家』 1965年 社会思想社
- ・石野博信「住居型の地域性」『三世紀の考古学』 1971年 学生社
- ・井守徳男「奈カリ与弥生時代集落の構成」『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
兵庫県教育委員会 1983年



大森谷遺跡出土弥生土器



1. 7号烧失居址



2. 7号居住址、烧土断面



大森谷遺跡より洲本川河口をのぞむ



1. 調査区遠景一西より



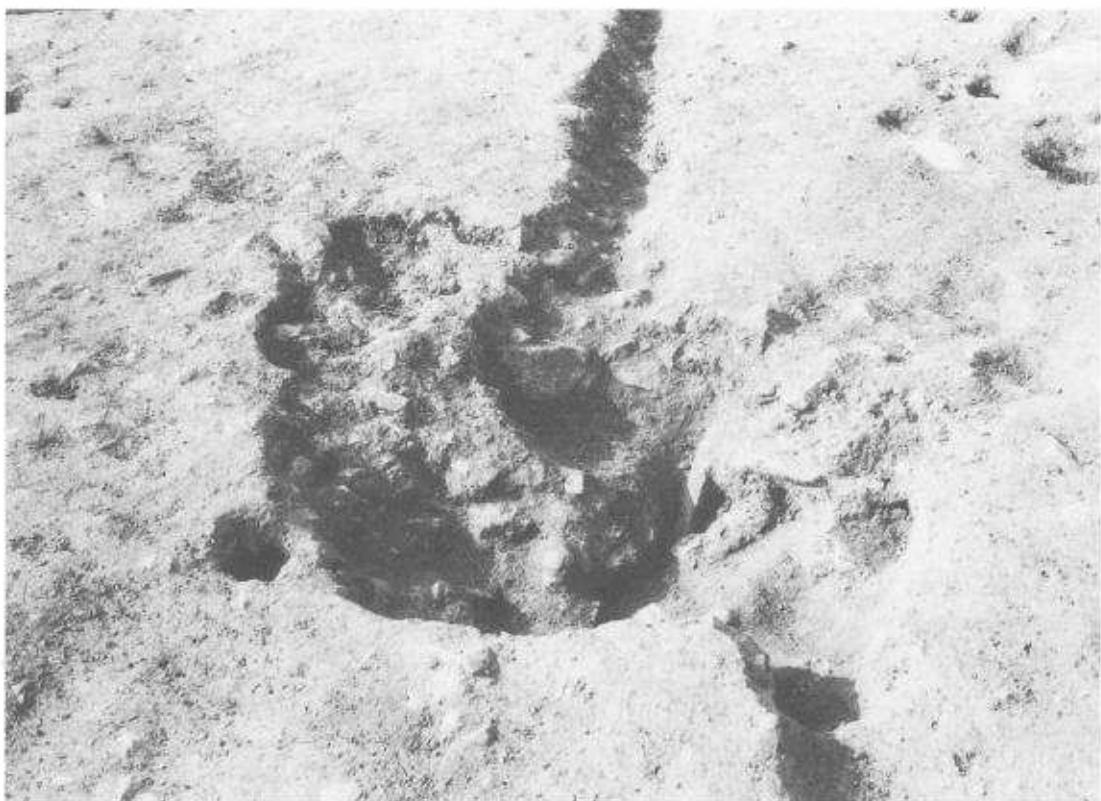
2. 調査区遠景一東尾根上より



1. 1号住居址（検出状況）—西より



2. 1号住居址—西より



1. 1号住居址 中央土壙—南東より



2. 1号住居址 中央土壙—南西より



1. 2号住居址（検出状況）—南より



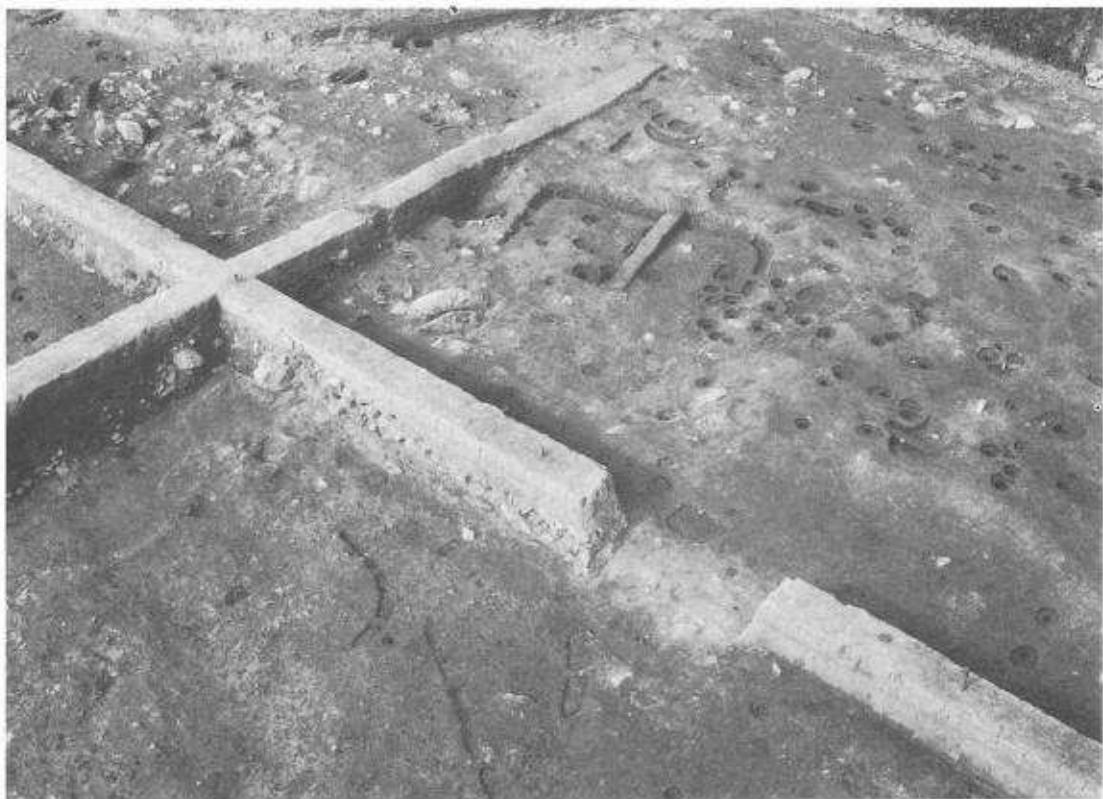
2. 2号住居址—南より



1. I地区南西部（掘立柱建物址 4・5）—北より



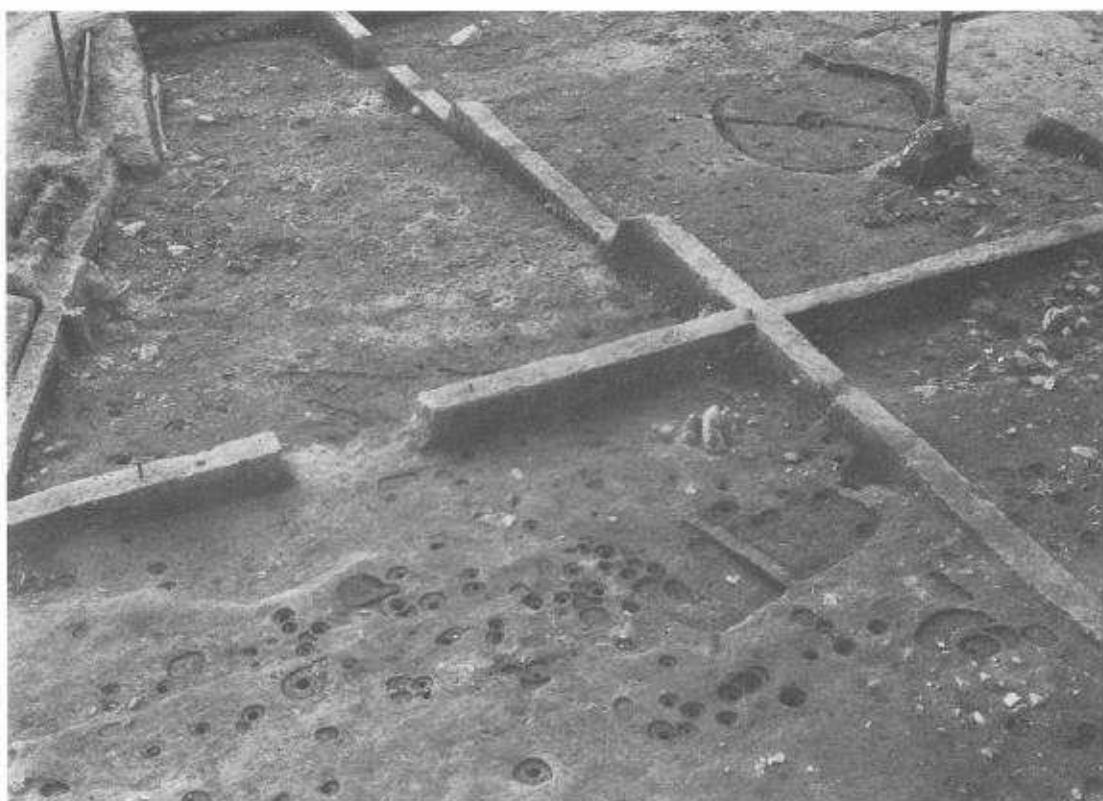
2. I地区南西部（掘立柱建物址 4・5）—南東より



1. 1地区北東部(2号住居址、溝8・9・10)一南より



2. 1地区北東部(2号住居址、溝8・9・10)一北東より



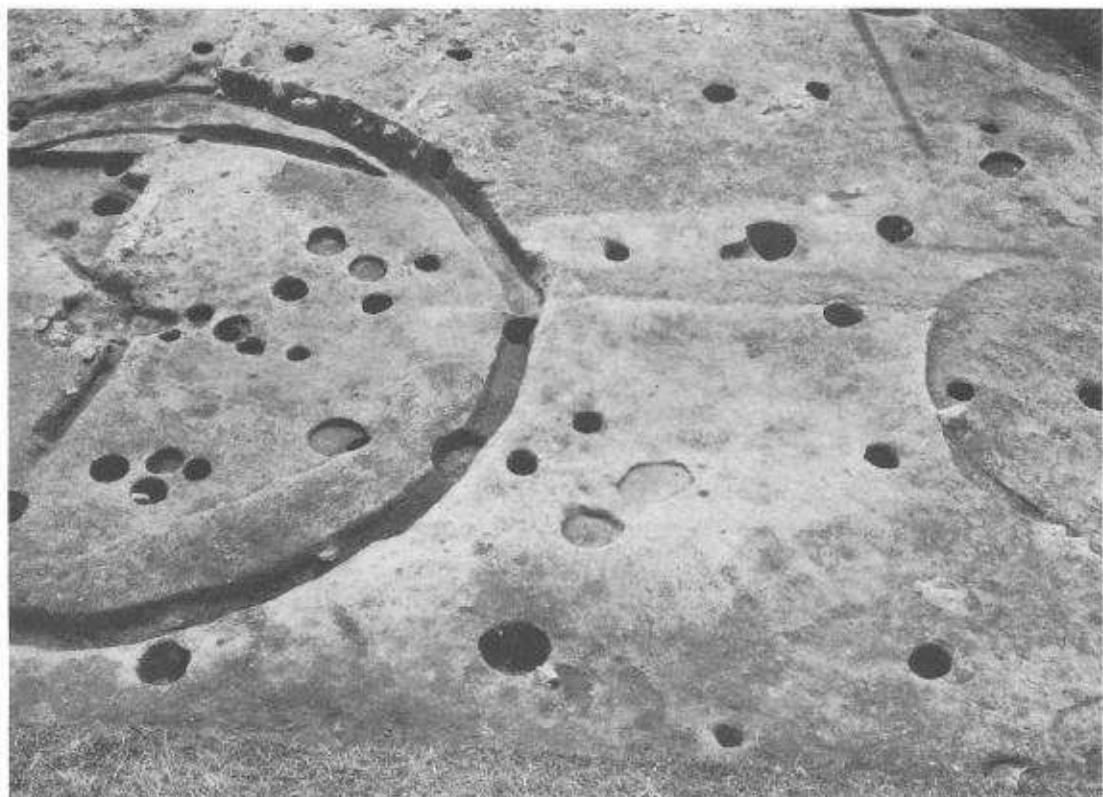
1. I地区東中央部（1号住居址、2号住居址、溝8・9・10・11）—北東より



2. I地区西中央部（1号住居址、掘立柱建物址3・4）—南より



1. Ⅱ地区西半部(3・4号住居址、掘立柱建物址6)一南より



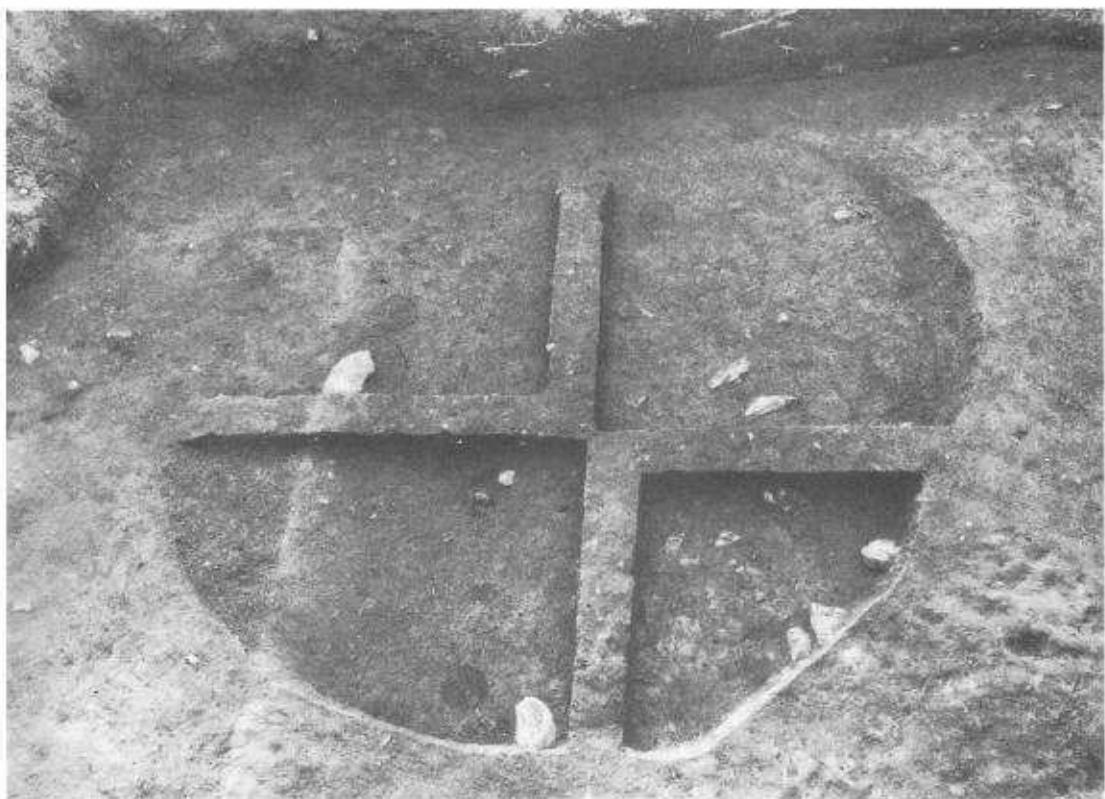
2. 掘立柱建物址6一北より



1. 3号・4号住居址（検出状況）一東より



2. 3号・4号住居址一東より



1. 4号住居址（検出状況）一東より



2. 4号住居址一東より



1. 三地区全景一南より



2. 三地区南半部一南より



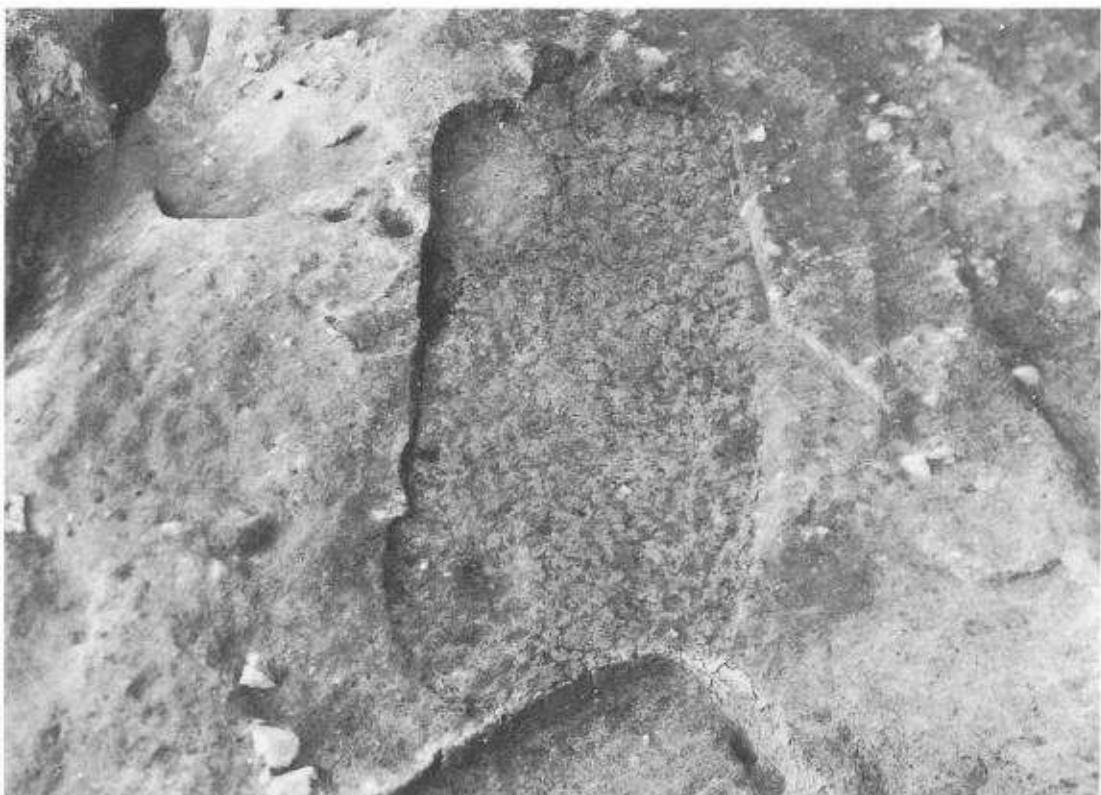
1. 5号住居址一西より



2. 5号住居址 中央土壙南北セクション一西より



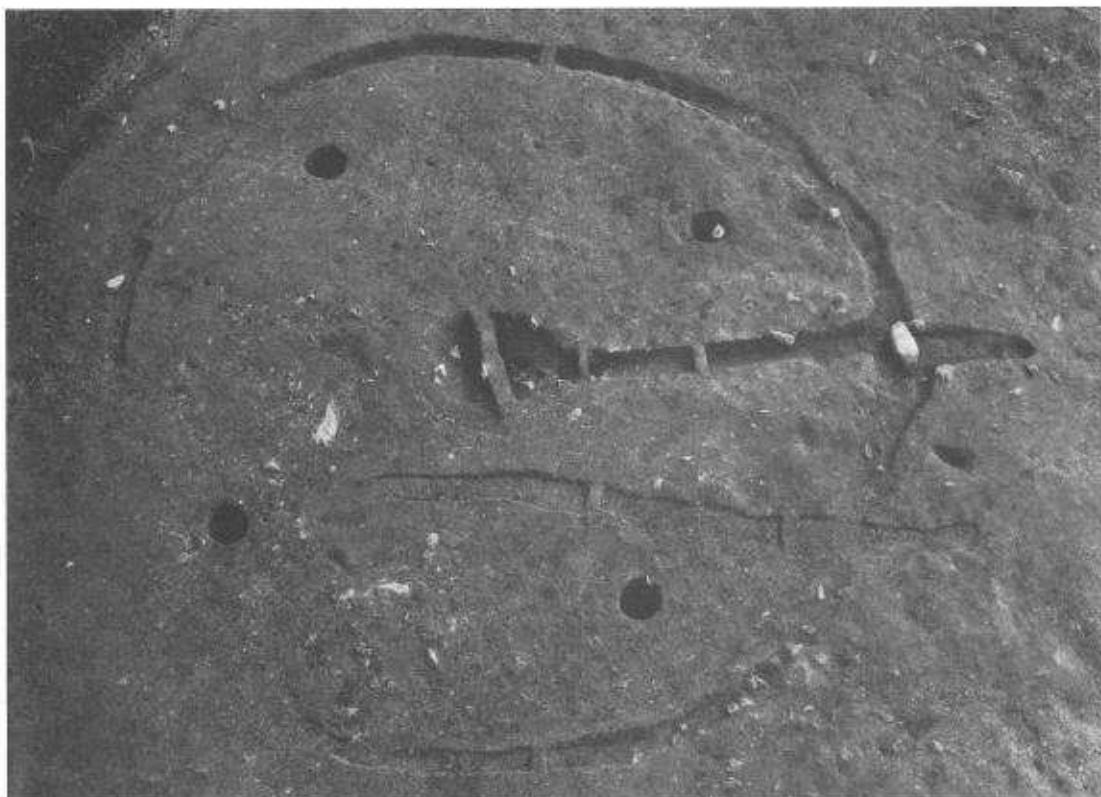
1. 土壌(検出状況)一南より



2. 土壌一南より



1. ヴ地区全景—西より



2. 6号住居址—西より



1. 6号住居址 中央土壤—南より



2. 6号住居址 排水溝・周壁溝交差個所—南より



1. 7号住居址一南より



2. 7号住居址 中央土壙一東より



1. 7号住居址 排水溝・周壁溝交差個所一東より



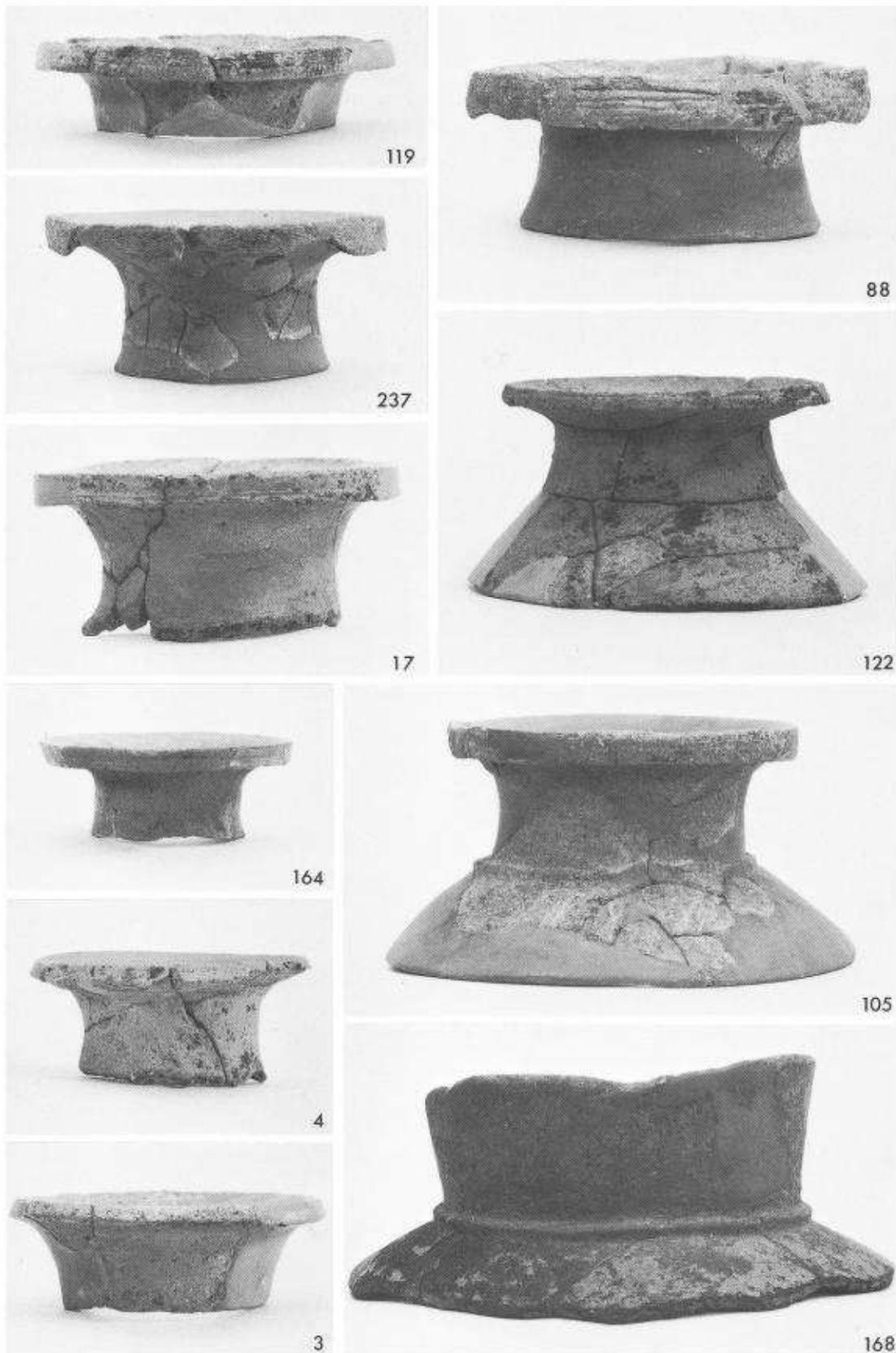
2. 7号住居址 砥石出土状況一東より



1. 5号溝 土器出土状況一南より



2. 5号溝 土器出土状況一南より



弥生土器—壺形土器



207



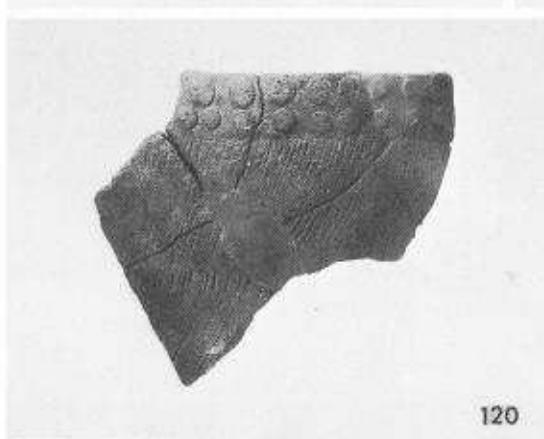
242



54



53



120



131



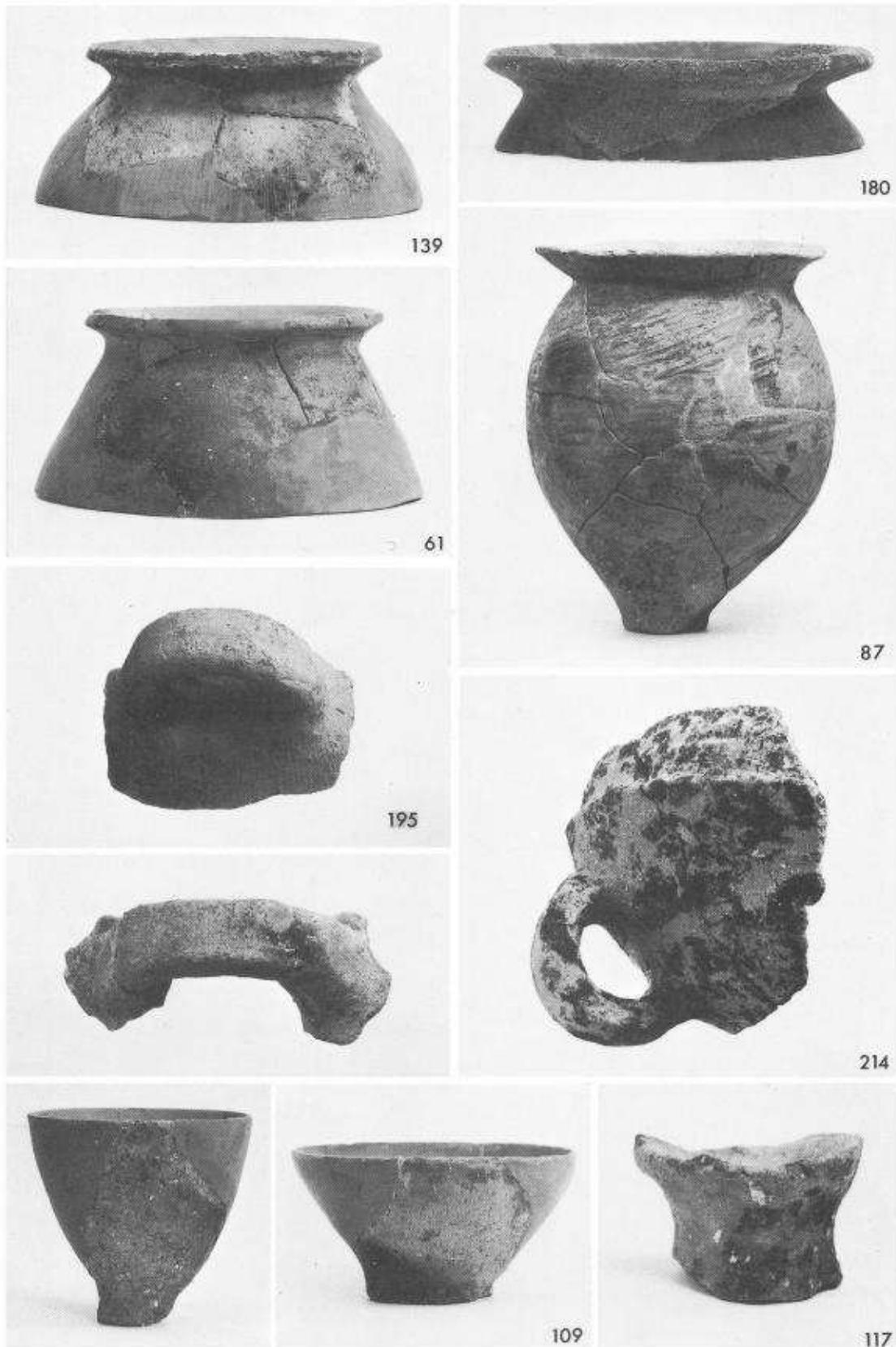
253



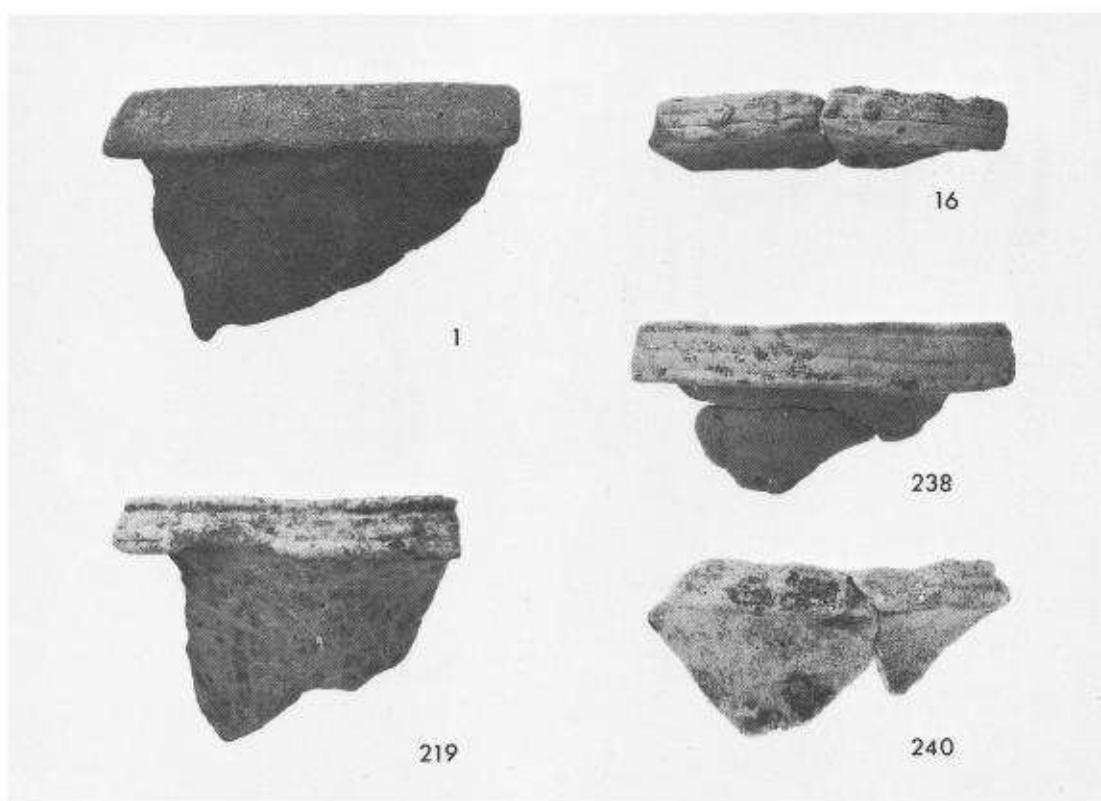
133



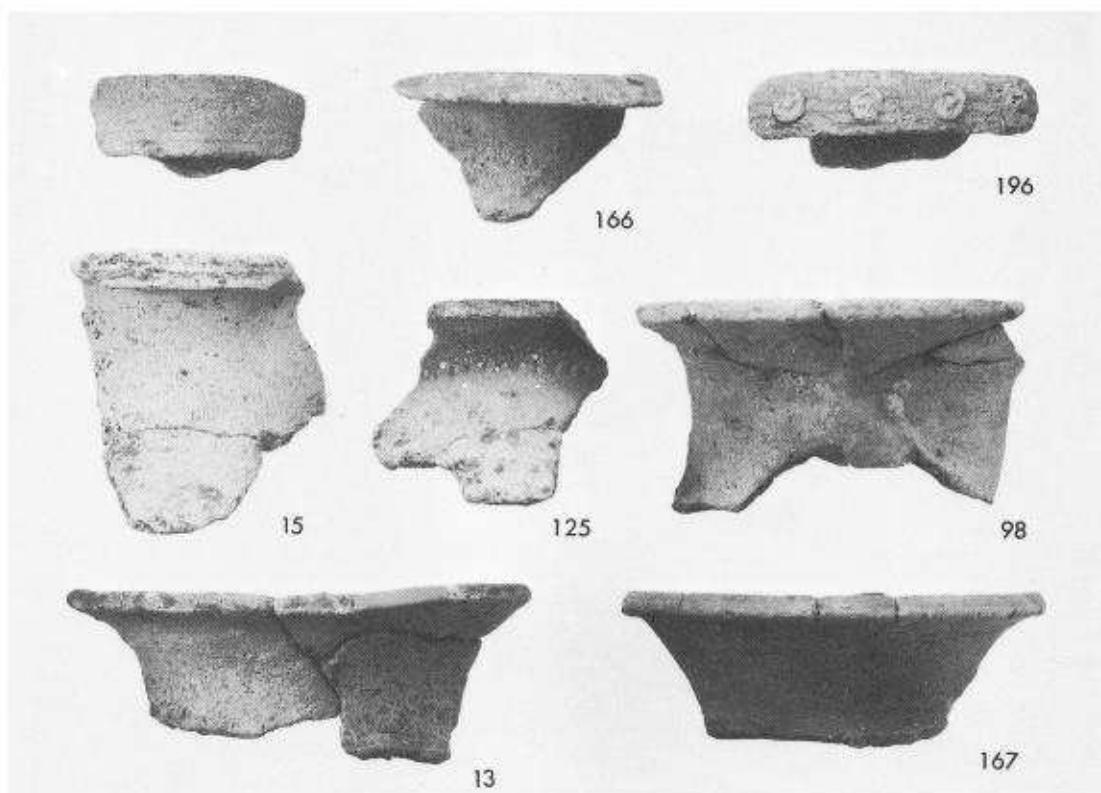
弥生土器—高環形土器



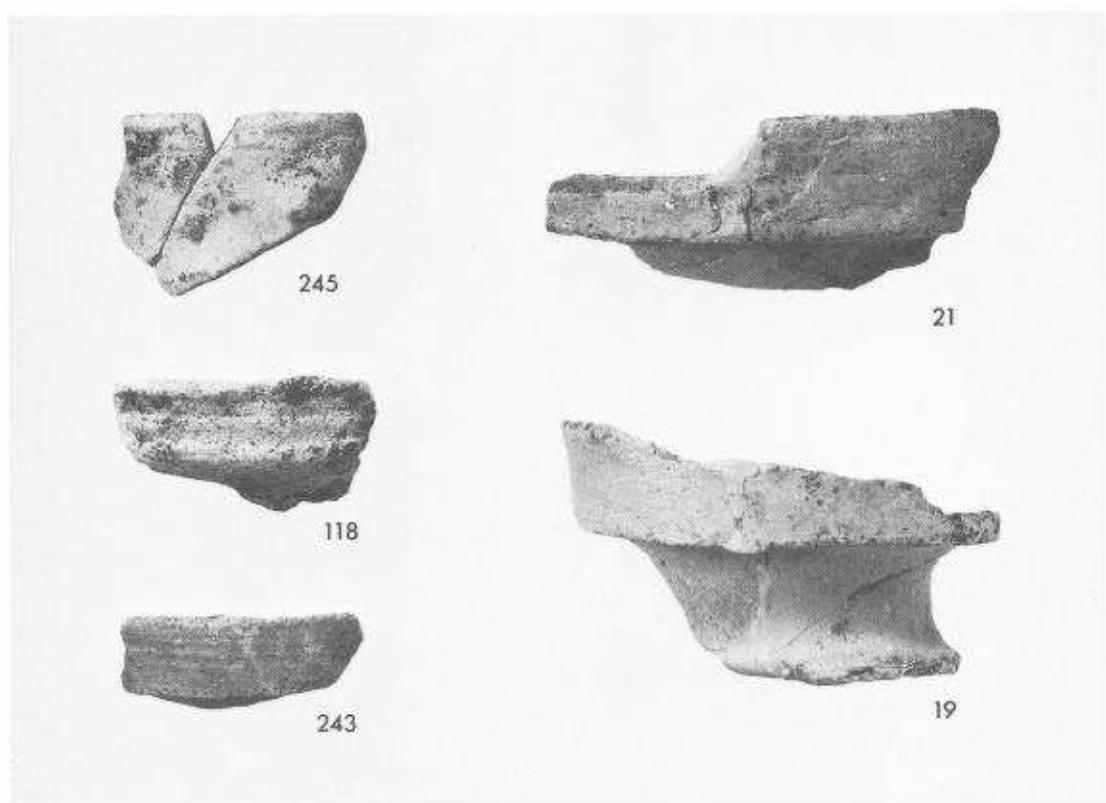
弥生土器—壺形土器・鉢形土器・把手・ミニチュア土器



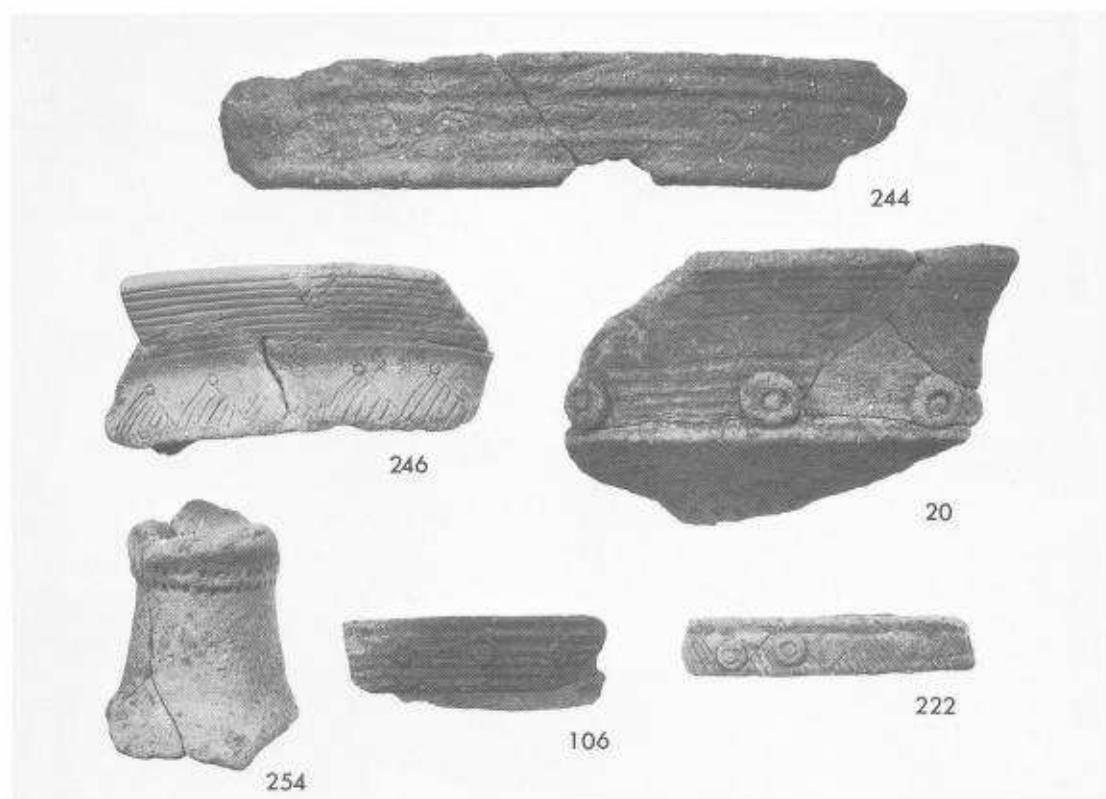
1. 弥生土器—壺形土器



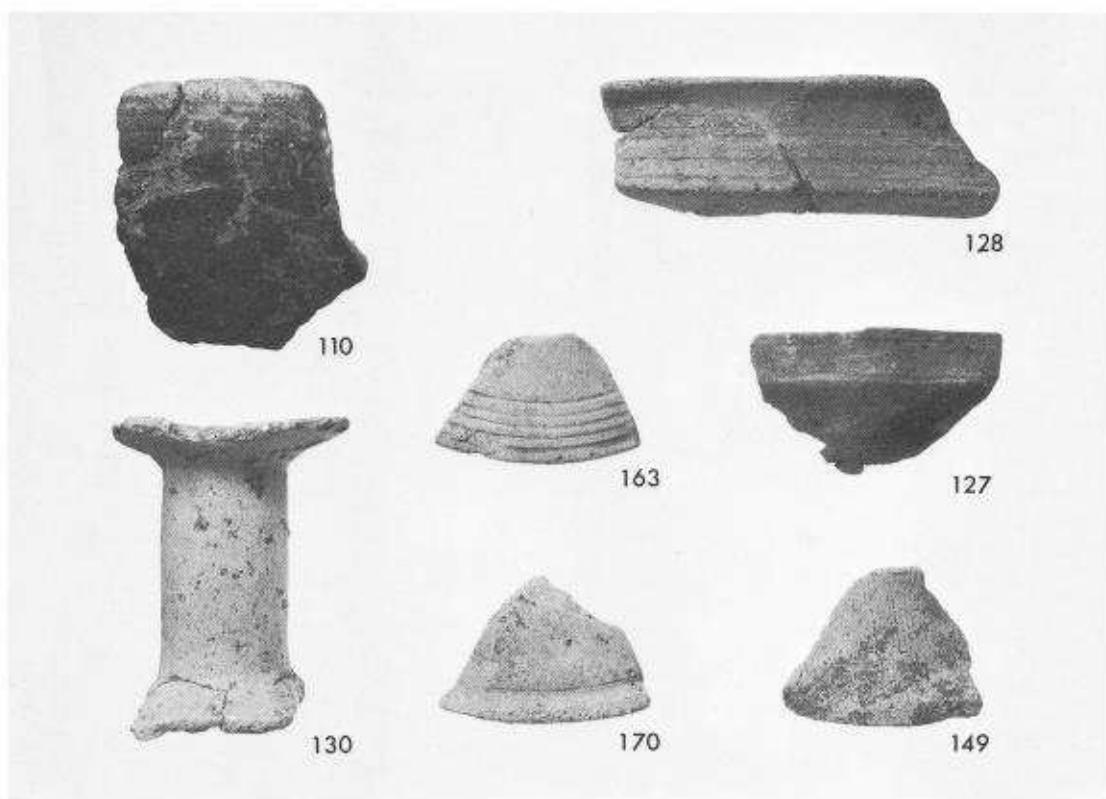
2. 弥生土器—壺形土器



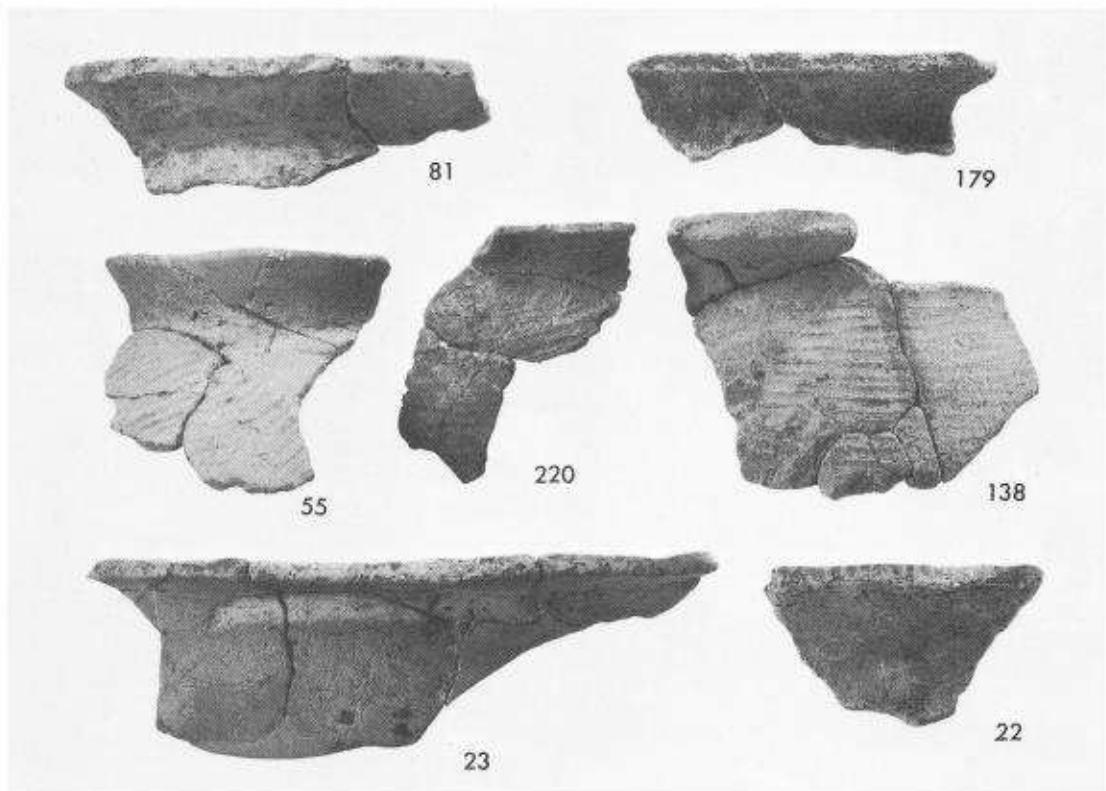
1. 弥生土器—壺形土器



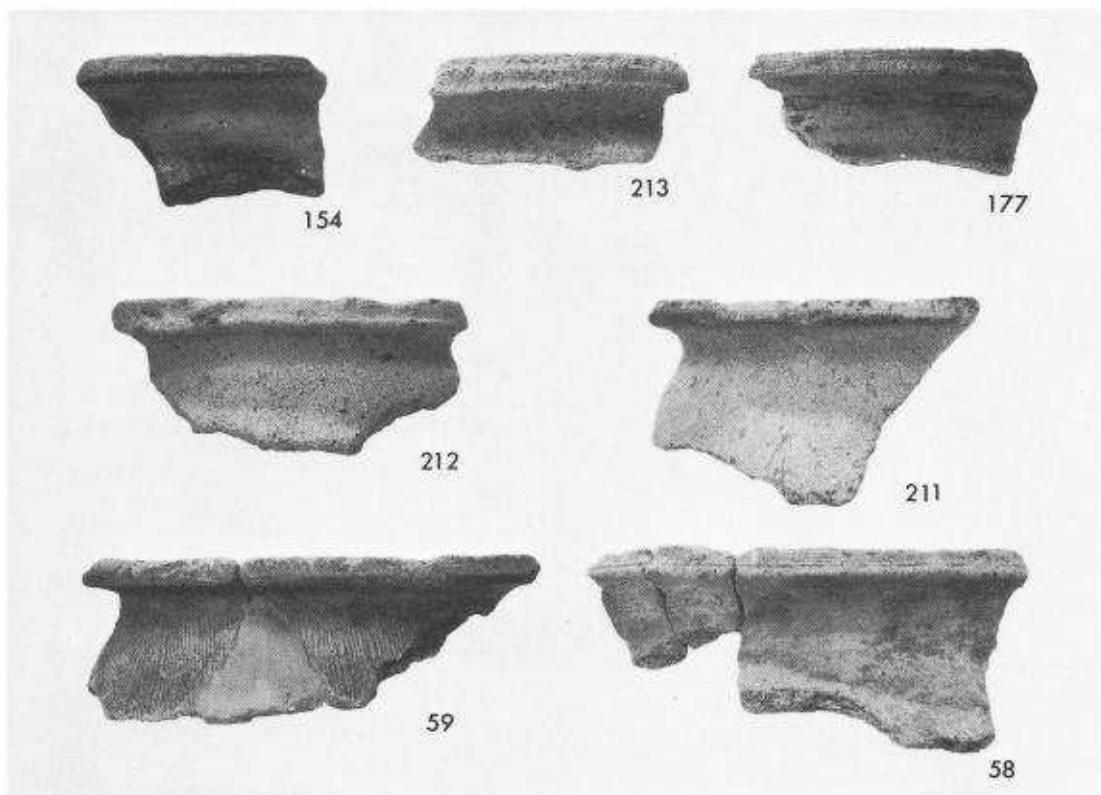
2. 弥生土器—壺形土器・器台形土器



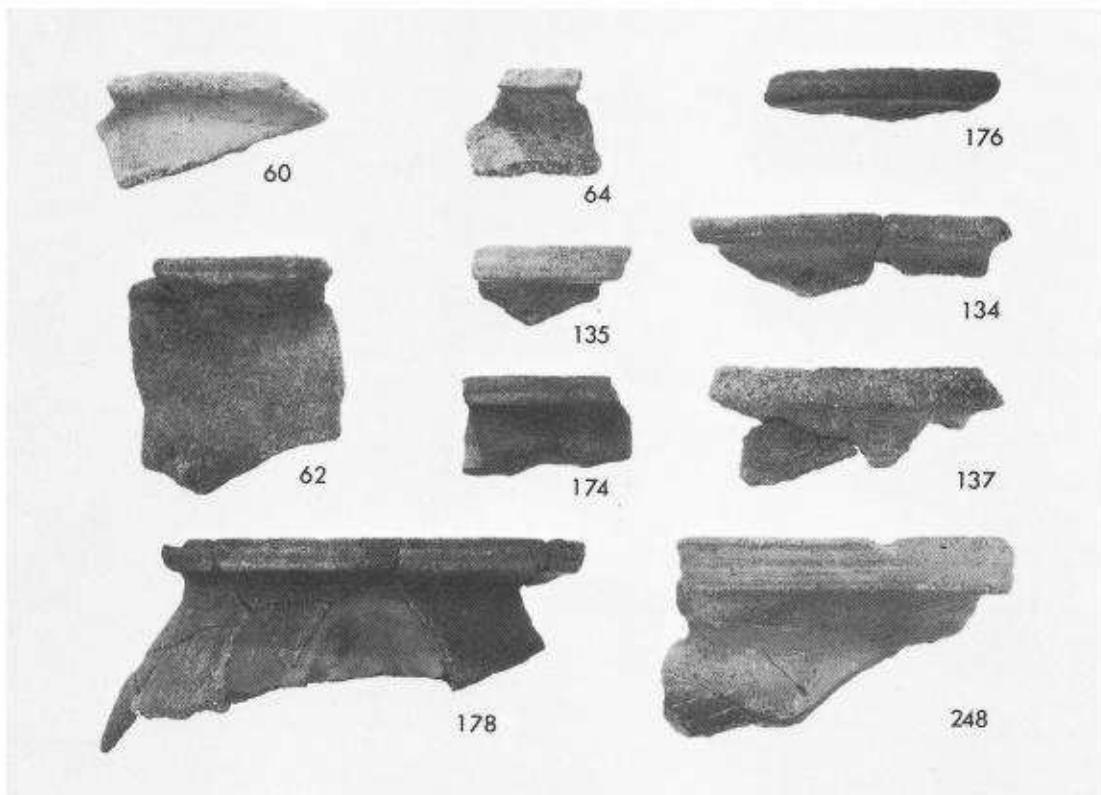
1. 弥生土器—高坏形土器



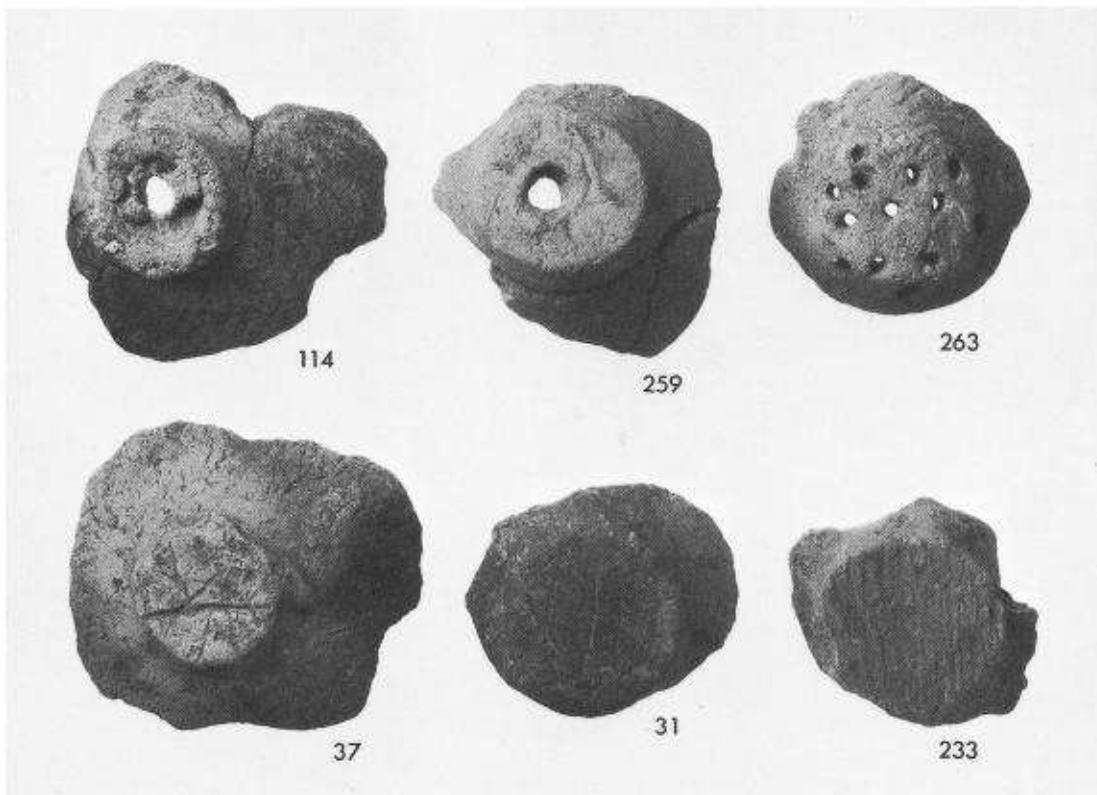
2. 弥生土器—變形土器



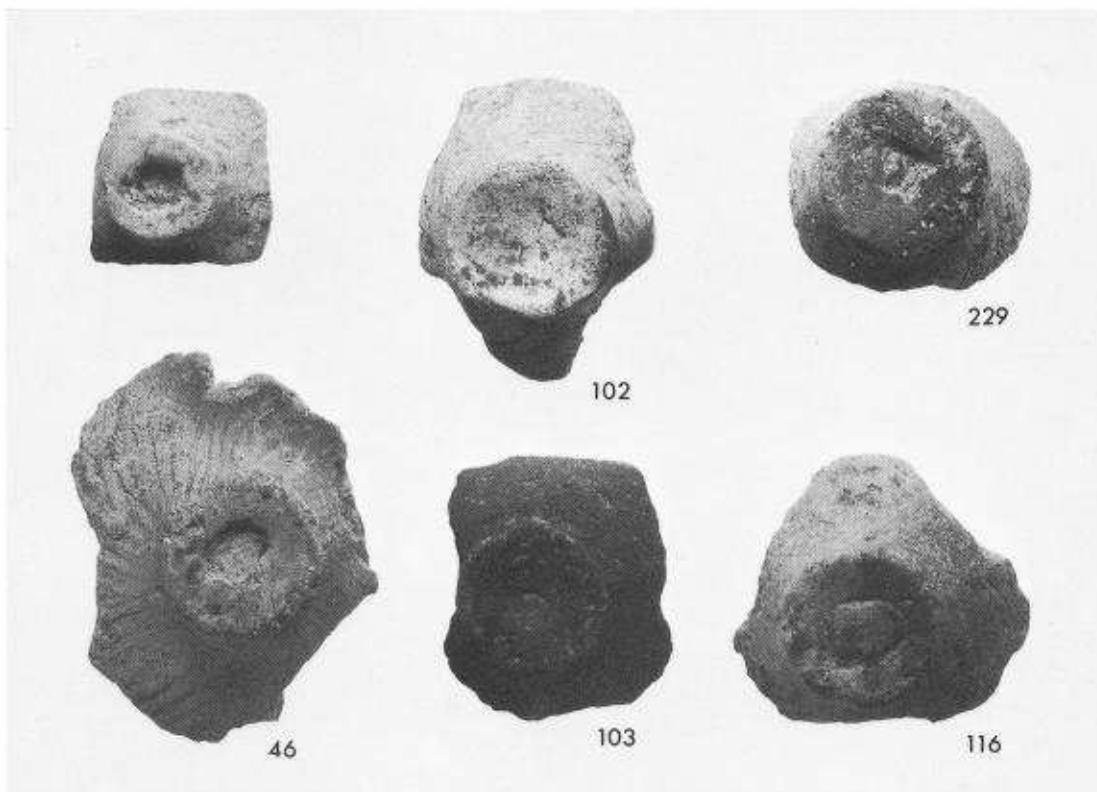
1. 弥生土器—斐形土器



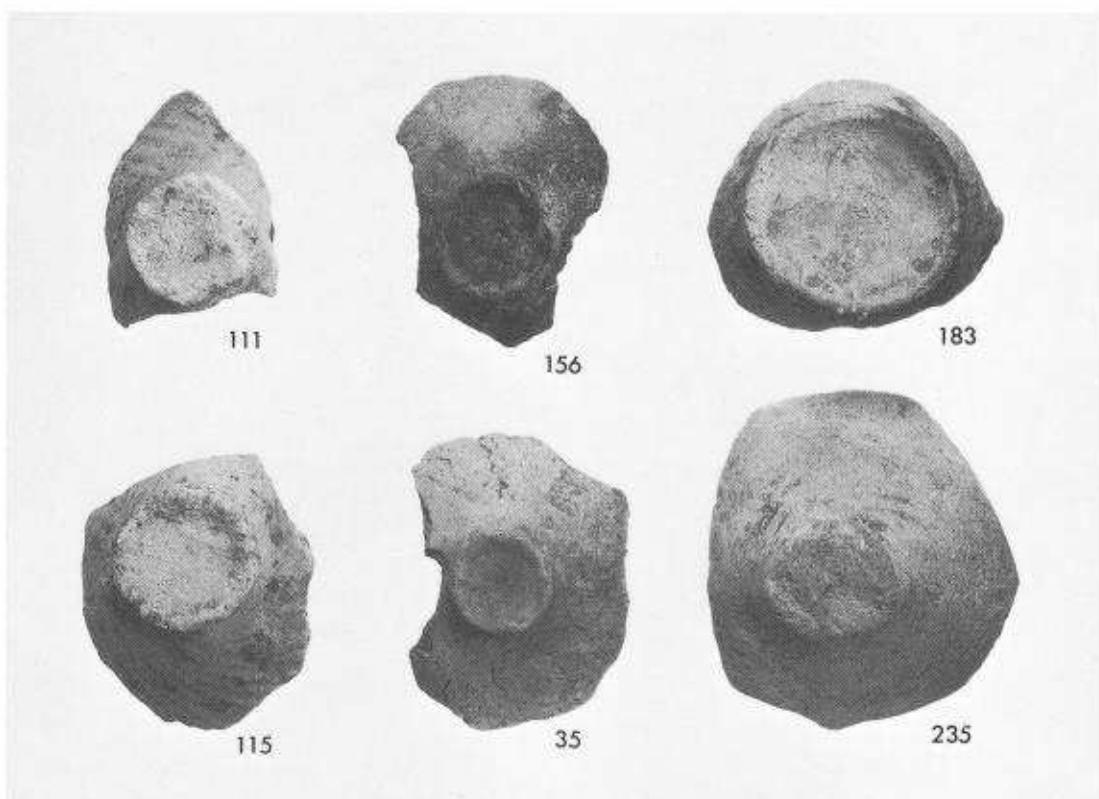
2. 弥生土器—斐形土器



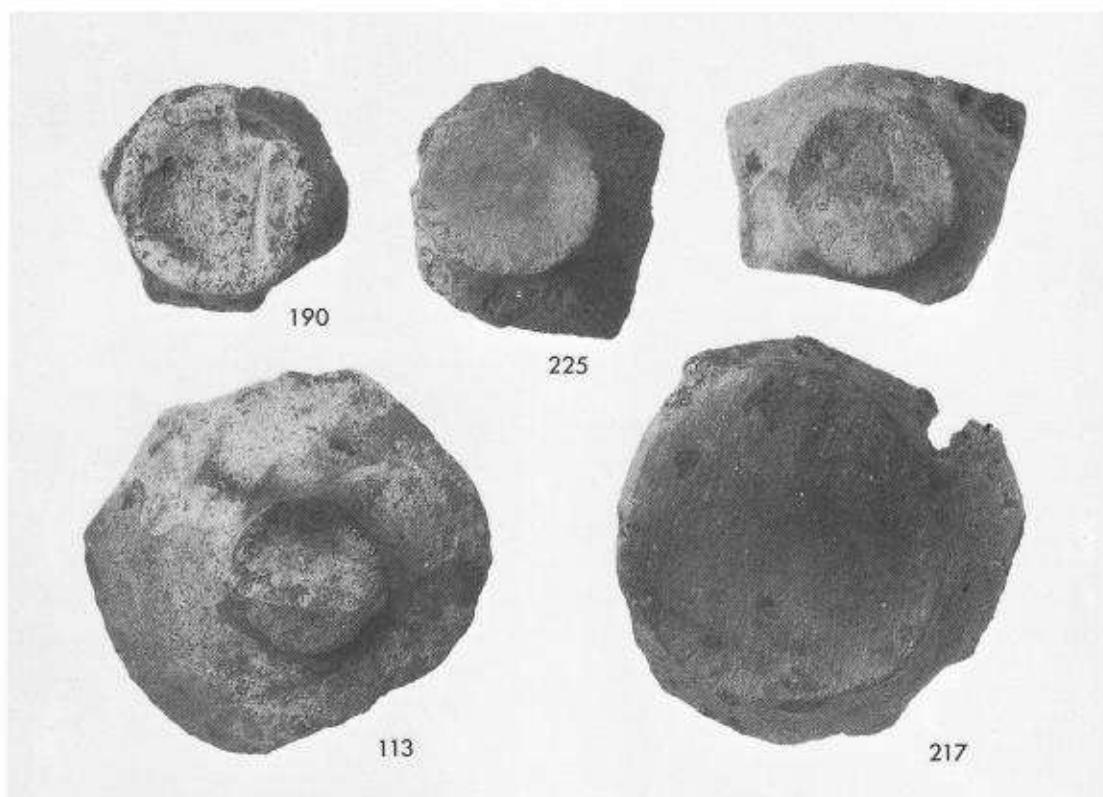
1. 弥生土器—底部



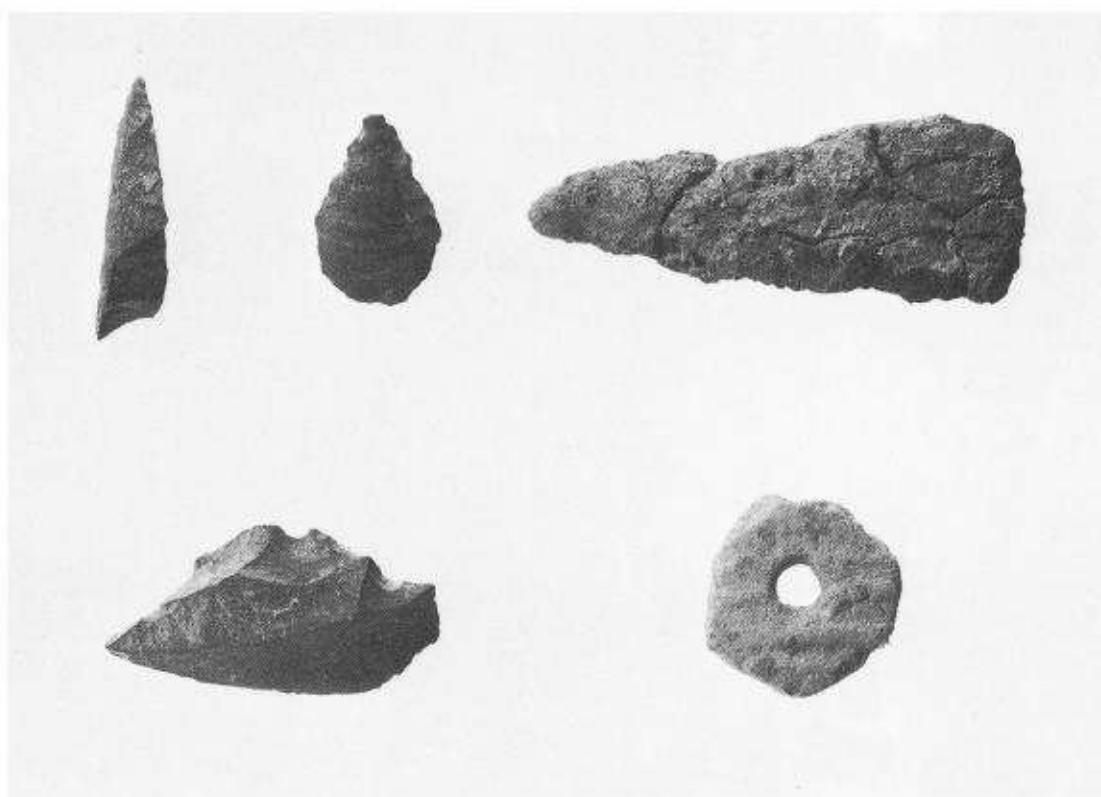
2. 弥生土器—底部



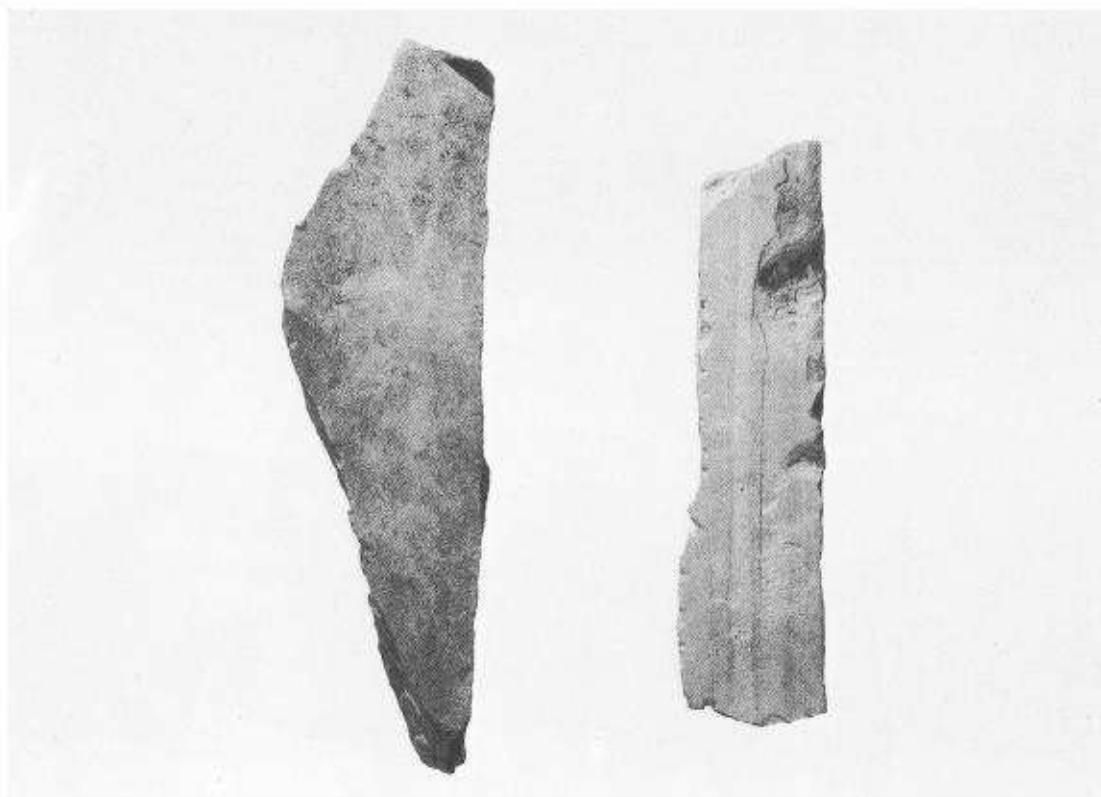
1. 弥生土器—底部



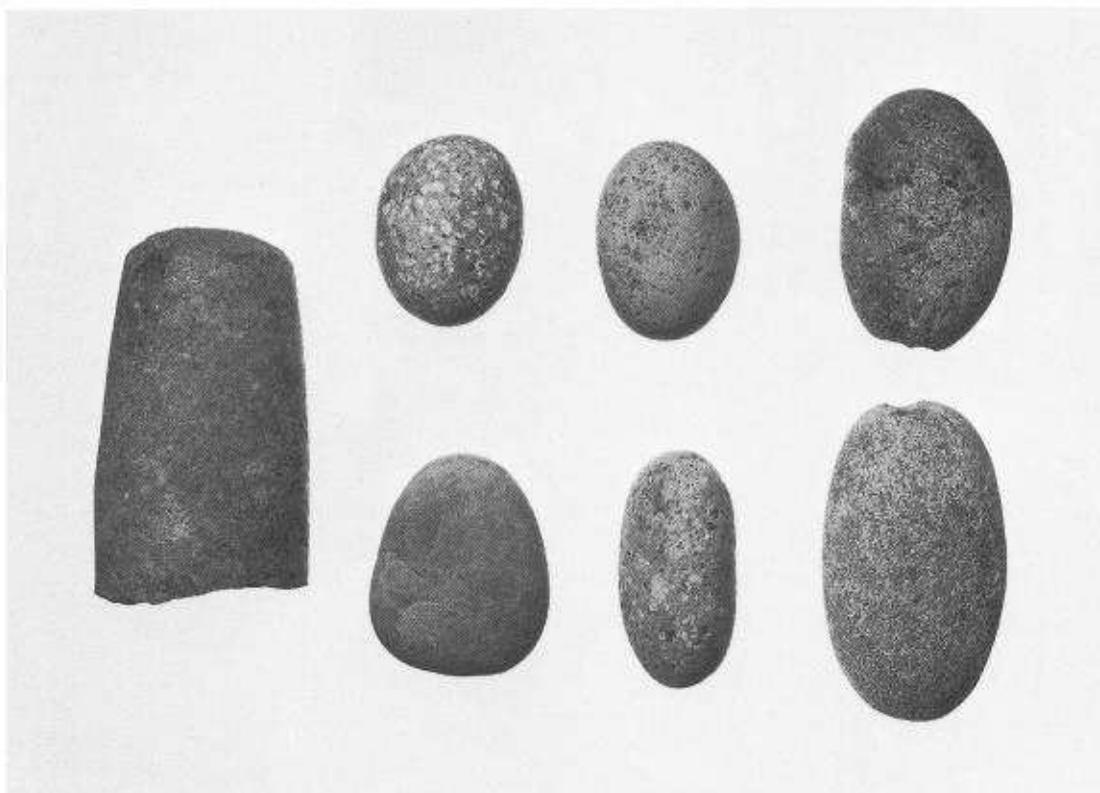
2. 弥生土器—底部



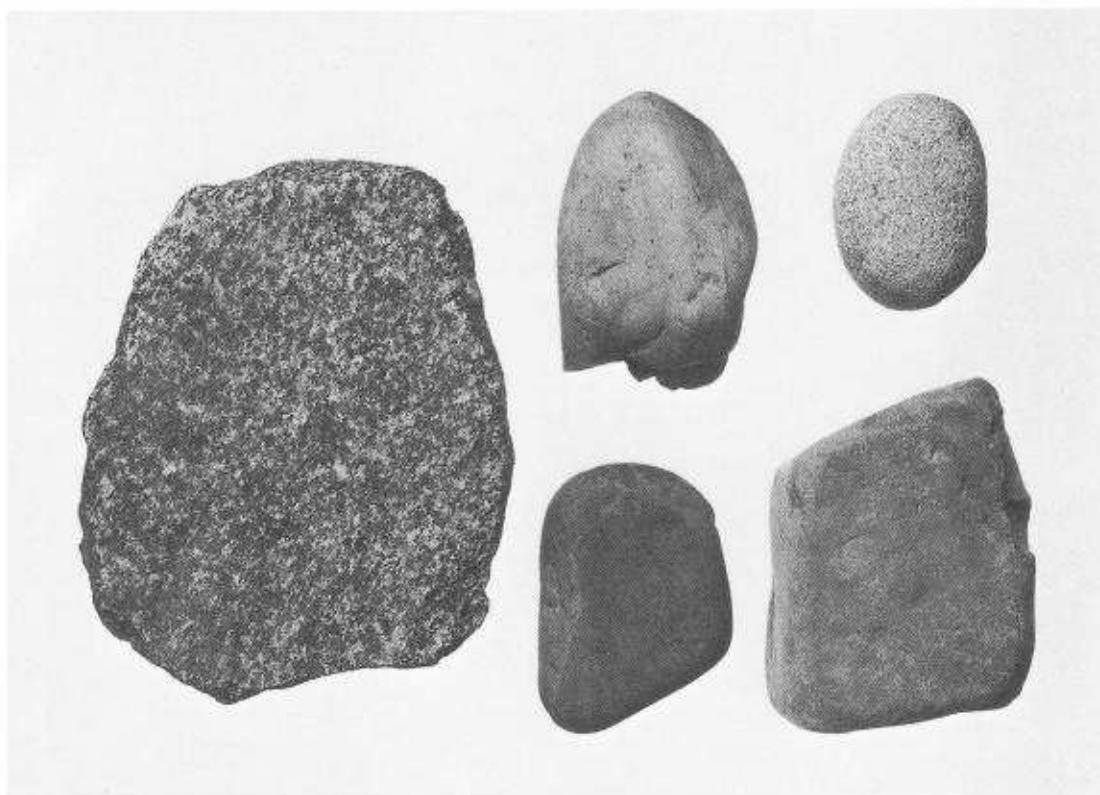
1. 石器・鉄器・有孔円板



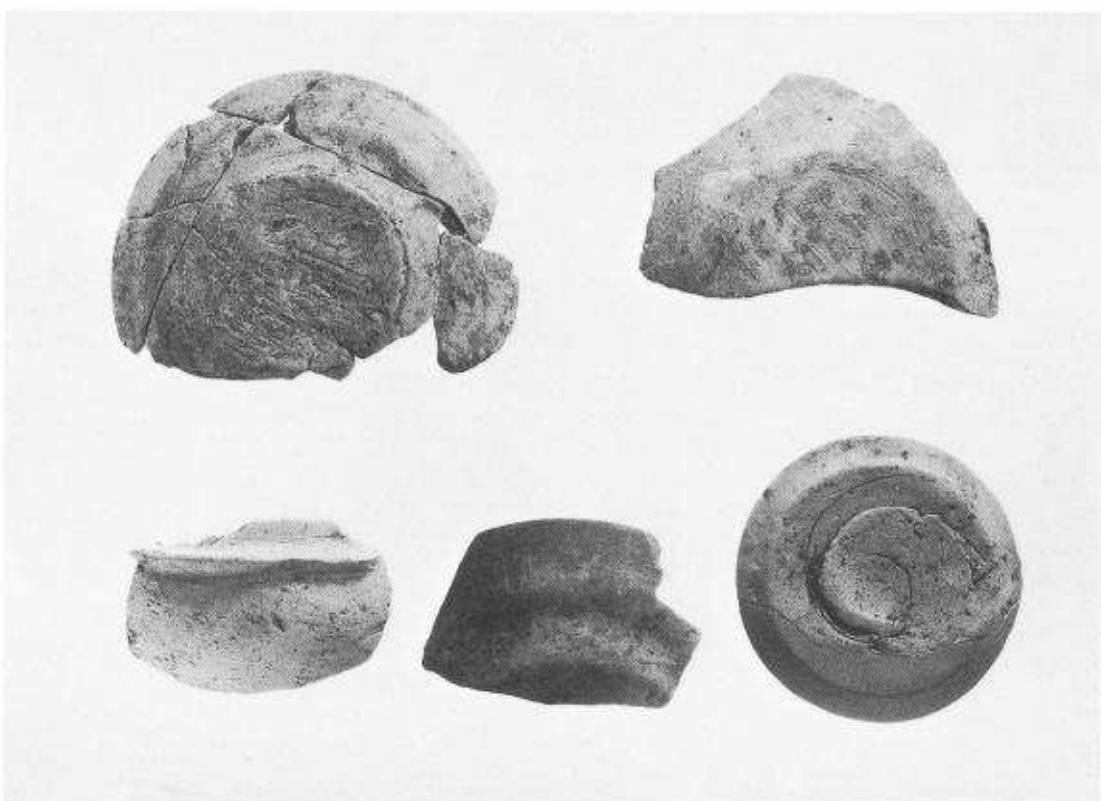
2. 石器一砥石



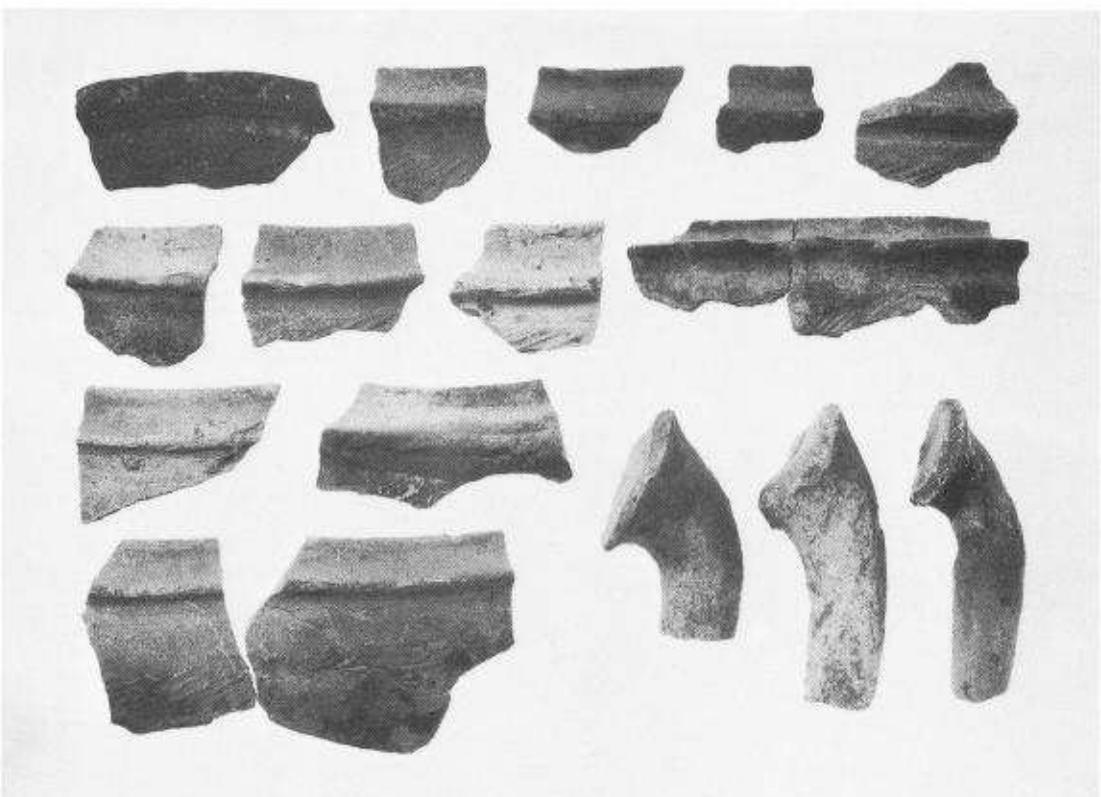
1. 石器—石斧・投彈他



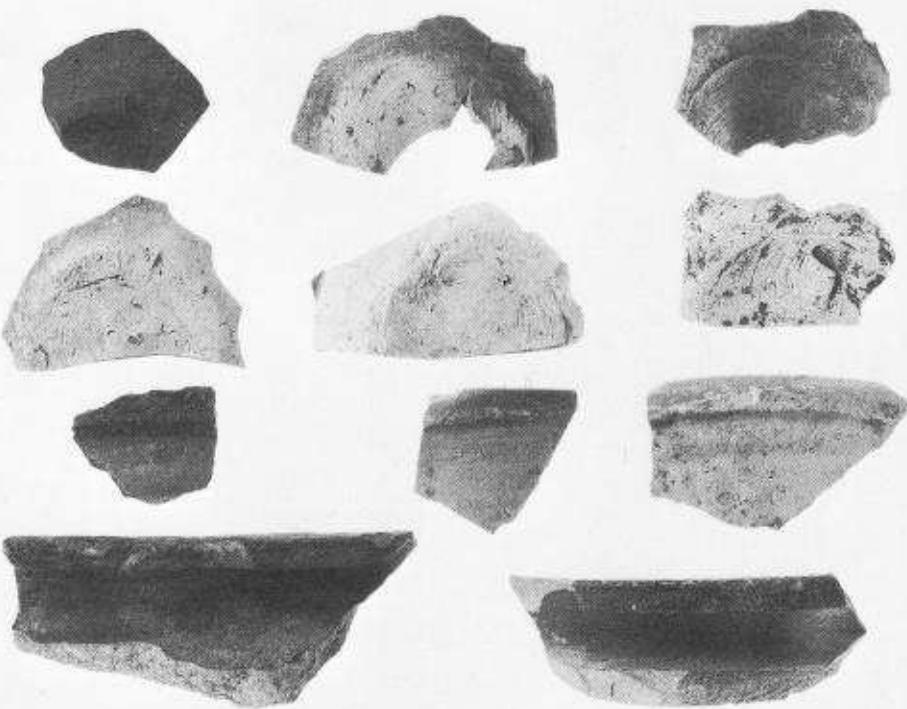
2. 石器—投彈他



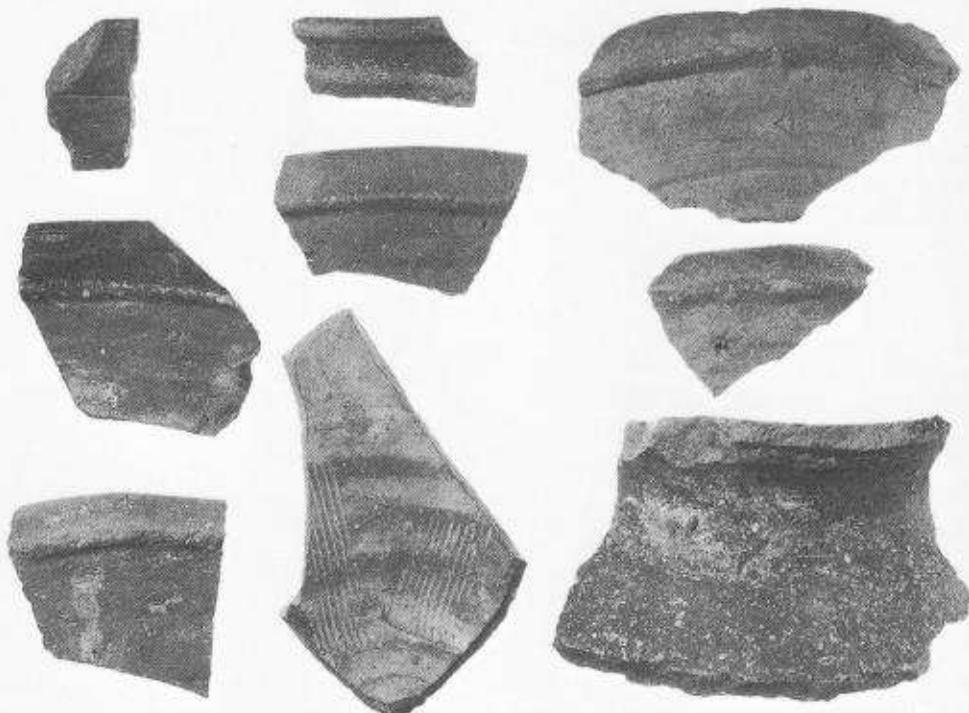
1. 中世土器—土師器



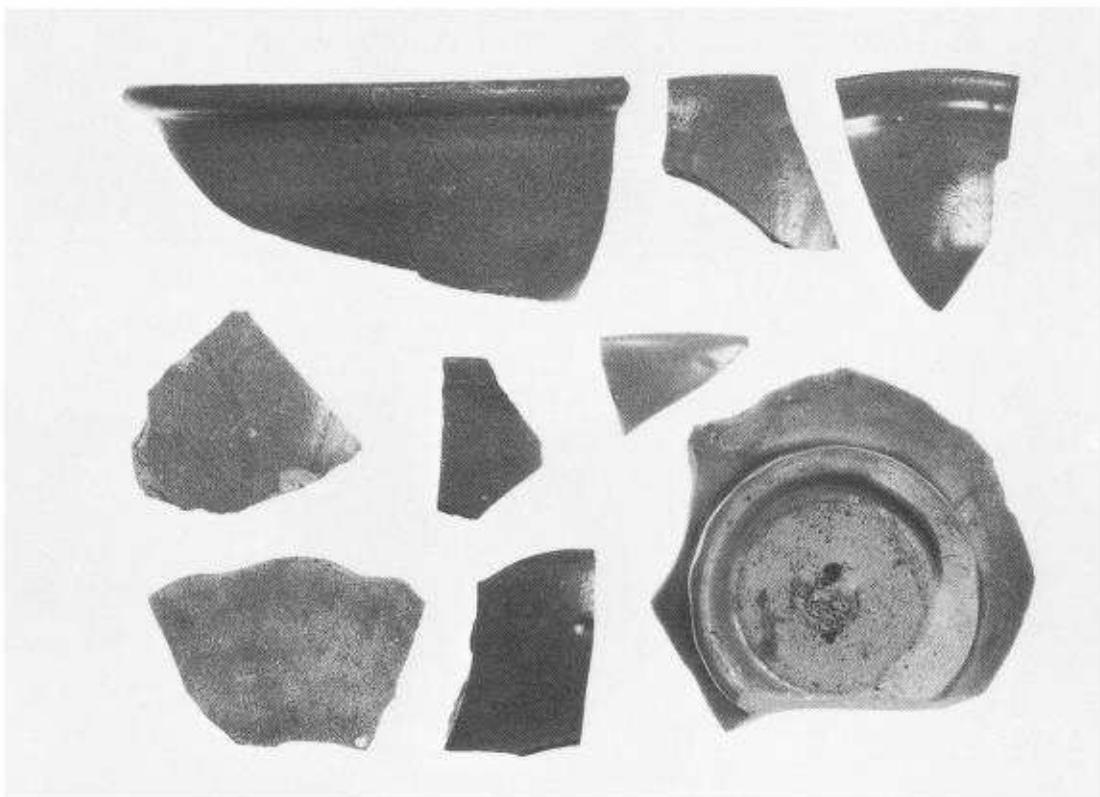
2. 中世土器—土師器



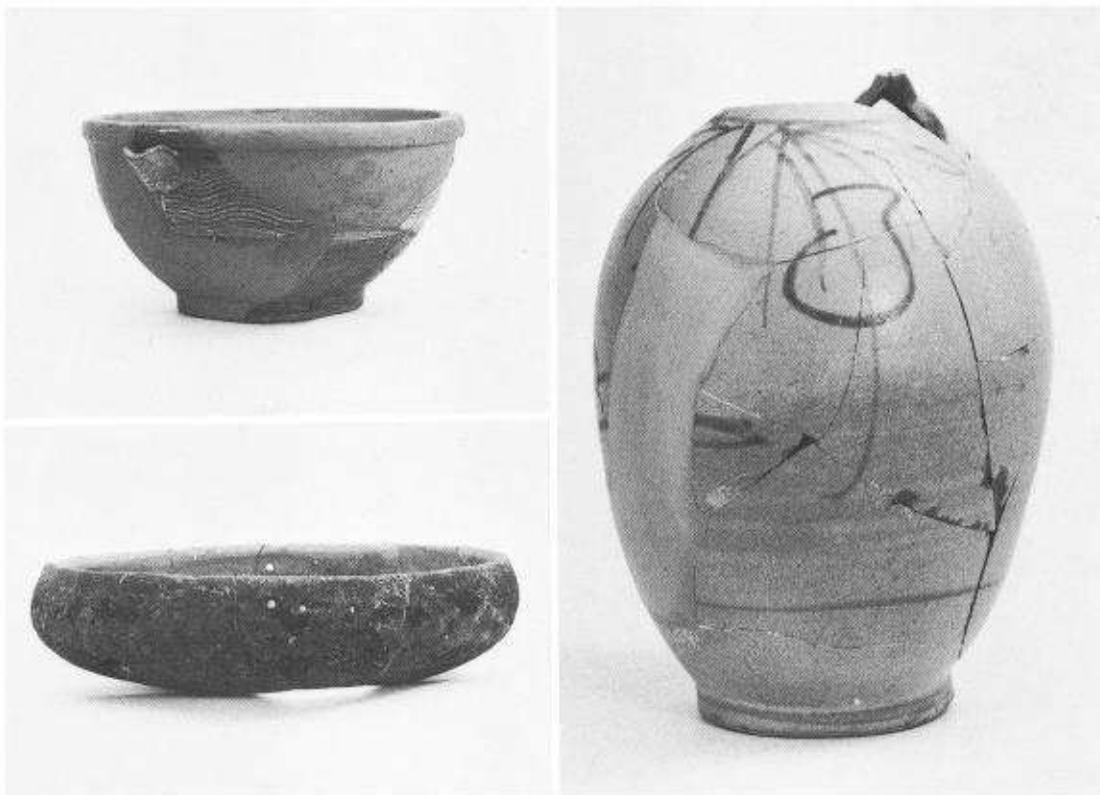
1. 中世土器—須恵器



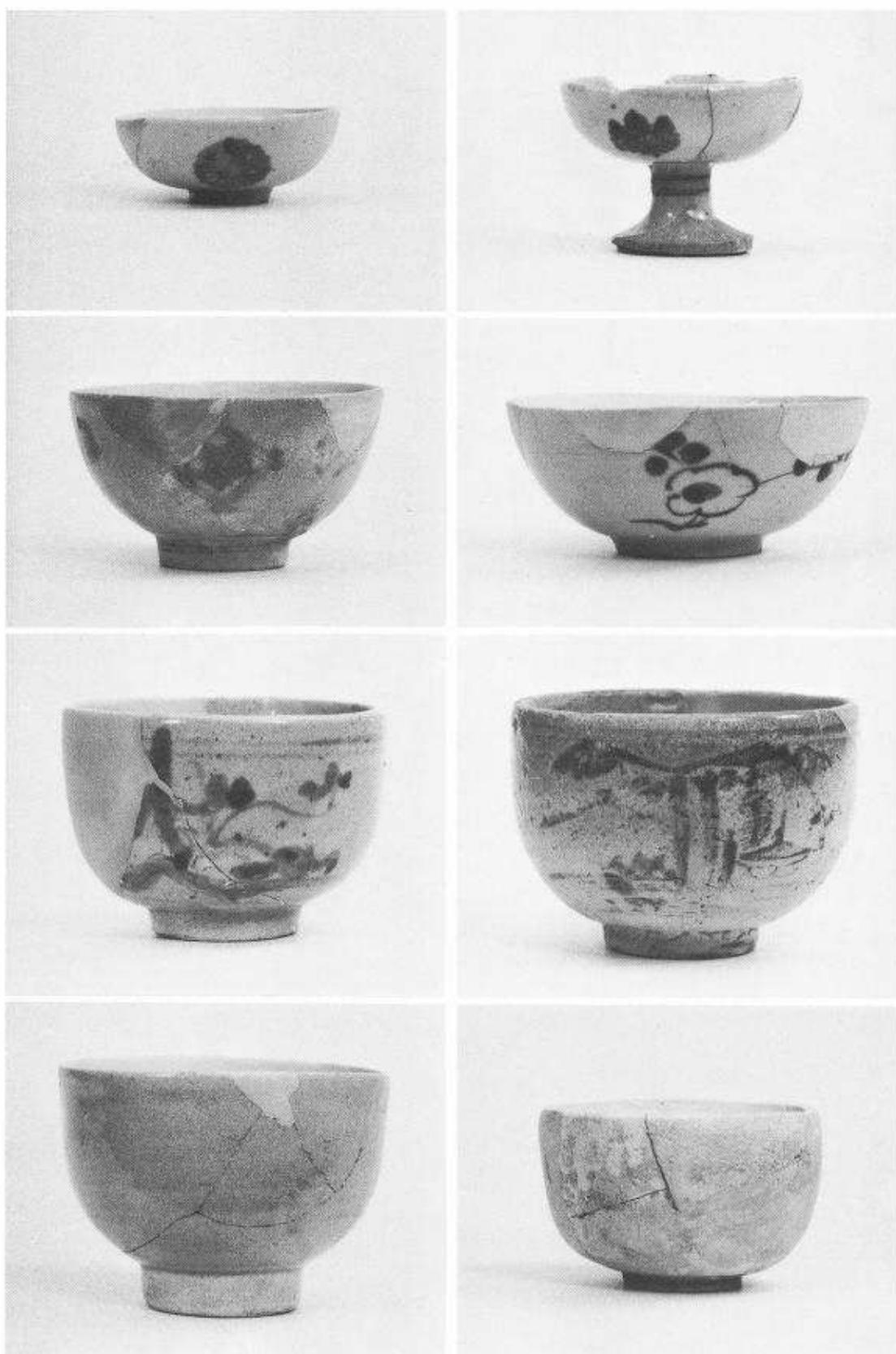
2. 中世土器—国産陶器



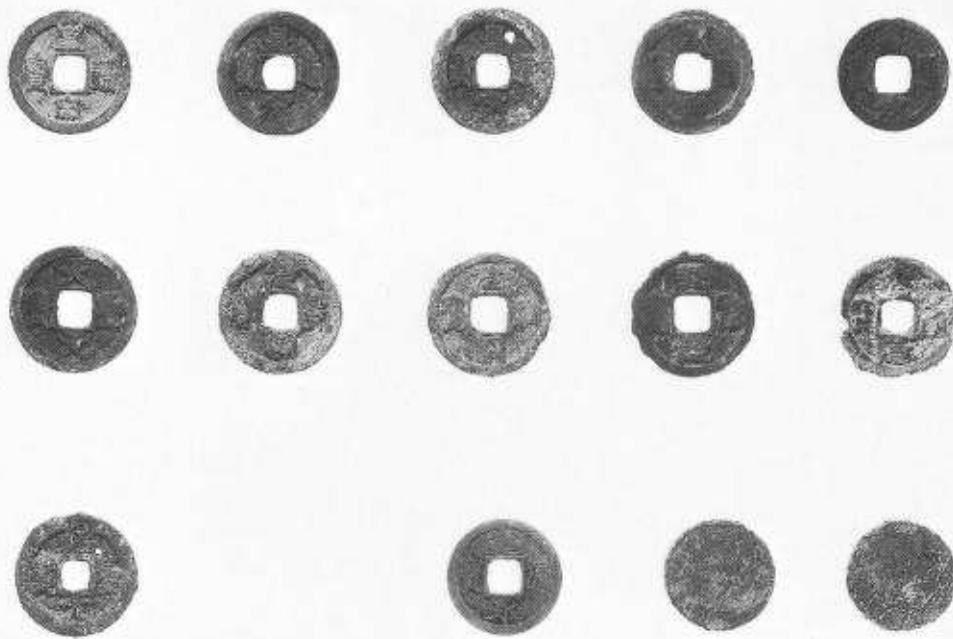
1. 中世土器—船載磁器



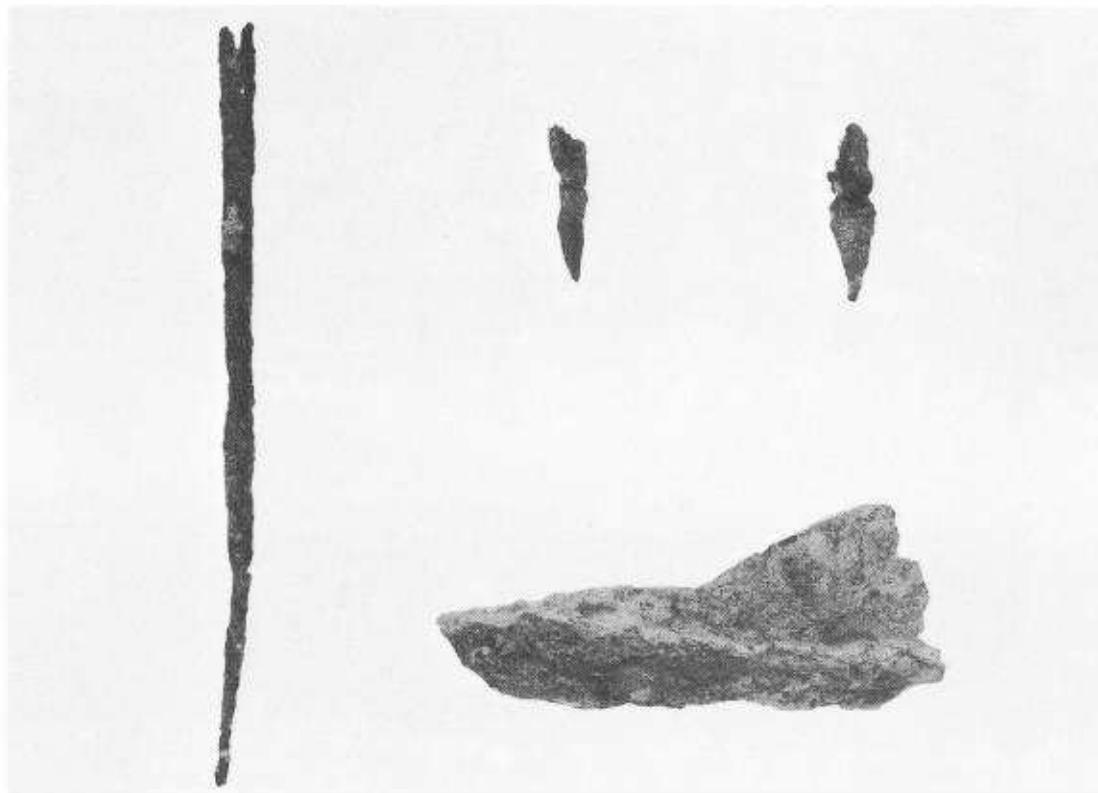
2. 近世土器



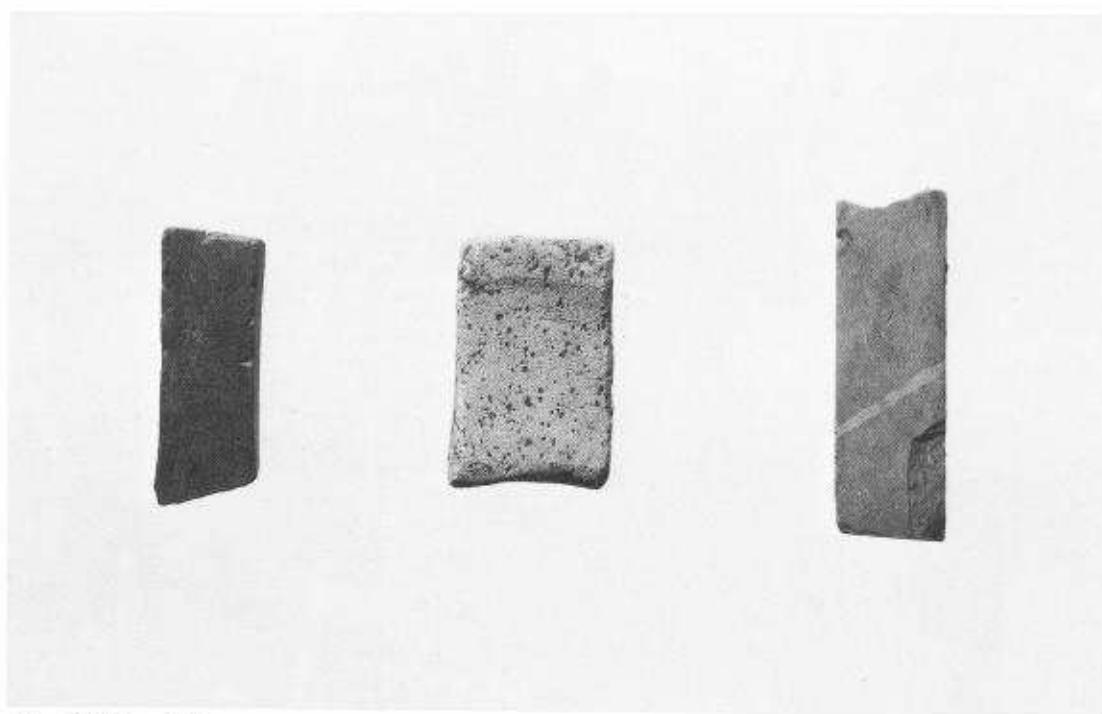
近世土器



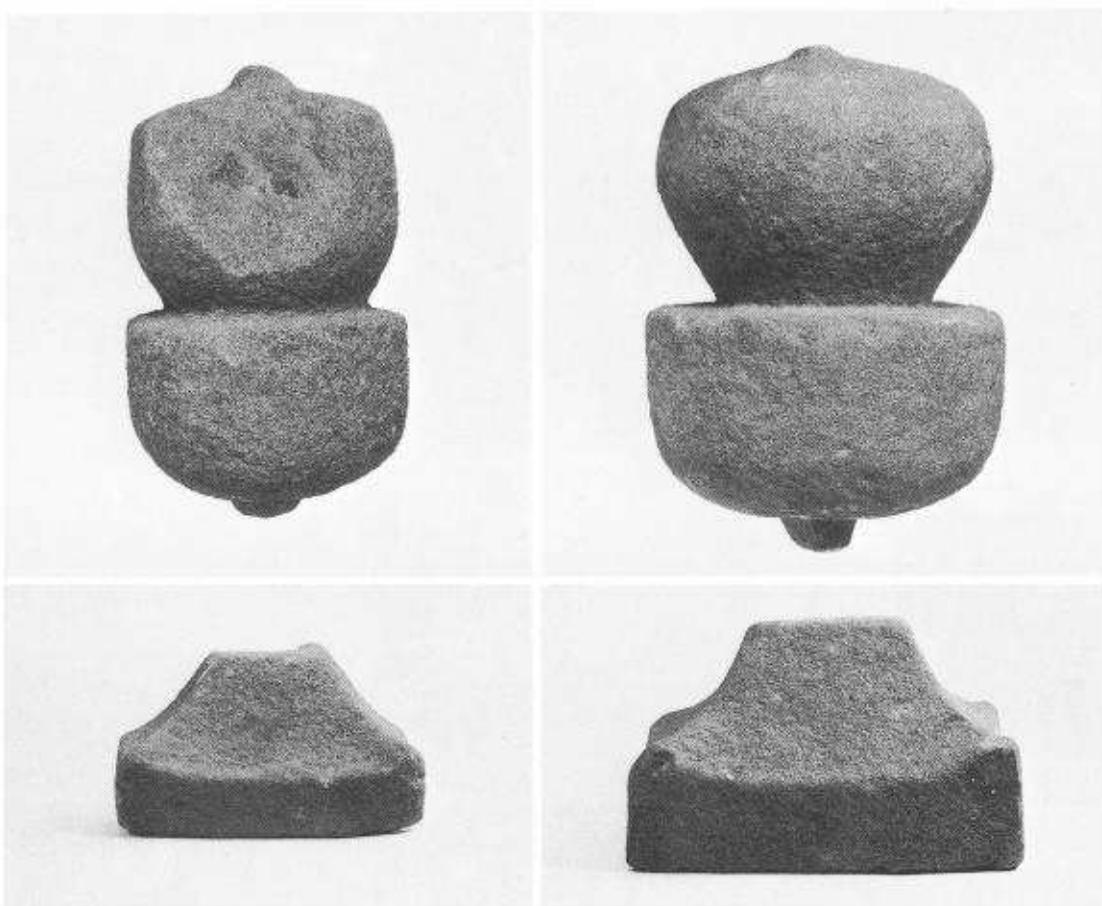
1. 錢 貨



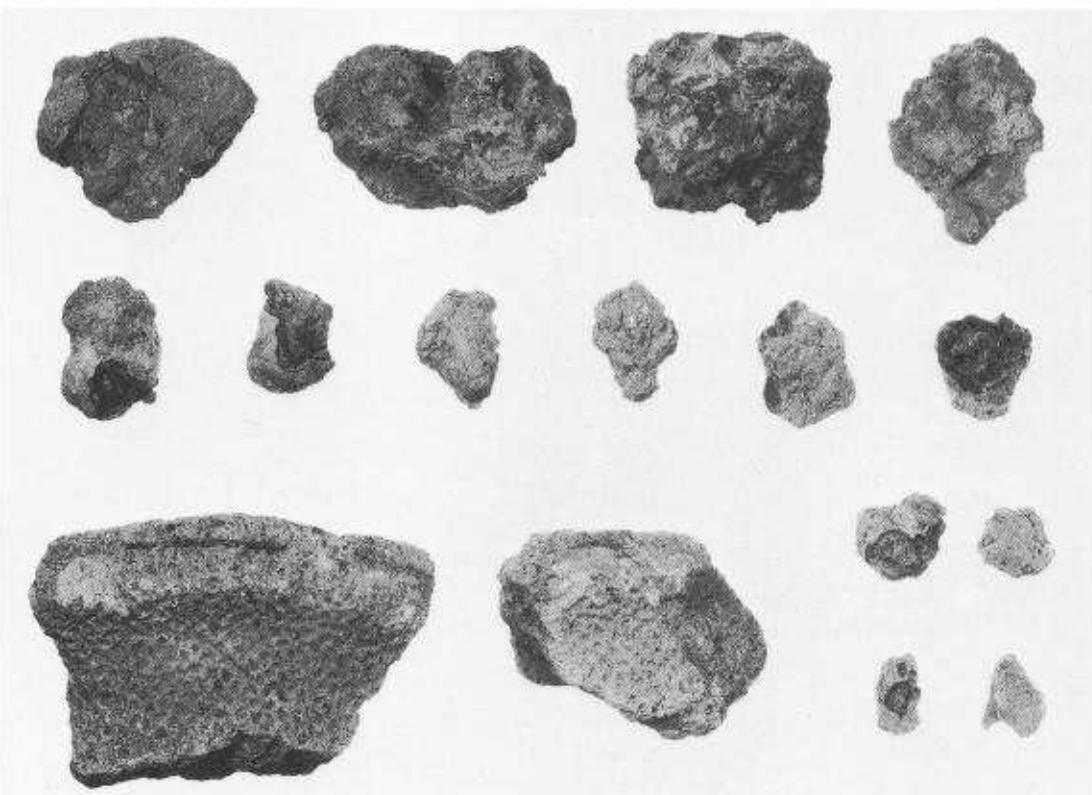
2. 鐵 器



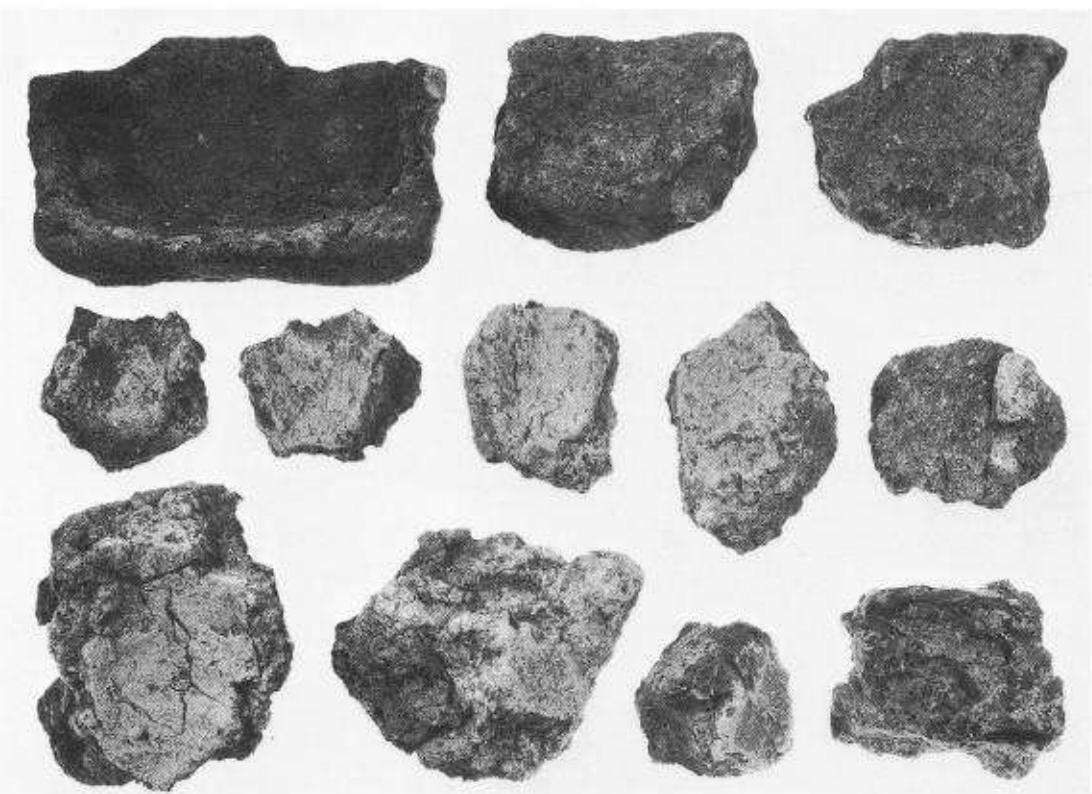
1. 石製品—砥石



2. 石製品—五輪塔



1. 鉄滓他



2. 炉壁片他

大森谷遺跡

兵庫県文化財調査報告 第27集

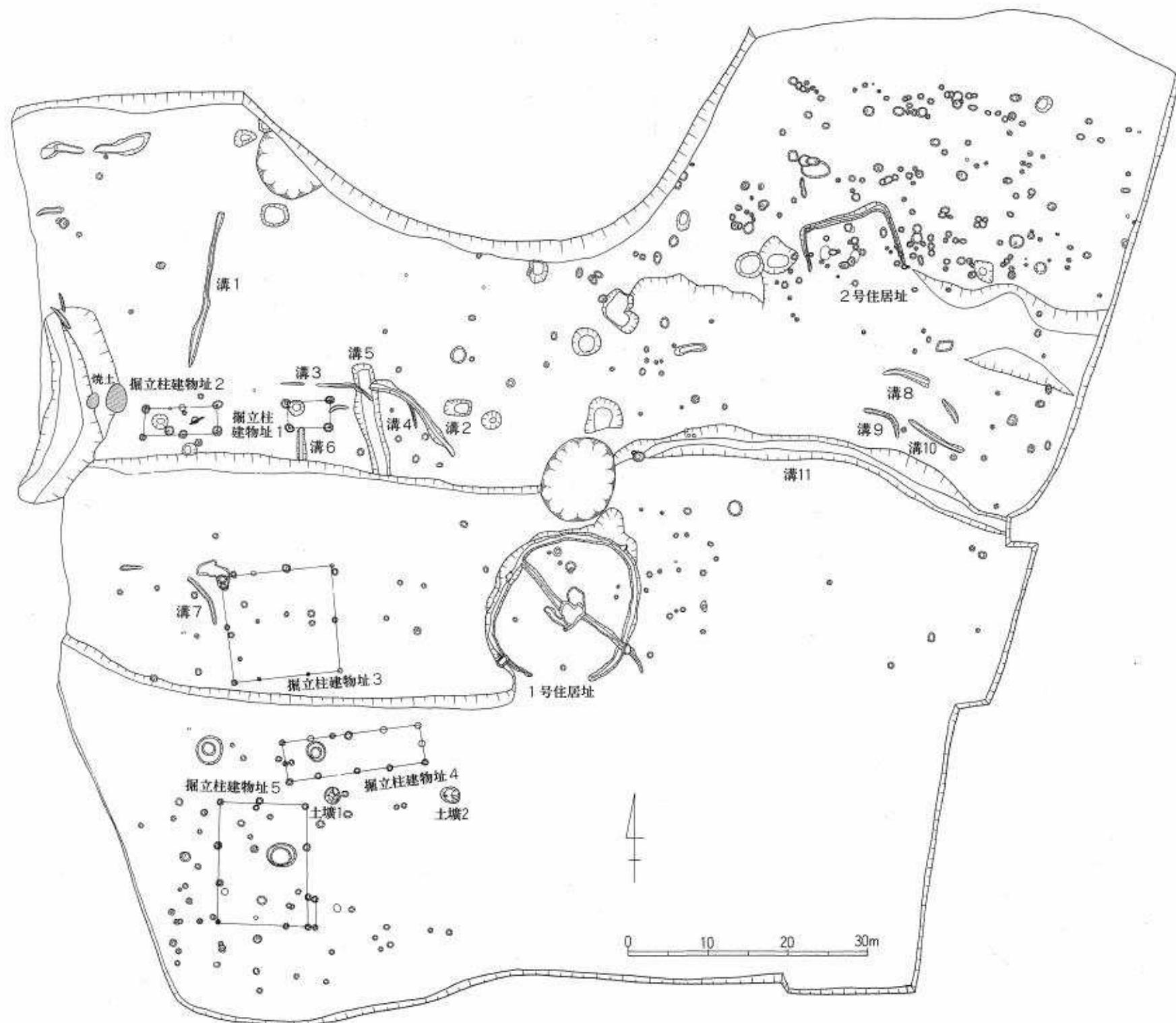
昭和60年3月31日 発行

編集発行 兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL 神戸(078) 341-7711

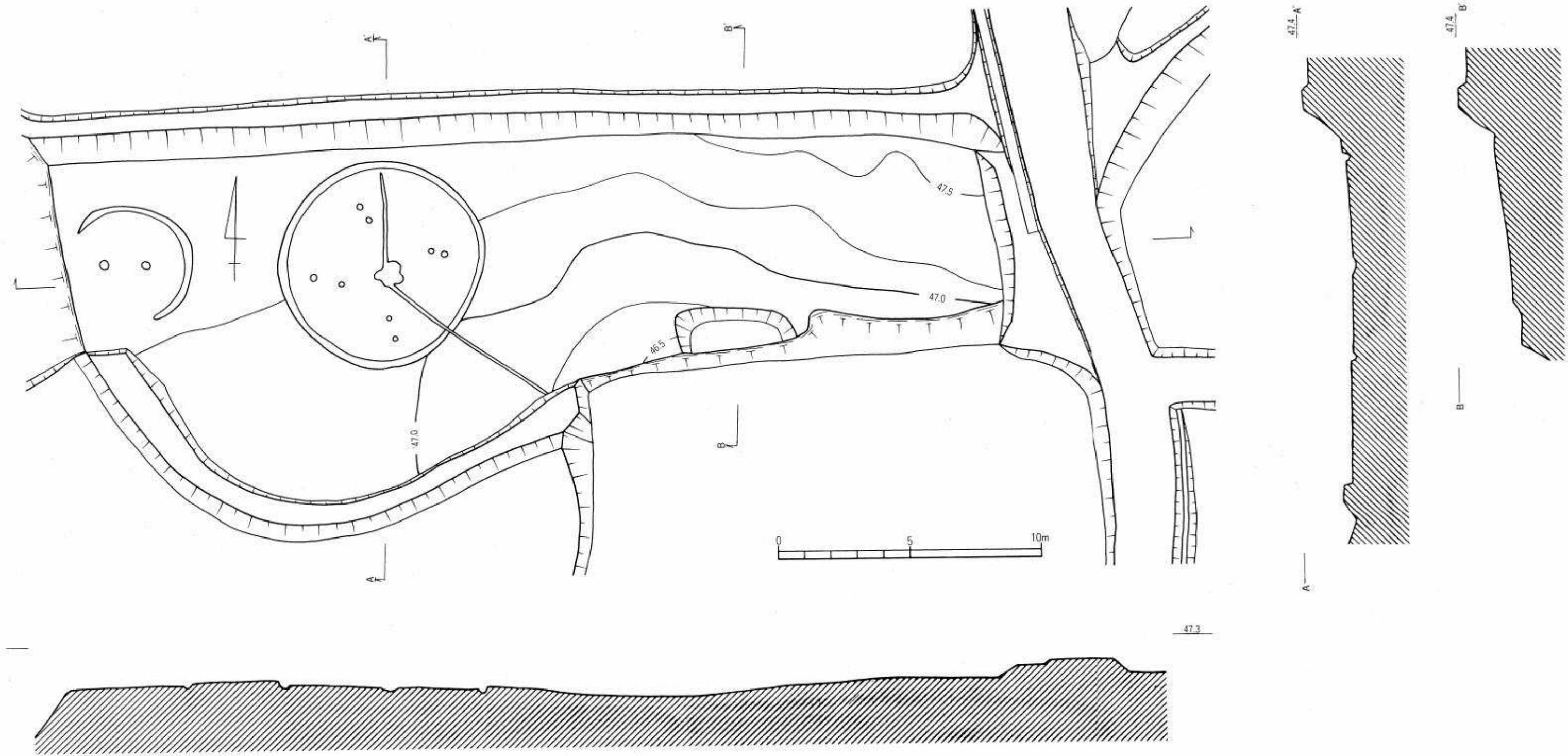
印刷 輝石川印刷出版社
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
〒652 TEL 神戸(078) 575-3761



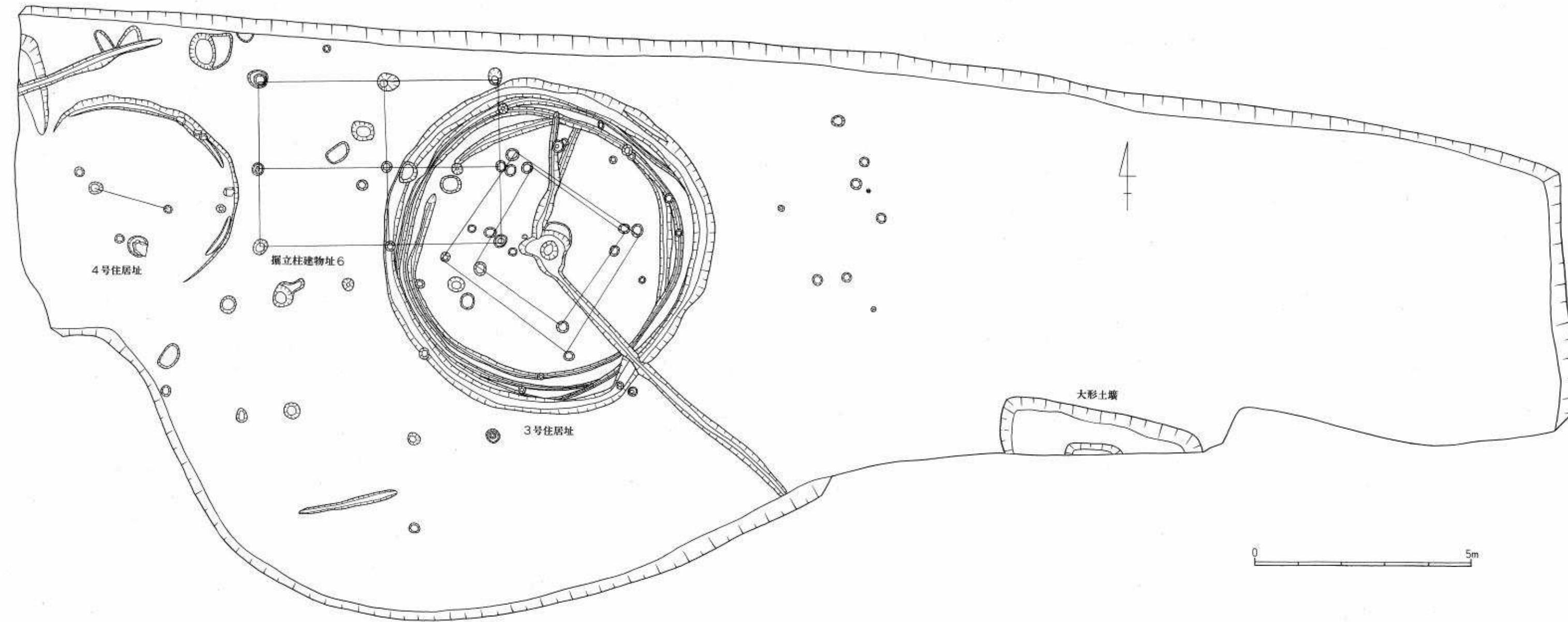
付図 1 I 地区全図



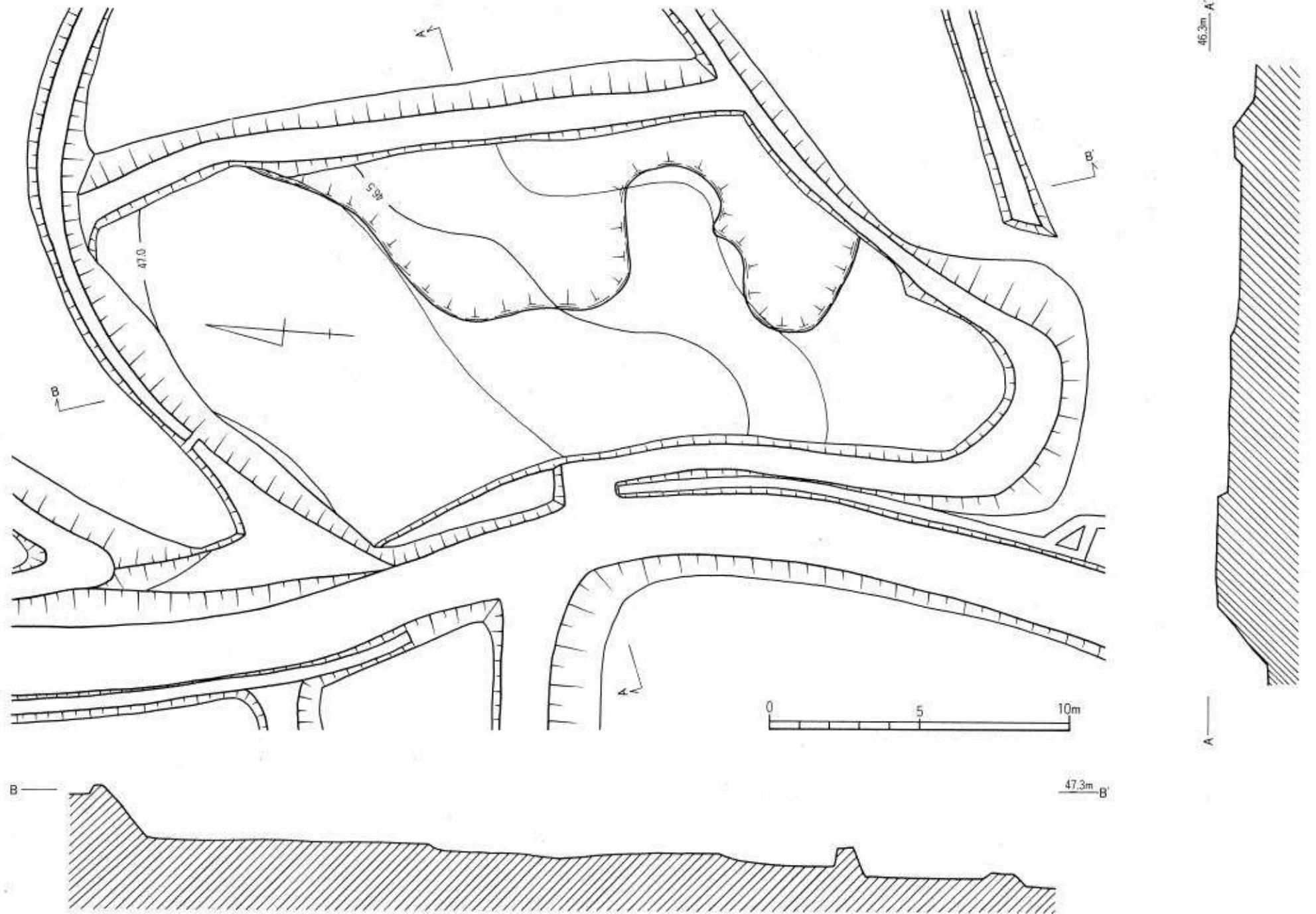
付図2 I 地区遺構配置図



付図3 II 地区全図

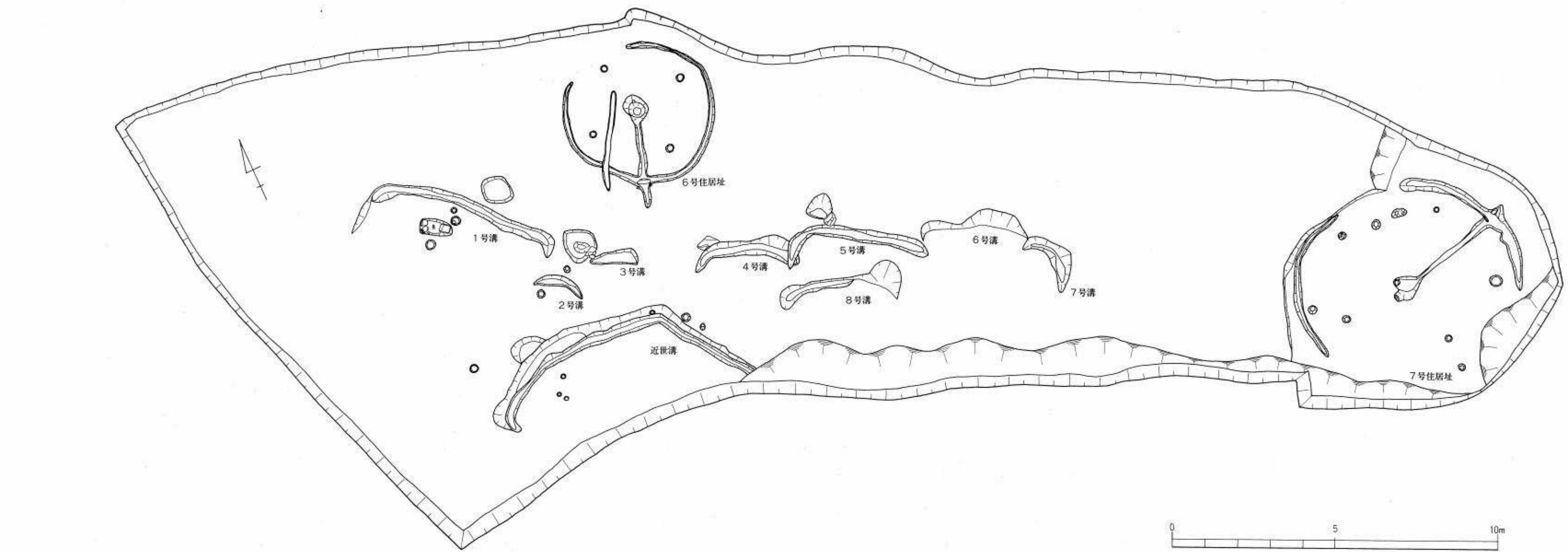


付図4 Ⅱ地区遺構配置図





付図 6 Ⅲ 地区 造構配置図



付図7 V地区遺構配置図